





# 目次

第一章	
第一章	逮捕、グルーバツハ夫人との対話、ビュルシュトゥナー嬢 . . . . . 2
第二章	
第二章	最初の審理 . . . . . 22
第三章	
第三章	人気のない法廷で、学生、裁判所事務局 . . . . . 34
第四章	
第四章	ビュルシュトゥナー嬢の女友だち . . . . . 52
第五章	
第五章	笞刑吏（ちけいり） . . . . . 60
第六章	
第六章	叔父、レーニ . . . . . 66
第七章	
第七章	弁護士、工場主、画家 . . . . . 82
第八章	
第八章	商人ブロック、弁護士への解約通知 . . . . . 116
第九章	
第九章	大聖堂にて . . . . . 138
第十章	
第十章	終わり . . . . . 156
訳者あとがき	
訳者あとがき	. . . . . 162



# 第一章

## 第一章 逮捕、グルーバッハ夫人との対話、ビュルシュトゥナー嬢

誰かがヨーゼフ・Kを中傷したに違いなかった。なぜなら、何も悪いことをしていないのに、ある日、逮捕されたのであるから。毎日、八時前には、大家のグルーバッハ夫人の料理女が朝食をもってくるはずが、この日は来なかった。こんなことは、これまでにないことであった。ちょっとKは待ってみて、向かいの建物に住む、いつもと全く違う好奇心を露わにしながら、こちらに視線を投げってくる老婆を、枕に頭を載せて見ていたが、そのことをいぶかしく思いながらも、腹も減ってきたので、呼び鈴を鳴らした。すぐにノックの音がして、この建物ではついぞ見たことのないひとりの男が入ってきた。痩せてはいるが、引き締まった身体つきで、旅行服のような、色々な襷、ポケット、留め金、ボタン、ベルトがついた、身体の線がはっきりと分かる黒い服を着て、そのため、何の役に立つかは分からないが、とりわけ実用的であると感じられた。「どちら様でしょう？」と、Kは聞くと、すぐにベッドに座ったが、身体のもう半分は立ちかけてもいた。しかし、自分の出現はそのまま受けとめるとでもいうように、男は問いを受け流すと、ただ一方的にこう言った。「呼び鈴を鳴らしましたね？」「アンナに朝食をもってこさせようと思って。」と、Kは言ったが、とりあえず何かを尋ねるといふより、一体、男が誰なのかを、注視と黙考で、突き止めようとしていた。しかし、男は、余り長くはKの視線に晒されていようとせず、少しだけ開いたドアの方を向くと、明らかにドアのすぐ後ろに立っているらしい誰かに向かって、こう言った。「アンナに朝食を運んでもらいたいんだそうだ。」隣の部屋で小さな哄笑が起こったが、その響きからでは、それがひとりによるものか、複数によるものか、はっきりしなかった。この見知らぬ男は、それによって、それまで知らなかったことを知るに至った訳でもないのに、報告するような口調でKに言った。「それはできないな。」「そんな話はないと思うんですよ。」と、Kは言う、ベッドから跳ね起きて、サッとズボン穿いた。「どんな種類の人間が隣の部屋にいるのか、グルーバッハ夫人がわたしに降って湧いたこの騒動の責任をどう取るつもりなのか、とにかくそれを見てやりたいと、わたしは思うのです。」すぐさま、こんなことを口にすべきだったのか、ある意味、そうすることで、この見知らぬ男の監督権を認めてしまうことになってしまうがという考えが心に浮かんだが、今のところ、大丈夫そうであった。とにかく、この見知らぬ男は状況をそのように解釈してくれていた。なぜなら、こう言ったからである。「君はどちらかといえば、こちらにいたいと思っているんじゃないの

かい?」「あなたが身分を明かしてくれないうちは、ここにいたくもなければ何かを言われたくもありません。」「善意で言ってあげているんだよ。」見知らぬ男はそう言うと、自分の手でドアを開けた。Kがそうしようと思っていたより、ずっとゆっくりと足を踏み入れた隣の部屋は、パッと見、前の日の晩とほとんど変わらないようであった。そこはグルーバツハ夫人の住まいであった。家具、敷物、陶磁器、写真で溢れ返ったこの部屋は、今日はおそらくいつもより少し余裕があったが、それはすぐには分からなかった。むしろ、主な変化がある男が存在している点にあったので、そこに余裕が生まれていることにまで気が回らなかったのである。その男は、開いた窓の側で本を手に座っていた。今、そこから目を上げたところであった。「君は、自分の部屋にいなければならなかったのだ! 一体、フランツがそう言わなかったか?」「いいえ、言っていました。ところで、あなた方の望みとは、一体、何です?」そう言うと、視線をその新しく出会った男から、ドアのところで立っているフランツと呼ばれた男に、それからまた元の男へと移した。いかにも老人らしい好奇心を剥き出しにしながら、この後に起こる全てを見届けてやろうと、例の老婆が、開いた窓から向かい側の窓ごしにまた身を乗り出しているのが見えた。「とにかく、グルーバツハ夫人に――。」そう言いながら、実際は、離れたところに立っている二人の男から身を振りほどき、先に進むような素振りをした。「駄目だ、」窓辺の男はそう言い、本を小卓の上に投げると、立ち上がった。「行っちゃいけない、君は逮捕されているんだぞ。」「どうやらそのようですね。」と、Kは言った。「でも、一体、なぜです?」と、彼は尋ねた。「そのことについては、話すようには言われていない。部屋に戻って、待っているんだ。とにかく、訴訟の手続きは始まった。然るべき時に、君は全てを知ることになるだろう。こんなにも親しげに会話をしていると、こっちまで職務を踏み越えたことになってしまう。全く、フランツ以外の誰も聞いていなければよいのだが。フランツは、あらゆる命令に逆らってまで、君に友好的であろうとしているから。これからもこの見張りの選任のような幸運に恵まれれば、君も自信をもってやれるだろう。」Kは座りたいと思ったが、部屋中どこを見回しても、窓辺の椅子しか座るところがなかった。「そのうち、全てが正しかったと思ひ知ることになるだろう。」と、フランツが言うと、すぐにもうひとりの男と一緒に、彼の方に向かって歩いてきた。とりわけ、後ろの方の男はKよりもはるかに背が高く、何度もKの肩を叩いてきた。二人はKの寝間着を吟味しながら、これからお前には沢山の質の悪い下着を着てもらおうが、俺たちが残りの下着と一緒にこのナイトガウンを預かり、事が上首尾に運んだら、また返してやることにしようなどと言うのであった。「保管庫に預けるより、俺たちに渡すほうがましだぞ。」と、二人は言った。「なぜって、保管庫では着服が横行していて、ある程度、時間が経つと、当の手続きが終わったかどうかに関わりなく、全てが売り払われてしまうのだから。それに、この種の訴訟にはとてつもなく時間がかかる。最近は特にそうだ! お前はあの時、最後には保管庫から売上金がもらえるのだが、この売上金がまずもってそもそもすでに少ないのだ。なぜなら、売却の際はつけ値の高さより賄賂の多さがものを言うのだし、この売上金は、経験上、人の手から手に年を経て受け渡されるうち、どんどん減ってってしまうのだから。」こういう話に、Kはほとんど耳を貸していなかった。おそらくはまだ帰属しているらしい自分の所有物をどう処分するかの権利を、彼はそれほど重視していなかった。自分が置かれた状況を明晰に理解することの方が、何倍も大

切なことであった。だが、彼らが横にいてはじっくり考えることもできなかった。二人目の見張り——これも単なる見張りに過ぎないのかもしれないが——の横腹が、何度も、まぎれもなく友好的に彼に当たった。そこから顔を上げると、片方にひん曲がった大きな鼻をした、太っちょの身体には似つかわしくない、干からびて、骨ばった顔がそこにはあった。その顔は、頭上のはるか彼方で、もうひとりの見張りと思いを疎通しあっていた。あいつらはどういう種類の人間なんだ？ 何を喋っているんだ？ どんな役所に属しているんだ？ とはいえ、Kが住んでいるのは法治国家であり、あらゆるところで自由が支配しており、全ての法律は紛れもなく存在していた。わざわざ彼の住まいまで誰が押し入ってきたのだろうか？ 彼には、いつも全てをできるだけ簡単に考えよう、最悪のことは最悪のことが起きてから初めて考えよう、あらゆることが急を告げていても、未来に対する備えはあえてしないでおこうとする傾向があった。しかし、今回のことは、さすがの彼にも不正であると思われた。確かに、全ては冗談で、彼がよく分からない理由、おそらくは今日が彼の三十歳の誕生日だという理由で、銀行の同僚たちが仕組んだ手荒な冗談であるという風に見えなくもなかった。それはむろんありえることであり、おそらく何かの方法で目の前の見張りに微笑みかけさえすれば、それで終わり。すると、やつらも一緒になって笑い出すのだ。おそらく、やつらは街の雑役夫か何かであろう。やつらはそういう風に見えなくもなかった。——それにも関わらず、今回、彼は最初に見張りのフランクを見た時から、自分がおそらくこれらの人間に対してもっている利益をこれっぽっちも手放すまいと決めたのであった。確かに、後々、冗談が分からない奴と言われるという非常に小さな危険はあった。とはいえ、彼は思い出すのであった——経験から学ぶというのは、普段の彼の習慣にはなかったが——、二、三の、それ自体は些細なケースを。つまり、落ちつきのある友人たちとは違い、彼にはどんな結果になるのかほとんど構わず、軽はずみな行動に出ては、結果的に、罰せられるという面があったのである。少なくとも今回だけは、こんなことを繰り返しているようではいけなかった。これはある種の喜劇であった。それゆえ、一緒に演じてやろうと、彼は思ったのであった。今のところ、彼は自由であった。「ちょっと失敬。」そう言うと、急いで二人の見張りの間を抜けて、自分の部屋に戻っていった。「聞き分けがよいようだ。」背後で、そう言っているのが聞こえた。部屋に戻ると、すぐさま、事務机の引き出しを開けた。机の中はきちんとしていたが、慌ていたので、探している身分証明書はすぐには出てこなかった。やっとのことで自転車許可証を探し出すと、さっそく見張りたちに見せようとしたが、いかにも頼りないと思われたので、さらに探して、とうとう出生証明書を見つけ出した。再び隣の部屋に戻ってみると、ちょうど向かいのドアが開いて、グルーバツハ夫人が入ってくるころであった。その姿は、チラッとしか見えなかった。なぜなら、Kの存在に気づくとすぐ、明らかに当惑した顔で失礼と言って踵を返し、極めて慎重にドアを閉めてしまったのである。「まあ、中に入って。」と、かろうじてまだ、Kは言うことができた。さて、証明書を手に部屋の真ん中で立ちすくみ、二度と開かないドアからまだ目を離せずにいると、見張りたちの呼ぶ声がして、彼はビクリとさせられた。開いた窓の側に置かれたテーブルのところに陣取って（今、Kはそれに気がついたのだが）、彼らは朝食をすっかり平らげてしまっていた。「どうして入ってこないんだろう？」と、彼は尋ねた。「入っちゃいけないんだ。」背の高い方の見張りが言った。「お

前は逮捕されたのだから。」「一体、どうして逮捕だなんて。しかも、こんなやり方で？」  
「ああ、またその質問か。」と、見張りは言うと、バターパンをはちみつの入った壺にポ  
トンと漬けた。「そういう質問には答えられない。」「答えてもらわねばなりません。」と、  
Kは言った。「これがわたしの身分証明書です。今すぐあなた方を見せて下さい。そし  
て何より、わたしの逮捕状を。」「さて、どうしたものか！」と、見張りは言った。「お前  
はこの状況を受け入れられず、おそらく、今のところはどんな同胞たちより一番近くに  
いるわれわれを、いたずらに怒らせようとしているようだ！」「その通りだ、いい加減、  
理解してもらわないと困るぞ。」と、フランツは言うと、手にもっていたコーヒーカップ  
を口には運ばず、長いこと、おそらく深い意味はあるのだろうが、しかし、全く理解不  
能の眼差しで、Kを見つめた。そんな気はなかったが、Kはつい釣り込まれて、フラン  
ツと視線のやり取りを交わすと、それから書類を叩いて、次のように言った。「ここに  
あるのがわたしの身分証明書です。」「それが俺たちに何の関係がある？」と、すぐに背の  
高い方の見張りが叫んだ。「子どもよりタチが悪いぞ。一体、どうしたいんだ？ お前  
は、俺たちのような見張りや身分証明書や逮捕状について議論すれば、この大変な、呪  
わしい訴訟を早々に決着できているのか？ 俺たちは、一番下っ端の役人で、  
身分証明書のことなんか知ったこっちゃない。毎日、十時間、お前の見張りをして、手  
当をもらうこと以外、何の繋がりもない。それが俺たちの全てなんだ。ところが、俺た  
ちが仕えている偉い役所というものは、間違いなく、そういう逮捕を命じる前には、逮  
捕の根拠や被疑者の人となりや極めて綿密に調べ上げている。そこにミスなどあるはず  
がない。俺の知る限り（ちなみに、俺が知っているのは、その中でも最下層のそれに過  
ぎないが）、われわれの役所は、法律にもそうあるが、何かの罪を住民の中に探すとい  
うよりも、むしろ、罪によって役所が引き寄せられて、われわれのような見張りを寄越さ  
ざるをえなくなる、それが法律というものなんだ。これのどこに、ミスの入り込む余地  
がある？」「そんな法律は、聞いたことがありません。」と、Kは言った。「そいつはお前  
にとって、なおさらよくないことだ。」と、見張りが言った。「その法律は、あなた方  
の頭の中にだけあるんですね。」と、Kは言うと、どうにか見張りたちの思考の中に潜り込  
み、それを自分の有利な方向に向けるか、そこに同化したいと考えた。しかし、見張りは、  
それをただ聞き流すだけで、こう言った。「今に思い知ることになるだろう。」フランツ  
がそこに割り込んできて、こう言った。「見ろよ、ヴィレム、こいつは法律が分からない  
と言いながら、同時に、自分に罪はないとぬかしていやがる。」「お前の言う通りだ。し  
かし、誰もこの男にそれを分からせることはできない。」と、もうひとりの見張りが言っ  
た。Kは何も答えを返さなかった。彼は思っていた。俺は、この最下層の組織——彼ら  
自身がそうだと白状している——の無駄話で、さらに混乱させられなければならないの  
か？ しかし、やつらは、いずれにしても、自分でもよく分からないことを口走ってい  
るだけである。あの自信は、無知だけがなせるわざなのだ。俺と同レベルの人間と、二  
言三言、言葉を交わすことさえできたら、全てを、あいつらとの長ったらしいお喋りよ  
りはるかにスッキリとさせられるんだが。彼は、部屋の中の空いたところを何度か行っ  
たり来たりしたが、窓の向こうでは、例の老婆が、もうひとりのもっと年寄りの老人に  
しがみつきながら、男を窓辺に引っ張り出そうとしているのが見えた。この見せ物を終  
わりにしなければと、Kは思った。「わたしをあなた方の上役のところ連れて行って下

さい。」と、彼は言った。「上役がいいと言えばな。それまでは駄目だ。」と、ヴィレムと呼ばれた方の見張りが言った。「それから、ちょっと忠告だが、」と、彼は付言した。「お前は、部屋に戻って、心を落ち着かせて、命令が下されるのを待っているのだ。無益な思考に惑わされず、心を集中させている。そのうち、重大な命令が発せられるであろう。お前は、こちらの譲歩にふさわしいやり方で、俺たちを遇しようとはしなかった。たとえば俺たちが何者であるにせよ、少なくとも、今、目の前にいる自由な人間であるということを、お前は忘れてしまっている。これは、決して小さな利点ではない。そして、そういう態度にも関わらず、金さえもらえれば、向かいの喫茶店から簡単な朝食をもってきてやってもいいと、俺たちは思っている。」

この提案には応じず、まだしばらくの間、Kはジッと立っていた。もしかして、彼が隣の部屋のドア、あるいは控えの間のドアを開けたとしても、二人は止めないのかもしれない。極限までやってみることが、一番単純な全体の解決法なのかもしれない。とはいえ、ことによると、二人は彼に襲いかかり、あろうことか投げ飛ばして、ある意味、今、彼がもっているあらゆる優位性すら失なわれるのかもしれない。そういうことで、彼は物事の自然な成り行きがもたらすであろう解決の確実性の方を選ぶと、自分の部屋に戻っていった。彼からも見張りの方からも、次の言葉が発せられることはなかった。彼はベッドに身を投げると、洗面台に手を伸ばして、昨日の夜、朝食にしようと取っておいた美しいりんごを手を取った。今や、それは唯一の朝食であったが、少なくとも最初にガブリと噛んで確かめたところでは、見張りたちのお情けでえられる汚ない深夜喫茶の朝食より、はるかにマシなものであった。気分もよかったし、自信に溢れてもいた。銀行では、今日の午前の勤めを休まなければならなかったが、彼がそこで占めているかなり高い地位からすれば、容易に免責されてしかるべきであった。銀行に対して、彼は真の弁解をすべきであったろうか？　そうしてやろうと、彼は考えていた。こういう場合にありえる話として、何を言っても全く相手にされないのだとしても、ブルーバッハ夫人か、たった今、向かいの窓に進撃中の二人の老人を証人に引っ張り出しさえすれば、それでよいのだ。ところで、Kにとって驚きだったのは（少なくとも、見張りたちのこれまでの思考回路からして、驚きだったのは）、彼には自殺する可能性が十分あったにも関わらず、彼らがKをこの部屋に追いやり、ひとりで置き去りにしたという点であった。もっとも、同時に、今度は自分の思考回路からしてみても、自殺をするようなどんな理由がありえるのかと、彼は自分に問いかけた。何か、二人が隣の部屋に陣取って、自分の朝食を横取りしたという理由からであろうか？　自殺するということは、かりにその気になったとしても、その無意味さから、やはり自殺することができなくなるくらい、無意味なことであった。ということで、見張りたちの精神的な視野狭窄がこれほどひどくなかったとしても、同じ確信から、彼を置き去りにしても特に問題はないと二人が見なしたというのは、ありえない話ではなかった。二人は今、その気にさえなれば、彼が上質の蒸留酒を保管してある据えつけの小さな棚のところまで来て、まず一杯目を朝食がわりに空け、二杯目を自分を奮起させるために干そうと決めているのを、目にしたことであろう。この後者の一杯は、それが必要になるかもしれない不測の事態への用心だけで、飲もうとしたのであった。

その時、隣の部屋から自分を呼ぶ声がかして、グラスに歯をぶつけるくらい、それは彼

を驚かせた。「監督官のお呼びだ！」と、その声は言っていた。彼が驚いたのは、その叫び声そのものであった。短い、裁ち切ったような、軍隊調の叫び声は、見張りのフランツから発したものと全く思えなかった。命令自体は大歓迎であった。「ついに来たか！」と、彼は大声を出した。据えつけの棚の扉を開めると、彼はすぐに隣の部屋に飛び込んだ。ところが、そこには例の二人の見張りが立っていて、まるで自明なことでもあるかのように、彼をまた元の部屋に追いやるのであった。「どういうつもりだ？」と、二人は叫んだ。「シャツのまま監督官の前に出ようっていうのか？ 監督官は、お前を打ち据えるだろうし、その次にやられるのは、俺たちだ！」「放っておいてくれ、全く！」すでに衣装箆筒のところまで押し戻されつつあったKが叫んだ。「寝込みを襲っておいで、パーティーの装いで来いというのも、無茶な話だ。」「何を言っても、無駄だ。」と、Kが大きな声を出す時はいつも本当に冷静で、ほとんど悲しげな様子にすらなり、そうなることでKをうろたえさせたり、ある意味、正気に返らせてくれたりしていた見張りたちがそう言った。「下らん儀式だ！」と、まだKはブツクサ言っていたが、椅子から上着をサッと取ると、しばらくの間、見張りたちの判断を仰ぐため、その上着を見せてやろうかという感じで、両手でそれを掲げてみせた。二人は首を振った。「もっと黒くないと駄目だ。」と、二人は言った。それを聞いたKは、上着を床に投げ捨てながら、こう言った——「どういふつもりでそう言ったのか、自分でもよく分からなかったが——、「まだ、本審理でもないだろうに。」見張りたちは笑ったが、意見は変わらなかった。「もっと黒くないと駄目だ。」「それで話が進むというのなら、それでもいい。」と、Kは言うのと、自分の手で衣装箆筒を開けて、長い間、衣類の山の中を探し回っていたが、そこから最上級の黒服を選び出した。それは腰のくびれの部分の仕上がりがよく、知人たちの間でほとんどセンセーションを巻き起こした一品であった。それから、もう一枚のシャツも引っ張り出してきて、注意深く、袖に手を通し始めた。見張りたちが入浴させるのを忘れてくれたおかげで、全体が早く進むことになったぞと、心ひそかに彼は考えていた。ひょっとして、彼らがそのことに気づいてしまうかもしれないと思って、ジッと観察していたが、むろんそんなことにはならなかった。そのかわり、Kは着替え中だという報告をもたせてフランツを監督官のところへ走らせるのを、ヴィレムは忘れていなかった。すっかり着替えが終わると、Kはヴィレムのすぐ前を通り、誰もいない隣の部屋を抜けて、続きの部屋に入ってしまった。その部屋に続く観音開きのドアはもう開いていた。この部屋には、Kはよく知っていたが、少し前からビュルシュトゥナー嬢というタイピストの女性が住んでいた。この女は、朝早くから仕事に出て、夜遅く帰るのを習いとしており、Kは挨拶以上の言葉を交わしたことはなかった。ちょうどその時、彼女のベッドに備えつけられたナイトテーブルが、審理用の机として部屋の真ん中に引っ張り出されていて、監督官はその向こう側に座っていた。彼は足を組み、椅子の背凭れに片腕を横たえさせていた。部屋の片隅には三人の若者が立っていて、壁にかかったマットの上に留められたビュルシュトゥナー嬢の色々な写真を眺めていた。開かれた窓枠の把手には、白いブラウスがかけられていた。向かい側の窓のところには、またしても例の二人の老人がいたが、仲間が増えていた。というのも、彼らの背後に彼らをはるかに突き抜けるような上背のある、胸のところを開けたシャツを着た男がいて、赤みがかった顎髭を指で押ししたり、捻ったりしていたのである。「ヨーゼフ・Kだね？」おそらく、焦

点のあわないKの視線を自分の方に向けさせるためだけに、監督官が言った。Kは頷いた。「今朝の出来事には、さぞかし驚いただろうね？」と、監督官は聞くと、審理のために必要なものでもあるかのように、ナイトテーブルの上に置かれたマッチつきのろうそく、本、針刺しといった二、三の品物を両手で脇に退けた。「確かに、」と、Kは言った。やっと分別のある人間と出会えて、この事件についての話ができるという快感に捕らえられていた。「確かに、驚きはしました。しかし、ひどくというわけではありません。」「ひどくというのではない？」と、聞き返すと、テーブルの真ん中にろうそくを立てながら、監督官はその周りに他の品物をまとめて置いた。「あなたは、おそらくわたしのことを誤解していらっしゃる。」と、Kは、急いでつけ足そうとした。「わたしが言おうとしているのは、」——ここでKは中断して、椅子がないかと探した。「そこに座ってもよろしいでしょうか？」と、Kは聞いた。「そういう通例はない。」と、監督官が答えた。「わたしが言いたいのは、」さて、Kは、それ以上は間を置かずに言った。「確かにひどく驚かされはしました。しかし、人間というもの、わたしの運命がそうだったように、三十年も生きてきて、ひとり世の中を渡っていると、驚くようなことが起こっても、免疫ができて、大事とは見なさなくなってくるのです。とりわけ、今日のような場合がそうです。」「なぜ、今日のような場合が？」「全てが冗談だというわけではありません。それにしても仕かけが大袈裟過ぎます。ここの下宿の全員がこのことに関わっているのは間違いありません。あなた方全員もそうです。これでははるかに冗談の域を越えてしまっている。だから冗談というつもりはないのです。」「それは正しい。」と、監督官は言いながら、箱に何本マッチが入っているのかを調べていた。「しかし、別の面からいうと、」と、Kは続けると、ここで皆の方に顔を向けた。ついでに、写真を眺めている例の三人も自分の方に顔を向けさせようとしたが、できなかった。「しかし、別の面からいうと、これまでのことも、それほど重大であるとはいえません。起訴はされましたが、これまでのことから、起訴できるようなこれっぽっちの罪も見つけられないだろうと、わたしは踏んでいるのです。しかし、それも些細なことです。むしろ、主な問題は次の点にあります。誰がわたしを起訴したのか？　どこの役所がこの手続きを行なったのか？　あなた方は役人なのか？　あなた方は制服を着ておられない。その服は、」——と、ここで彼はフランクの方を向いた——「かりに制服と呼ばないとするのなら、むしろ旅行服です。これらの質問にはっきりお答えいただきたい。そして、これらのことさえはっきりすれば、お互いに心からのサヨナラを言えるだろうと、わたしは踏んでいるのです。」監督官はマッチ箱をテーブルの上に投げつけた。「君は大変な考え違いをしている。」と、彼は言った。「ここにいる人間やわたしは、この一件に関しては全く取るに足りない存在だ。それどころか、君についてはほとんど何も知らない。規則に従った制服を着ればよいのだろうが、それで何か物事が悪い方向に傾くというのでもない。わたしには、君が起訴されたとすら言うことができない。あるいは、もっと言うのなら、君がそういう状態にあるのかどうかすら知らない。君は逮捕された、それは確かだ。しかし、それ以上のことは分からない。もしかして、見張りたちが何か違うことを言ったかもしれないが、それは戯言に過ぎない。何にせよ、わたしは、今、君の質問には答えられないが、次のような返事はできる。われわれについて詮索するのを止めよ。自分の身に起きたことを詮索するのも止めよ。そうではなく、自分についての反省を深めよ。自分は無実であると気を大きく

して、そんな風に騒ぎ立てるのはよくない。それ以外ではさほど悪くない自分の印象を、掻き乱すことになってしまう。さらに言えば、そもそも話をする時は、もっと慎重深くあらねばならない。君がこれまで話してきたことのほとんど全ては、ほんのちょっと口に出しさえすれば、その態度から読み取られることであった。加えて、君がそういう行動に出たということが、とりわけ有利に働いたという訳でもない。」

Kは監督官をジッと見ていた。ここで彼は、学校でやられるような説教を（おそらくは年下の人間から）受けたのであろうか？ 慎みがなさ過ぎて、叱責されたのであろうか？ 逮捕の理由や命令者について、何も教えられなかったのであろうか？ 彼はある種の混乱の中に落ち込んで、誰に邪魔されるのでもなく、あっちへ行き、こっちへ行きし、袖口をまくったり、胸の辺りに手をやったり、髪のを乱れを整えたりして、三人の脇を通り過ぎると、「どれもこれも全く意味をなさない。」と、言った。すると例の三人の方も、彼の方を向いて、彼の方に歩みを進めながら、真剣な顔でジッと彼の方に視線を投げるのであった。最後に監督官のテーブルの前まで来ると、Kはピタリと足を止めた。「検察官のハシュテラーとはよい友人でしてね。」と、彼は言った。「彼に電話してもよろしいでしょうか？」「もちろん。」と、監督官は言った。「しかし、それにどういう意味があるのか、わたしには分かり兼ねるが。しかし、何か個人的な用がおりなんでしょう。」「どういう意味があるかですって？」怒るというより、驚きながら、Kは叫んだ。「一体、あなた方は何者です？ 意味のあることを求めながら、ありえる限り、最も無意味なことをやってくるあなた方は？ 泣きたくてきます。この人たちは、最初、急にやってきて、今はその辺で立ったり、座ったりして、あなたの目の前で、わたしに高等馬術をさせようとしています。わたしが形の上で逮捕されようというその時に、検察官に電話することにどのような意味があるかですって？ いいでしょう、電話するのは止めておきます。」「でもまあ、そうは言っても、」と、言いながら、監督官は電話がある控えの間の方に手を伸ばした。「どうぞ、電話なすって下さい。」「いいえ、止めておきます。」と、Kは言うのと、窓のところに行った。その先には、窓のところはまだ例の連中がいた。ちょうどその時、Kが窓のところまで出てきたことで、彼らは見物人という安らぎの地位にありながら、少し居づらい思いをしているようでもあった。二人の老人は伸びをしようとしていたが、後ろの男はそれを止めろとたしなめていた。「あそこにもあんな見物人がいる。」と、Kは声を荒らげて監督官に言うと、人差し指で差した。それから、「そこから離れろ。」と、向こうに対して一喝した。実際、三人は、数歩、後ろに退った。それでもまだ二人の老人は男の背後にいたが、男の方は、恰幅のよい身体で彼らを被い隠しながら、その口の動きから察するに、とにかくあの遠く離れたところからでも聞きとれない何かを語ろうとしているようであった。ところで、二人は完全に姿をくramsというより、Kには気づかれず、再度、窓のところにも近寄る機会を待っているようであった。「しつこい、無遠慮なやつらだ！」と、もう一度、部屋の中の方に向かいながら、Kは言った。ひょっとして、監督官は、横目で見てKがそう思ったように、彼に賛同していたのかもしれない。しかし、何も聞いていなかったというのもありえる話であった。というのも、片手をテーブルの上に押しつけて、指の長さを比べているようでもあったのだから。二人の見張りは、飾り布で覆われたトランクの上に座って、両方の膝を手で擦っていた。三人の若者は、腰に両手を当てながら、ぼんやりと周囲に

目を配っていた。どこかの忘れられた事務所にいるかのように、静かであった。「さて、皆さん、」と、Kは叫んだ。一瞬、両肩で全てを背負っているような感じがした。「皆さんの様子から察するに、わたしの事件は終わったということでしょうか。あなた方の行動の正当性、あるいは非正当性についてのこれ以上の詮索は止めて、双方の握手で問題に宥和的な解決を与えるというのが最もよいというのが、わたしの意見です。この意見にご賛同いただけるのであれば、どうか――。」そして、監督官のテーブルのところに歩み寄り、片方の手を差し出した。監督官は目を上げて、唇を噛みながら、Kが伸ばした手をジッと見ていた。その時は、まだこれで手打ちにしてもらえると、Kは思っていた。しかし、監督官はスッと立ち上がると、ビュルシュトゥナー嬢のベッドの上に置かれた、固い、丸みを帯びた帽子を手にとって、何か新しい帽子を試着する時のように、両手で注意深くもち上げながら、頭に被せてみていた。「君の目には全てが何と単純に映っているんだろう！」と、試着しながら、彼は言った。「われわれはこれで事件を手打ちにしようと、君は言うんだね？ イヤイヤ、そうはいかないよ。だからといって、絶望しろと言っているのでもない。そう、なぜって？ 君は逮捕されたに過ぎず、それ以上ではないのだから。そのことをわたしは伝えるように言われてきた。そして、その務めは果たされて、それがどう受け入れられたのかも確かめられた。今日はもう十分だから、われわれはお暇することができる。むろん、このことは暫定的な話に過ぎない。そろそろ銀行に行きたいと思ってるんじゃないのかい？」「銀行ッ？」と、Kは聞いた。「てっきり、逮捕されたとばかり思っていましたよ。」と、一種の反抗心を抱きながら、Kは聞いた。なぜなら、握手は受け入れられなかったものの、とりわけ監督官が立ち上がってから、これら全ての人々に対して、ますます自立している自分を感じていたのである。彼はこれらの人々と戯れていた。彼らが退室する段になったら、門まで追いかけて、自分の逮捕の話をもち出してやろうと、彼は思っていた。そのため、彼はもう一度、このように話を蒸し返すことすらした。「逮捕されているのに、どうして銀行に行けるんです？」「ああ、その話か。」と、もうドアのところにいた監督官が言った。「君はわたしの発言を誤解している。確かに君は逮捕された。しかし、そのことは職務の遂行を妨げないし、普段の生活も妨げないのだ。」「とすると、逮捕されるというのも悪くはない。」と、Kは言って、ちょっと監督官の方に歩み寄った。「そういう風にしか言わなかったはずだが。」と、監督官が言った。「しかし、そうだとすると、この逮捕通知は不必要なようにすら思えるのですが。」と、Kは言い、さらににじり寄っていった。他の人たちも近寄っていった。今や、全員が狭い部屋のドアのところに集まっていた。「それがわたしの義務だったのだ。」と、監督官が言った。「下らない義務ですね。」と、決然としてKが言った。「そうかもしれない。」と、監督官が答えた。「だが、こんなお喋りで時間を費やすのは止めておこう。わたしは、君が銀行へ行きたいんだとばかり思っていた。一言一言に君がこだわるから言うのだが、わたしは君に銀行に行けと強制しているのではない。君がそうしたがっていると仮定したまでだ。そうして、君の負担を減らして、なるべく目立たない形で銀行に行ってもらうために、同僚である三人の方をこちらに呼んであるから、自由にしてもらっていい。」「エッ？」と、Kは叫び声を上げて、例の三人をじっと睨んだ。今でもまだ、写真のところにいるグループとしてしか記憶にない、この余りにも個性のない貧血症の若者たちは、確かに、彼の銀行の職員たちであり

(同僚というのは言い過ぎで、このことは全能の監督官にも抜けがあることを示していたが)、とにかく、彼の銀行の配下の職員たちであった。Kが彼らの存在を見逃すということが、どうしてありえたのだろうか？ どうしてこの三人の様子に気づかないくらい監督官や見張りに心を奪われていたのだろうか！ 両手をブラブラさせて、動作がぎこちないラーベンシュタイナー、目を窪ませたクリッヒ、慢性的な痙攣によって生じる、虫酸が走るような笑みを浮かべたカミーナー。「おはよう！」と、少し間を置いてKは言う、非の打ちどころのないお辞儀をする三人に、手を差し出した。「全然、気がつかなかったよ。さあ、それじゃあ、仕事に向かおうか？」三人は、微笑みを浮かべながらコクリと頷くと、Kが部屋に忘れてきた帽子がないことに気がついた時だけ、ずっとそれだけを待っていたかのように、やけに熱心に順ぐりに全員で駆け出していった、それを取ってきたが、こういう全てがある種の困惑の存在を窺わせていた。Kは静かに立ちながら、二つの開いたドア越しに三人を目で追っていたが、そのしんがりを勤めたのは、むろん、投げ槍なラーベンシュタイナーで、この男は、エレガントな速足をひたすらカツカツと鳴り響かせていた。カミーナーから帽子を進呈されると、Kは銀行でもやはりしばしばその必要があったように、カミーナーの微笑みは狙ったものではない、そう、大体、こいつは意識して微笑むことなどできないのだと、しっかり自分に言い聞かせなければならなかった。その時、控えの間では、さほど後ろめたさを感じている風でもないグルーバツハ夫人が、彼ら全員のために玄関のドアを開けてくれていたが、それまでもよくそうしたように、Kは彼女のでっぷりした身体に不必要に深く食い込んでいるエプロンの紐にジッと目をやった。下まで出ると、時計を手に、すでに半時間になる遅れを不必要に大きくしないため、Kは車を拾うことにした。車を止めるために、カミーナーが角まで走ってくれた。残りの二人は、どうやらKの気を紛らわせようとしているようであった。突然、クリッヒが向かいの建物の門の方を指で差した。ちょうどそこには、先を尖らせたブロンドの顎髭をした、例の大男が姿を現わしていたが、最初のちょっとした間は、自分の全身が見られたことに少なからず当惑しながら、建物の壁のともたろまで後退りして、そこに凭れかかっていた。例の老婆と老人もまだ階段のところにいる。Kはこの男がいることにはかなり前から気がついていて、それどころか、そこに現われるのを予期すらして、クリッヒがそれを指で差したことには、憤りを感じていた。「そっちを見るな！」一人前の男に対するそういう物言いが、どれくらい人目を引くかということには気も回らず、彼は大声を出した。しかし、言い訳をする必要はなかった。なぜなら、ちょうど車が来たのである。全員が乗り込むと、車が走り出した。その時、監督官と見張りたちがいなくなっていることに全く気がついていない自分に、Kはハタと思い至った。監督官に気を取られる余り、三人の職員に気づけず、今度はまた、三人の職員の方に気を取られる余り、監督官に気づくことができなかった。このことは、彼がさほど沈着冷静ではないことの証拠になっていた。Kは、こういう点からも自分をもっと観察しなければと決意した。しかし、それでもまだ反射的に後ろを振り返ると、もしかして、監督官と見張りたちがまだいるかもしれないからと、車の後部のクッションの方にグッと身を乗り出してみた。しかし、すぐにまた前の方に向き直ると、誰かを探すことは止めて、車室の隅でゆったりとクッションに背中をもたせかけた。そういう感じはしなかったが、まさにその時、彼はちょっとした声かけを求めている。しかし、その時、三

人は疲れているようであった。ラーベンシュタイナーは、車の中から右側を、クリッヒは左側を見ていた。カミーナーは、何でも言って下さいという例のニヤニヤ笑いを浮かべていたが、残念ながら、それをからかうのは人の道に反していた。

この春、Kは可能であれば——というのも、大体は九時まで事務所にいたので——、仕事終わりに、ひとりあるいは職員たちとのちょっとした散歩の後、ビアホールまで繰り出し、大抵は自分より年配の男性たちと常連席に陣取り、通常、十一時くらいまで夜を過ごすのを習いにしていた。しかし、例えば、Kの職務能力や信頼性を非常に高く買っていた支配人から、ドライブや邸宅での夕食に誘われれば、この時間配分にも例外が生じた。さらに、週に一度は、彼はエルザという名の少女の許にも通っていた。この少女は、夜から翌朝の遅くまでワイン酒場のメイドとして働き、日中は訪問があってもベッドでしか客を迎えなかった。

しかし、この日の夜は——ちなみにこの日は、緊張を強いる仕事と、敬意と愛情に満ちた沢山の誕生日おめでとうの挨拶の中、足早に過ぎていったが——、Kはすぐに家に帰ろうと考えていた。仕事の合間でのちょっとした中断の度、そんなことを彼は考えていた。自分が何を考えているかはハッキリしなかったが、あたかも今朝の出来事でグルーバツハ夫人の住まいには大きな混乱が生じており、その秩序の回復のためには自分が必要であると感じていたのである。とはいえ、一旦、秩序さえ回復すれば、これらの出来事のあらゆる痕跡は拭い去られて、全ては再び本来の歩みを取り戻していくはずであった。特に、例の三人の職員については、何も恐れることはなかった。彼らは、銀行の巨大な官僚機構の中に再び沈み込んで、そこに大きな変化は見られなかった。観察だけのために、Kは何度も、個別に、あるいはまとめて彼らを事務所に呼んだが、その度、安心して解放することができた。

夜の九時半、住まいである建物の前まで来ると、門のところで大股を開いて立ちながら、パイプを燻らしているひとりの若者に出くわした。「誰だ、お前は？」と、Kはすぐに問いかけて、若者に顔を近づけたが、通路が薄暗かったので、ハッキリとは見極められなかった。「門番の息子です、旦那。」と、若者は答えると、口からパイプを外して道を空けた。「門番の息子？」と、Kは聞き返して、せっかちな感じで杖で床を突いた。「御用ですか？ 父を呼んで参りますか？」「いいよ、いいんだ。」と、Kは言ったが、その声には、この若者が悪さをして、Kがそれを許しているような、何か赦免を与えるような響きがあった。「構わないよ。」それから彼はそう言うと、さらに一步を進めて、階段を上る前のところでもう一度、クルリと後ろを振り返った。真っ直ぐ自分の部屋に行ってもよかったが、グルーバツハ夫人と話がしたかったので、直ちに彼女の部屋のドアを叩いた。彼女は、テーブルのところで繕いかけの靴下を手に座っていた。テーブルの上には古びた靴下はまだ山のように積んであった。こんな遅くにすみませんと、ボンヤリした様子でKは断りを入れたが、そんな弁解は結構ですわと、とても愛想のよい感じで、グルーバツハ夫人が言った。わたしはいつもあなたの味方です。分かっていると思いますが。あなたは、わたしにとっての最高かつ最良の借家人です。Kは部屋の中を見回したが、そこは以前の状態を完全に取り戻していた。朝、窓側のテーブルの上にあった朝食の食器もすっかり片づいていた。「女の手は、静かに色々なことをやってのける。」と、Kは思った。彼なら、ひょっとして食器をその場で叩き割っていたかもしれない

かった。むろん、それを運び出すことなど絶対にありえなかった。ある種の感謝の気もちで、グルーバツハ夫人を彼は見つめた。「こんな夜更けまでどうして働いていらっしゃる？」と、Kは聞いた。さて、二人でテーブルの席につくと、時々、Kは靴下の中に手を突っ込んだりした。「仕事だらけでしてね。」と、彼女は言った。「昼間は借家人にかかり切りで、自分のことをするのは夜しかありません。」「そして、今日は、わたしがとんでもない仕事を作ってしまった？」「どうしてまたそんな？」と、少し熱くなりながら、彼女が切り返した。繕いかけの靴下が膝の上にあった。「例の男たちのことですよ、今朝、ここに来た。」「ああ、あの。」と、彼女は言うのと、再び冷静な状態に戻っていった。「大した手間じゃありませんでしたわ。」Kは、彼女が再び繕い物に精を出すのを黙って見ていた。あの話をすると、彼女を驚かせてしまうようだと、彼は感じていた。あれについて話すのがよいことだとは、彼女は思っていない。ならばなおさら、このことを彼女に言うのが肝要ではないか。なぜなら、こんなことは年配の女性にしか話せないことなのだから。「でも、実際には、ひと仕事だったんでしょう。」と、彼は言ったが、その後、「とはいえ、もう二度と起こることじゃありませんが。」とも、つけ加えた。「そうですね、起こるものですか。」と、彼女は力を込めて言うと、ほとんど悲しげな顔でKに微笑んでみせた。「本当にそう思っているのですか？」と、Kは聞いた。「そうですね。」と、声を低くして彼女は言った。「でも、とにかく根を詰めて考えてはいけませんわ。世の中、どんなことでも起こりえるのですから！　こういう風に内密に話をさせてもらったので、Kさん、わたしも白状しますが、ちょっとの間ですが、ドアの陰から話は聞かせてもらいました。二人の見張りの方とも、ちょっとの間だけ。今、問題になっているのは、あなたの運命についてですよ。本当に、気になって仕方がありません。おそらく、許されている以上に。なぜって、わたしは大家に過ぎませんもの。まあ、そんなことで、ちょっと聞かせてもらったのですが、あなたが特に悪いことをしたとは申し上げられません。そう、確かに、逮捕はされました。でも、泥棒の逮捕じゃありませんから。泥棒みたいに逮捕されたのなら、悪いことをしたのでしょう。でも、今回の逮捕は――。わたしには、あなたが、何か学者のようなことをされたのだと思われるのです。馬鹿なことを言っていたら、ごめんなさい。分かって言っているんじゃない、誰にも分からないんだと思いますが、そう思えるのです。」「グルーバツハ夫人、仰ったことの中に、馬鹿げたところはひとつもありません。少なくとも部分的には、わたしもあなたと全く同意見です（ただし、全体をさらに明晰には見ていますが）。わたしは、単純に、全体を学者のようなものだとすら考えず、むしろそもそも意味などなかったと考えています。実際、わたしは虚を突かれました。目覚めたらすぐ、アンナがいないとか、そんなことには惑わされず、シャンと起きて、どこに誰がいが、その男が立ち塞がろうがお構いなく、あなたのところまで来て、それがいつもと違うやり方だったとしても、キッチンで何かの朝食をかき込みながら、着るものは部屋まであなたに取りにいらって、要するに、理性的にさえ振る舞えれば、それ以上、何も起きなかったでしょうし、生じつつあった全ても封印されていたのでしょう。しかし、人間には余りにも心構えというものが無い。例えば、銀行でなら、わたしにも心構えがあります。あそこでなら、何かありえないことが起こったとしても、使用人たちが何人もいますし、外線と内線の電話が目の前の机の上にあります。利害関係者と職員たちもひっきりなしにやってきます。もちろん、それ

だけじゃなく、何よりわたしが仕事との繋がりの中にあるので、冷静でもあり、こういうことの相手をするのは、むしろ楽しみなくらいなのです。とはいえ、全ては終わってしまいました。もともとはこれ以上、こんな話をするつもりもありませんでした。ただ、あなたのご意見、理性的な判断力をもったご婦人のご意見を伺いたいと思っておりまして、このことに賛同いただけるのを、非常に嬉しいとも感じています。さあ、手を出して下さい。握手によって、この意見の一致をより確かなものにするのです。」

彼女は手を差し出すだろうか？ 監督官は出そうとしなかったが。そう考えながら、これまでとは違う探るような目つきで、Kは彼女の方を見た。Kが立ち上がると、彼女も立ち上がった。ちょっと気づまりそうな様子であった。なぜなら、Kが話した内容の全ては、簡単には理解できないものだったのである。こういう気づまりから、その場にそぐわぬようなことを、思わず彼女は口走った。「でも、物事をそう真剣に取るもんじゃありませんわ、Kさん。」そう言うと、泣きそうな声になって、もちろん、握手のことは忘れてしまった。「今回のことを真剣に受け取ったという自覚はありませんでした。」と、答えはしたものの、突然、ドッと疲れを感じて、この夫人をいくら納得させても、一文の得にもならないのだとKは悟った。ドアのところでもうひとつだけ、彼は聞いた。「ビュルシュトゥナー嬢はもう帰りました？」「いいえ。」と、グルーバツハ夫人は言う、この素っ気ない受け答えに、遅きに失したとはいえ、理性から来る思いやりの心を添えるために、ニッコリと微笑んでみせた。「観劇ですわ。何かご用でも？ 何か伝えましょうか？」「いえ、ただちょっと話したいことがあって。」「いつ帰ってくるのやら。観劇の時はいつも遅いのです。」「本当にどうでもいい話なんです。」と、Kは言った。退室しようと傾けた頭は、もうドアの方に向かっていた。「今日、部屋を使うことになったのをお詫びしたいと思っただけなのです。」「そんな必要はないですよ、Kさん。気の使い過ぎです。あの娘は何も分かっています。朝から今まで帰らないので、もう何もかも元に戻してあります。あなたもご覧になって下さい。」そうして、ビュルシュトゥナー嬢の部屋に繋がるドアを開けた。「ありがとうございます。よくやってもらっているのは分かっています。」と、Kは言う、それでも、開いたドアの中に一歩を踏み入れた。真っ暗な部屋の中で、静かに月が輝いていた。実際、目に入る全てのものは、元のところに収まっていた。もうブラウスも窓の把手にはなかった。ベッドのクッションがいやに高く盛られているようであった。その一部には月光が当たっていた。「あの娘はよく帰りが遅くなりますね。」と、Kは言う、その責任が彼女にあるかのように、グルーバツハ夫人をジッと見つめた。「この頃の若い人には多いんですよ！」と、言い訳をするように、グルーバツハ夫人が言った。「そうですね。」と、Kは言った。「とはいえ、行き過ぎてこともあるじゃないですか。」「ですわね。」と、グルーバツハ夫人が言った。「Kさん、いつもあなたは何て正しいんでしょう。今回の場合もきっとそうですね。ビュルシュトゥナー嬢のことを悪く言うつもりはありません。あの方は、善良で愛らしい娘さんですもの。感じもいいし、礼儀もしっかりしている。時間も正確で、働き者でもいらっしゃる。そういう一切を、高く買わせてもらっています。でも、もっと自分に誇りをもち、慎重であるべきというのも本当にその通りですわ。今月になってからもう二回くらい、場末の通りで違う男の人といるのを見かけました。本当に神に賭けてKさんだけに言うのですが、大変に嫌な気持ちにさせられました。とはいえ、遠からず、このことはあの娘自身にも話す

ことになるでしょう。それはそうと、わたしがあの娘に怪訝な気持ちにさせられたのは、一度や二度ではないのです。「あなたは大変な思い違いをしていらっしゃる。」と、腹を立てながら、ほとんどそれを隠そうともせず、Kは言った。「さらに言えば、あの娘に対するわたしの考えを明らかに取り違えてもいらっしゃる。そういう意味じゃありません。それどころか、わたしの心からの警告ですが、彼女にそういうことを言うべきでもありません。あなたは完全にどこかに迷い込んでしまわれた。わたしはあの娘のことを本当によく分かっています。あなたが仰ったことの中に、正しいところはひとつもない。さらに言えば、どうやらわたしは言い過ぎたようでもある。邪魔をする気などありません。言いたいことを言えばいい。ここでわたしは失礼します。」「Kさん、」と、懇願するようにグルーバツハ夫人は言うと、すでに彼がノブに手をかけていた、彼の部屋に繋がるドアのところにすがってきた。「まだ、全然、あの娘と話をする気などありません。もちろん、これからはもっとよく観察しますわ。わたしは、知っていたことをあなたにだけ打ち明けさせてもらいました。つまり、こういうことは、下宿を綺麗にしておこうとする時、全ての大家が考えることなのです。わたしがしたこと、それ以上の他意はありません。」「綺麗にしておく！」Kは、なおもドアの隙間越しから、そう叫んだ。「下宿を綺麗にしておきたいのなら、真っ先にまずわたしの契約を切るべきでしょう。」そうして、ピシヤリとドアを閉めると、小さなノックの音にはもう注意を払わなかった。

とはいえ、眠気は全くなかったので、もうちょっと眠らずにいて、この機会にビュルシュトゥナー嬢が帰ってくる時間を見届けてやろうと、彼は考えた。そうすれば、不謹慎かもしれないが、ひょっとして、二言三言、彼女と話ができるかもしれない。窓辺に寄りかかり、疲れた目を押さえていると、そればかりでなく、グルーバツハ夫人を罰してやろう、こっそりビュルシュトゥナー嬢を説き伏せて、一緒に契約解除してやろうという考えすら、一瞬、脳裏に浮かんできた。しかし、すぐに、そこまでやるのはひどくやり過ぎという感じもしてきた。それどころか、今朝の出来事をきっかけに引っ越しまで考える自分に対する疑問の念すら生じてきた。それほど無意味で、何より無鉄砲で、軽蔑すべきことがあろうか。

誰もいない通りを眺めているのにも飽きたので、誰がこの屋敷に踏み込んできてもソファからすぐ見分けられるよう、控えの間に通じるドアを少し開けてから、ソファに横になった。だいたい十一時頃まで、葉巻を吹かして、静かにソファで寝そべていたが、それからはもうジッとしておられず、まるでそうすればビュルシュトゥナー嬢の帰宅が早まるかのように、ほんのちょっと控えの間に入ったりもした。彼女に対する特別な感情はなかった。そもそもどんな女だったのかも思い出せなかった。しかし、話をしてみたいという気持ちはあった。そして、今日が終わるというこの時に及んで、遅い帰宅という形でまだ不安と混乱をもち込む彼女に対して、腹を立ててもいた。今日は、夕食もまだで、予定していたエルザ宅の訪問も諦めていたが、それも彼女の責任であった。もっとも、今からエルザが働くワイン酒場へ繰り出しさえすれば、この二つの埋め合わせをすることはできた。ビュルシュトゥナー嬢との対話さえ終われば、遅くなくてもそれをやってやろうと、まだ彼は考えていた。

十一時半を過ぎた頃、階段で誰かの足音がした。思考に没入していたKは、控えの間をまるで自室のように大声を出して歩いていたが、自室のドアの裏側にサッと身を隠し

た。そこに姿を現わしたのがビュルシュトゥナー嬢であった。ブルブルと身体を震わせた彼女は、ドアを閉めながら、華奢な肩の周りに絹のマフラーをギュッと巻きつけていた。次の瞬間にも自室へ消えようというその彼女の部屋に、真夜中、Kが足を踏み入れるというのは、本当に許される話ではなかった。今こそ、話しかけなければならなかった。しかし、運悪く、部屋の電灯を点けるタイミングを、彼は逃してしまった。そのため、もし暗い部屋からパッと姿を現わせば、襲撃のような感じを与えて、少なくともひどく彼女を驚かせることにはなってしまった。誰の助けも借りられず、一刻の猶予もない中を、ドアの隙間からヒソヒソと、彼は囁きかけた。「ビュルシュトゥナーさん。」それは呼びかけというより、嘆願のように聞こえた。「誰です？」と、ビュルシュトゥナー嬢は返事をする、大きな瞳で周りを見回した。「わたしです。」と、Kは言い、姿を現わした。「あら、Kさん！」と、微笑みながら、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「こんばんは。」そうして、片手を差し出した。「ちょっとお話ししたいことがあるのです。今、よろしいですか？」「今ですか？」と、ビュルシュトゥナー嬢が聞いた。「今でなくちゃいけません？　ちょっとおかしくありません？」「九時からずっと待っていたのです。」「まあ、そうでしたの。わたしは観劇中でした。でも、それにしても、わたし、あなたのことを何も存じ上げません。」「わたしがお話ししようとするこの発端は、今日、初めて起きたことなのです。」「そうすると、今のわたしには、倒れるくらい疲れているのは別にしても、そうしなければならない理由はないという訳ね。でも、まあ、ちょっとの間なら部屋にお入り下さい。ここでは話ができませんわ。皆さん、目を覚ましてしまいます。そうなれば、周りの人にもそうですが、わたしたちにとっても不愉快なことになってきます。部屋の明かりを点けますね。こちらでお待ちになって。ここの電灯は切って下さい。」Kはそのようにした。それから、こちらにお入り下さいと、ビュルシュトゥナー嬢が、もう一度、部屋からそっと合図してくれるのを待っていた。「どうぞ、お座りになって。」と、彼女は言うと、オットマンを差し示した。口に出した疲れはあったものの、彼女自身は、ずっとベッドの柱の横に立ち続けていた。花々で豊かに飾られた小さな帽子すら、脱ぐことはなかった。「で、ご用は？　本当に興味がありますわ。」と、彼女は軽く足を交わらせた。「おそらく、あなたは仰るのでしょう、」と、Kは話し始めた。「今、話をしなければならないほど、急な話ではなかったとか。しかし――。」「前置きは、いつも聞き流すようにしています。」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「そう言ってもらえると助かります。」と、Kは言った。「かなりの部分がわたしの罪なのですが、今朝、この部屋で小さな騒ぎがあったのです。わたしが意図したものではありませんが、数人の見知らぬ人間がここに足を踏み入れました。といっても、さっきも言った通り、それはわたしの罪から来るのですが。このことについて、お許し願いたいと思っています。」「わたしの部屋で？」と、ビュルシュトゥナー嬢は言うと、部屋ではなく、Kを吟味するように見た。「そうです。」と、Kは言うと、そこで初めて二人の目が合った。「それがどう行なわれたのかは、口に出すのも無益なことです。」「いえ、でも、本当のところ、興味がありますわ。」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「いえいえ。」と、Kが言った。「そうですか。」と、ビュルシュトゥナー嬢が答えた。「秘密に首を突っ込む気はありません。さして興味のないことだと仰るのなら、あれこれ言うのは止めじます。お願いされた許しは喜んで差し上げますわ。とにかく、何も荒らされた形跡がないのですから。」

と、開いた手を両方の腰のところに当てながら、部屋の中をグルッと見て回った。そして、写真が留められたマットのところで足を止めると、「ちょっと、ご覧になって！」と、大きな声を出した。「本当に写真がメチャクチャだわ。ひどい。こんな風に誰かが不法に部屋の中に忍び込んだのね。」Kは頷くと、あの退屈で目的のない活発さを誰も飼い馴らせない職員のカミーナーを、心ひそかに呪った。「おかしな話だわ、」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「留守中に部屋に入らないだなんて、当然、あなたが禁じているはずのことを、わたしが禁じなければならないだなんて。」「お言葉ですが、」と、Kは言う、写真のところまで歩いていった。「写真に触ったのはわたしじゃありません。といつても、信じてもらえないでしょうから、白状しますが、審理委員会が三人の銀行の職員をここに連れ込んだのです。おそらくそのうちのひとり（近々、わたしが銀行から放り出そうとしている男）が、その辺の写真を手に取りました。そう、ここで審理委員会が開かれたのです。」何かを問いたげな目でビュルシュトゥナー嬢が見ていたが、彼はそう続けた。「あなたのための査問？」と、ビュルシュトゥナー嬢が聞いた。「ええ。」と、Kが答えた。「ありえないわ！」と、大きな声を出して、ビュルシュトゥナー嬢は笑った。「それがあったのです。」と、Kが言った。「そういう風に仰るといことは、わたしの無実を信じていらっしゃる？」「さあ、無実と言われても。」と、ビュルシュトゥナー嬢は言った。「おそらく重大な結果をもたらすはずの判断を、すぐに口に出すつもりはありません。まだあなたのこともよく存じ上げていませんし。でも、審理委員会にいきなりつめ寄られるというのは、よほどの重罪人ではないのかしら。ただ、あなたは今、自由の身でいらっしゃる――。あなたの落ちついた身のこなしからすると、少なくとも脱獄してきたのではないと、推察されます――。するとやっぱり、その手の犯罪はなかったのかもしれないね。」「そうなんです。」と、Kが言った。「そして、審理委員会は、わたしが無実、あるいは想定したほどの罪ではなかったと理解したのかもしれない。」「確かにありえます。」と、非常に注意深く、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「ちょっといいですか。」と、Kが言った。「裁判についての経験が、それほどおありな訳じゃないですよね。」「ええ、ありません。」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「そして、実際、これまでに何度も、わたしはそういう経験がないのを残念に思ってきました。なぜなら、全てを知りたいと思うタチですし、特に裁判に関することについては、とても興味があるものですから。裁判所には、独自の魅力があると思いませんか？　ところでわたしは、この方面での知識を必ず確かなものにするつもりです。なぜなら、来月から事務員として弁護士事務所で働くのです。」「素晴らしい。」と、Kは言った。「それなら、わたしの裁判も少しは手伝ってもらえるのかな。」「できるかしら。」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「いいえ、できるわ。どうぞ、わたしの知識を使って下さい。」「本当に、本気でお願いしているのです。」と、Kは言った。「あなたは半分くらい本気のようにですが、わたしは少なくともあなたと同じくらいの気もちでいます。何しろ、この件は、弁護士を引き込むには話がこじんまりし過ぎていますが、助言者なら役に立つこともあると思いますから。」「そうね、でも助言者になるには、何が問題かが分からないと。」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「そこがまさに厄介なところで、」と、Kが言った。「わたしにもさっぱり分からないのです。」「何だ、やっぱりからかってらっしゃるんだ。」と、ビュルシュトゥナー嬢が本当にガッカリという風に言った。「そのためにこんな真夜中を選ぶ

だなんて、全然、必要なかったんじゃないですか？」そうして、長い間、二人でその横に立っていた、写真のある例の場所から離れていった。「いいえ、それは違います、ビュルシュトゥナー嬢、」と、Kは言った。「からかってなんていません。全く、あなたに信じてもらえないだなんて！　すでに知っていることはお話ししました。それどころか、分かっていることまで。なぜなら、審理委員会というのは口が滑ったのです。つい、そうやってしまいました。他に名前を知らなかったものですから。審理はありませんでした。ただし、逮捕はされました。何かの委員会というのも本当です。」ビュルシュトゥナー嬢は、オットマンの上に座って、また笑った。「で、どんな感じでしたの？」と、彼女は聞いた。「ひどいものでした。」と、Kは答えたが、その時、実はそのことは全く考えておらず、ビュルシュトゥナー嬢の姿態の方にばかり、目を奪われていた。彼女は、片手で頬杖を突きながら――肘はオットマンのクッションの上で安らわせていた――、もう一方の手で、ゆるやかに腰のところを擦っていた。「それでは余りにも漠然としています。」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「何が漠然としているですって？」と、Kが聞いた。それから、何を聞かれていたのかを思い出して、こう言った。「それがどんな風だったか、やってみましょうか？」彼は立ち上がりかけたが、部屋を出ていくというのではなかった。「本当に疲れているんです。」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「いつもお帰りが遅いからじゃないですか。」と、Kが言った。「ほら、ご覧なさい、やっぱりわたしが小言をもらって終わりって訳ね。小言は全くその通りよ。だって、わたしはあなたを入れるべきじゃなかったんだもの。今、明らかになったように、本当にこんなことはすべきじゃなかったんだわ。」「今、すぐに分かることですが、すべきだったんです。」と、Kは言った。「ベッドからナイトテーブルを出してもよろしいですか？」「何の思いつきで？」と、ビュルシュトゥナー嬢が言った。「もちろん、駄目よ！」「だったら、見せられないじゃないですか。」それによって、計り知れない損害を被らされるという風に、激昂しながら、Kが言った。「分かったわ。説明のために必要というのなら、そのテーブルをゆっくりずらして下さい。」と、ビュルシュトゥナー嬢は言うと、少し間を置いた後、弱々しい声でこうつけ加えた。「余りにも疲れているから、本来の一線を越えてまで、あなたを許してしまうのよ。」部屋の真ん中にテーブルを置くと、Kはその後ろに座った。「正しく人物の配置を頭に入れてもらわなければなりません。とても面白いんです。わたしが監督官です。トランクの上には二人の見張りが座っています。写真の前には三人の若者が立っています。ついでに言えば、窓の把手には白いブラウスがかかっています。さあ、始まりです。アッ、自分のことを忘れていました。最重要人物のわたしは、このテーブルの前に立っています。監督官は、足を組んで、片方の腕はこの背凭れのところでダラリとさせながら、非常にくつろいだ様子で座っています。無類のルンペンです。さあ、ここからが本当の始まりです。まるで起きろと言わんばかり、監督官がわたしを呼びつけます。ほとんど叫ぶような感じです。あなたに分かってもらうために、残念ながら、わたしも叫んでみなければなりません。ちなみに、彼が叫んだのはわたしの名前ですが。」微笑みながら聞いていたビュルシュトゥナー嬢が、Kが叫ぶのを制しようと唇に人差し指を当てたが、もう遅かった。すっかり役にはまり込んだKは、ゆっくりと大きな声を出した。「ヨーゼフ・K！」ちなみに、それは、言っていたほどの大声ではなかったが、その叫びには、唐突に吐き出された後、しばらくして、徐々に部屋の中に拡がるように思

われる、そういう力強さがあった。隣の部屋のドアで、何度か、強く、短く、規則的なノックの音がした。真っ青になったビュルシュトゥナー嬢が、胸のところに手をやった。Kもひどく肝をつぶした。というのも、今朝の出来事と、それを演じてやっているビュルシュトゥナー嬢以外、何も頭になかったのである。彼は気もちを整理すると、ビュルシュトゥナー嬢のところに駆け寄って、手を握った。「怖がることはありません。」と、彼は囁いた。「全部、元の鞘に収まります。だけど、一体、誰だろう？　ここの隣の部屋には誰も泊まっていないはずなんだが。」「いいえ。」と、ビュルシュトゥナー嬢がKの耳元で囁いた。「昨日からグルーバツハ夫人の甥の大尉が泊まっています。たまたま、どこにも空いた部屋がなかったんです。ああ、そのことを忘れていた。まさか、あなたがこんな大声を出すだなんて！　こんなことになって、本当に残念だわ。」「何も心配ないですよ。」と、Kは言うと、彼女がクッションに仰向きに沈み込むやいなや、額にキスをした。「駄目よ、止めてちょうだい。」と、ビュルシュトゥナー嬢は言うと、また急に立ち上がった。「帰って、本当に帰って下さい。一体、何のつもり？　大尉がドアで聞き耳を立てているわ。全部、聞かれてしまったのよ。もう、面倒ばかりかけないで！」「まだ帰りません。」と、Kは言った。「あなたがちょっと落ち着くまでは。部屋のあっちの隅に行きましょう。あそこなら、盗み聞きもされません。」抗う様子もなく、彼女は引っ張っていかれた。「まだ分かってもらえていませんが、」と、彼は言った。「今、問題になっているのは、確かに不愉快なことではありますが、全然、危険なことではありません。この問題を左右する力をもつグルーバツハ夫人が、本当にどれくらいわたしを崇拜し、わたしの言うことを無条件に信じてくれるか、あの大尉が彼女の甥であれば、なおさらそうだとすることは、あなたもよくお分かりでしょう。ついでに言えば、彼女はわたしを頼りにしてもいます。なぜなら、かなりの金額をわたしから借りたことがあるのですから。今、われわれが一緒にいるのを釈明するどんな提案もわたしは受け入れます（それがちょっとでも目的にかなっているのなら）。表向きだけでなく、本当に心からその釈明を信じるように、グルーバツハ夫人を仕向けることもお約束します。その時は、手加減の必要はありません。わたしがあなたを襲ったという話を広めたいのだとしても、グルーバツハ夫人はそれをそのままの意味で受け取り、そうだと信じながら、わたしへの信頼は一切揺るがないでしょう。それくらい、わたしを頼っているのです。」ビュルシュトゥナー嬢は、少しうずくまるような感じで、静かに前方の床を見ていた。「わたしがあなたを襲ったとグルーバツハ夫人に思われても、別に構わないじゃないですか。」と、Kはつけ足した。目の前に、分け目が入り、少し盛り上がり、ギョッと束ねられた、赤毛の彼女の髪があった。ビュルシュトゥナー嬢がこちらを向くのではと、Kは思ったが、姿勢は変えずに、彼女は言った。「ごめんなさい、急にノックの音がしたので、びっくりしてしまって（大尉と居合わせたことで、これからどうなるのかとか、そういうことじゃないのよ）。あなたが大きな声を出した後、とても静かになったでしょう。そこであのノックの音がしたので、ひどくびっくりしたの。ドアの近くに座っていたというもあるわ。本当にすぐ横でノックの音がしたんですもの。お申し出には感謝しますわ。でも、受けるつもりはありません。自分の部屋で起きる全てのことに、わたしは責任が取れるのです。本当にどんなことでも。不思議なのですが、あなたは自分の申し出の中にどんな種類の侮辱があったのか、全く気づいていらっしやらないのね（もちろん、その横には、善意

がありましたわ。それは認めます)。さあ、もうここから出て行って、わたしをひとりにして下さい。今はそうしてもらうことが、さっきよりさらに必要です。お願いされたのは数分だったのに、もう半時間以上も経ってしまった。」Kは、最初に彼女の手を、次に手首をギュッと掴んだ。「気を悪くされたんじゃない？」と、彼が言った。彼の手を振りほどきながら、彼女は答えた。「そんなことはありません。いつ、誰に対しても、わたしが気を悪くすることなどありません。」彼はもう一度、彼女の手首を掴んだ。今度は、彼女はされるがままになりながら、その形のまま、彼をドアのところまで連れていった。彼は、ほとんど帰ろうとしかけていた。しかし、ドアの前まで来ると、こんなところにドアがあったのかという風にピタリとそこで足を止めた。ビュルシュトゥナー嬢は、身を振りほどき、ドアを開けて、控えの間にスリと逃げ込むと、そこからKにひそひそ話をするために、この一瞬を利用した。「ちょっとこちらにいらして。ほら。」——大尉の部屋のドアを彼女は指差した。ドアの下からは光が漏れていた——「明かりを点けて、わたしたちのことを見て楽しんでいるのよ。」「どれどれ。」と、Kは言う、先に立って歩きながら、彼女を掴まえて、喉を潤らした猛獣が舌を鳴らして、ようやく見つけた泉の水に襲いかかるように、彼女の唇、それから顔中にキスをした。そして、最後は喉がある方の首に唇を押しつけながら、長い間、そこから唇を動かさずにいた。大尉の部屋から物音がしたので、彼はムクリと顔を上げた。「そろそろ行こうか。」と、彼は言い、ビュルシュトゥナー嬢を洗礼名で呼ぼうとしたが、それを知らなかった。彼女は、疲れたように頷くと、すでに半身を翻しながら、キスのために彼に手を委ねていたが、まるでそのことには気づかないかのようであった。それから、身を屈めると、彼女は自室に入った。その後すぐ、Kはベッドで横になった。彼はたちまち眠りに落ちた。しかし、そうなる前、もう一度、少しだけ自分の行動を振り返っていた。大満足であった。しかし、もっと満足を感じないのが不思議な感じでもあった。大尉のこともあり、彼はビュルシュトゥナー嬢のことを真剣に心配したのであった。

## 第二章

## 第二章 最初の審理

次の日曜日、事件についての短い審理が行なわれると、電話で知らされた。次の点に留意するようにと、Kは言われた。これからの審理はひたすら定期的に、おそらく毎週ではないにせよ、かなり過密な日程で行なわれる。訴訟の早期の決着は、一方では、全体の利益に供している。しかし、他方では、審理はあらゆる点から徹底的に尽くされなければならない。しかし、それに伴う労力のことも考えると、過度に長引くのはよろしくない。ということで、素早く、次々に執り行なわれる、しかし、短期間の審理という逃げ道が選ばれることになった。Kの仕事を妨げないため、審理の日程としては、日曜日を指定することにする。ここまで申し上げたことには、ご同意いただけると思う。しかし、別日程を希望する場合でも、できるだけ、意向には添うつもりでいる。ちなみに、審理は、夜に行なうこともできる。といっても、おそらく貴殿の頭が回らないであろうが、いずれにせよ、何らかの異議がない限り、審理は日曜日ということにしたい。Kが必ず出席すべきなのはもちろんである。そのことは、改めて注意する必要もなかろう。出頭しなければならない建物の番地が告げられたが、そこはKが一度も訪ねたことがない、辺鄙な町外れにある街道沿いの建物であった。

知らせを受けると、何の返事もせず、Kは受話器をフックにかけた。すぐに日曜日に行こうと決めた。それは確かに必要なことであった。裁判は始まったのだ。彼はその前に立ち塞がり、最初の審理を最後の審理にしなければならなかった。電話口でまだ物思いに沈んで立っていると、その時、背中越しで支配人代理の話し声がした。電話をかけようと思っている彼の行く手を、Kが塞いでいたのである。「よくない知らせですか？」と、何かを聞くというより、電話口からKを追い払うために、支配人代理が聞いた。「大したことじゃありません。」と、Kは言う、脇に退いた。しかし、そこから離れるというのでもなかった。支配人代理は受話器を取ると、交換手が繋ぐのを待っている間、受話器越しにこう言った。「ちょっとよろしいですか、Kさん。日曜日の朝、わたしのヨットで船上パーティーをするのですが、ご一緒しませんか。かなりの規模のパーティーです。あなたの知りあいもいるはずですよ。例えば、検察官のハシュテラーさんとか。いかがですか？ ぜひいらして下さい！」Kは、支配人代理の話に注意を集中しようとした。それは、Kにとってどうでもよい話ではなかった。なぜなら、決して仲がよいとはいえない支配人代理からの今回の招待は、あちら側からの宥和の試みを意味していたし、Kが銀行の中でどれほどの重みをなしているか、彼が友好的、あるいは、少なくとも中立的であるということが、銀行で二番目の地位にある職員にとり、どういう価値があると

映っているのかを示していたのである。この招待は、支配人代理の側からの屈従であった。もちろん、交換手が繋ぐのを待つ間、受話器越しにそう言っただけかもしれないが。とはいえ、Kは第二の屈従を強いなけらななかつた。彼は言った。「ありがとうございます！ 残念ですが、日曜日は時間がありません。先約がありまして。」「それは残念だ。」と、支配人代理は言う、今、繋がったばかりの電話の会話の方に意識を向けていった。それは短い通話ではなかつた。しかし、その間もKはポーッとした感じで、電話の脇に立ち尽くしていた。支配人代理の電話が切れると、急にわれに返って、意味もなくそこにいたことを、少し詫びるためだけにこう言った。「さっき電話がありまして。わたしはここを外すつもりでした。ですが、相手がわたしに何時かと伝えるのを忘れてしまつて。」「もう一度、聞いてみたらいいじゃないですか。」と、支配人代理が言った。「大したことじゃないんです。」と、Kは言った。しかし、口に出したことで、元からすでに欠点だらけだった言い訳は、さらにしどろもどろになっていった。そこから歩き出した後も、まだ支配人代理は色々と別のことを喋つてきた。それゆえ、Kもそれに調子をあわせていたが、日曜日は午前九時に行けばいいのだろうか、平日はどの裁判所もその時間に仕事が始まるのだからということしか、ほとんど頭の中にはなかつた。日曜日は曇天であつた。Kは疲れていた。というのも、常連客とのドンチャン騒ぎで、夜中まで宿屋に居残っていたのである。あやうく寝過ごすところであつた。熟慮の時間も、その週のうちに考えていた幾つかの案をうまく組みあわせる時間もなく、大急ぎで着換えると、朝食も食わず、指定された町外れに向かつて走つていった。奇妙なことに、周りを見る余裕もなかつたのに、事件に関係する三人の職員、ラーベンシュタイナー、クリッヒ、カミーナーに、バツタリと彼は出くわした。最初の二人は、路面電車に揺られながら、彼の行く手を横切つていった。カミーナーは喫茶店のテラスに座り、彼が通つていくと、興味津々という感じで、手すりから下の方に身を乗り出していた。三人とも、ジツと彼を見つめて、自分たちの上司が走り去る様子に、怪訝な表情を浮かべていた。Kが車に乗らなかつたのは、ある種の反抗心からであつた。彼にとっては、全てが（この件に関する見知らぬ人からの最低限の援助ですら）嫌悪の対象だったのである。それゆえ、誰の手も借りないことで、ほんのちょっとでも誰かに悟られまいとしたのであつた。とはいえ、最終的に審理委員会に大いなる几帳面さを示して、自らの品位を貶める気もサラサラなかつた。いつ来いとは言われなかつたが、とにかく今はただ、なるべく九時と思つて走つていた。そのような建物は（彼自身、明確な考えがあつた訳ではなかつたが）、何らかの目印や、あるいは入り口付近の特別な人の動きで、遠くからでも見分けがつくのだろうと、彼は考えていた。しかし、それがあつたというユリウス通りの始点に着いてみて、しばらくKは立ちすくんでしまつた。両側には、ほとんど全く同じ形の建物がズラリと並んでいて、それらは、背の高い、灰色の、低所得者たちが住む賃貸住宅であつた。その時は、日曜日の朝だったので、ほとんどの窓辺には人の姿があつた。彼らは、腕まくりをして、窓辺に凭れたり、煙草を吹かしたり、窓辺まで小さな子どもを連れてきて、慎重に、優しく、身体を支えてやったりしていた。寝具がうず高く積まれた向こうに、掻きむしつたような髪をした女の頭がチラツと見える、そういう窓もあつた。通りの両側では、人々が大きな声で呼び交わしていた。そういう呼び交わしが、まさにKの頭上で何かの大爆笑を引き起こしていた。延々と通りは続いていた。沿道には、通り

よりも低いところであって、階段を二、三段、下りると中に入ることができるちょっとした様々な食料品店が、一定の間隔を空けて点在していた。そこには女たちが出入りして、階段の踏み段のところで立ち止まるとは、ベチャクチャお喋りをしていた。上の方の窓に向かって商品を薦めていた果物商は、Kと同じくらいボンヤリしていて、手押し車で危うくKを轢きそうになった。ちょうどそこで、もっと裕福な市区で使われていた蓄音機が殺人的な音を響かせ始めた。

時間はたっぷりある、あるいは、予審判事がどこかの窓から彼を見ていて、それでKが来るのは分かっているとでもいうように、Kはゆっくりと裏通りの方に入っていった。九時には少し早かった。その建物はかなり奥まったところにあった。そして、ほとんどありえないくらいの高さがあった。特に車両の出入り口は高さも幅もあり、明らかに様々な商品倉庫に付随する荷物の運搬車両が通るための出入り口であった。その時、倉庫の扉は閉ざされていたが、それは大きな中庭を取り囲むように建設されていた。それぞれの倉庫には会社の商標が掲げられていて、そのうちの幾つかは、銀行の仕事の関係でKも目にした記憶があった。いつもの彼の習慣にはないことではあったが、こういうあらゆる些細なところにもさらに緻密に関わるようにしなければと、しばらく中庭の入り口のところで彼は佇んでいた。彼のすぐ側の木箱の上では、裸足の男が腰を下ろして、新聞を読んでいた。手押し車の上では、二人の少年が車を揺らしあっていた。ポンプの前ではパジャマ姿で痩せた若い女が立っていたが、水をポットに入れている間も、ジイッと彼の方を見つめていた。中庭の一角では二つの窓の間に一本の紐が張り渡されて、物干しのための洗濯物がもうぶら下がっていた。ひとりの男がその下に立ち、何かを大声で言いながら、その仕事に対して指示を出していた。

審理室に行こうと、Kは階段の方に向かった。しかし、そこでまた足が止まってしまった。なぜなら、中庭にはこの階段の外にもう三つ、別の階段の上り口があったのである。その上、この中庭の突き当たりの小さな通路すら、次の中庭の方に繋がっているようであった。部屋の場所を詳しく教えてくれなかったことが、腹立たしく感じられた。これらの一切が、まさしく彼らがKを遇する際の無類のだらしなさ、無頓着さを表わしていた。このことは、大声で、無遠慮に、言い放ってやらねばならないと、彼は考えていた。そう思いながらも、結局はその階段を登ることにした。裁判所は罪に引き寄せられるという見張りのヴィレムの言葉を思い出しながら、それなら、たまたま選んだ階段の先にも審理室は現われるであろうと、Kは考えていた。階段を登ると、沢山の子どもたちの行く手を遮ることになった。彼らの遊び場は階段で、Kが列を横切ろうとすると、怒った顔でこちらを見てきた。「近いうちにまた来たら、」と、彼は思った。「手なずけるために砂糖菓子をもって来るか、打ち据えるために杖をもって来るかのどちらかだ。」あとちょっとで二階というところでも、ボール遊びが終わるのをしばらく待たなければならなかった。そういう間にも、大人の浮浪者のような不快な顔つきをした年端もいかない二人の少年が、Kのズボンにグッと掴んできた。この少年たちを振り払ってしまったかった。彼らは痛い目にあうべきであった。しかし、やれなかった。彼らが大声を出すのを恐れたからであった。

二階から本格的な探索は始まった。といっても、審理委員会はどこにありますかと、聞いて歩く訳にもいかなかったので、指物師のランツというのを考え出して――この名前

はパッと浮かんだ。なぜなら、グルーバツハ夫人の甥の大尉がそういう名前だったので――、指物師のランツはいませんか、全ての住まいを聞いて回ることにした。そうすれば、部屋を覗けると思ったのである。しかし、ほとんどの場合、そのことはそれほど難しくなかった。なぜなら、ほとんどのドアは開けっ放しで、そこを子どもたちが自由に入出入りしていたのである。大抵、それは窓がひとつだけの小さな部屋で、そこでは煮炊きもされていた。片方の腕で乳飲み子を抱えながら、空いた方の手で料理をしている女たちも数多くいた。まだ成年には達しておらず、エプロンしか身につけていないように見える少女たちも、非常に熱心な様子であちらこちらを飛び回っていた。どこの部屋のベッドの上にもまだ人がいた。そこでは、病人、就寝中の人、服を着たまま伸びをしている人が横になっていた。ドアが締まっている部屋はノックをした上で、指物師のランツはいませんか、聞いた。大抵は、女性がドアを開けて、この質問に耳を傾けると、部屋の奥のベッドで起き上がっている誰かに向かって、「この人、指物師のランツはいないかって?」「指物師のランツ?」と、男がベッドの方からそう聞いてきた。この部屋に審理委員会がないのは火を見るより明らかで、もうやることは残っていなかったが、「そうです。」と、Kは答えた。多くの人たちは、指物師ランツの発見がKにはひどく重要であると思いついて、長いこと考えたり、ランツとは別の名前の指物師、ほとんど似ても似つかぬ名前の指物師のことを口にしたり、隣りの人に聞いてみたり、さらに遠くの部屋までKを連れていったりした。彼らの意見では、そこでならひょっとして転貸しでそういう人が住んでいるかもしれない、自分たちよりもっと情報をもっている人がいるかもしれないというのであった。結局、Kはもう自分で聞く必要はなくなって、そういうやり方で複数の階を引き回されていった。ところが、最初は実用的に見えたこの計画も、だんだん重荷にしか感じられなくなってきた。六階に上がる直前で、この搜索は諦めざるをえないと覚悟すると、さらに上の階に案内しようとする若く愛想のよい労働者には暇乞いをして、階段を下りようとした。しかし、しばらくすると、これまでのあらゆる試みが徒労に終わったことが、再び心に重くのしかかってくる。彼は、今、来た道を再び取って返すと、六階の最初の部屋のドアをノックした。その小部屋で最初に目に飛び込んできたのは、すでに十時を指した大きな柱時計であった。「ここに指物師のランツはいますか?」と、聞くと、「どうぞ。」と、輝くような黒い瞳をした若い女が言い(ちょうど、盥で子どもの洗濯物を洗っているところであった)、濡れた手で隣の部屋に続く開け放たれたドアを差し示した。

何かの集會に足を踏み入れたのだと、Kは思った。ありとあらゆる種類の人間の群れが――Kが入っても、気に留める人は誰もいなかった――、中くらいの大きさの窓が二つある部屋を埋め尽くしていた。その部屋は、天井すれすれの棧敷席でグルリを取り巻かれていて、やはりその棧敷席も満員の人で占められていた。そこでは、全員が身体を屈めなければ立っておられず、天井に頭と背中を擦りつけるようにしていた。蒸せ返るような空気に堪えられず、もう一度、部屋から外に出たKは、彼のことをおそらく明らかに誤解している例の若い女に言った。「さっきわたしはランツという男がいませんか聞いたんですが?」「ええ。」と、女が言った。「とにかく中にお入り下さい。」彼のところに女がやってきて、ドアのノブを掴み、次のように言わなかったのなら、おそらくKは女の言うことに従わなかったであろう。「あなたを中に入れたら、このドアは閉めなけ

ればならないのよ。ここはあなた以外の誰も入れてはいけないの。」「実に道理に適っている。」と、Kは言った。「でも、ここはもう満杯ですよ。」と、言いながら、またその部屋の中に入っていった。ドアのすぐ横で話をしていた二人の男——ひとりは大きく前方に伸ばした両手で金を数えるような仕草をし、もうひとりはKの目をジッと覗き込んでいた——の間から、ヌッと一本の手が伸びてきた。それは、赤い頬をした小柄な若者であった。「こっちです。」と、若者が言った。導かれるままに進んでいくと、ごった返した人々の群れの中に、とにかく一筋の細い通路の分だけ隙間があるのが見て取られた。この通路が二つの党派を分けているようであった。最前列の人たちの右側と左側を見ても、彼の方を向いている顔はひとつもなく、身振り、手振りですら自分が属する党派の人間だけと話している人たちの背中しか見えないというのが、そのことを裏づけていた。ほとんどの人間は、年代物の、裾の長い、ダラリとした黒の燕尾服を着ていて、このような服装だけが彼を不安な気持ちにさせた。それさえなければ、この全体を地区の政治集会と見なしていたかもしれなかった。Kとは反対側の広間の突き当たりの恐ろしく低い演壇の上には、横向きに置かれた小さな机があって、そこもこちらと同じようにごった返していた。演壇の縁スレスレにある机の向こう側では、小柄で、でっぷりして、息を喘がせている男がひとりいて、背後に立っている男——椅子の背凭れに肘をついて、足を交わらせていた——と、大笑いしながら話に興じていた。誰かの真似でもするように、何度も片方の腕を男は突き出していた。Kを案内してくれた若者は、報告を上げるのに苦労していた。すでに二度、爪先立ちになりながら、何とか報告を上げようとしていたが、演壇にいる男の目にはなかなか届かなかった。壇上にいる人間のひとりが若者に気づいて、ようやくあの男の方も彼に目を留めると、身を乗り出しながら、その短い報告に聞き入っていた。それから、懐中時計を引っ張り出して、Kの方にサッと視線を落とすと、「あと一時間と五分、早く出頭すべきだったな。」と、男は言った。Kは何とか反論しようとしたが、そういう時間はなかった。というのも、男が発言すると同時に、一斉に広間の右半分から不満の声が上がったのである。「あと一時間と五分、早く出頭すべきだったな。」そういうこともあって、さらに大きな声で男は繰り返すと、下の広間の方に向かって、もう一度、サッと視線を投げた。すぐに不満の声はさらに高まったが、男がそれ以上、何も言わなかったので、逆にだんだんとそれは弱まっていった。今や、広間はKが入場した時よりもはるかに静かになっていた。ただ、栈敷席にいる連中だけは、感想を言ひあうのを止めなかった。彼らは薄明かりと靄と塵埃の中、何かしら上の人間を見分けられる限りにおいて、下の人間よりはるかに粗末な服を着ているようであった。多くの人はクッションを用意して、天井との間に挟むことで、擦り傷を作らないようにしていた。Kは、喋るよりも観察しようと決めていた。そこで、彼らから申し立てられた遅刻について弁解するのは諦めて、ただ、次のように言うだけにした。「遅刻はしたかもしれませんが、今はこうして来ております。」再び広間の右半分から、賛同の拍手が湧き起こった。御しやすい連中だなど、Kは思った。ただ、真後ろの広間の左半分の静けさだけが、彼を不快な気分させていた。そこからは、本当にまばらな拍手しか起こらなかった。全員を同時に、あるいはそれは無理にしても、時々反対側も味方にするにはどう言ったらよいのかと、彼は考えていた。「ふむ。」と、男が言った。「しかし、今、わたしに君を尋問せねばならない義務はない。」——また、あの不満の声が上がったが、今度は

どっちつかずであった。というのも、男が片手で人々を制しながら、次のように続けたからである――。「とはいえ、今日は例外的に尋問することにしよう。こういう遅刻は、二度と繰り返してはならない。では、前へ！」場所を空けるために、誰かが演壇から飛び下りて、空いた場所にKが上がった。机に身体を押しつけられながら、彼はそこに立ち尽くしていた。背後の人間の群れは余りにも圧倒的で、予審判事の机と、おそらくは判事自身を演壇から落とさないようにするために、彼は押し返さなければならなかった。

しかし、そんなことにはお構いなく、予審判事は肘かけ椅子にゆったりと腰を下ろして、後ろにいる男に締め括りの言葉をかけた後で、机の上に載っている唯一の品である小さな備忘録の方に手を伸ばしていた。それは学校で使われる帳面のようで、古ぼけて、めくられ過ぎて形が崩れていた。「さて、」と、予審判事は言って、帳面をめくると、Kに確認しようという口調になった。「室内画家だね?」「いいえ。」と、Kは言った。「ある大銀行の第一業務代理人です。」この答えの後を追うように、演壇の下の右側の党派から大きな笑い声がした。それが腹の底からの笑いだったので、Kの方も思わず釣り込まれてしまった。人々は膝の上に両手を突き立てながら、ひどい咳の発作に襲われたように身体を震わせていた。それどころか、笑い声は栈敷席の方からもパラパラと降ってきていた。腹の虫が治まらない予審判事は、どうやら演壇の下の人間に対しては無力であるらしく、栈敷席の方で借りを返そうとして席を立つと、そちらに向かって脅しをかけていた。そんなことでもなければ、ほとんど目立たない彼の眉毛が、フサフサと、黒く、大きく、目の上でひしめいていた。しかし、広間の左半分は相変わらず静かであった。そこでは、皆が列を作って立ちながら、演壇の方に顔を向けて、反対側の党派の喧騒にも、頭上で交わされる言葉にも、同じように静かに耳を傾けていた。それどころか、何人かがあちこちで固まりになって列から抜け出そうとすることにすら、文句を言わなかった。とはいえ、反対側の党派より数が少ない左側の党派の人たちも、根本的に右側の党派の人たちと同じように価値がない人たちなのかもしれなかった。しかし、その落ち着いた態度には、何かしら価値があると思わせるところがあった。ちょうど弁論を始めようとしたその時、Kは左側の人たちの立場で話をしてみようという気持ちになっていた。「予審判事さん、わたしが室内画家かというご質問――むしろ、質問というよりは、頭ごなしの指摘――には、今回、わたしに対してなされた訴訟手続きがもつ、まぎれもないある性質が表わされています。このことは、そもそも訴訟手続きですらないと、あなたは反論されるのかもしれませんが。確かにそうです。なぜなら、わたしがそうだと認識した時しか、それは訴訟手続きになりませんから。しかし、今、この瞬間は、そうだと認識することにしましょう。ある意味、これは同情から来ています。一体、こういうものを尊重するとしたら、同情するしかありません。だらしのない訴訟手続きとは言いません。しかし、あなたの自己認識を深めてもらうため、このことが表わす性質をお伝えしようと思うのです。」

一息つくくと、Kは下の方の広間に目をやった。彼が投げかけた言葉には切れ味があった。思ったよりも切れ味があった。そして、的を射てもいた。あちこちで拍手があってもよさそうであった。しかし、全ては水を打ったように静かなのであった。皆、明らかに、次に起こることを張りつめた気持ちで待っていた。もしかすると、この静けさの中、全てを終わりにする何かの爆発が用意されていたのかもしれなかった。その時、目障り

なことに、広間の反対側の突き当たりのドアが開き、どうやら仕事を終えたらしい、あの若い洗濯女が入ってきた。そして、彼女が色々と注意を払ったにも関わらず、そのことは何人かの視線を集めてしまってもいた。ただ、予審判事だけは、手放してKを喜ばせてくれた。というのも、Kの言葉にたちまち困惑しているように見えたからである。それまで、彼は立ったままで話を聞きながら（というのも、Kの話に不意を突かれたので）、一方で机敷席の方に身体を向けてもいた。今度は少し間を置くと、誰にも気づかれてはいけないとでもいうように、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。おそらくは平静を装うために、彼はまた、あの帳面の方に手を伸ばした。「そんなもの、何の役にも立ちませんよ。」と、Kは続けた。「この帳面もまた、予審判事さん、わたしが言ったことを裏づけています。」この奇妙な集まりの中で、自分の落ち着いた言葉だけが響いていることに満足を感じながら、そればかりか、予審判事から無造作にあの帳面を取り上げて、汚いものでも触るように冊子の真ん中の一枚を指先でつまんでもち上げてみせた。そのことによって、ギッシリと書き込まれた、しみだらけの、黄色く日焼けしたページが、両側にダラリと垂れ下がった。「これが予審判事のやっていることです。」と、言いながら、机の上にバッサリと冊子を落とした。「ゆっくりと先をお読みなさい、予審判事さん、こんな要注意者名簿なんかちっとも恐くない。もっとも、二本の指でつまめるだけで、読ませてはもらえないのしょうから、理解できることなど何もないのしょうが。」冊子が机の上に落ちるやいなや、予審判事がそれに手を伸ばして、どうにか元の状態にしようと、またそれを目の前にもって行って読もうとしたことは、より深い屈従のしるしに過ぎないのかもしれない（あるいは、少なくともそう理解されてしかるべきであった）。

最前列の人々の顔が、余りにも好奇心に満ちた目でKを見るので、ちょっとの間、演壇から下の方に目が向いた。どの顔も、例外なく高齢の男たちであった。何人かは白い髭も蓄えていた。ひょっとして彼らこそが、この集まり全体に影響を及ぼす決定権者なのであろうか（Kが話し始めてから、この集まり全体はずっと無感動の中に沈み込んで、その態度は予審判事の屈従によっても少しも変わらなかったが）？ 「わたしの身の上で起きたことは、」と、さっきよりも少し落とした声で話を続けながら、何度も彼は最前列の人たちの表情を読み取ろうとした。そのために、喋りに幾らか上滑りな印象が加わることになった。「わたしの身の上で起きたことは、確かに個別の事件ですので、そういうことで、それほど重要であるとはいえません。なぜなら、わたし自身、重要であるとは考えていませんから。しかし、このことは、訴訟手続きが多くの人々にどのように行なわれているのかを示してくれてもいます。彼らのために、わたしはここにいます。自分のためにではありません。」何の気なしにそういう言葉が口を突いて出た。どこかで誰かが、両手を上げて、拍手して、叫んでいた。「ブラーヴォ！ いいぞ。ブラーヴォ！

もうひとつおまけに、ブラーヴォ！」最前列の人々は、あちこちで髭に手をやっていたが、叫び声のために後ろを振り返ることはなかった。Kもまた、その声を重視してはいなかった。しかし、とはいえ、大いに励まされてはいた。もう満場一致の拍手が必要だとは思っていなかった。皆がこの問題について考えて、時々でも、誰かが説得されてこちらの仲間になってくれれば、それで十分であった。「雄弁術でうまく立ち回ろうとは思っていません。」こういうことをよく考えた上で、Kは言った。「そんなことは、全くのところ不可能です。予審判事さんなら、おそらくもっとうまく話ができるのでしょ

何しろ、自分の職業なのですから。わたしの望みは、公けの不法行為を公けの審議に委ねることです。聞いて下さい。十日ほど前、わたしは逮捕されました。逮捕という事実そのものは笑い飛ばしています。しかし、この場ではそんなことはどっちでもいい。わたしは寝込みを襲われました。おそらく――予審判事の返答からしても、ありえないことではないでしょう――、わたしと同じように無実の室内画家の誰かを逮捕する命令が下っていたのに、わたしが選ばれてしまったのです。隣りの部屋は、二人のがさつな見張りに占拠されていました。わたしがもっと危険な泥棒だったとしても、これ以上の下準備はありません。これらの見張りは、おまけに墮落した無頼漢でもありました。彼らは、下らないお喋りでわたしの耳を聳すると、賄賂を求めて、作り話で下着や衣類をくすねようとして、目の前でわたしの朝食を恥ずかしげもなく平らげた後で、金をもらえるのなら、彼らがいうところの朝食をもってきてやると、言ってきました。それだけじゃありません。もうひとつ先の部屋にいた監督官の前にも、引っ張り出されました。そこは、わたしが非常に敬愛している婦人の部屋でした。そして、わたしの罪ではないにせよ、わたしが元で、見張りや監督官に土足で踏み入れられて、その部屋が、ある意味、汚されていくのを見ていなければなりません。平静を保つのは、容易なことではありませんでした。しかし、それをやり遂げると、沈着冷静な態度でわたしは監督官に言いました――彼がいたら、それを証明してくれるのでしょうか――、なぜわたしは逮捕されたのでしょうか。さて、一切のことに関心を示さない傲慢さを滲ませながら、先程、申し上げた婦人の椅子に腰をかけていた監督官の様子が、今もこの目にまざまざと甦ってきますが、男は何と答えたのでしょうか。皆さん、根本のところ、何の返事もありませんでした。おそらく、実際は何も知らなかったのでしょうか。男は、逮捕して満足していました。それどころか、もうひとつ余計なこともしてくれました。つまり、その婦人の部屋に、わたしの銀行の三人の部下の職員を引き込んだのです。三人は、その婦人の所有物である写真にじかに触れて、位置をバラバラにしてしまいました。もちろん、三人がそこにいたのには、別に目的があったのです。彼らは、逮捕の一報を大家や女中のように撒き散らして、わたしの公けの声望を傷つけて、とりわけ銀行での地位を揺るがせにする手筈だったのです。それが、蓋を開けてみれば、全くこれっぽっちもそうなっていません。本当に飾らない人物であるわたしの大家ですら――敬愛の気持ちを込めて、わたしは彼女の名前を言わせてもらいます。グルーバツハ夫人です――、そのグルーバツハ夫人ですら、このような逮捕が、大人の目が届かない裏通りの若者たちの企みとほとんど変わらないことを理解するだけの十分な理性をもっていました。繰り返します。今回の一件は、困惑と束の間の怒りをもたらしただけで終わりました。しかし、もっとひどい結果になるというのも、ありえる話だったのではないのでしょうか？」Kはそこで少し間を置くと、ジッとしている予審判事の方に目をやった。その時、彼が人ごみの中の誰かに目配せをしたのが分かったような感じがした。微笑みながら、Kは言った。「たった今、わたしのすぐ横で、予審判事さんがあなた方の誰かに秘密の合図を送りましたね。さては、あなた方の中にこちらの演壇から指示を受けている人がいるんですね。今のが舌打ちの合図なのか、拍手の合図なのかは分かりません。ただ、今、わたしがこのことを暴露してしまったことで、そのことを完全に意識はしながらも、合図の意味を知るのは諦めることにしましょう。本当にどうでもよいのです。予審判事さんには、

皆さんの前で、演壇の下にいる金で丸め込んだ従業員たちに向かって、秘密の合図などではなく、はっきりと声に出して、とにかく一度、『今だ、舌打ちしろ！』とか、その次に『今だ、拍手しろ！』とか言うことで、取り仕切る権限をお渡ししようと思います。」

困惑からか、焦りからか、予審判事は椅子の上で座る位置をゴソゴソと変えた。もう随分前から、予審判事と談笑しながら、背後に立っていた例の男は、再び予審判事の方に屈み込んでいたが、ありふれた勇気づけをしているのか、さらに具体的な助言を与えようとしているのかのどちらかであった。演壇の下では、小さな声で、しかし、活発に談笑が交わされていた。さっきまでは意見が対立しているように見えた二つの党派が、ひとつにまとまってしまっていた。Kを指差す人もあれば、予審判事を指差す人もいた。部屋の中の霧のような靄は、極めて堪えがたく、そればかりか遠方にいる人間を仔細に観察することすら妨げていた。とりわけ、棧敷席の人たちにとって、靄は不快なものであったに違いない。もちろん、彼らは予審判事には神妙な流し目を送ってはいたが、さらに情報を入手するためには、集会の参加者たちに小声で問いあわせなければならなかった。その返事は、口元を手で隠しながら、同じように小声で伝えられていた。「もうじき終わりますから。」と、Kは言う、呼び鈴がなかったので、拳でゴンと机を叩いた。そのことに驚いて、予審判事とその助言者の頭がサッと二手に分かれた。「こういうことは、わたしには縁遠いことでした。だからこそ、冷静な判断を下せるのだともいえます。そして、今、この瞬間でも、この裁判には何かしらの意味があるという前提つきにはなりますが、わたしの言葉に耳を貸してもらえるとこののなら、あなた方にも大きな利益があるでしょう。わたしの提案に対する双方の議論は、後ろにずらすようにお願いします。なぜなら、わたしには時間がありませんから。すぐにもここを出なければならぬのです。」

周りはすぐに静かになった。もうそのくらい、この集会はKの意のままなのであった。最初の頃のように大声を出す人もおらず、賛同の拍手をする人もいなかった。そして、全員が納得したか、あるいは、ほぼそうなっているように思われたのであった。

「間違いなく、」と、ひどく小さな声でKは言った。というのも、その全員が息を飲んで聞いてくれるのが嬉しかったし、この静寂の中にどよめきが生まれていて、それが最高度に熱狂的な拍手より、さらに魅力的だったからでもあった。「間違いなく、この裁判のあらゆる言動の背後、わたしの事件における逮捕と今回の審理の裏には、巨大な組織が存在しています。この組織は、どんなにまともな時でも慎重深くらいがやっとの、金にほだされやすい見張り、愚かな監督官、予審判事を配下に従えているだけではありません。その上、少なくとも、廷吏、書記、地方警察官、その他の助手、そしておそらくは（わたしはこの言葉を口にすることをためらいません）絞首刑吏による無数の避けられない結果を伴いながら、高位の裁判官、さらに最高位の裁判官すら取り込んでいます。皆さん、この巨大な組織の意味とは何でしょう？ それは、無実の人間が逮捕されて、彼らに対して、無意味で（わたしの場合がそうですが）、ほとんど無益な手続きが開始されるという点にこそあります。全体がこのように無意味である時に、役人たちによる最悪の腐敗をどうやって防げるでしょう？ そんなことは不可能です。最高の裁判官がいても、独力では達成できません。だからこそ、見張りたちは逮捕者から身ぐるみはがそうとして、監督官は見知らぬ人たちの住まいに押し入ろうとして、無実の人間は尋問すらされず、集まった全員の前で面目を貶めさせられることになるのです。見張りたちは、

逮捕者の所有物がもち込まれるという保管庫の話をしていましたが、盗癖のある保管庫の役人が横領しない限り、逮捕者たちが苦勞して手に入れた資産がどんどん腐敗していくというその保管庫の場所を、いつか突き止めてやろうと思っています。」

広間の向こう側で起こった悲鳴で、Kの話は遮られた。先をよく見るため、Kは目の上に手を翳した。なぜなら、濁った日の光が靄を白くさせて、ギラギラと照り輝いていたのである。その正体は、部屋に入ってきた時からKが本当に鬱陶しいと感じていたあの洗濯女であった。今の悲鳴が彼女からのものだったのかは、分からなかった。ひとりの男が彼女をドアの側の片隅に引き入れながら、抱擁している様子だけが、Kからは見えた。とはいえ、悲鳴の主は、むしろ彼女というよりは男の方であった。口をアングリと開けて、男は天井を見ていた。二人の周りには小さな人垣ができていて、横にいた棧敷席の見物人たちは、Kがこの集まりにもち込んだ真剣味がこういう形でないがしろにされるのを喜んでいるようであった。パッと浮かんだ思いつきで、Kは素早く走っていかうかと考えた。実際、そこに秩序を回復して、少なくとも広間から二人を放逐することは、共通の関心事なのだろうと彼は考えていた。しかし、目の前の最前列の人たちは、Kの前に立ち塞がると、ピクリとも動かず、彼を前に進ませないようにしたのであった。それどころか、全員がKを妨害して、老人たちも腕を前に突き出してきた。さらに誰かの手が——彼には後ろを向いている暇がなかった——後ろから彼の襟首をグイッと掴んできた。実際、二人のことはもうKの眼中にはなかった。あたかも自由が拘束されたか、あるいは逮捕が実行されたかのようにであった。深く考えもせず、演壇から飛び下りると、目と目をあわせて、今や、彼はこの人々の群れと対峙していた。彼はこの人たちを正しく判断していたのか？ 自分の弁が立つのを買い被り過ぎてはいなかったか？ 彼が話している間、彼らはいかにうわべを繕っていただけだったのではないか？ 彼の結論が出た今になって、彼らは演技するのに飽きてしまったのであろうか？ 何という顔が彼の周りを取り囲んでいるのであろう！ 小さな黒い目がサッと素早く動いていた。飲んだくれのように、ダラッと頬の肉が垂れ下がっていた。長い髭が固くまばらに伸びていた。彼らはその中に手を突っ込んでいたが、それは髭の中に手を突っ込むというより、爪を研ぐためだけにそうしているようであった。ところで、その髭の下——それはまさにKによる発見だった——上着の襟元には、様々な大きさや色の徽章が、鈍い光を放っていた。見渡す限り、あらゆる人たちがこの徽章をつけていた。表向き、二手に分かれていた党派の人たちも、皆、それぞれがお互いに属しあっていたのであった。パッと後ろを振り向くと、両手を膝の上に置き、静かにこちらを見下ろす予審判事の襟にも、その同じ徽章がついていた。「さては、」と、Kは叫ぶと、天に向かってグッと両腕を突き上げた。突然の閃きが、彼の中で行き場を求めていた。「お前たちはどうやら本当は、全員、役人なんだな。本当に墮落した一味なんだ。そして、俺はそんなやつらに熱弁を揮っていた。お前たちは、聴衆やスパイとしてここに押しかけて、表向きは党派を作って、俺を陥れるために、片側だけが拍手をすることで、無実の人をどうやってかどわかすのかを学んでやろうと考えたのだ！ さて、お前らのここでの滞在は無意味ではなかった。そうあって欲しいと俺は思っている。お前らは、俺たちの中に無実の弁護がされるのを期待しているやつがいるというのをネタにして、面白がっていたのか、あるいは——、こっちに来るな、さもないと殴るぞ。」と、自分のすぐ側に押しやられて、ブルブルと震えて

いる白髪の老人に向かって、大声を出した——「あるいは、本当に何か学べたかのどちらかだ。このことで、お前らの商売がうまく進んだのであればよいがと、俺は願っている。」机の縁に置いてあった帽子をパツと取ると、彼はほとんどの人が静かになった中を（少なくとも、驚きの余り静まり返った中を）、出口に向かって進んでいった。ところで、予審判事はKよりずっと身のこなしが軽いようであった。なぜなら、ドアのところでKを待っていたのである。「ちょっと待って下さい。」と、彼は言った。Kは立ち止まったが、予審判事ではなく、すでにノブに手をかけていたドアの方を見ていた。「次のことにだけ、注意を促しておきたいのです。」と、予審判事は言った。「あなたは今日——そのことにはまだ、お気づきではないようだが——、どんな場合でも、逮捕者への尋問が意味しているところの有利さを放棄したのです。」ドアのところで、Kはニヤリと笑った。「ルンペンどもめ。」と、Kは叫んだ。「尋問なんか、こっちから願い下げだ。」ドアを開けるなり、階段をスタスタと下りていった。背後では、再び活発になった集会の喧騒がゴウゴウと轟いていた。どうやら研究者のようなやり方で、今回の事件を検討し始めたようであった。

## 第三章

### 第三章 人気のない法廷で、学生、裁判所事務局

次の週は毎日、改めて知らせが来るのを待っていた。尋問の放棄がすんなり受け入れられたとは信じられなかった。しかし、実際のところ、待っていた知らせは土曜の夕方になっても来なかった。暗黙のうち、同じ建物に同じ時刻に出頭するよう命じられたと仮定することにした。そういうことで、日曜日、再び彼は出かけた。今度は、階段や廊下でも迷わなかった。彼の顔を覚えていた幾人かは、ドアのところで彼に挨拶をしてくれた。しかし、もう誰にも聞いて回る必要もなく、目的のドアの前に彼はすぐに辿り着いた。ノックをすると、サッとドアが開いた。ドアの横に立っていた、例の知った顔の女には目もくれず、彼はすぐに隣の部屋に入ろうとした。「今日は公判はないわ。」と、女が言った。「どうしてそんな？」と、彼は聞いたが、信じられないという風であった。ところが、女は、隣の部屋のドアを開けてやることで、そのことをスッとKの頭の中に入り込ませた。そこは本当に空っぽで、誰もいないだけに、この間の日曜日よりもずっと貧相な感じがした。この間と同じように演壇の上には机があり、何冊かの本が置いてあった。「あの本を見せてもらえませんか？」と、特に興味があってというより、ここまで来て収穫なしでは帰れないということだけで、Kが聞いた。「駄目よ。」と、女は言う。またドアを閉めた。「許されていないもの。この本は予審判事のものなのよ。」「ああ、そうなんだ。」と、Kは言う。ニヤリと笑った。「きっとこの本は法律書だよ。そして、無実というだけじゃなく、無知でもある人たちに対して判決をして回るのが、ここの司法組織のやり方なんだ。」「そうなの。」と、彼の言ったことをキチンとは飲み込めなかった女が言った。「さあ、じゃ、帰ろうかな。」と、Kは言った。「予審判事に何か知らせておきますか？」と、女が聞いた。「あの男のことを知っているのかい？」と、Kが聞いた。「ええ、もちろんよ。」と、女が答えた。「だって、夫は裁判所の廷吏なんですよ。」その時になって初めて、この間は洗濯桶だけだったその部屋が、今は完璧に調度品が設えられた居間になっていることに、彼は気がついた。Kが驚いていることが分かると、女は言った。「そうよ、わたしたち、ここをタダで借りているの。だけど、法廷がある日はここを開けなければならない。夫くらいの地位だと、色々と面倒なことが多いよ。」「この部屋がどうのこうのより、」と、Kは言う。邪険な目つきで彼女を見つめた。「あなたが結婚しているということに、驚きましたよ。」「この間、弁論を妨げた件をあてこすっていらっしやるのね？」と、彼女は尋ねた。「もちろんです。」と、Kは言った。「今となっては過ぎたことで、ほとんど忘れてもいましたが、あの時は本当にイライラさせられました。それが今度は、既婚者だって聞かされるんですから。」「弁論が

妨げられたのは、悪い方には働いていません。皆、あの後もまだあなたのことを、随分、悪く言っていたのよ。」「それはそうかもしれない。」と、話題を変えながら、Kは言った。「だからといって、それで許されるという訳ではありませんが。」「わたしを知っている人たちの中でも、とりわけ、わたしは許されるわ。」と、女が言った。「あの時、わたしを抱いていた男には、もうかなり前からつきまどわれている。わたしは、普通、殿方に好かれる口じゃないけど、あの人は違うの。これは逃げようがないわ。このことは夫も早々に受け入れてしまった。地位を失いたくなければ、我慢するしかない。なぜって、あの人は今は学生だけど、おそらくこれから先、かなり高い権力の座につくのでしょうか。いつも彼はわたしを追い回してくる。あなたが来る直前も、ここを出ていったわ。」「そんなこと、他の誰にもありますよ。」と、Kが言った。「僕はちっとも驚きません。」「あなたはここで何かを改善しようとしていらっしゃるの？」と、自分とKにとって危険な話でもするように、ゆっくりと誘惑するかのように、女が聞いた。「わたし、あなたの弁論が個人的にはとても気に入ったわ。それで、あの弁論を聞いてから、きっとそうなんだろうって思っていたの。確かに、聞き取れたのはほんの一部分だけだったけど。最初のところは聞き逃がしたし、最後のところは学生と床に転がっていたから。——ここは本当に嫌なところよ。」少し間を置いた後でそう言うと、Kの手を握った。「何か改善できる点があると思っているんですか？」Kは微笑みながら、女の柔らかな両手の中で自分の手の平を少し回転させてみた。「本当のところ、」と、彼は言った。「僕はあなたが言うみたいに何かを改善するためにここに来たんじゃありません。例えば、あなたがそんなことを予審判事に言ったとしても、物笑いの種になるか、罰せられるかでしょう。実際、自由意思だけでなら、僕もこんなことに決して首を突っ込みませんでしたし、この司法組織に眠りを妨げられることもありませんでした。しかし、申し立てによれば、僕は逮捕されたということなので——実際、逮捕されています——、この中に組み込まれることを余儀なくされました。それも自分のためにです。ただ、こうなったことで、何かのお役に立てるといふのなら、もちろん、喜んでやろうと思います。このことは隣人愛的な観点だけで言っているのではなく、もうひとつ、あなたに助けてもらえるからというものもあるのです。」「助けるって、何を？」と、女が聞いた。「例えば、机の上の本を見せてくれるとかです。」「構わないわ。」と、女は叫ぶと、大急ぎでKを引っ張っていった。それは、使い古された年代物の一冊で、表紙は真ん中のところでほとんど千切れかけていて、それぞれの部分は綴り紐だけで繋がっていた。「ここでは、全てが何て汚ならしんだらう。」と、首を横に振りながら、Kが言った。まだKが本に手を伸ばす前に、少なくとも表面についた塵だけは、前かけで女がパッと払ってくれた。Kが一番上の本を開いてみた。いやらしい図柄が目飛び込んできた。一組の裸の男女がソファに腰をかけていた。画家の下劣な意図は容易に読み取られた。しかし、画力が極めて乏しいために、結局、恐ろしく立体的に男女が絵から飛び出すことになり、ありえないくらい直立してそこに座らせられて、誤った遠近法でひどく無理な体勢で向きあわされたということだけが認められた。それ以上、その本のページはめくらず、また別の本の扉を開けてみた。それは、「グレーテが夫ハンスから受けねばならなかった苦しみ」という題の長編小説であった。「ここで研究されている法律書というのが、これか。」と、Kが言った。「こんなやつらに裁かれなきゃならないのか。」「わたしが助けますわ。」と、女が言った。「本

気ですか？」「あなた自身が危険な目にあわずに、本当にそんなことが可能ですか？  
だって、ご主人は上役の言いなりだと、さっきも仰っていたじゃないですか。」「それでも助けます。」と、女が言った。「こっちにいらして。そのことについてお話しします。危険がどうのという話はもういいわ。危険を恐ろしいと感じるのは、恐ろしいと感じようとする時だけですもの。さあ、こっちへ。」と、演壇の方を示して、一緒に踏み段のところに座るようにと、彼を誘った。「あなたは、美しい黒い目をしている。」二人で腰を下ろすと、彼女はそう言って、Kの顔を下から覗き込んだ。「わたしもきれいな目をしてるって言われるの。でも、あなたの方が何倍もきれい。ちなみに、初めてあなたがここに来た時から、もうその目のことが気になっていたわ。あの後、少し経って、ここの集会室にわたしが入ってきたじゃない。それは、そういう理由からだったの。普段なら絶対にあんなことはしない。ある意味、むしろ禁止されていることなんですもの。」全てがこういう調子なんだと、Kは思った。この女は俺に身体を差し出そうとしている。ここにいるやつらみたいに、この女も墮落してしまっている。そうして、分からなくもないが、裁判所の役人たちのことが嫌になってしまっている。そういうことで、知らない顔がくると誰であれ、やれ目が綺麗だの、お世辞を言っては近寄ってくるのだ。Kは黙って立ち上がった。あたかも、自分の考えは声に出して表わしたので、女には自分の態度が伝わっているとでもいうようであった。「あなたが助けになるとは思えません。」と、彼は言った。「助けになるには、より高位の役人とのコネが必要です。それなのに、あなたはここに屯している最下層の職員たちとの知りあいであるのに過ぎない。確かに彼らのことはよく知っていて、色々と無理は聞いてもらえるんでしょう。そのことは疑っていません。しかし、どれだけ無理を聞いてもらえるにしても、訴訟の最終的な結果には何の影響も与えられないでしょう。それどころか、それによってあなたは何人かの友人を失なうかもしれない。そういう風には、僕はなってもらいたくない。この人たちとのこれまでの関係は、ずっと続けてもらいたいのです。というのも、あなたにとってのここでの関係は、不可欠であるように思われるので。ちなみに、このことは何の後悔もなく言ってるんじゃないありません。なぜって、まあ、どうしてだか、あなたのお世辞に答えることにもなりますが、僕もあなたのことが気になっていますから。ちょうど今みたいに、他に理由もないのに悲しそうに見えるあなたの顔は、特に魅力的です。僕が戦うべき集団の側にあなたは属しています。とはいえ、その中に非常にうまく溶け込んでもらっしやる。それどころか、あの学生を愛してすらいらっしやる。いや、愛してはいないのかな。少なくとも、ご主人に対するよりは好意を感じていらっしやる。あなたの言葉の端々からも、そのことは容易に伺い知ることができます。」「違うわ！」と、彼女は叫ぶと、座ったまま、Kの手を握ろうとした（そして、Kは十分に早くその手を引っ込められなかった）。「今、出ていってはいけません。間違っただけの判断をしたままで、出ていってしまうだなんて！　今、本当に行ってしまうの？　もうちょっと待つという好意すら示してもらえないほど、わたしには価値がないってこと？」「誤解です。」と、Kは言うのと、座った。「僕がここにいるのが本当に重要なことだというのなら、喜んでいます。時間もありません。というのも、今日は審理があると思ってきましたから。これまで申し上げたことで、この裁判の間、僕のためには何もしないで欲しいということだけを、僕はお願ひしてきました。といっても、この裁判の結果が僕には何の意味もなく、有罪判決が出

でも、ただ笑い飛ばすつもりでいるのを念頭に置いてさえもらえれば、あなたの感情が乱されることもないと思っています。そもそも、これまでは裁判が本当に終わるという前提で話してきましたが、そのことは僕には大変に疑わしくなってきました。さらに言うのなら、公務員たちの怠慢、健忘、ひょっとして不安から、訴訟手続きはもう打ち切られている、あるいは、近いうちに打ち切られるのではとも考えています。なるほど、何か大きな賄賂があるのを期待して、表向き、裁判を長引かせているというのも、ありえない話ではないでしょう。しかし、今日ははっきりと申し上げますが、こういうことは全く無益です。なぜって、賄賂なんて誰にも渡しませんから。とはいえ、あの人たちが豊富にもっているどんな手練手管を使っても、僕が賄賂を渡すことなど絶対にないということを、予審判事や、重要な報告を喜んで広める他の誰かに伝えてくれるというのなら、それはそれで、あなたにやってもらえるある種の心尽くしです。賄賂だなんて、何て的外れているんだか。このことは、あちらで言ってもらってもいいですよ。ちなみに、このことを彼らはもう独力で突き止めているのかもしれませんが。そうではなく、彼らがこのことを知ったのが今この時だったとしても、そんなことはどうでもいい。確かに、もしそうなら、彼らも余計な仕事が省けるのでしょし、もちろん、こちらも幾つかの不愉快なことから解放されるのでしょし。とはいえ、その不愉快なことが、同時に裁判所への打撃になると分かったのなら、喜んで僕はそちらのことを引き受けて、そうなるように取り図らうでしょし。そもそも、あの予審判事のことをご存知なのですか？」「もちろんよ。」と、女が言った。「それどころか、あなたを助けると申し出た時、真っ先に頭に浮かんだのがあの人だったわ。あの人ただの下層役人なのかは分からない。あなたがそう仰るのなら、たぶんそうなのね。それでもやっぱり、上役に向けてあの人を作る報告書には、何かの影響があると思うわ。あの方は本当に沢山の報告書を作るの。役人たちは怠け者だってあなたは言うけど、全員がそうじゃないわ。特にあの予審判事はそうよ。あの方はとても沢山の報告を書くの。例えばこの間の日曜日は、集会在夕方まで続いて、全員がいなくなった後も、あの方はひとりで広間に残っていたわ。わたしはランプをもっていかなければならなかった。手元には台所用の小さなランプしかなかったけど、あの方はそれでもいいと言ってきて、すぐに書類に取りかかった。その間に、あの日曜日、あいにく休暇を取っていた夫が帰ってきて、わたしたちは家具を取りにいくと、部屋の調度を元の通りにした。それから、また近所の人たちがやってきて、ろうそくを囲んでお喋りに花を咲かせた。それから、予審判事がいたことなんかすっかり忘れて、わたしたちは寝床に入っていた。その日の晩、もう真夜中だったと思うけど、急にわたしは目を覚ました。ベッドの脇に予審判事が立っていて、夫に光が当たらないように、手でランプの光を遮ってくれていた。それは無駄な心遣いだった。なぜって、夫の眠りは、光にすら妨げられない、そういう種類の眠りなんですもの。叫び出しそうなくらいわたしは驚いたけど、とても愛想のいい感じで、気をつけなさいと、予審判事はわたしに戒めると、こう囁いてきた。今まで書き物をしておりました。さあ、ランプをお返しします。たまたま見てしまったあなたの寝姿が、心に焼きついて離れませんか。こういう全体から申し上げるのですが、実に多くの、特にあなたについての報告書を予審判事は作成しています。というのも、実際、あなたの審問は、あの日曜日の集会の主な議題のひとつだったのです。いくら何でも、あれだけの長い報告書が無意味というのは

ありえません。さらに、そういう事情からしても、予審判事がわたしに気のある素振りを見せていて、それが始まりかけの今ならなおさら（きっと、今になってわたしのことが気になり出したのよ）、わたしが彼に大きな影響を与えられるという点は、あなたにも同意してもらえるでしょう。わたしに首ったけという証拠なら、他にもあります。昨日のことです。彼が大きな信頼を寄せていて、同僚でもあるあの学生を仲介にして、彼がわたしに絹のストッキングを贈ってきました。表向きは、わたしが法廷を片づけてくれるからと言っていましたが、口実です。なぜって、この仕事は義務でやっているだけで、夫はそのことでお金をもらっているんですから。美しいストッキングですわ、あなたもご覧になって。」――両足を伸ばすと、スカートが膝のところまでめくり上げて、自分でもストッキングに目をやった――。「本当に美しい。でも、あんまり綺麗過ぎて、わたしには似合わないのよ。」

急に話を止めると、彼のことを宥めようともいうように、自分の手をKの手の上に重ねながら、彼女は囁いた。「シッ、静かに、ベルトラントが見ている。」ゆっくりとKは目を上げた。法廷のドアのところ、ひとりの若者がいた。小柄で、真っ直ぐに両足が伸びておらず、短かく、まばらに生えた赤色の髭で、威厳を保とうとしていた（その中で、絶えずごちゃごちゃと指を動かしていたが）。興味津々という感じで、Kは若者の方に目をやった。法学という得体の知れない学問を修める学生に、いわゆる一個人としてお目にかかるのは初めてであった。きっといずれは極めて高位の役人になるのであろう。一方の学生は、一見したところ、Kなど眼中にないという感じであった。髭の中から一瞬のうちに引き抜いた指で女に合図をすると、窓に向かってサッと一步を踏み出した。女の方は、Kに向かって身体を折り曲げると、こう囁いた。「お怒りにならないで。くれぐれもお願いします。どうかわたしのことを悪くお考えにならないで。今からあの男、あのおぞましい醜男のところに行かねばなりません。あの曲がった両足をちょっとご覧になって。でも、すぐに戻ります。そうしたら、あなたと一緒に参りますわ。連れていってもらえるなら、お望みのところへ。好きにしてもらっていいんです。できるだけ長い間、ここからいなくなれるのなら、わたしは幸せです。もちろん、永久にいなくなれば、最高なんだけど。」もう一度、Kの手を撫でると、スッと立って、彼女は窓の方に歩き出した。Kは思わずその手を掴みかけたが、それは空を切った。実に、そその女であった。あれこれ考えてみたものの、誘惑に屈してはならないとする確かな理由は、全く見当たらなかった。裁判所に突き出されるのではという暫時の反論は、苦もなく払いのけられた。一体、どうやって、女が彼を突き出せるというのであろう？ 少なくとも、自分に関する部分だけであれば、すぐに裁判所全体に手ひどい打撃を与えられるくらい、彼は自由だったのではなかったか？ それとも、そんな最低限の自信のもちあわせすら、彼の側にはなかったのか？ さらには、女からの援助の申し出には誠実そうな響きがあったし、おそらくそこには何らかの価値があった。さらに、予審判事やその一味への報復として、予審判事から女を奪い取り、ものにする以上のことはおそらくありえなかった。そうなれば、予審判事がKについての嘘八百の報告という厄介な仕事をやり終えた後、空っぽの女のベッドを夜中に見い出すというのもありえることなのである。そこでベッドが空になったのは、女がKのものになったから、窓辺にいるこの女、目の粗い、重い生地のできた黒っぽい服に包まれたこの豊かで温かな肉体が、Kだけのもの

になったからなのである。

こんな風にして、女についての疑念を除いていると、彼には二人のひそひそ話が長過ぎるように思えてきた。指の関節、次には拳で、彼は演壇をゴンゴンと叩いてみた。学生は、女の肩越しにチラッと視線を投げて、それからKなど眼中にないという感じで、それどころか馴れ馴れしく身体を押しつけながら、女をギュッと抱き締めていた。女は俯いていた（まるで学生の言うことに注意深く耳を傾けるかのようであった）。学生は、屈み込んで、基本的には喋り続けながら、大きな音をさせて女の首のところにキスをしていた。女が訴えていた残虐さがその中に蠢いているのを見て取ると、Kはスッと立ち上がり、部屋の中をあちらこちらと歩き回った。そして、学生の方を横目で睨みながら、なるべく早くやつを厄介払いするにはどうしたらよいだろうと考えていた。それから、時にはドンドンと足を踏み鳴らすまでになったKの徘徊により、明らかに気を悪くした学生が次のように言った時、Kにはそれが歓迎すべきであることとしか思えなかった。「我慢ができないなら、どこへでも行ったらいい。もっと早くいなくなったらよかったんだ。いなくなっても気にするやつなどいない。いや、それどころかなくなるべきだった。俺が部屋に入ったらすぐ、サッサとね。」こういう発言の中では、色々な怒りが炸裂していたのかもしれない。いずれにせよ、気が乗らない被告人に話しかける際の未来の裁判所の役人の傲慢さが、そこにはあった。男のすぐ脇に立って、薄笑いを浮かべながら、Kは言った。「わたしに我慢が足りなかったというのなら、まさにその通りです。しかし、この我慢の足らなさは、放っておけばすぐに除かれるものでしょう。ひょっとして、あなたが勉強のためにやってきたというのなら——あなたは学生だって聞きましたよ——喜んでこの場所を明け渡して、そちらの女の方と失礼することにいたします。ちなみに、裁判官になるには、もっと勉強しなければなりません。もちろん、わたしは司法制度についてそれほど明るい方じゃありません。しかし、なるほど、すでに恥知らずにもあなたが立ち回り方を心得ているその無作法な語り口だけでは、まだそれをうまく果たせないだろうとわたしは思います。」「お前を野放しにしちゃいけなかったんだ。」と、Kの侮辱的な発言に対する釈明を女にしようとしてもいうように、学生が言った。「大失敗だ。予審判事には言っていたんだ。尋問の間は、少なくとも部屋で監禁しておかなきゃ駄目だって。時々、あの予審判事は訳の分からんことをする。」「下らん話だ。」と、Kは言うど、女の方に手を伸ばした。「一緒に行こう。」「そう来るか。」と、学生が言った。「いやいや、女は渡せないよ。」そうして、到底、彼のものとは思えない力で、ヒョイと女を片腕で担ぎ上げると、いとおしように女を仰ぎ見ながら、背中を丸めて、ドアに向かって走っていった。その際、Kへのある種の不安があるのは隠せなかったが、それにも関わらず、学生は空いた方の手で女の腕を撫でたり、押したりして、さらにKを苛立たせようとしていた。今にも襲撃する、それが駄目なら首を絞めるという心もちで、横に並んでKは何歩か走っていった。すると、女はこう言った。「無駄よ。予審判事が呼んでいる。あなたとは一緒に行けないわ。この小さな化け物だって、」と、そこで、女は、手で学生の顔を擦ってみせた。「この小さな化け物も、離そうとしてくれないみたいだし。」「というより、君が離れようとしていない！」と、Kは叫ぶと、学生の肩に手をかけたが、学生はガブリとそこに噛みついた。「止めて！」と、女は叫んで、両手でKを押し止めた。「止めて、止めて、それだけは止めてちょうだい。一体、何を考えているの！

そんなことをしたら、わたしの身の破滅だわ。通してあげて、お願い、とにかく通してあげて。本当に、予審判事の命令でやっているだけなんだから。それで、わたしを運んでくれないかとしているんだから。」「なら、行ったらいい。そのかわり、二度と君とは会わないから。」と、すっかり当てが外れたことに腹を立てながら、Kは言う、学生の背中をドンと突いてやった。学生の方は、軽くふらついたものの、転びもせず、むしろ、そのことを大いに喜びながら、女という重荷を負っているのに、その直後から、ピョーンピョーンと、さらに高く跳ねるのだった。Kは、その後をゆっくりと追っていった。これがやつらから与えられた最初の明白な敗北なんだと、Kは了解していた。むろん、これくらいのことで不安になる理由はなかった。このことは、戦いを求めたがゆえの敗北に過ぎないと、彼は考えていた。ずっと部屋の中で普通の生活をしているだけなら、彼はこんなやつらより何千倍も優れていたし、誰でも一蹴りで行く手から追い払うことができた。それから、彼は、極めて愚かしい場面、例えば、このみじめな学生、鼻もちならない子ども、足の曲がった髭面が、エルザのベッドの前に跪き、両手を組んで慈悲を乞う際に生じる場面を想像してみた。Kはこの思いつきがひどく気に入った。そして、何かの機会があれば、学生をエルザに引きあわせてやろうと決心した。

興味が引かれたので、まだドアに向かってKは足を急がせていた。女がどこに連れていかれるのかに興味があった。女を腕に抱えたまま、通りの向こうまで行くなどということがあろうか。やがて、さほど道のりは遠くないことが分かった。建物のすぐ前に幅の狭い木製の階段があり、どうやら屋根裏部屋まで繋がっているようであった。しかし、それは途中で曲がっていて、そこから先は見通すことができなかった。この階段を使い、学生は女を運び上げようとしていた。しかし、すでにその動きは精彩さを欠き、ウンウンという唸り声が聞こえていた。というのも、そこまで登ったところで、息が切れていたのである。女の方は、その場所からKに手で合図を送って、肩をすくめてみせることで、自分はこの誘拐と無関係であると示そうとしていた。しかし、その身振りには残念そうな感じがさほどなかった。知らない人を見るかのように、表情のない顔でKは女を見ていた。彼は、自分の幻滅を悟られるのが嫌であった。さらに、その幻滅から簡単に立ち直っていると見透かされるのも嫌であった。

二人の姿はもう見えなかったが、まだKはドアのところにいた。女が、自分を騙したというだけでなく、予審判事のところに運ばれるという口実を使って、嘘までついたということを、Kは認めない訳にはいかなかった。やはり、屋根裏部屋で予審判事が椅子に座って、Kを待っているということではなかったのだ。木製の階段をジッと見ているだけでは、何が分かってくるという訳でもなかった。ふと、上り口の横にある小さな張り紙に気がついた。そこまで歩いていくと、子どもっぽい、拙い字で、「裁判所事務局昇降口」と、書いてあった。こんな賃貸住宅の屋根裏部屋にも、裁判所事務局があるのか？

そこは、沢山の人々に尊敬してもらえる施設というのではなかった。とにかく、彼ら自身が最も貧しい階層に属している借家人たちですら不要だとするガラクタが捨てられるような場所に裁判所が事務局を置いているとすると、裁判所の自由になる資産はどれほど少ないのかと想像してみることは、被告人にとっての安心であった。金はある余るほどあるのに、裁判所の目的で使う前に役人たちが群がってくるというのは、確かにありえないどころか、これまでの経験からしても、はるかにありえる話ではあった。ただ、

もしそうだとすると、裁判所のそういう墮落は、被告人にとっての屈辱でもあった。しかし、実際のところは、裁判所が墮落しているというのは、裁判所が貧乏な状態であるというより、はるかに安心なことであった。こうなってみると、最初の尋問の時、被告人を屋根裏部屋に呼ぶのが恥ずかしいというので、部屋にいる彼を煩わす方を選んだらしいということが、Kには分かってきた。とにかく、Kは裁判官たちに比べて、何という地位にいたのであろう！ 彼らは屋根裏部屋に座っているのに、彼は銀行の一角の控えの間がある大きな部屋を与えられて、巨大なガラス窓を通して、活気に溢れた街の広場を見下ろせるのである。むろん、彼には買収や横領による副収入はなく、廷吏の腕に抱えさせて、女を事務所に運ばせることもできなかった。しかし、少なくとも今の人生が送れるなら、そんなものは喜んで諦めてやると、Kは思っていた。

ひとりの男が階段を上ってきて、開いたドアから部屋の中を覗き込んで（そこからは、法廷の中が一瞥できた）、ちょっと前、ここで女性を見ませんでしたかと、最後に聞いてきた時、まだKは張り紙の前で立ち尽くしていた。「君は廷吏かい？」と、Kは尋ねた。「そうです。」と、男が言った。「すると、あなたは被告のKさんですね。今、気がつきましたよ。ようこそ、いらっしやい。」そして、何も期待していなかったKに、男は握手を求めてきた。「でも、今日、告示されている公判はありませんよ。」と、Kが黙っているの、廷吏が言った。「分かっています。」と、Kは言うと、廷吏の私服の上着にサッと目を走らせた。そこには、何個かのありふれたボタンの脇に、役人であることを表す唯一の徽章として、将校の古外套から取ってきたようなあの金メッキのボタンが二個、並んでいた。「さっきまで、君の奥さんと喋っていました。彼女はもういません。学生が予審判事のところまで運んでいきました。」「そうなんですよ。」と、廷吏が言った。「いつも誰かが運んでいきます。といっても、今日は、日曜日で、わたしは仕事がありません。それなのに、ここからわたしを遠ざけるためだけに、とにかく意味のない伝言を言いつけては、わたしを使いに出そうとするのです。ただ、そう遠くへはやられないので、大急ぎで行けば、おそらく時間内に戻ってこられるという希望はあります。そういうことで、必死に走っては、ドアの隙間から使いの先の役人に、息も絶え絶えのほとんど聞き取れない伝言を叫ぶように伝えて、やってきた道を引き返すことになります。もっとも、学生はわたしよりずっと早く着くのですが（近道を使って、屋根裏部屋に通じる階段を下りただけですから）。わたしも、ここまで学生に頼り切りでなければ、とっくの昔に、この壁のところギューギューあいつを押しつけているところなんです（この張り紙の横のところなんです）。いつも見るのはこんな夢です。ここの、床の少し上のところであいつを押し潰すんです。両腕はダラリと伸びて、手は大きく開かれて、曲がった両足はグルッと振って、周りに血しぶきが散っている。それで終わり。といっても、夢ですがね。」「他にやり方はないのかい？」と、笑いながら、Kが聞いた。「分かりません。」と、廷吏が答えた。「今となっては、事態はさらに悪化しています。今までは、やつは自分のところにだけ妻を運んでいましたが、今は、予審判事のところにも運んでいきます（もちろん、予想はしていましたがね）。」「そもそも、奥さんに罪はないのかい？」と、Kは尋ねたが、聞いておきながら、自分にもうち克たなければならなかった（その時、同じくらい強い嫉妬も感じていたのである）。「まあ、確かに。」と、廷吏は言った。「というより、大きな罪があるんでしょう。本気で学生に惚れていますから。学生も学生で、女と見

れば手当たり次第に尻を追いかけています。この賃貸住宅の中だけでも、忍び込んだ五つの部屋から放り出されました。もちろん、この賃貸住宅では妻はピカイチなので、いよいよそれは防げません。」「それじゃあ、確かに方法がない。」と、Kが言った。「そうですねです。」と、廷吏が言った。「いつかまたあの臆病者の学生が妻に手を出すことがあっても、次にやろうとは絶対に思わなくなるくらい、コテンパンにしておくべきなんです。でも、わたしにはできない。そういう好意を示してくれる人もいない。なぜって、全員が彼の権力を恐れていますから。やれるのは、あなたのような人だけです。」「どうしてわたしが？」と、驚いたKが尋ねた。「あなたは、本当に逮捕されているんですよ？」と、廷吏が言った。「されています。」と、Kが答えた。「ではありますが、だからこそあの学生が、裁判の結果には影響を与えないまでも、ひょっとして予審には影響を与えるのではと恐れています。」「確かにそうでしょう。」と、Kの意見は自分の意見と同じくらい正しいという感じで、廷吏が言った。「でも、通常、われわれのところでは見込みのない裁判はやらないのです。」「その意見には反対です。」と、Kは言った。「でも、そのことが、時々、わたしが学生を矯正しようとするものの妨げにはならないでしょう。」「そうであれば、本当にありがたい。」と、少しかしこまった感じで、廷吏が言った。しかし、そもそもKの最大の望みが成就するとは思っていないようであった。「もしかして、」と、Kは続けた。「それ以外の役人たち、もしかして、それどころか同類たち全部をそういう目にあわせた方がいいのかもしれない。」「そうです、そうですよ。」と、何か自明のことが問題になっているとでもいうように、廷吏が言った。それから、親しげではあるものの、これまでは絶対に見せたことがなかった、信じ切ったような眼差しをKの方に投げながら、こう続けた。「あの人たちは、とにかくいつも騒ぎを起こしてくれます。」しかし、ここでの会話を、少し後ろめたく感じているようでもあった。なぜなら、急に話の腰を折って、こう言ったのであるから。「今から事務局に報告に行かねばなりません。一緒にどうですか？」「そこには用がありません。」と、Kが言った。「事務局の中を見られますよ。気にする人もおりません。」「見る価値があるのかな？」行きたい気もちは満々だったが、ためらうようにKが聞いた。「ともかく、」と、廷吏が言った。「興味は湧くと思います。」「分かりました。」と、最後にKが言った。「一緒に行きます。」そうして、廷吏に先んじて階段を登っていった。上がり框では、彼は危うく転びそうになった。というのも、ドアの向こうにもうひとつ踏み段があったのである。「公衆のための配慮に欠けるな。」と、Kが言った。「元々、配慮なんてありませんから。」と、廷吏が答えた。「この待合室をご覧ください。」それは、ひどく長い廊下であったが、適当な作りのドアを通じて、屋根裏にあるそれぞれの小部屋と繋がっていた。直接の採光窓はなかったが、真っ暗というのでもなかった。なぜなら、統一感のある板壁とはまた違った、裸材の、といっても、天井まで届くような格子壁が多くの小部屋を仕切っていて、格子の間から幾筋かの光が射し込んでくるので、何人かの役人が机に向かって書き物をしたり、格子のすぐ横に立ち、格子の隙間から廊下にいる人を観察しているのを見ることができたのである。おそらく日曜日だったからか、廊下には数えるほどの人しかいなかった。彼らからは非常に控えめな印象を受けた。ほとんど規則的な間隔を空けて、廊下の両側に置かれた二列の長い木製のベンチの上に向かいあわせて座っていた。外見、物腰、髭の整え方、その他、断言はできないような、色々なちょっとしたディテールから、彼らのほとんどは上

流階級の出であるように思われた。しかし、全員がラフな格好であった。近くに洋服かけがなかったので、帽子はベンチの下に置かれていた（おそらく前の人のやり方に倣ったのであろう）。ドアのすぐ横に座る人たちにKと廷吏が目をやると、彼らは挨拶のために立ち上がった。それを目にしたこれに続く人たちも、挨拶をしようと考えて、二人が通るのにあわせて、続々と腰を上げた。きちんと真っ直ぐに立てる人はひとりもなく、前屈みの姿勢で膝を曲げながら、街角の乞食のようにヨロヨロと立ち上がるのであった。後ろをついてくる廷吏を少し待った上で、Kはこう言った。「どこまで卑屈になったら気が済むんだろう。」「ええ。」と、廷吏が言った。「彼らは被告人です。ご覧いただいているのは、全員、被告人なのです。」「本当に？」と、Kは言った。「だったら、わたしの仲間じゃないですか。」それから、一番近くにいる、背が高く、痩せて、すでにほとんど白髪になってしまった男の方に、Kは目をやった。「ここで何を待っていらっしゃる？」と、礼儀正しくKは聞いた。しかし、この思いがけない発言は、男をすっかり混乱させてしまっていた。このことは、今、渦中にある人物が、こういう場所でもなければ、自制するやり方が明らかに分かっている、大勢の人に対して自分がもっている優位性をあっさりとは手放したりしない、世知に長けた人物であっただけに、なおさら残念な感じがした。しかし、ここではこんな簡単な質問にも答えられず、彼はジッとK以外の人たちに目をやったのであった（あたかも、彼らには自分を助ける義務があり、その助けがないなら、誰にも返事などしませんというように）。廷吏はそこに割って入ると、宥めるようにして、男に助け船を出した。「この方は何を待っているのかと仰っている。サッサと答えてあげなさい。」どうやらこの聞き覚えがある廷吏の声の方が、よりよい効果を表わすようであった。「わたしは、待っているのです――。」と、口には出してみたものの、そこで止まってしまった。明らかに、極めて厳密に質問に答えようとしてこういう切り出し方をしたのが、今となっては、後が続かないのであった。待合室の何人かがゾロゾロ集まってきて、三人を取り囲んだ。彼らに向かって、廷吏が言った。「退いた、退いた、道を開けろ。」彼らはちょっと後ろに下がったが、最初のところまでではなかった。そうしている間に、さっき質問された男が気を取り直して、それどころか小さな笑みすら浮かべて、こう言った。「一ヶ月前、自分の事件について、幾つかの証拠申請をしました。今はその処理を待っています。」「本当に大変なご苦勞をされていますね。」と、Kが言った。「はい。」と、男は言った。「自分の事件ですから。」「誰もがあなたのように考えているんじゃないよ。」と、Kが言った。「例えば、このわたしも起訴はされています。心底、救われたいとも思っています。でも、証拠申請やそれに類することはしていません。一体、そんなことが必要だと思われますか？」「よく分かりません。」と、再び、完全にあやふやな態度に陥った男が言った。明らかに、男は、Kがからかっていると考えて、それゆえ、自分が何か新しいミスをするかもしれないという恐れから、おそらくさっきと全く変わらない返事をしようとしたのであった。しかし、イライラしたKの前で、彼が言えたのはこれだけであった。「わたしについて申し上げられるのは、証拠申請をしたという点です。」「わたしが起訴されているということをおそらく信じてもらっていませんよね？」と、Kが聞いた。「いいえ、信じています、本当です。」男はそう言うと、少し脇に退いたが、その答えの中には、確信というより、むしろ不安だけがあった。「やっぱり、わたしが言ったことは、信じてもらえていない？」と、Kは聞くと、男の控えめな

様子で気が大きくなり、まるで彼に信じさせようと強いるように、思わずその腕を掴んでしまった。ただ、痛がらせようという意図はなく、本当に優しく掴んだだけであったのに、二本の指ではなく、真っ赤に焼けた火ばさみで掴んだように、男は大きな叫び声を出した。この素頓狂な叫び声で、Kは、男のことがすっかり嫌になってしまった。Kの起訴を信じている人はひとりもいなかった。それならそれで好都合ではないか。おそらく裁判官だとすら思っているのだ。そして、別れのためだけに本当にギュッと彼の手を握ると、例のベンチにドンと押し返して、サッサと先を歩いていった。「大抵の被告人は、あんな風に感じやすくなっています。」と、廷吏が言った。その時、彼の背後では、叫ぶのを止めたあの男のところに待合室のほぼ全員が集まって、この騒動の内容を色々詮索しているようであった。その時、Kのところに向かって、主にそのサーベルからして監視人だろうと分かるひとりの男が近づいてきた。少なくともその色から察するに、その鞆はアルミニウム製のものであった。そのことに驚いたKは、それどころか、手を伸ばしてそのものに触れてみようとする。叫び声を聞きつけた監視人も、何が起こったんだと問い質した。廷吏は、何か短い言葉で押し止めようとしていたが、監視人は、やはり自分の目で確かめなければと言うと、敬礼して、大急ぎの、しかし、極めて短い歩幅、おそらく痛風のために慎重になった足取りで、サッサと先を歩いていった。

しばらくすると、Kは、廊下にいる監視人やその同類たちについて考えるのは止めた(廊下を半分ほど行った先のドアなしの開口部を抜けたところで、右に抜けられる可能性を見出してからは、なおさらそうだった)。右に曲がってもよいかと廷吏に目配せして、彼がコクリと頷いたので、実際、そこを曲がった。いつも廷吏より数歩先を歩かねばならないことが、彼には煩わしく感じられた。少なくとも、こういう場面では、逮捕、あるいは連行されているという印象を与えかねなかったのである。そこで、彼はしばしば後ろからくる廷吏を待つことになったが、廷吏はすぐにまた遅れ出すのであった。この居心地の悪さにケリをつけるため、とうとうKはこう言った。「さあ、ここにあるものは見させてもらいました。そろそろ、お暇しなければなりません。」「まだ、全部をご覧ただけていません。」「と、全く無邪気な感じで、廷吏が言った。「全部を見ようだなんて思ってませんよ。」「と、Kが言った。実際のところ、本気で疲れを感じていた。「出たいんだよ。出口はどっちに行ったらいい?」「まさか、もう迷われたんですか?」と、驚いた廷吏が尋ねた。「ここから曲がり角まで出て、廊下を右に曲がって真っ直ぐ行けば、そこがドアですよ。」「一緒に来てくれないか。」「と、Kが言った。「道を教えて欲しいんだよ。迷ってしまう。ここは本当に道だらけだ。」「道は、ただひとつです。」「と、今やすっかり咎めるような感じになって、そう廷吏が言った。「一緒に戻るのはもう無理です。報告に行かねばなりません。あなたには、随分と手間をかけさせられました。」「一緒に来るんだ!」と、ついに廷吏の不実を突き止めたぞと言わんばかり、今やはるかに鋭いものとなった口調で、彼は繰り返した。「そんなに大声を出さないで。」「と、廷吏が囁いた。「確かに、ここにはそこら中に事務所があります。ひとりで帰れないと仰るなら、もう少しつきあってもらうか、わたしの報告が終わるまで、こちらで待ってもらうかのどちらかです。そうであるのなら、喜んで一緒に参ります。」「駄目だ、駄目だ。」「と、Kは言った。「待ってられない。今すぐ行ってもらわなきゃ。」「今いる部屋すら、まだ全然、見て回っていなかったが、その部屋を取り囲むようにつけられた沢山のドアのひとつがパ

タンと開いたので、初めてそこに目が行った。おそらく、Kの大声に招き寄せられたであろう娘がひとり、そこに立っていて、こう聞いた。「この方は何を望んでいらっしゃるの？」彼女の背後の遠くの薄暗がりの中からは、もうひとり、男がやってくるのが分かった。Kは廷吏の顔をジッと見つめた。この廷吏は、さっきは誰もKのことなど気にしないと書いていたが、もう二人も集まってきてしまっていた。これ以上はご免被りたいところであった。役人たちも彼に気がついて、なぜこんなところにいるのかと、説明を求めてくるかもしれなかった。唯一、理解可能で、受け入れてもらえそうな説明は、自分は被告人で、次の審理日を知りたかったからというものであった。しかし、この説明は、とりわけそれが事実ではないという点で、彼には受け入れにくいものであった。なぜなら、単なる好奇心から、あるいは（説明としては、さらに成り立っていなかったが）、この司法組織の内部が外部と同じように吐き気を催させるものであるかを確認ようとして、彼はやってきたのであったから。実際、その仮定は間違っていなかったと、彼は思っていた。しかし、さらに深入りするという気にはなれなかった。これまで見てきたことで、十分に重い気持ちにもさせられていた。今、この時点では、あらゆるドアの向こうに姿を現わすかもしれない、より高位の役人たちと対面できる状態にも全くなかった。彼はここから退散したかった。それも、廷吏と一緒に。どうしても駄目なら、ひとりで。ところで、黙ってそこにいるというのは、目立つことであつたに違いない。実際のところ、娘と廷吏は、もうすぐ彼には何か大きな変化があるはずで、その観察を必ずやり遂げてやるという感じで、彼を見つめていた。ドアの開口部には、さっきKが遠くにいるなど思っていたあの男が立っていた。低いドアの戸口の梁を手でしっかりと握りながら、ちょっと爪先立ちになって、身体をブラブラと揺すっていたが、短気な見物人のようでもあった。ところで、その娘がようやく、Kの態度が軽い体調不良から来ているらしいと気がついた。椅子をもってくると、彼女はこう聞いた。「座りたいんじゃないですか？」すぐにKは座ると、よりよく身体を支えるため、肘かけの上にドンと両肘を突いた。「少しめまいがするんじゃない？」と、彼女は聞いた。今や、彼女の顔は彼の顔のすぐ横にあった。その顔には、多くの女性が最も輝きを放つ少女時代に浮かべるのが常である、あの強い表情があった。「心配いらぬわ。」と、彼女が言った。「珍しいことじゃないもの。初めてここに来ると、ほとんど全員がこういう発作を起こすのよ。ここに来たのは、初めて？　そう、じゃ、珍しくないわ。ここでは、太陽が屋根材を照らすことで、温められた木材がこの空気を蒸し返すように淀んだものにしてしまう。だから、ここは余り事務所向きじゃないのよ。まあ、それ以外では、とても便利なところもあるけど。といっても、空気に関する限り（それは、ほとんど毎日のことなただけ）、大勢の訴訟当事者が行ったり来たりする日には、息もつけにくいになってしまう。それからあと、ここでも物を乾かすために、色々な洗濯物が干されるのを考えると――それを借家人たちに完全に禁じることはできないわ――、あなたがちょっと具合を悪くしたのも、決して不思議じゃないと思えてくる。といっても、最後には、この空気にもすっかり慣れてしまう。二度、三度、こちらに来れば、息苦しさもなくなります。お加減はマシになりました？」Kからの答えはなかった。こうやって、急に衰弱しながら、こちらの人々に引き渡されるというのは、彼にとっては余りにもバツの悪いことであつた。それどころか、今や、自分の体調不良の原因まで皆の知るところとなり、体調はよくな

るどころか、むしろ少し悪化しつつあった。娘はすぐにそのことに気がつく、Kに新鮮な空気を与えてやろうと、壁に立てかけてあった鉤つきの竿を取って、直接、外気に繋がる、頭上につけられた小さな天窗を押し上げたが、ドッと煤が降ってきたので、すぐにまた閉めて、ハンカチでKの両手から塵をパッと払ってやった。というのも、そんなこともできないくらい、Kは疲れ切っていたのである。自分で帰る力が回復するまで、静かに座っていようと、彼は思った。そして、Kが彼らにかけける心配が少なれば少ないだけ、回復は早まるに違いないのであった。しかし、そこで娘はさらにこんなことを言った。「こんなところにはいけないわ。往来の邪魔になってしまうもの——。」一体、どんな往来の邪魔になるんだと、目つきで彼は言い放った——。「よければ、診療所まで案内しますわ。ね、ちょっと手伝って下さらない。」と、ドアのところにいる男に言うと、男もすぐに近寄ってきた。しかし、診療所に行く気はサラサラなかった。ここからさらに引き回されるなど、真っ平ご免であった。中に行けば行くほど、ますます具合が悪くなるのに相違なかった。「もう歩けますから。」そのため、そう言って、立ち上がってはみたものの、楽な姿勢で座るのに慣れていて、震えながらになってしまった。そして、結局、直立した姿勢を保っていることはできなかった。「やっぱり駄目か。」と、首を横に振って言うと、ため息をつきながら、再び彼は座り込んだ。例の廷吏のことが頭に浮かんだ。どんなことがあろうと、あの男なら、やすやすと運び出してくれるはずであった。さっきから、彼の姿はなかった。目の前に立つ娘と男の間にジイツと目をやったが、廷吏の姿は見当たらなかった。「僕が思うに、」と、男の方が言った。ちなみに、男は洗練された身だしなみで、二つの先端をもつ長い尖った尾のようなグレーのベストが、とりわけ人の目を引いた。「この人の体調不良は、ここの環境の悪さから来ています。だから、診療所に行くより、事務所から外に出してあげた方が一番いいし、この人も一番それを望んでいる。」「その通りです。」と、Kは叫ぶと、喜びの余り、男の話の中に飛び込んでいった。「間違いなく、すぐに元気になりますよ。そんなに弱ってもしませんし。両脇をちょっと支えてもらえればいいのです。それほど面倒なことではありません。実際、すぐそこです。ドアまで連れていってもらえれば、それでよいのです。階段で一休みすれば、すぐによくなりますから。というのも、元来、こんな発作を起こす人間じゃないのです。ただただ、不意を突かれてしまいました。それに、わたしは勤め人で、事務所の空気にも慣れてはいます。ただ、仰るように、ここのはちょっとひど過ぎますが。ということで、ちょっと案内をお願いしたいのです。なぜって、めまいがして、ひとりで立っていると、気分が悪くなるからです。」そうして、二人が助け起こしやすいように、スッと両肩を上げた。

しかし、この要求には応えようとせず、静かに両手をポケットに突っ込みながら、大きな声で男は笑った。「見ろよ。」と、男は娘に言った。「やっぱり言った通りだろう。ここでだけ、この方は調子が悪いんだ。どこでもじゃない。」娘も笑って、それではKに対する余りにもきつい冗談だわという風に、指先で男の腕を軽く突いた。「で、君はどうして欲しいんだい。」と、まだずっと笑いながらではあったが、男が言った。「もちろん、実際のところ、この方を外に出してあげようとは思っているがね。」「ならいいわ。」と、かわいい小さな頭を、一瞬、傾けながら、娘が言った。「この笑いをあんまり真剣にお取りにならないでね。」と、娘はKに言った。再び、重い気分になっていたKは、ジッと前

方に目を凝らしていたが、説明を求めている感じには見えなかった。「この人も一一、あなたを紹介してもいいかしら？」（手の動きで、よいと男は許可を与えた。）一一「この人も情報屋なの。待ってもらっている当事者の方たちが必要とするあらゆる情報を伝えてくれる。われわれの司法組織は、住民の皆さんには余り知られていないので、沢山の情報を伝えることが求められている。この人はどんな質問でも答えられるわ。その気があったら、試してみて。でも、この人の長所はそれだけじゃない。二つ目の長所は、その洗練された身だしなみにあるの。公務員のわれわれは、かつて、次のように考えました。情報屋たるもの、常に、さらにいうなら、真っ先に当事者と顔をあわせるので、第一印象を威厳のあるものとするために、本当に洗練された衣装でいなければならないと。それ以外の人間はといえば、ご覧の通り、残念ながら、非常に質素で、流行遅れの服装でいます。実際、身なりを構うのには、余り意味がありません。なぜって、われわれは事務所にほとんど入り浸りなのですから。ええ、ここで寝ることすらあるのです。そして、申し上げた通り、情報屋には美しい衣装が必要であると、われわれは決めました。とはいえ、当局からの衣装の支給はなかったので（その点、少し変わった当局です）、われわれはカンパを募って一一当事者たちにも寄付してもらって一一、この方のために、この美しい衣類を買い揃えたのでした。ところが、好印象を与えるために、あらゆる準備を整えてやった今になって、またあんな笑いで全てを台無しにして、皆を驚かせるんですから。」「そんなところさ。」と、嘲けるように男が言った。「だけどね、君、どうしてこちらの方に、ここでの内輪話を説明してやる（というより、無理強いする）のかが分からないよ。なぜって、こちらの方は、君の話にまるで耳を貸していないんだから。ちょっとご覧。明らかに、自分の事件で頭を一杯にして、そこに座っている。」反論する気にもなれなかった。娘の行為は、善意から来ているのかもしれない。おそらく、Kの気を紛らわす、あるいは、気を落ち着けるための機会を与えようとしたのであろう。しかし、そのやり方は間違っていた。「なぜあなたが笑ったのかを、この方にお伝えしなければならなかったの。」と、娘が言った。「だって、本当に侮辱的だったんですもの。」「最終的に外に出してやりさえすれば、もっとひどい侮辱だって許してくれるさ。」何も言わず、一度も顔を上げず、自分のことについて、何かの事例みたいに二人が話しているのを、我慢しながらKは聞いていた。彼にとっては、まだその方がマシであった。ところが、突然、一方の腕に案内係の手が、もう一方の腕に娘の手が触れるのを、彼は感じた。「じゃあ、立ちますか、か弱い方。」と、情報屋が言った。「本当にありがとうございます。」と、喜びにうち震えながら、Kは言う、よろよろと立ち上がり、相手の手を、最も支えて欲しいと思うところに、自分の力でもっていった。「端からは、こんな風に見えるんじゃないかしら。」と、廊下の方に向かいながら、娘がKの耳元で囁いた。「情報屋にスポットライトを当てるのが、この娘にはよほど大事なことなんだな、みたいな。本当にそう信じている人もいるでしょう。でも、本当のことをわたしは言います。この人は、冷たいんじゃない。病気になる当事者を外まで案内する義務なんてないのに、ご覧の通り、やろうとしてくれています。たぶん、わたしたちの中に冷たい人間なんておりません。皆、誰かを助けたいと思っている。でも、裁判所の役人というだけで、冷たいとか、誰にも手を貸さない人と見られてしまいます。わたしが悩んでいるのは、まさにそこなんです。」「ちょっと座りませんか？」と、情報屋が呼びかけた。すでに

廊下の、さっきKが声をかけた、あの被告人のところまでやってきていた。彼は、恥じ入らばかりの気もちであった。さっきは背筋をシャンと伸ばして立っていたのに、今は二人に支えられなければならなかった。彼の帽子は、情報屋が大きく開いた指の上で、ゆらゆらとバランスを保っていた。髪型は崩れて、汗まみれの額の上には、前髪が垂れ下がっていた。しかし、例の被告人は、その辺のことは全く目に入らないようであった。自分の方を見ないようにしている情報屋を前にして、被告人はかしこまった感じで立つと、自分がそこにいることの言い訳をしようとした。「分かってはいるのです、」と、彼は言った。「今日はまだ、申請の処理が下りないだろうということは。でも、来てしまいました。待つことはできると思ったんです。今日は日曜で、時間もありますから。ここなら、邪魔にもなりませんし。」「そんな言い訳はしなくても大丈夫ですよ。」と、情報屋が言った。「あなたの心遣いは本当に誉められるべきです。あなたはこの場所を不必要に塞いでいらっしゃるが、こちらの邪魔にならない限り、事件の経過をあなたが細かく調べるのを妨げるつもりはありません。自分の義務を恥ずべきやり方で疎かにしている人たちを見ていると、あなたのような方には寛大な気もちでいられます。どうぞお座りになって。」「どうやって当事者たちと話をすべきか、なんて分かっていらっしゃるのかしら。」と、娘が囁き、Kは頷いたが、情報屋から、「ここに座りませんか？」と、聞かれると、すぐに怒り出した。「結構です。」と、Kは言った。「休憩なんていません。」と、ありえないくらいキツパリと、Kは言い放った。実際、ずっと座らせてもらっていたら、元氣も回復していたのかもしれないが、まるで船に酔ったかのようにであった。荒波に揉まれる船上のようだと、彼は思った。板壁には、波がぶち当たっていた。ザブザブと船縁を洗う波が立てる轟音が、廊下の奥から響き渡っていた。廊下が傾きながら、ゆらゆらと揺れていた。待合室の両側に控えている当事者たちは、波間を浮いたり、沈んだりしていた。それゆえ、先導をしている娘と男の落ち着きぶりが、なおさら腑に落ちないのであった。彼は二人に身を預けていたが、彼らが手を離せば、板切れのように倒れてしまったであろう。彼らの小さな瞳からは、鋭い視線が、あちらこちらに飛び交っていた。Kは、彼らの規則正しい足取りを感じていた。とはいえ、その運動に参加していたのではなかった。なぜなら、ほとんど一步一步、彼らに運ばれていたのであったから。最後になって、彼は二人から話しかけられているのに気づいたが、何を言われているのかは分からなかった。あらゆるところに充満している騒音しか、彼の耳には入らなかった。その騒音の中を貫くように、ある変化のない高音が、サイレンのように鳴り響いていた。「もっと大きな声をお願いします。」と、がっくりと下を向きながら、彼は囁いたが、恥ずかしさも感じていた。なぜなら、何を言われているのかは分からなかったが、彼らが十分に大きな声を出しているのは、分かったからである。そこに、とうとう前の壁が二つに裂けたようになって、新鮮な空気の流れが彼に向かって押し寄せてきた。横のところで、次のように言っているのが聞こえた。「最初は、行く気満々なんだ。だけど、そこから先は、百回、出口だと言ってやっても、ピクリとも動きやあしない。」Kは、娘が開けてくれた出口のドアの前に自分が立っているのに気がついた。あらゆる力が一気に蘇ってくるようであった。自由の感触を味わうために、すぐに踏み段に一步を進めると、そこから彼の方に屈み込んでいた同行者の二人に、彼は別れの挨拶をした。「ありがとうございました。」そう繰り返すと、何度も二人と握手を交わしたが、事務局の空気

に馴れている二人が、むしろ階段からのかなり新鮮な空気を敬遠しているようなのに気づいて、ようやく二人を解放した。二人は、ほとんど返事をする事さえできなかった。Kが大慌てでドアを閉めてやらなければ、ひょっとして、娘は昏倒してしまっていたかもしれなかった。それからKは、もうちょっとそこに立って、手鏡を使って髪の毛を整えていたが、踊り場に転がっていた帽子——情報屋が投げて寄越した——をすぐに拾い上げると、階段を下りていった。余りにも澁刺とした気分で、飛ぶような大股で歩けるので、この急変ぶりには、ほとんど不安のようなものを感じた。かつて、彼の完全に安定した健康状態が、このように予期せぬ結果をもたらしたことはなかった。彼が古い裁判に余りにもやすやすと耐えるので、肉体が何かの革命を起こして、新しい裁判を準備しているのだろうか？ 彼は、次の機会に医者のところへ行くという考えを捨てた訳ではなかった。いずれにせよ——これについては、自分で決めることができた——、これからの日曜日の午前は今日よりうまく使ってやろうと、彼は考えていた。



## 第四章

## 第四章 ビュルシュトゥナー嬢の女友だち

ここ最近、ビュルシュトゥナー嬢と数語を交わすことすらできずにいた。色々な方法で彼女に近づこうとしたが、それをかわすやり方を彼女はいつも弁えていた。事務所が終わるとすぐ、Kは自分の部屋に戻って、電灯も点けずに部屋に陣取り、ソファーに腰をかけて、ずっと控えの間に目をやっていた。例えば、女中が通って、人がいないように見える部屋のドアを閉めて回ると、そのちょっと後で、彼は立ち上がり、今度はそのドアを開けて回るのであった。ある朝など、おそらく勤め先に向かうビュルシュトゥナー嬢と二人きりで会えるかもしれないというので、いつもより約一時間早く起きたこともあった。しかし、この種の企てはどれも上手くいかなかった。彼女の勤め先と住まいの両方に手紙を書いたこともあった。その中で彼は、もう一度、自らの態度の正当化を試みて、ありとあらゆる補償を申し出て、彼女が課すかもしれない限度を自分の方が踏み越えることはしないからと確約して、とりわけ、あなたと相談してからでないでグルーバツハ夫人に何の指示もできないので、もう一度だけ話す機会をもらえないかと頼み込んだりした。そして、文末のところでは、次の日曜日は、一日中、自分の申し出の成就が約束される兆候、あるいは少なくとも、彼がこんなにも彼女の言うことを聞くと約束したのに、なぜ申し出が成就されないのかの理由が明らかにされる兆候を自室で待つからと伝えたのであった。この手紙は、返送もされてこなかったが、返事も来なかった。ところが、その日曜日、十分過ぎるほど明らかな兆候が現われてきた。早朝から、鍵穴越しに控えの間での奇妙な動きにKは気がついていて、その意味はやがて明らかになった。フランス語の女教師、ちなみにドイツ人で、名をモンターク、虚弱で、顔色の悪い、いざりの娘であったが、これまでは自分で部屋を借りて住んでいたのが、ビュルシュトゥナー嬢のところに引っ越すことになったのである。何時間も、彼女が控えの間を足を引きずりながら歩き、下着やテーブルクロスや本を何度も忘れるので、その度に取りに戻り、また新しい住まいの中に運び入れる、そういう様子が見て取られた。グルーバツハ夫人が、Kに朝食を運んでくると――Kを怒らせてから、最低限の給仕すら、女中に任せることはしなかった――、Kは、五日ぶりに彼女と話をする気になった。「今日は、どうして控えの間があんなに騒がしいんでしょう？」と、コーヒーを注ぎながら、彼が聞いた。「止めさせられませんか？ 日曜日に片づける必要がありますかね？」グルーバツハ夫人の方には目をやらなかつたが、彼女がホッとしたような安堵の溜め息をつくの、Kは見逃さなかつた。このように厳しいKの質問ですら、赦免、あるいは赦免の始まりであることが、彼女には分かったのだ。「片づけじゃありませんわ、Kさん。」

と、彼女は言った。「モンターク嬢が、ビュルシュトゥナー嬢のところに引っ越しているだけです。自分の荷物を運んでいるのです。」それ以上は言わず、Kがそれをどう受け止めて、自分がさらに喋るのを許す気があるのかどうかを見定めていた。一方のKも、彼女がどう出てくるのかを推し量り、じっくりと考えて、コーヒーをスプーンで掻き回しながら、黙っていた。それから彼女の方を見ると、こう言った。「この間のビュルシュトゥナー嬢に対する疑いはもう晴れたんですか?」「Kさん、」この質問だけを待っていたグルーバツハ夫人は、そう叫ぶと、ピッタリとあわせた両手をKに向けて差し出した。「あなたは、この間、たまたま出た言葉を余りにも真剣に取っていらっしゃる。あなたや他の誰かの気を悪くしようだなんて、これっぽっちも思っていません。といっても、Kさん、あなたはずっと前からわたしのことをご存知だから、このことについてはご納得がいただけるでしょう。でも、ここ数日、どれほどわたしが苦しんでいたかについては、全然、お分かりじゃない! わたしが借家人の悪口を言うだなんて! それを、Kさん、あなたがお信じになるだなんて! そして、わたしがあなたを契約解除するという話が、あなたの口から飛び出すのを聞かされることになるだなんて! わたしが契約解除するですって!」と、最後の叫び声は、噎せて声にならなかった。前かけを顔に当てながら、彼女は大きな声で泣いた。「泣かないで下さい、グルーバツハ夫人。」と、Kは言う、窓の方に目をやった。頭の中にあっただのは、ビュルシュトゥナー嬢、そして、彼女が知らない娘を部屋に迎え入れたという、その二点のみであった。「泣かないで下さい。」と、もう一度、言う、部屋の方にも目をやった。まだグルーバツハ夫人はめそめそしていた。「あの時も、そんなに悪い意味で言ったんじゃないんです。お互いの誤解ですよ。古い友人にはよくある話じゃないですか。」Kが本当に怒っていないのかを確かめるため、グルーバツハ夫人は前かけを目の下のところまでずらした。「まあ、実際、それだけのことなんですよ。」と、Kは言う、グルーバツハ夫人の態度から、例の大尉が秘密を漏してはいないらしいことが推察されたので、もうちょっとだけ、こう言い添えてやった。「馴染みでもない娘のために、わたしがあなたと仲違いするだなんて、よくもお信じになりましたね?」「確かにその通りですわ、Kさん。」と、グルーバツハ夫人は言った。しかし、何となくホッとした感じになるとすぐ、ちょっとまずいことを口走ってしまうところが、彼女にとっては不運であった。「わたしはいつも自問していたんです。どうして、Kさんはビュルシュトゥナー嬢のことをあんなに気にかけるのか、どうして、彼女のことでもガミガミ言われるのか、Kさんからひどいことを言われるとわたしの眠りが浅くなるのは、分かっていたらっしゃるはずなのに。あの人については、本当にこの目で見たことしか、わたしは言っていないのに。」Kは何も言わなかった。そんなことはしなかったが、開口一番、部屋から追い出していけば、それでよかったのであろう。コーヒーを飲み、それから、グルーバツハ夫人に、自らの軽率さを知らしめることで、彼はよしとした。外では再び控えの間全体を横切って、モンターク嬢の引きずるようなあの足音が聞こえていた。「あれが聞こえますか?」と、Kは言う、片手でドアの方を差し示した。「ええ。」グルーバツハ夫人は言う、溜め息をついた。「手は貸します、女中にも手伝わせますと申し出たのです。でも、あの方は頑なで、全部、自分でやるからと仰いました。ビュルシュトゥナー嬢もどうかしていますわ。わたしなら、モンターク嬢を借家人に迎えるのも嫌なのに、自分の部屋に入れるとまで言うんですから。」「あなたには無関係の

話でしょう。」と、Kは言うと、カップの中の残りの角砂糖をグシャッと潰した。「そのことで何か実害がありましたか?」「いいえ。」と、グルーバツハ夫人が言った。「それ自体は、願ったり叶ったりです。部屋がひとつ空けば、甥の大尉を入れられますから。最近、あれを隣の居間に住まわせていますが、あなたの気に障るんじゃないかとヒヤヒヤでした。余り気の利く方じゃありませんから。」「よくもそんなことを!」と、Kは言うと、立ち上がった。「そんなことを一言でもわたしが言ったのでしょうか。どうやらあなたは、モンターク嬢のフラフラ歩き――また、こっちに帰ってきた――に我慢ができないわたしを、神経過敏だと思っていらっしゃる。」グルーバツハ夫人は、もう自分には対処できないという感じがしていた。「Kさん、引っ越しのやり残しを延期するように言いませんか? お望みなら、すぐにそうさせますが。」「だって、ビュルシュトゥナー嬢のところ引っ越すんでしょ!」と、Kが言った。「分かりました。」と、グルーバツハ夫人は言った。言わんとすることを完全に理解していた訳ではなかった。「さて、」と、Kが言った。「とすると、モンターク嬢が荷物を運ぶということですよ。」グルーバツハ夫人は、ただコクリと頷いた。この押し黙った頼りなさは、表面的には反抗にしか見えず、さらに彼を苛立たせた。彼は、部屋の中の窓からドアのところまでを行ったり来たりし始めた。そのことで、グルーバツハ夫人はそこから脱出する機会を失なった。そうでなければ、彼女はおそらく逃げ出していたであろう。

もう一度、Kがドアのところまで来ると、ノックの音がした。それは女中であった。モンターク嬢が、Kと少し話をしたいと考えており、食堂（彼女はそこで待っている）まで来てもらいたいと仰っていますと、彼女はKに伝えた。女中の話を注意深く聞き取った後で、驚いているグルーバツハ夫人には、ほとんど嘲笑のような視線を投げながら、Kはクルリと向きを変えた。この一瞥によって、彼は、自分はモンターク嬢からの招待をもうかなり以前から予期しており、この招待は、この日曜日の午前に、グルーバツハ夫人の借家人から味わされた苦痛と極めてよく符丁していると、言っているようであった。すぐに行きますという答えをもたせて、女中を下がらせると、上着の取り換えのため、彼は衣装箆筒に向かった。この厄介な人物について、小声で嘆いてくるグルーバツハ夫人に対する返礼としては、朝食の食器をすぐに運び出すよう頼んでやるだけにした。「ほとんど手もつけていらっしゃらないのに。」と、グルーバツハ夫人は言った。「もういいから、すぐに下げて!」と、Kは叫んだ。全てのものにモンターク嬢が混ざり、不快なものに変わっていく感じがした。控えの間を通る時、彼は、ビュルシュトゥナー嬢の部屋の閉ざされたドアの方に目をやった。しかし、招待されたのはそこではなく、食堂であった。食堂のドアをノックもせずには彼は開けた。

極めて細長く、しかし幅は狭い、ひとつの窓しかない部屋であった。あり余るほどスペースがあるので、ドア側の隅には戸棚が二つ、しかもそれを斜めに置くことができた。他方、その他の空間は、ドアの近くから始まって大窓スレスレに至るまで、細長い食卓で完全に占められており、大窓にはほとんど近寄ることすらできなかった。食卓には、すでに食事の準備が整えられていた（大人数のための用意であった）。なぜなら、日曜日はほとんど全ての借家人が、ここで昼食を取るようになっていたのである。

部屋に入ると、窓のところから食卓の片方の縁に掴まりながら、モンターク嬢が近づいてきた。黙ったままで、二人は挨拶を交わした。それから、いつものように異様に首

を直立させながら、モンターク嬢がこう言った。「わたしのことをご存知かどうかは分かりませんが。」怪訝そうな目で、Kは彼女のことを見た。「もちろん、知っています。」と、彼は言った。「だってもう長いこと、グルーバツハ夫人のところにお住まいでしょう。」「でも、わたしが思うに、あなたは下宿のことに全く関心を払っていらっしやらない。」と、モンターク嬢が言った。「それは違う。」と、Kが言った。「座りませんか?」と、モンターク嬢が言った。黙ったまま、二人は食卓の一番端から二つの椅子を引っ張り出してきて、向かいあわせに座った。しかし、すぐまたモンターク嬢は立ち上がることになった。なぜなら、ハンドバッグを窓台のところに置き忘れて、それを取りに行くことになったからである。部屋の端から端まで足を引きずりながら、彼女は歩いた。ハンドバッグをブラブラさせて戻ってくると、こう言った。「ちょっと友人から頼まれたので、少しだけ話をさせてもらいます。彼女は自分で来ようとしたのです。しかし、今日はちょっと体調が優れませんでした。彼女のことは許してもらいたいし、かわりに、わたしの話をお聞きいただきたいとも思います。わたしが言うより以上のことは、きっと彼女も話ができないでしょう。それどころか、逆にわたしの方がもっと説明ができると思います。なぜって、わたしはかなり局外者の立場におりますから。お分かりになりますか?」「で、何を仰りたいんです?」と、Kは答えたが、モンターク嬢の視線が自分の唇にジッと注がれているのを見て、うんざりしてきた。彼女はそうすることで、まずKが言おうすることの機先を制しようとしていた。「どうやらピュトゥナー嬢は、お願いした個人的な話しあいをお許しにはならなかったんですね。」「ええ。」と、モンターク嬢が言った。「あるいは、むしろ、そうではなかったともいえます。あなたは、妙にはっきりとした物言いをされますね。一般的に言えば、話しあいは許されませんでした。しかし、許されなかったという訳でもないのです。なぜなら、話しあいが不要だと見なされるのもよくある話でしょう。今回の場合がまさにそれでした。さあ、今なら、あなたの言葉を受けて、お話しすることができます。あなたは、わたしの友人に、文書、あるいは口頭での話しあいをお申し出になりました。とはいえ、わたしの友人はそれが何の話しあいなのかをもう分かっています（少なくとも、そう考えざるをえません）。そういうことで、わたしにも分からない色々な理由で、この話しあいが実現しても誰のためにもならないことを、彼女は確信しているのです。ちなみに、昨日になって初めて、本当にざっくりとですが、彼女はこの話をしてくれました。その時、この話しあいは、いずれにせよ、あなたにとって意味のあるものにはならないと、彼女は言っていました。というのも、本当にたまたまあなたはこの発想に至っただけで、特に説明しなくても、ごく自然に（今は、そうではないかもしれませんが）、すぐにこの発想が無意味だということを悟るはずだと彼女は言うのです。それに対して、わたしはこう言ってやりました。そうかもしれません。でも、きちんとしておきたいのなら、はっきり返事をした方がよいと思いますよ。その役目を引き受けましょうかと、わたしが申し出ると、ちょっとためらった後で、友人は首を縦に振りました。でも、わたしはあなたの意向に添った動きになっているというのも望んでいるのです。なぜなら、取るに足りない問題のごく些細な不明点であっても、そうはいっても、それ自体がいつも頭痛の種になりますし、今回のように簡単に取り除かれるのなら、すぐにそうなった方がよいに決まっていますから。」「ありがとうございます。」と、すぐにKは言うのと、ゆっくりと立ち上がり、まずはモンターク

嬢の方、次にぎっと食卓の方、次に窓から外の方を見た上で――隣りの建物は陽光の下にあった――、ドアの方に向かって歩いていった。モンターク嬢は、彼のことを完全には信じられないという風に、何歩か後ろをついていった。しかし、ドアのところで二人は逆戻りすることになった。なぜなら、ドアが開いて、大尉のランツが入ってきたのである。近くから彼を見るのは、初めてであった。大柄の、大體、四十くらいの男で、こんがり日焼けして、丸々と太った顔をしていた。軽く一礼をすると（それはKに対しても行なわれた）、彼はモンターク嬢の方に歩み寄って、うやうやしくその手の甲にキスをした。極めて熟達した身のこなしであった。彼のモンターク嬢に対する礼儀正しさは、彼女がKから受けた取り扱いと比べて、著しい対照をなしていた。とはいえ、モンターク嬢は気を悪くしたようではなかった。なぜなら、Kを大尉に紹介するようにも見えたからである。しかし、紹介して欲しいという気持ちはKにはなかった。もし紹介されても、大尉にも、モンターク嬢にも、友好的ではいられなかったであろう。この手の甲へのキスは、完全な無害や無私を装いながら、Kに対抗してビュルシュトゥナー嬢を彼から引き離そうとする一派に、モンターク嬢を取り込んでいた。しかし、Kは、自分が気づいたのはそれだけではないとも考えていた。彼は、モンターク嬢がよい手段、とはいえ、両刃の剣となる手段を選んだことにも気がついていて、彼女は、ビュルシュトゥナー嬢とKとの関係の意味、とりわけ、懇願されたあの話し合いが意味していることについて、ひどく大袈裟に言い立てていた。同時に、あらゆることを大袈裟に言い立てているのは、むしろKであるかのように、その意味を逆転させようとしていた。思い違いをしているのは、むしろ彼女の方であったのに。彼は、何も大袈裟には言っていなかった。ビュルシュトゥナー嬢が、本当はそう長くは抵抗できない一介のタイピストであることも、彼にはよく分かっていた。その際には、グルーバツハ夫人からビュルシュトゥナー嬢について聞いた話は、わざと考えないようにしていた。ほとんど挨拶もなしに、その部屋を後にしながら、彼はこういう全てのことを頭の中で反芻していた。すぐに自分の部屋に戻ろうとしかけたが、後ろの食堂から聞こえてくるモンターク嬢のクスクス笑いを耳にして、ひょっとして大尉とモンターク嬢の両方を驚かすことができるのではという考えが、彼の中で閃いた。彼は、周りの部屋のどこかから邪魔が入るかもしれないと、キョロキョロと周囲を見回して、聞き耳を立てた。どこも静かであった。食堂からのお喋りの声だけが聞こえた。台所に通じる廊下の方からはグルーバツハ夫人の声も聞こえていた。チャンスが到来したようであった。Kは、ビュルシュトゥナー嬢の部屋のドアの前に歩み寄ると、小さくノックをした。何も物音がなかったので、もう一度、ノックをしたが、やはり答えはなかった。寝ているのか？ 本心に体調が優れないのか？ こんな風に小さくノックをするのはKだけという勘が働いて、居留守を使っているのか？ 居留守という仮定の下で、もっと強くノックしてみた。それでも不首尾に終わったので、用心深く、何かよろしくない、さらに無益なことをしているという感じもなくはなかったが、とうとうドアを開けた。部屋には誰もいなかった。ちなみに、Kが知っているあの部屋を思い出させるものは、ほとんどなかった。壁の横に二つ、ベッドが並べて置いてあった。ドアの横には、衣類や下着が積まれた椅子が三脚、扉が開けっ放しの戸棚もひとつあった。モンターク嬢が食堂でKと話し込んでいる間に、ビュルシュトゥナー嬢は、行方をくらましたようであった。Kはそのことにはさほど驚かなかった。ビュル

シュトゥナー嬢にそれほど簡単に会えるとは、もうほとんど期待をしていなかった。彼は、ほとんどモンターク嬢への反感だけから、このような試みに打って出ている。ところで、彼がとりわけバツが悪いと感じたのは、ドアを再び閉めた際、食堂の開いたドアの間隙から、モンターク嬢と大尉が喋っているのが見えたことであった。Kがそのドアを開けてから、おそらくずっと二人はそこにいたのであった。彼らは、何か自分たちがKを観察していたという感じを出さないようにしていた。低い声で話をしながら、会話の合間にフッと目が行っただけのような感じで、しかし、Kの動きを目で追いかけていた。そして、Kにとってのこの視線は、余りにも厳しいものがあった。彼は、壁伝いに自分の部屋に急いで帰った。



## 第五章

## 第五章 笞刑吏（ちけいり）

つい最近のある晩、事務所と主階段を分ける廊下を歩いていると――その日は、Kがほぼ最後の退勤者で、発送部にだけ、使用人がまだ二人、一個の電灯の小さな明かりの下で働いていた――、あるドアの向こうから（その先は、Kはただのガラクタ置き場と想着いて、今まで一度もそのことを確かめたことはなかったが）呻き声が聞こえた。驚いて立ち尽くして、間違いだったのかを確かめるため、もう一度、聞き耳を立てていると――、ちょっとの間は静かだったが、また呻き声がした。――最初は、使用人を呼びそうになった。もしかすると、証人が必要なのかもしれない。しかし、その後、ドアを正式に勢いよく開けたいという抑えがたい好奇心が彼を襲った。

果たして、思った通りのガラクタ置き場であった。敷居の向こうには、不要品の数々、古い書類、引っくり返った陶製の空のインク壺があった。部屋自体には男が三人いて、その低い天井のせいで身体を縮こまらせていた。棚の上に置かれたろうそくの光が、彼らを照らしていた。「ここで何をしている？」興奮のせいで軽はずみな調子にはなったが、大声ではなく、Kが聞いた。明らかに他の二人を牛耳っていて、最初、視線を一手に集めていたひとりの男は、首から胸までと肩全体を露わにして、黒っぽい革製の服に身を包んでいた。その男からの返事はなかった。かわりに、その男ではない二人の方がこう叫んだ。「旦那！ われわれは今から笞刑を受けるんです。というも、あなたが予審判事に告げ口をしてくれたものだから。」その時、Kは初めて、それが見張りのフランツとヴィレムで、三人目が、彼らを打擲するために笞を握っているのに気がついた。「さて、」と、Kは言うと、ジッと二人を見た。「告げ口なんてするもんか。自分の部屋で起こったことを言ったまでだ。もちろん、君らが非の打ちどころのない振る舞いをしてくれた訳でもない。」「旦那、」と、ヴィレムが言ったが、一方のフランツは、ヴィレムの陰に隠れて、打擲人からわが身を守るかのようにであった。「われわれがどんなに薄給なのかを分かってもらえたら、もっと好意的な判断もいただけたんでしょうが。わたしには、養うべき家族がいます。こちらのフランツには、結婚を決めた人がおります。人が豊かになろうとするのはこの世の習いです。しかし、いくら一生懸命でも、ただ働いているだけでは豊かになれません。そこで、下着に目が行ってしまいました。もちろん、そんなことを見張りがするのは禁じられています。よくないことです。しかし、慣習の上では、下着は見張りのものだったのです。ずっとそうでした。信じて下さい。分かりやすい話でしょう。逮捕という不幸に見舞われた男に、一体、そんなものが何の役に立ちますか？ それなのに、その後、その男は、そのことを公の場で話題にしたのでした。そ

うなったら、罰をもらうしかありません。」「そんな話は初めて聞いたぞ。君らの処罰なんて求めちゃいない。原理原則の話をしたんだ。」「フランツ、」と、ヴィレムは、もうひとりの見張りの方を向いた。「言っただろう、この旦那は、われわれの処罰を望んではいなかった。今、聞いたように、俺たちが処罰されるという話をご存知でもなかった。」「そんな話に惑わされちゃいけない。」「と、三人目がKに言った。「この処罰は、正しいと同時に避けられないんだ。」「その男の言うことを聞きちゃいけません。」「と、ヴィレムは言う。」「と、答の一撃を受けた手を素早く口にもっていくためだけに、その会話を中断させた。」「あなたが告発をしたばかりに、われわれは罰を受けることになりました。それさえなければ、したことが露見しても、何も起こらなかったでしょう。一体、これが正義ですか？ われわれ二人は、中でもわたしは、見張り役として、長い間、本当によくこの務めを果たしてきました——役所という見地からして、われわれがちゃんと見張りの役目を果たしていたのは、あなたも認めてくれるでしょう。——われわれには、出世の見込みがありました。もうちょっとで、この男のような答刑吏になれるところだったのです。ちなみにこの男は、幸運にも誰からの告発も受けてはおりません。なぜって、こんな告発は、実際のところ、極めてまれなことなのですから。さあ、旦那、今や、全てを失って、出世の道も閉ざされて、われわれは見張り役よりはるかに低い仕事に就かされます。おまけに、今はこの恐ろしく痛い答を受けねばなりません。」「その答はそんなに痛いのかい？」と、Kは聞くと、答刑吏がヴィレムの前でしならせている答を、じっくりと吟味した。「さて、これから服を脱いで、裸にならねばなりません。」「と、ヴィレムが言った。「ああ、そうか。」「と、Kは言う。」「と、答刑吏の方をマジマジと見た。男は、水夫のように日に焼けて、野生的で、血色のよい風貌をしていた。「答刑なしで済ませられる可能性はないのかい？」と、Kは聞いた。「ない。」「と、答刑吏は答えると、笑いながら首を振った。「服を脱げ！」「と、見張りたちに命じると、Kに言った。「こいつらの言うことを真に受けてはいけません。これから答刑を受ける不安で、すでに若干、精神に変調を来しています。例えば、こっちの方が、——彼はヴィレムを指差した——「ありもしない出世の話をしましたが、全くもって噴飯物です。ご覧なさい、ブクブクと太って、——答による最初の一撃は、そもそも脂肪の中に飲み込まれるでしょう——。ご存知ですか、こいつがなんでこんなに太っているのか？ こいつには、逮捕者の朝飯を平らげるといふ悪癖がありましてね。あなたの朝食にも手をつけませんでしたか？ ほら、言った通りでしょう。それに、こんな腹をしたやつが答刑吏になるだなんて、無理に決まっています。もう絶対に不可能なことです。」「そういう答刑吏もいます。」「と、ズボンのベルトを外しかけたヴィレムが主張した。「いや、いない。」「と、答刑吏は言う。」「と、首に一撃を食らわしたので、ヴィレムはビクッと震えた。「人の話なんて聞いていないで、サッサと服を脱げ。」「この人たちを見逃がしてくれるのなら、お礼はたっぷり弾みますよ。」「と、Kは言う。」「と、もう答刑吏の顔の方には目をやらず——こういう話は、お互いが下を向いている時にこそうまくいく——、財布を引っ張り出してみせた。「今度は俺を告発しようって肚かい。」「と、答刑吏が言った。「俺にも答を食らわせようっていうのかい、イカン、イカン！」「よく考えてみて下さい。」「と、Kは言った。「二人を罰するべきとっていて、今、彼らを請け出そうとするのでしょうか。単にドアを閉めて、何も見ず、何も聞かず、帰ってしまえばいいんですから。でも、今、わたしがやろうとしているのは、そ

の逆です。むしろ、彼らを助けようと頑張っています。もし、二人が処罰されるか、あるいは、その可能性があると分かっていたら、彼らの名前など口にしなかったでしょう。つまり、二人に罪があるとは、わたしは思っていませんでした。罪があるのは、むしろ組織の方、高位の役人たちの方なのです。」「その通り！」と、見張りたちが叫ぶと、すでに剥き出しになった背中の上に、その笞が振り下ろされた。「この笞の下にいるのが高位の裁判官だったのなら、」と、Kは言うのと、言いながら、再び鎌首をもたげてきた笞を、素手で掴んで引き下ろした。「実際、あなたが襲いかかるのを止めず、逆にお金を掴ませてでも、よい方向に行くよう促したことでしょう。」「お前の言うことには、本当に真実味がある。」と、笞刑吏が言った。「だが、買収はされない。笞を振るのが仕事だから、俺は笞を振る。」見張りのフランツは、おそらくKの介入によるさらにより結果を期待して、それまではかなり控え目であったが、今はズボンを履いたままで、ドアの方に一步を踏み出して、膝を突きながら、Kの腕にすがってこう囁いた。「二人の保護を勝ち取れないのなら、少なくともわたしの解放に向かって動いて下さい。ヴィレムはわたしよりも年上です。そして、どう見ても鈍い方です。それに、数年前、すでに一度、軽い笞刑の処分も受けています。わたしの方は、まだこの辱しめを受けていません。また、わたしのやり方は、よくも悪くも、もっぱらわたしの師、ヴィレム直伝のものです。下の銀行の前では、可哀想な婚約者が事の行く末を見守っています。わたしは全く、穴があったら入ってしまいたい。」涙でベタベタの顔を、彼はKの上着で拭った。「もう待つてはられない。」と、笞刑吏は言うのと、両手で笞を掴んで、フランツに向かって襲いかかった。一方のヴィレムは、片隅にしゃがみ込んで、頭をピクリともさせず、小さくなってそれを見ていた。そこに、フランツから発せられた叫び声があった。それはひと続きの変化のない声で、人からというより、拷問された楽器から出たような感じだった。それは廊下全体に響き渡った。事務所にいる全員にも聞こえたに違いなかった。「大きな声を出すんじゃない。」と、Kは叫んだが、自分を抑えられなかった。使用人がやってくるはずの方向を緊張した面もちで見つめながら、つついフランツを小突いてしまった。力はいれていなかったが、失神した人間をドウと倒れ込ませて、痙攣させたまま、両手で地面を掻きむしらせるだけの強さは十分にあった。笞刑はそれでも免除されなかった。倒れていようが、笞はフランツを見逃さないものであった。彼が笞の下でのたうち回っている間、その先端は上下にリズムカルに躍動していた。すでに遠目にひとりの使用人の姿が見えた。その二、三步先には、もうひとりの姿もあった。Kはすぐにドアを閉めて、中庭に面した窓のひとつに駆け寄ると、それを開けた。叫び声は完全に止んでいた。使用人たちを寄せつけないでおくために、彼はこう叫んだ。「わたしならここにいるよ！」「ご苦労様です、業務代理人さん！」と、相手が叫んだ。「何かありましたか？」「何でもないんだ。」と、Kが答えた。「中庭でちょっと犬が鳴いたんだよ。」それでも使用人たちが動かないので、彼は続けた。「もう仕事に戻っていいんだよ。」使用人たちと話さなくても済むように、彼は窓から身を乗り出そうとした。少ししてから、また廊下を見ると、もう使用人たちの姿はなかった。しかし、まだKは窓のところにおいて、ガラクタ置き場の方に戻ろうとはしなかった。とはいえ、家に帰る気にもなれずにいた。彼が見下ろしていたのは小さな中庭で、それは四角の形をしており、その周りを取り囲むようにして、事務所が入っていた。その時はすでにどの窓も真っ暗だったが、最上階の窓だけは月光を受

けて輝いていた。Kは神経を研ぎ澄ましなが、中庭の隅の暗がりの方に目を凝らそうとした。そこでは、二、三台の手押し車が、折り重なるように置かれていた。笞刑を止められなかったことが悔やまれた。だが、うまくいかなかったのは、彼の罪ではなかった。フランツが叫び出しさえしなければ――実際、猛烈に痛かったのだろうが、人間、ここぞという時は、我慢ができないと――、あれさえなければ、まだ笞刑吏を言いくるめられたかもしれない。いや、少なくとも、それは大いにありえることであった。もし、あの最下層の官僚組織の全員が無頼漢たちで占められていたのなら、非人間的な職務を担当する笞刑吏がどうしてその例外の方に入ることがあろう。お札をチラッと見た時、その目が光っていたのを彼は見逃さなかった。明らかに、賄賂の金額をちょっと釣り上げるためだけに、彼は笞を振ったのだ。Kが出し惜しみするはずもなかった。見張りたちを解放してやることは、本当の重大事であったのだ。この司法組織の墮落との戦いを始めたのなら、こういう点からも介入するのは、自然な流れであった。しかし、フランツが叫び出した瞬間、当然ながら、全ては終わってしまった。使用人や、考えられるあらゆる人間が、あのガラクタ置き場で一味と交渉している現場を押さえにくというのは、Kには堪えられないことであった。そこまでの自己犠牲を強いるのは、本当に誰にもできなかった。かりにそこまでする気があったのなら、話はもっと簡単に終わっていたであろう。つまり、Kが自ら服を脱いで、見張りたちの身がわりになると笞刑吏に申し出るのである。ちなみに、笞刑吏がこの代理を受け入れることは絶対になかった。なぜなら、そのことには何のうまみもなかったし、それどころか、重大な義務違反を犯すことにもなってしまったのだから。しかも、おそらくは二重の違反を。というのも、訴訟手続きの間は、おそらくKは、裁判所の役人たちに権利を侵されてはならなかったのである。むろん、今回の場合は、特別の規定が適用されるのかもしれない。いずれにせよ、彼にはドアを閉めるしかなかった。しかも、そうしたからといって、今もまだ、あらゆる危険が完全に除かれたという訳でもなかった。フランツをまた最後に小突いてしまったことが、遺憾に思われた。興奮していたからとしか言いようがなかった。

遠くで使用人たちの足音が聞こえた。彼らに気づかれぬように窓を閉めると、彼は主階段の方に歩いていった。ガラクタ置き場のドアの前で立ち止まると、そこでジッと聞き耳を立てた。物音ひとつしなかった。あの男が、見張りたちをなぶり殺しにしたのかもしれない。彼らは完全に男のなすがままであった。Kはもうドアのノブに手を伸ばしていたが、すぐにまた引っ込めた。もう誰も助けられなかった。使用人たちもやがてはやってくるのに違いなかった。しかし、彼は、いずれこのことはもち出してやる、本当の罪人である高位の役人たちには（まだひとりも自分の前に姿を現わそうとはしていないが）、力の限り、しかるべき処分を与えてやるぞと心に誓った。銀行の外階段を下りる際には、全ての通行人を入念に観察したが、視野をその周辺にまで拡大しても、誰かを待っている女は見つけられなかった。婚約者が待っているというフランツの言葉は、さらに大きな同情を掻き立てるためだけに発せられた、もちろん、赦されるべき嘘であることがこうして明らかになった。

次の日もまた、見張りたちのことが頭から離れなかった。仕事をしていても気もそぞろで、残務の整理のため、前日よりさらに遅く事務所に残ることになった。帰りがけ、またガラクタ置き場の側を通ると、まるで習慣のように、パッとそこのドアを開けていた。

予期した暗闇のかわりに目に飛び込んだものを前に、感情の高ぶりが抑えられなかった。何も変わらず、前の日の晩、彼がドアを開けた時、見た通りのものがそこにはあった。敷居のすぐ向こうにある書類、インク壺、笞を手にした笞刑吏、まだ素っ裸の見張りたち、棚の上のろうそく。見張りたちが大きな声で訴え始めた。「旦那っ！」Kはすぐにドアを閉めた。こうすればドアはちゃんと閉まるんだという風に、両方の拳でゴンと叩いた。ほとんど泣きそうになりながら、使用人たちのところに駆け込むと、謄写板の前でのんびりと仕事をしていた彼らは、驚いて仕事の手を止めた。「いい加減、あのガラクタ置き場を空にしてくれないか！」と、彼は叫んだ。「本当に、ゴミの山になってしまうよ！」明日やりますからと使用人たちが言うと、Kはコクリと頷いてみせた。今日は夜も更けて、当初の目論見のように、この仕事を彼らに押しつけるのには無理があった。しばらく使用人たちの様子を見張るために、ちょっとそこに腰を下ろすと、彼は数枚の複写をパラパラと投げてみた。そうすることで、書類を吟味中のように見えると思ったのである。その後、彼らが一緒に退勤してくれる気がなさそうだったので、疲れた彼は家路についた。

## 第六章

## 第六章 叔父、レーニ

ある日の午後――郵便の締切日の直前で、Kは大変に忙しかったが――、書類をもってくる二人の使用人たちの間を掻き分けて、田舎の小地主である叔父のカールが部屋に入ってきた。その様子が目に入ってきて、それよりかなり前、叔父の訪問を頭で思い描いていた時のような驚きはなかった。元々、叔父は来ることになっていた。すでに一ヶ月くらい前にそのことは決まっていた。もうその時から、ちょっと猫背になりながら、左手に潰れたパナマ帽をもち、右手はかなり遠くからこちら側にグイッと伸ばし、行く手を塞ぐあらゆるものを礼儀知らずの性急さで押しのけながら、事務机の上までやってくるのが見えるような気がしていた。いつも叔父は忙しそうであった。なぜなら、一日しかない首都での滞在中、事前に計画された全てを片づけて、さらに、たまたま生じた一切の会話、用件、娯楽もないがしろにしないという、不幸な考えに常に追い回されていたのであるから。そういう時、特にかつての後見人としての恩義があるKは、あらゆることに手を貸して、おまけに泊めてやらなければならなかった。「田舎にいる幽霊」というのが、叔父についたあだ名であった。

挨拶もそこそこに――肘かけ椅子を勧めてみたが、叔父には時間がなかった――、ちょっと内輪の話がしたいんだよと、彼はKに言った。「どうしても必要なことなんだ。」と、苦しそうに唾を飲み込みながら、彼は言った。「わしが落ち着くためには、どうしても必要なことなんだよ。」誰も入れてはならないという指図をして、すぐに使用人たちに席を外させた。「わしがどんな話を聞いたと思う、ヨーゼフ？」と、二人きりになると、叔父は大きな声を出して机に腰を下ろし、ろくに見もせず、座り心地をよくするために反古紙をその尻の下に敷いた。Kは黙っていた。何の話かは分かっていた。しかし、こんな形で急に骨の折れる仕事から解放されたので、最初は心地のよい疲労感にドブプリと浸っていった。それから、Kは向かい側の道路の方を窓越しに見た。座っているところからは、小さな三角形の断片、二つの飾り窓の間にある何もない家の壁の一部が見えただけであった。「窓から外ばかり眺めよって！」と、両手を上げながら、叔父が大声を出した。「後生だから、ヨーゼフ、わしの言うことに答えてくれ！ あれは本当なのか？

そんなことがありえるのか？」「親愛なる叔父さん、」と、Kは言うと、ボウツとした状態から我に返った。「あなたがどうしろと仰りたいのか、わたしにはさっぱり分かりません。」「ヨーゼフ、」と、警告するように叔父が言った。「わしの知る限り、お前はいつでも真実を話してくれた。今の言葉は、悪い兆しだと理解しろということか？」「仰りたいことが、だんだん分かってきましたよ。」と、素直にKが言った。「たぶん、訴訟のこ

とお聞きになったんですね。」「その通りだ。」と、ゆっくりと頷きながら、叔父が答えた。「訴訟のことを聞いたんだよ。」「誰からお聞きになりました?」と、Kは尋ねた。「エルナが手紙で教えてくれたんだよ。」と、叔父が言った。「娘とお前の間には全く音信がないようだな。そして、残念なことに、娘のことをお前はほとんど気にかけてもいない。それなのに、娘はこの話を聞きつけてきたんだ。わしは今日、手紙をもらって、もちろん、すぐに飛んできた。それ以外に理由なんてないが、その理由だけで十分だろう。お前について書かれた部分を読み上げてやる。」彼は、書類鞆から手紙を引っ張り出した。「これがそれだ。こう書いてある。『ヨーゼフには長いこと会えていません。先週も、一度、銀行に参りましたが、忙しいというので、通されませんでした。ほぼ一時間近く待ちましたが、ピアノのレッスンもあったので、家に帰りました。ヨーゼフと話したかった。おそらく近いうち、また機会があるのでしょうか。そういえば、わたしの名の日には大箱入りのチョコレートが送られてきました。本当に心の籠った、思いやりのあるプレゼント。その時は、書くのを忘れていましたが、聞かれて初めて、思い出しました。というのも、下宿では、チョコレートはすぐになくなってしまいますのですから。もらったと意識するかしらないかで、もう忘れてしまいます。ところで、ヨーゼフについては、もう少し言いたいことがあります。さっきも書いたように、銀行では交渉の真っ最中で、面会は許されませんでした。しばらく大人しく待った後で、わたしは使用人にこう聞いてみました。交渉はまだ続きますか。答えはこうでした。たぶん、そうだろう。なぜなら、業務代理人さんに対して起こされた訴訟についての話のようだから。わたしは聞き返しました。どんな種類の訴訟ですか? 何かの間違いなんじゃありません? 答えはこうでした。訴訟自体に誤りはない。訴訟、それも本当に厄介な訴訟についての話だ。しかし、それ以上は分からない。わたし自身は、業務代理人さんのお手伝いがしたい気持ちで一杯である。なぜなら、Kさんは善良で公正な人だから。しかし、どうやって助けたらよいか分からない。ただもう、どこかの有力者が尽力してくれるのを祈るばかりである。間違いなくそうなって、最後は大団円を迎えるのであろうが。しかし、業務代理人さんの機嫌から察するに、今のところは全くよくない状況にある。こんなお喋りに大した意味はないんでしょうと、もちろん思いましたわ。実際、わたしは、この単純な使用人を落ち着かせると、このことは他人にペラペラ喋って欲しくないと言ってやりました。つまらない噂話に過ぎないのだろうとも思いました。といっても、親愛なるお父様、あなたの次のご訪問でこのことが解明されるというのなら、おそらくそれはよいことです。細かい情報を手に入れて、必要とあらば、巨大で、影響力に富んだ人脈を駆使して、そこに介入していくというのは、至極、たやすい話でしょう。本当はそんな必要すらないのがよいのでしょし、結局、何もなかったという話にはなるとは思います。ただ、もしそうなったとしても、少なくとも、父親を抱擁する機会がすぐに娘に与えられるのですから、それはわたしにとっては喜びなのです。』——いい娘だ。」と、読み上げるのを止めて、叔父は言うど、数滴の涙を拭いた。Kはコクリと頷いた。エルナのことは、最近のゴタゴタですっかり頭の中から消えてしまっていた。誕生日のことですら。チョコレートの件は、叔父や叔母からKを守るための、明らかなでっち上げであった。何とも感動的な話。これから彼女に定期的に送ってやろうと思っている劇場のチケットだけでは、まだ到底、不足なのであろうが、下宿を訪ねて、十八歳の小柄なギムナジウム

生とお喋りしようという気には、今はなれなかった。「で、どうなんだ？」と、手紙を読んでいるうち、急いでいたこと、怒っていたことはすっかり忘れて、再び手紙の中に入り込んでいた叔父が聞いた。「ええ、叔父さん、」と、Kは言った。「そこに書いてあることは、全部、本当です。」「何っ？」と、叔父は叫んだ。「どこが本当だって？　何がどうなったら、本当ということになる？　どういう種類の訴訟？　まさか刑事訴訟じゃあるまいな？」「それが刑事なんですよ。」と、Kが答えた。「お前は、ここでのんびりと座りながら、厄介な刑事訴訟をしょい込んでいるというのか？」と、叔父は叫んだ。その声は、ドンドン大きくなっていった。「落ち着き払っていればいるだけ、訴訟はよい方に進むのです。」と、弱々しい声でKが言った。「心配しないで下さい。」「そんなんじゃ、ちっとも安心できん！」と、叔父が叫んだ。「ヨーゼフ、可愛いヨーゼフ、お前自身のこと、親戚のこと、わしらの家名のことをよく考えておくれ！　これまで、お前は一門の誉れだった。家名に泥を塗ることは、断じて許さん。今のお前の態度は、」と、首を斜めにしながら、Kの方をジッと見た。「わしには気に入らん。澆刺とした無実の被告人という態度からは、大きく外れている。手短かに言ってくれ、問題は何か、それが分かれば、わしは助けられる。もちろん、銀行の関係なんだろう？」「それが違うのです。」と、Kは言う。立ち上がった。「ただ、叔父さん、ちょっと声が大き過ぎるようです。たぶん、ドアのところで使用人たちに聞かれてしまっています。誠に心苦しいのですが。むしろ、外出しませんか。そうすれば、どんな質問にも答えられます。家族に釈明の義務があるのも、本当によく分かっています。」「そうだな！」と、叔父が叫んだ。「確かにそうだ。それなら、善は急げだ、ヨーゼフ。すぐに行こう！」「ちょっと言い置いておくことがあります。」と、Kは言い、電話で代行者を呼び出すと、それは瞬時に姿を現わした。すっかり興奮した叔父は、そんなことはやらなくても分かり切ったことなのに、電話でお前を呼んだのはKだということを、身振り手振りで男に伝えた。事務机の前に立ったKは、色々な書類を使って、留守中、今日のうちにやっておくべきことを、小声で男に説明してやった。若い部下は、冷ややかな、しかし、注意深い態度で、それを聞き取っていた。最初、叔父は神経質そうに唇を噛みながら、目を見開いて立っていたが、すでにそのことが目障りであった。確かに話は聞いていなかったが、すでにその外見が目障りだったのである。それから、叔父は部屋の中をあちこちと歩き回り、窓の前のそこここで足を止めては、また絵の前でも立ち止まると、その度、色々な叫び声を上げた。例えば、「わしには、全く理解できん！」とか、「これからどうなるのかすぐに言ってみろ！」とか。その若い部下は、何も気がつかない振りをして、Kの指示を最後まで大人しく聞きながら、幾つかのことはメモまでして、叔父とKにお辞儀をした後で、その場から出ていった。ちょうどその時、叔父は窓から外を見ながら、男には背中を向けて、伸ばした両手でカーテンをクシャクシャにしていた。ドアが閉まるか閉まらないかで、叔父がこう叫んだ。「やっとのことで、操り人形が出ていった。これでわしらも出ていける！　やっとのことで！」玄関ホールでは、何人かの役人や使用人が棒立ちになって、まさにその中を支配人代理が突っ切っていったが、残念ながら、叔父に訴訟の質問を控えさせられるような手立てはなかった。「で、ヨーゼフ、」と、周りの人が腰を屈めて挨拶をしてくるので、それには略式の敬礼で答えながら、叔父がこう始めた。「さあ、正直に言ってくれ。どんな種類の訴訟なんだ。」薄笑いを浮かべながら、Kは曖昧な受け答えをして、階

段のところまで出てきて初めて、周りに人がいるところで打ち明け話をするつもりはありませんと、叔父に説明した。「そうだな。」と、叔父は言った。「だが、もういいんじゃないか。」首を傾げ、急いた感じで短く煙を吐きながら、Kが話し出すのをジッと待っていた。「とりあえず、叔父さん、」と、Kは言った。「今、問題になっているのは、普通の裁判所で取り扱っている訴訟じゃないんです。」「それはまずいな。」と、叔父が言った。「というと？」と、言うと、Kは叔父の方を見た。「それはまずいなと、わしは思うんだ。」と、叔父が繰り返した。二人は表通りに繋がる銀行の外階段のところに出た。守衛にも聞かれている気がしたので、Kは叔父を下の階まで引っ張っていった。活発な街頭の往来が二人を包んだ。Kと腕を組んだ叔父は、訴訟について、もうそれほど性急には聞こうとしなかった。それどころか、しばらくはジッと黙り込んで、二人は歩くことになった。「一体、何があったんだ？」と、とうとう叔父が聞いた。そして、余りにも唐突に立ち止まったので、後ろの人々が驚いてサッと身をおかわすことになった。「しかしだ、こんなことは急にそうなるもんじゃない。ずっと前から始まっていたんだ。何か前兆があったはずだ。どうしてそれを書いてこなかった？ わしが何でもしてやれるのは、知っているだろう。本当のところ、ある意味、わしは今でもお前の後見人なんだ。今日までは、そのことが誇りだった。むろん、今でもお前を助けることはできる。ただ、今もうすでに訴訟が動いてしまっているとすると、そいつは厄介だ。いずれにせよ、今はちょっと休暇を取って、田舎のわしらのところに来るのが一番じゃないか。それから、今、気がついたが、お前は少し痩せたな。田舎に来たら、きっと元気になる。そうだ、それがいい。確かに、目の前には大変な苦勞が迫っている。だが、そうすることで、ある意味、ついでに裁判所から逃げられることにもなるんだ。こちらでは、あらゆる権力手段があって、やつらはそれを間違いなく、自動的にお前にも適用してくる。しかし、田舎に来れば、まず色々な機関を派遣するか、手紙、電報、電話で働きかけるしかやつらには手がない。当然、動きは鈍ってくる。むろん、解放される訳じゃないが、一息つけるようにはなるんだ。」「ひょっとして、外出を禁止してくるかもしれませんね。」と、Kは言ったが、叔父の話の思考の流れの中に、少し引き込まれてしまっていた。「やつらがそう出てくるとは思えん。」と、考え抜いた末で、叔父が言った。「お前が出発したところで、やつらが受ける権力の喪失はさほどでもないんだ。」「わたしは、」と、Kは言うと、叔父が立ち止まらないように、腕の下にグッと手を回した。「叔父さんは、わたしほど全体に重きを置いてはいないと思っていました。それが今日は、それ自体をひどく深刻に捉えていらっしやる。」「ヨーゼフ、」と、叔父は大きな声を出して、立ち止まれるように身を振りほどこうとしたが、Kは腕を放さなかった。「お前は変わったな。そうはいつでも、お前にはいつも本当に素晴らしい理解力があった。今はそれにも見放されたのか？ 訴訟に敗けてもいいのか？ それが何を意味するのか、分かっているのか？ 単純に、抹殺されるってことなんだぞ。親類全体が巻き込まれるか、少なくとも徹底的に侮辱されてしまう。しっかりしろ、ヨーゼフ。お前の無頓着な様子は、わしの正気を失なわせる。お前を見ていると、あの諺を信じそうになる。『訴えられたってことは、もう敗けてるってことだ。』」

「親愛なる叔父さん、」と、Kは言った。「興奮しても、何の意味もありません。叔父さんは興奮していらっしやる。わたしもそうかもしれません。興奮しても、この訴訟に

は勝てません。わたしは、叔父さんの実務的な経験を（それがどんなに驚くようなものであっても）、いつでも（そして今でも）、とても高く買ってきました。同じように、わたしの経験もちょっと適用してみましょう。家族も訴訟の巻き添えになると仰るのなら——個人的にはこの考え方に賛同できませんが、まあ、枝葉の話です——、何でも言いつけには従います。ただ、田舎への逗留だけは、叔父さんの考えを受け入れても、得になるとは思えないのです。というのは、それでは、逃亡や罪の意識を意味することになりますから。いずれにせよ、こっちにいれば、確かにこれまで以上に追われることとなりますが、それ以上に、事件が進むことにもなるのです。」「その通りだ。」と、今、ようやく二人がお互いに歩み寄れたと言わんばかりの口調で、叔父が言った。「こっちにお前がいても、その無頓着さで、この事件をただ危険に晒しているくらいなら、かわりにわしが動いた方がいいと思ってそう言ったんだ。だが、全力を出してこの事件に取り組むというのなら、むろん、そっちの方がはるかにいい。」「この件では、意見が一致しましたね。」と、Kが言った。「当面、わたしがやっておくことで、この時点で何か提案はありますか？」「この事件については、むろん、わしの方がもっと熟慮していかねばなるまい。」と、叔父が言った。「今、すでに二十年もの間、ほぼ途切れることなく田舎にいて、そうするうち、この方面でのわしの嗅覚もすっかり衰えてしまったということも、お前は考えに入れねばなるまい。この手の事情通たちとの雑多で重要な結びつきも、自然に弛んできてしまった。知っての通り、この田舎でわしは少し冷飯を食わされてもいる。人間、こうなってみないと、本当にそうなったことが自分で分かるようにはならないものだ。ひとつには、お前の件がやはり全く予想外だったというのもある。おかしいことだが、エルナの手紙ですでにこの種のことを予見して、今日、お前の姿を見て、ほとんど確信にまで至りながら、それでもそうだったのだ。だが、そんなことはどうでもいい。今、重要なのは、一瞬でも無駄にしないということだ。」すでに喋っている端から爪先立ちになり、一台の自動車に合図を送ると、同時に住所を運転手に大声で伝えながら、こちらに続けとばかり、早速、Kを車の中に引っ張り込んだ。「今すぐフルト弁護士のところに行こう。」と、彼は言った。「学校仲間なんだ。きっと、名前を聞いたことはあるだろう？　ない？　おかしいな。擁護者、貧民の弁護士として、大変な名声を博している。わしは特にあの男には人間として大きな信頼を置いているんだ。」「叔父さんがやろうとしていることには、何の異論もありません。」と、叔父がこの事件を取り扱おうとする、性急で、執拗なやり方が不愉快で仕方がなかったが、Kはそう言った。被告人として貧民の弁護士のところに赴くというのも、好ましい話とは全くいえなかった。「知りませんでした。」と、彼は言った。「こういう事件でも、やっぱり弁護士は呼べるんですね。」「そりゃそうだ。」と、叔父は言った。「当たり前だ。そうに決まっている。さあ、そろそろこれまでに起こったことを全て話して、この事件の詳細を教えてくれ。」Kはすぐに、何も隠し事もせず、話を始めた。訴訟をとんでもない恥さらしだとする叔父の意見に対してなした唯一の抗議は、完全に率直に喋ることであった。ビュルシュトゥナー嬢の名前は、ほんの一度、チラッと出すだけに止めておいた。しかし、だからといって、率直でないということにはならなかった。なぜなら、ビュルシュトゥナー嬢は、訴訟と何の関係もなかったのであるから。叔父が喋っている間、Kは窓から外を見ていたが、まさに裁判所事務局があるあの郊外の町に近づいているのに気がついた。彼はそれを叔父に

伝えた。しかし、叔父はこの偶然の一致に、特に変わったところがあるとは考えなかった。真っ暗な建物の前で、車が停まった。一階のとっつきにあるドアのベルを叔父が鳴らした。待っている間、ニヤリと笑いながら、大きな歯を見せて、彼はこう囁いた。「八時、訴訟当事者が訪問するには、ありえない時刻だ。しかし、フルトはそんなことではついぞ気を悪くしたりしない。」ドアの覗き窓に二つの大きな黒い目が現われて、しばらく二人の訪問客を見た後で、サッと消えた。しかし、ドアは開かなかった。二つの目が見えたという事実を、叔父とKはお互いに確認しあった。「新入りの小間使いだから、知らない人間を見て、恐かったんだろう。」と、叔父は言う、もう一度、ノックをした。また目が現われた。今度は、ほとんど悲しんでいるようにも見えたが、もしかするとそれは、頭のすぐ上でジリジリと激しく音を立てて燃えながら、ほとんど光は発していない、剥き出しのガス灯の火が引き起こした、幻視に過ぎないのかもしれない。「開けろ。」と、叔父は大声を出しながら、拳でドアを叩いた。「弁護士殿の友人だぞ！」「弁護士さんにご病気です。」と、背後で囁く声が出た。狭い廊下のもう一方の端にあるドアの脇に、ナイトガウンを着たひとりの紳士が立っていて、恐ろしく小声でそう言っていた。待ちくたびれて、すでにひどく立腹していた叔父は、パッと後ろを振り向くと、こう叫んだ。「病気？ あいつが病気だって言うのか？」と、その紳士の方が病気だと言わんばかり、ほとんど脅かすように、男の方ににじり寄った。「ドアはもう開いています。」と、男は言う、弁護士の部屋のドアの方を指差して、ナイトガウンの前をあわせながら、姿を消した。ドアは本当に開いていた。ひとりの若い娘——あの少し前に飛び出た黒い目をKは再び見出し出した——が、だらりとした白のエプロンを着て、控えの間どころに立って、手にはろうそくを一本もっていた。「次に来た時は、もっと早く開けるんだ！」と、挨拶がわりに叔父が言うと、娘は小さく膝を折って挨拶した。「来い、ヨーゼフ。」と、それから彼は、ゆっくりと娘の横を通り過ぎているKに向かって、そう言った。「弁護士さんは病気ですわ。」と、娘は言った。しかし、叔父はそんなことには躊躇せず、あるドアに向かって突進していた。Kは、まだ娘の方をポオッと見ていた。その間に、娘はクルッと回って、玄関のドアに再び鍵をかけようとしていた。人形のように丸い顔の女であった。青白い頬や顎が丸いだけではなく、側頭部や額の生え際までが丸いのだ。「ヨーゼフ！」と、また叔父が叫んで、それから娘に聞いた。「心臓痛かい？」「たぶん、そうですわ。」と、娘が言った。彼女はタイミングを見計らって、ろうそくを手先導すると、その部屋のドアを開けた。ろうそくの光がまだ届いていない部屋の片隅に置かれたベッドの上では、長い髭を生やした男が、身体を起こしかけていた。「レーニ、どなたがいらっしゃった？」と、ろうそくの光に目が眩んで、客を見分けられずにいた弁護士が聞いた。「君の古くからの友人、アルベルトだよ。」と、叔父が言った。「おお、アルベルトか。」と、弁護士は言う、この訪問には、体裁を取り繕う必要はないという感じで、再び枕の上に頭を落とした。「本当にそんなに悪いのかい？」と、叔父は聞くと、ベッドの縁に座った。「そんな風には見えないが。単なる心臓病の発作じゃないのか。これまでみたいにすぐによくなるさ。」「だといいが。」と、弁護士が小声で言った。「前よりだんだんひどくなっている。息をしているのも苦しいし、ちっとも眠れない。日増しに体力も落ちてきた。」「そうか。」と、叔父は言う、大きな手で膝の上にパナマ帽をしっかりと載せた。「そいつはよくない知らせだな。ちゃんと養生しているのか？　ここは本当

に陰気だぞ。真っ暗じゃないか。以前、ここに来てからかなりの時間が経つが、あの頃はもう少し感じがよかった。ここの小柄な下女も、あんまり元気がなさそうだし。あるいは、そういう風に見せているのか。」相変わらず、娘はろうそくを手にもったまま、ドアの脇のところ立っていた。その定まらない視線から察するに、叔父が彼女の話を話していた時も、叔父ではなく、むしろ、Kだけをジッと見ていたようであった。Kは、娘の近くまで椅子をずらすと、その椅子に身体を凭れさせた。「わしみたいに病気になったら、」と、弁護士が言った。「安静でいるしかない。それがわしにとっては陰気じゃないんだ。」ちょっと間を置いてから、彼は続けた。「それに、レーニはよく世話を焼いてくれる。有能だよ。」しかし、叔父はその言葉を受け入れなかった。そこには、看護婦への明らかな蔑視があり、病人には何も言わなかったが、彼女がベッドの脇に行き、ナイトテーブルの上でろうそくを置いて、病人の上にグッと身を屈めて、枕を整えてやりながら、ヒソヒソ話をしていた時も、看護婦の振る舞いを鋭い目つきで追いかけていた。叔父は、ほとんど病人への配慮も忘れて立ち上がると、看護婦の行く先々を、あちこちらとついで回った。背後からスカートを掴み、ベッドから娘を引きずり下ろしていたとしても、Kは全く驚かなかったであろう。K自身は、こういう一切のことを静観していた。弁護士の病気は、好都合ですらあった。この事件で叔父が示している熱意は止めようがなかったが、今、特別に何をするでもなく、その熱意が別の方面に逸れていくのは、Kには大歓迎であった。その時、おそらくは看護婦を貶めようという意図だけで、叔父がこう言った。「お嬢さん、ちょっとだけ二人にしてくれませんか。友人と個人的な相談があるんだ。」まだ病人の上に屈み込んだまま、ちょうど壁の脇のところの亜麻布を伸ばしてやっていた看護婦は、首だけで後ろを振り向くと、非常に落ち着いた感じでこう言った（憤怒の余り、カッと突っかかるようになり、そこからまた淀みない状態に戻っていく叔父の語り口とは、恐ろしい対照をなしていた）。「ご覧下さい。こんなに弱っていたら、どんな事件の相談もできませんわ。」おそらくは、その方が便利というだけで、彼女は叔父の言葉をそのままの形で投げ返した。とはいえ、それはそれ自体で、第三者には侮辱的に響くことがありえる言葉であった。むろん、刺された人間のよう、叔父はピョンと跳ね上がった。「貴様っ、」と、興奮からくる出始めのダミ声（まだ、ほとんど聞き取れるものではなかった）で、彼は言った。こうなると予想はしていたが、やはりKは驚くと、その口を両手で塞ぐという明確な意図をもって、叔父に向かって駆けていった。ところが幸いなことに、娘の背後では、例の病人が身体を起こし始めていた。何か気味の悪いものを飲み込んだように、不機嫌そうな顔をした後で、また少し落ち着いた感じになると、叔父は言った。「もちろん、わしらにはまだ理性というものがある。お願いが無理な話というのなら、わしも諦めよう。だから、今はこの場を外してくれ！」看護婦は、叔父の方にジッと顔を向けながら、ベッドの脇に立っていた。Kにはそう見えたが、彼女は弁護士の手を片手で擦っているようでもあった。「レーニの前なら、何を言ってもらっても構わないよ。」と、明らかに、是非、そうしてもらいたいという感じで病人は言った。「わしの問題じゃないんだ。」と、叔父が言った。「わしの秘密じゃないんだ。」もうこれ以上、話すつもりはないが、もう少しだけ猶予を与えてやるという感じで、彼がクルッと向きを変えた。「じゃあ、誰の？」と、消え入りそうな声で聞きながら、再び弁護士は身を横たえさせた。「甥だよ。」と、叔父は言った。「連れてきて

いる。」そして、紹介した。「業務代理人、ヨーゼフ・K。」「おお、」と、はるかに生気を帯びた感じで病人は言う、Kに手を差し出した。「すまない、まるで気がつかなかった。レーニ、行きなさい。」それから、これまた一切の抵抗を止めた看護婦にそう言うと、長い別れになるかのように片手を差し出した。「じゃあ、君は、」と、これもまた鉾を納めて、親愛の情を深めつつあった叔父に向かって、最後に彼は言った。「病氣の見舞いじゃなく、仕事で来てくれていたんだね。」それまでは、見舞いというイメージによって、弁護士は無気力になっていたようであった。それゆえ、今はすっかり元気になったらしく、ずっと肘一本で身体を支えているのであった（それは、非常に骨の折れることであったに違いない）。髭の中からひとつの房を何度も何度も引っ張り出していた。「すっかりよくなったみたいじゃないか。」と、叔父が言った。「あの魔女がいなくなっからさ。」と、口を閉じると、こう囁いた。「賭けてもいいが、あの女、盗み聞きしているぞ！」ピョンとドアのところへ飛んでいったが、ドアの向こうには誰もおらず、彼はすぐに戻ってきた。少しもガッカリはしていなかった。なぜなら、盗み聞きをしないのは、さらに質が悪く考えたのである。ただし、不機嫌そうな顔はしていた。「君は、あれを誤解している。」と、弁護士は言った。しかし、それ以上、看護婦をかばおうとはしなかった。おそらく、それによって、もう彼女には保護は不要だということをおもうとしたのであろう。それからは、はるかにいたわりに満ちた感じで、弁護士はこう続けた。「甥御さんの事件だが、むろん、わしの体力がこの極めて難しい事件についていけるのなら、その方が喜ばしい。本当に恐ろしいのは、この体力が続かなくなることだ。とにかく、あらゆることをやってみるつもりでいる。わしで間にあわなければ、別の人間を呼べばいい。ただ、正直なところ、この事件は余りにも興味深いので、全ての関与を諦めてしまう気にはなれない。万が一、この心臓がもたないことがあるのなら、少なくとも、それはここで完全な無能ぶりをさらけ出す絶好の機会を見出すのであろう。」何を言っているのかサッパリ分からないと、Kは思った。何かの説明があるのを期待して、彼はジッと叔父の方に目をやった。しかし、叔父はろうそくを手をナイトテーブルに座り（そのテーブルからは、絨毯の上に薬瓶がすでに転がり出していたが）、弁護士が言うあらゆることに相槌を打ち、あらゆることに賛同して、時々、同じように賛同することをKにも強要しながら、Kの方を見ていた。もしかして、もうずっと前に、この訴訟について叔父は弁護士に話したことがあったのだろうか？ いや、そんなはずはなかった。これまでのことから、そうでないのは明らかであった。「さっぱり分からないのですが――。」と、それゆえ、彼は言ってみた。「おや、もしかしてわしの方が誤解していたのかな？」と、Kと同じくらい、驚き、当惑していた弁護士が聞いた。「慌ててしまったのかな。では、何から話したらよいでしょう？ てっきり訴訟の話なんだと思っていましたが？」「もちろんだ。」と、叔父が言って、Kにも聞いた。「お前、何を言っているんだ？」「ええ、というのも、わたしや訴訟のことを、そもそもどこでお知りになったのか？」と、Kが聞いた。「ああ、そのことですか。」と、笑いながら、弁護士が言った。「こう見えても、弁護士ですから、裁判関係者たちとのつきあいがあります。色々な訴訟、目を引く訴訟は、人の口にも上ります。とりわけ、友人の甥御さんが関わっているとすれば、頭の中にも残ります。どこにも不思議はありません。」「一体、何が言いたいんだ？」と、もう一度、叔父が言った。「お前には、落ち着きてもんがない。」「裁判の関係者とのつきあ

い？」と、Kが聞いた。「ええ。」と、弁護士が答えた。「お前の質問は、全てが子どもじみている。」と、叔父が言った。「専門分野の人間とつきあわず、一体、誰とつきあえます？」と、さらに弁護士が引き継いだ。その響きに反論の余地はなく、Kは答えに窮してしまった。「とはいえ、あなたが働いているのは、大審院の裁判所の方で、屋根裏にある裁判所ではないですよ。」と、言おうとしたが、グツとこらえて、実際は口に出さなかった。「よく考えてみて下さい。」と、余計なことだが、わざわざ当たり前のことを教えてやるという感じで、弁護士がそう続けた。「よく考えてみて下さい、そういうつきあいの中から、依頼人への大きな利益（しかも、色々な面で）は引き出されても、そのことを口に出すのは許されていません。むろん、病気のせいで、今は少々、差し障りが出てきてもいます。それでも、裁判所の心優しい友人が訪ねてくることで、ある程度の情報は入手できるのです。おそらく、健康でピンピンして、裁判所で丸一日を過ごしている大勢の人たちよりも分かっているくらいです。例えば、たった今も、ご親切な訪問を受けていたところでして。」そうして、真っ暗な部屋の中の一角を指で差し示した。「エッ、どこ？」と、驚きの余り、ほとんど礼儀も忘れてしまって、Kはそう聞いた。それから、落ち着かない感じでキョロキョロと辺りを見回してみた。小さなろうそくの光は、向かいの壁には全く届いていなかった。しかし、実際のところ、その一角でゴソゴソと動き出すものがあった。その時、叔父が掲げたらうそくの光の中にある小さな机の脇に、年配の紳士が座っているのが見分けられた。おそらくジッと息を殺していたので、長いこと分からなかったのであろう。自分に注意が向けられるのを明らかに嫌気しているその男は、非常に念の入った感じで、ゆっくりと立ち上がった。両手を短い翼のように動かして、あらゆる自己紹介や挨拶を撥ねつけようとするかのように、何があっても自分の存在で誰かに気まづい思いはさせたくないと望んでいるかのように、再び闇の中に消えることで自らの存在が忘れ去られるのを強く求めているかのようにであった。しかし、その願いを叶えてやる訳にはいかなかった。「つまるところ、われわれは不意をつかれてしまいました。」と、弁護士は説明のためにそう言うと、その一方で、こちらにお越し下さいと励ますように、その紳士の方に目配せをした。ためらいがちに周囲に注意を払いながら、しかし、ある種の威厳は保ちながら、男がこちらにやってきた。「事務局長さん——あつ、すみません、紹介がまだでしたね——、こちらが友人のアルベルト・K、こちらがその甥御さんで、業務代理人のフランツ・K。こちらが、事務局長さんです。——ご覧のように、わたしを訪ねるといふ親切心が、この事務局長さんにはおありだ。事務局長さんがどれほど忙しいのかを知っている事情通にしか、この訪問にどれだけの価値があるかを評価することはできません。さあ、そういう事情はありましたが、この人はやってきてくれました。そして、わたしの病勢が許す限り、和やかに歓談させてもらっていました。誰も来ないと思っていたので、見舞客を通すのをレーニに止めることはしませんでした。ところが、二人きりと思っていたのに、アルベルト、君の拳がドアを叩く音がした。事務局長さんは、椅子と机をもって、奥に引き籠ってしまわれた。しかし、こういう風になってみると、ひょっとして（あるいは言葉を換えるのなら、その気になりさえすれば）、お互いが関係するこの問題について話しあいさえすれば、むしろ、もっと近づきになれるかもしれないことが明らかになりました。——では、事務局長さん、」首を傾けて、卑屈な笑いを浮かべながらそう言うと、ベッドの近くにあった肘かけ椅子を差し示

した。「残念ながら、あと少ししかこちらにはおられません。」と、愛想よく事務局長は言う。肘かけ椅子にはもう腰を下ろして、時計の方に目をやった。「仕事がありますので。といっても、友人の友人である方と知りあいになる機会を逃すつもりはありません。」そうして、叔父の方に軽く首を傾けたのであった。今回の新しい交わりに、叔父は心から満足したようであった。しかし、その性分から、自分の服従心をうまく言葉で言い表わすことができず、当惑したように大袈裟に笑いながら、事務局長の言葉に応えたのであった。何という嫌な光景！ これら一切のことをKは静観していた。なぜなら、彼のことを気にする人は誰もいなかったのである。どうやら癖のようであったが、自分の顔が表に出るや、事務局長はすぐに会話の主導権を握った。おそらく当初の病弱さが新参の見舞客を追い払う口実でしかなかった弁護士も、耳に手をやって、注意しながら、その話を聞き取っていた。ろうそくを手にしていた叔父も――ろうそくを太腿の上に置いて、バランスを取り、弁護士はそれを心配そうに見つめていたが――、突然、当惑から解き放たれると、事務局長の話す様子、彼が話をする際に用いる、柔らかで、波打つような手の動きに、ただただ見惚れていた。ベッドの柱に身体を凭せていたKも、事務局長からは完全に無視されていたが（もしかして、それは故意だったのかもしれないが）、老紳士の聞き役に回っていた。ちなみに、その話の中身はほとんど分からなかった。彼は、看護婦について考えたり、彼女が叔父から受けたひどい扱いについて考えたり、すでに一度、この事務局長に会ったことがあるのではないかと、もしかして、それは最初の審理の集まりにおいてではなかったかと、考えたりしていた。もしそれが思い違いだったとしても、この事務局長であれば、あの集会の最前列の参加者たち、あのまばらな髭をした高齢の紳士たちの中に、見事にはまり込んでいたのであろうが。

その時、控えの間から陶器がガチャンと割れたような音がして、全員が聞き耳を立てた。「何があったのか、見てきます。」と、Kは言う。他の二人に引き留めさせる機会を与えようともいうように、ひどくゆっくりとその場を後にした。控えの間に足を踏み入れて、暗闇に目を馴らそうとしていると、ドアを開いた状態にしていた手の上に、小さな手、Kの手よりはるかに小さな手がすぐに置かれて、そのドアを静かに閉めた。待っていたのは看護婦であった。「何でもないわ。」と、彼女が囁いた。「一枚だけ皿を壁に投げたのよ。あなたを呼ぶために。」気後れした感じのKが言った。「ぼくもずっとあなたのことを考えてました。」「なら、なおさら具合がいいわ。」と、看護婦が言った。「こっちに来て。」数歩で、擦りガラス製のドアの前のところまで二人はやってきた。Kの目の前でそれを看護婦が開けた。「さ、どうぞ。」と、彼女は言った。何にしても、そこは弁護士の執務室であった。その時、月光は三つの大きな窓それぞれのすぐ横の床の小さな四角い平面だけを照らしていた。そして、その光で見分けがつく限りでは、ずっしりした、古い家具類がそこにはあった。「こっちよ。」と、言う。木彫りの背凭れがついた、黒っぽいチェストを彼女は差し示した。そこに座って、彼は部屋の中をグルッと見回してみた。天井の高い、大きな部屋であった。こんなところに来たら、あの貧民弁護士の顧客たちは、自分のことを絶望的だと感じるんだろうなとKは思った。訪問者たちが大きな事務机に近づく際のトボトボ歩きが、彼の目には浮かんできた。しかし、その後はそんなことは忘れて、自分のすぐ横に座って、肘かけに彼をほとんど押しつけようとしている看護婦の方に目を奪われていた。「あたし、思っていたのよ、」と、彼女は言った。「呼

んだりしなくても、あなたは自分でこっちに来るんだらうって。だって、おかしいじゃない。最初は入ってくるなり、ずっとあたしに見惚れていたのに、その後は待たせっ放しにするだなんて。それはそうと、あたしのことはレーニって呼んでね。」と、この話しあいのうちの一瞬でも無駄にしないという風に、間髪を置かず、出し抜けるに、さらに彼女はそう続けた。「分かったよ。」と、Kは言った。「でもね、レーニ、君はおかしいって言うけど、そのことは簡単に説明がつくんだ。まず、あの老人たちのお喋りには、つきあわなければならなかった。理由もなしに席を外すだなんて、できるはずもない。次に、ぼくはそもそも厚かましいというよりは、むしろ内気な方の人間だ。それにレーニ、君もすぐに墜ちるような女には、全く見えなかったし。」「そりゃそうよ。」と、肘かけの上に腕を載せながら、レーニは言う、Kの方をジッと見た。「でも、あなたは、あたしのことを気に入っていなかったわ。たぶん、今もそうよ。」「気に入る、気に入らないなんて、どっちでもいいじゃないか。」と、鉾先をかわしながら、Kが言った。「まあ！」と、笑いながら彼女は言う、Kの発言や、こういう小さな感嘆の表現から、ある種の優越感を勝ち取っていった。そのため、しばらくの間は黙っていようと、Kも思った。すでに部屋の暗さにも馴れて、家具調度のそれぞれの細部にまで目を走らせられるようになっていた。特にドアの右側に掲げられた大きな絵には注意が引きつけられていた。もっとよく見てみようと思って、彼はグッと身を乗り出した。裁判官の法服に身を包んだ男が描かれていた。玉座のように背の高い椅子に男は座っており、その椅子の金メッキは絵から何倍も飛び出してきそうであった。普通の絵とは違うと思わせたのは、この裁判官が、静寂と威厳をもって座るといふより、まるで何か決定的な一言を口に出す、あるいはそれどころか判決を言い渡そうとして、激しい、ほとんど怒りの急展開を見せながら、次の瞬間には跳び上がろうとするように、左腕はほとんど背凭れと肘かけに押しつけて、かわりに右腕は完全に自由にして、手だけで肘かけを握り締めているという点にあった。画面の上方では、階段の上側の黄色の絨毯で被われた数段分までしか分からなかったが、被告人はその階段の下側にいるように思われた。「たぶん、ぼくの裁判官だね。」と、Kは言う、その絵を指で差した。「この人なら知ってるわ。」と、レーニは言う、同じようにその絵を仰ぎ見た。「ここにも頻繁に来るの。この絵は若い頃のものだわ。でも、この人がこの絵に似ていただなんて、絶対にありえない。なぜって、本当にチビなんですもの。でも、ここの皆みたいに常識外れの見栄っ張りだから、絵の中ではあんな大きさにまで引き伸ばされている。でも、あたしも同じくらい見栄っ張りだから、あなたに気に入られてないことがとっても不満なの。」この最後の発言には、レーニを抱き、自分の方に引き寄せることでしか、彼は対応しなかった。彼女は彼の肩に静かに頭を凭せかけていた。その後、ついでに彼はこう聞いた。「彼はどういう地位の人？」「予審判事よ。」と、彼女は言う、自分を抱き締めているKの手を掴んで、その指を弄んだ。「何だ、また予審判事か。」と、ガッカリしたKが言った。「高位の役人は前面に出てこない。なのに、この男は玉座に座っている。」「全部、嘘で塗り固められているのよ。」と、Kの手の上に顔を近づけながら、レーニが言った。「本当は彼は台所の椅子に座って、その椅子の上には古い毛布が折り畳まれているの。ところで、あなたはずっと訴訟のことを考えてなきゃならないの？」と、彼女がゆっくりとそう付言した。「いや、全然、そうじゃない。」と、Kが言った。「たぶんそれどころか、ぼくは考えなさ過ぎなくらいなんだ。」

「あなたが犯しているミスはそこじゃないわ。」と、レーニが言った。「あなたは強情過ぎるのよ、あたしはそう聞いている。」「誰がそう言っているって?」と、Kは聞いた。胸のところに彼女の身体を感じながら、しっかりと束ねられた、豊かな、褐色の彼女の髪の毛を、上の方から覗き見ていた。「それを言ったら、喋り過ぎてことになっちゃう。」と、レーニが言った。「名前については聞かないで。でも、あなたは、これ以上、ミスをするのは止めて、あんまり強情になるのもよしてちょうだい。あの裁判所には、本当に誰も逆らえないわ。白状させられるわよ。まあ、次の機会にでも、白状してしまいなさい。そうやって、初めて抜け出せるんだから(そうやって、初めてね)。でも、どうしても、それを他人の助けなしに、ひとりでやるのは無理よ。かといって、この助けについて、不安になることもないの。なぜって、あたしがやってあげられるんだから。」「君はよく分かっているんだね、この裁判所や、ここで求められているペテンについて。」Kはそう言うと、彼女があんまり強く身体を押しつけてくるので、膝の上に載せることにした。「そうしてもらえるといいわ。」と、彼女は言うと、スカートの襷を整えたり、ブラウスの皺を伸ばしたりしながら、膝の上で背筋をシャンとさせた。それから、両手を彼の首に回してぶら下がると、後ろの方に寝そべりながら、彼の方をマジマジと見た。「で、ぼくが白状しないと、助けられないっていうんだね?」と、試しにKは聞いてみた。俺はよく女の協力者を引き当てるなど、ほとんど狐につままれたような気もちで、彼は考えていた。まず、ピュルシュトゥナー嬢、次に裁判所の廷吏の女房、最後はこの小柄な看護婦(この女は、俺に不可解な欲望を抱いているようだ)。ここが唯一の正しい場所だというように、俺の膝の上で腰を下ろしている様子と云ったらどうだ! 「そうよ。」と、レーニは答えると、ゆっくりと首を振った。「そうでなければ、助けられないわ。でも、本当は、あなたはあたしの助けなんか望んじゃいない。そんなのはどうでもいいのよ。わがままで、人の言うことになんて、全然、耳を貸さないんだから。」「恋人はいるの?」と、少しの間を置いてから、彼女が聞いてきた。「いない。」と、Kは言った。「嘘、隠さないでよ。」と、彼女は言った。「そうかい、実はね。」と、Kは言った。「ちょっと、どう思うだろうか、ぼくは、その女を振っておきながら、まだその写真を手放せずにいるんだ。」どうしてもと言われて、エルザの写真を見せた。彼の膝の上で丸くなりながら、彼女は写真をシゲシゲと眺めていた。それはモノクロ写真であった。エルザがワイン酒場で好んで踊る旋回をした直後の様子が写し撮られていた。彼女の周りで、クルッと開いた襷の形を残しながら、まだスカートが宙にふわりと浮いていた。彼女は、がっしりした腰に両手を当てて、首筋をピンと反らしながら、笑顔で横を向いていた。彼女が微笑みを送っている相手は、写真からは判別できなかった。「コルセットで締めているわね。」と、レーニは言うと、彼女の言い分では、そのことが表われているという箇所を指で差し示した。「好きになれないわ。不器用で、粗野な女よ。たぶん、あなたには優しくして、気立てもいいんでしょう。この写真を見れば、それが分かるわ。こんなにも大柄で、逞しい女は、優しくして、気立てがいいくらいしか、取り柄がないんだもの。彼女は、あなたのために犠牲になれるのかしら?」「無理だね。」と、Kは言った。「彼女は優しくもないし、愛想もない。ましてや、犠牲になるだなんてとんでもない。実際、これまでも、彼女にそんなことは求めてこなかった。そう、ぼくは、君みたいにこの写真を眺めたことがなかったんだ。」「とすると、あなたにとって、彼女はどうしてもよいものなのかしら。」

と、レーニが言った。「つまり、恋人じゃないのかしら。」「それは違う。」と、Kは言った。「自分の言葉は撤回しないよ。」「今はそういうことにしておきましょう。」と、レーニが言った。「だけど、彼女に去られて、それが別の人（例えば、あたし）にかわったとしても、さほどの寂しさは感じないんじゃないの。」「確かに、」と、笑いながら、Kが言った。「そうかもしれない。でも、君とは違って、とてもいいところもあるんだ。つまり、彼女は訴訟のことが全く分からず、分かったとしても、何とも思わない、譲歩も勧めてこないってところさ。」「そんなのは、いいところじゃないわ。」と、レーニが言った。「他にいいところがないのなら、あたしは勇気を失わずに済む。他に肉体的な欠陥はないの?」「肉体的な欠陥?」と、Kは聞いた。「そう。」と、レーニが言った。「なぜって、あたしには肉体的な欠陥があるの。見て。」彼女は右手の中指と薬指の間をバツと広げた。二本の指の間には、短い指のほとんど第一関節のところまで、何かの被膜が被っていた。暗かったので、何が示されたのかがすぐには分からず、それゆえ、触って確かめられるように、彼女は彼の手をそこに導いてやった。「何という自然の紛れ。」と、Kは言う、手全体をじっくり眺めてから、また言った。「何という可愛らしい指!」すっかり驚いたKが、二本の指を何度も開けたり閉めたりして、最後はそこにキスまでして、サッと手放してやる様子を、ある種の誇らしい気もちで、レーニは見ていた。「アラッ!」と、それから、すぐに彼女は叫び声を上げた。「あなた、あたしにキスをしたわね!」口を大きく開けたまま、彼女が膝を使って、大急ぎで彼の太股の上を駆け登ってきた。Kは、ほとんど正気を失ないかけながら、彼女の顔を仰ぎ見た。今、彼女との距離がこれだけ縮まってみると、胡椒のような刺激的な苦い香りが立ち昇ってくるのであった。彼女は彼の頭をグッと引き寄せると、彼の上に覆い被さってきて、彼の首を噛み、キスをしてきた。髪の毛の奥の方まで噛んできた。「あなた、あたしに乗り換えたのよ!」時折、大きな声を出した。「いいわね、今、乗り換えたのよ!」その時、彼女は膝を滑らせると、短い叫び声を上げながら、ほとんど絨毯の上に落ちそうになった。それを何とか支えようと、Kが両腕で抱えてやったので、彼は彼女の方に引っ張り込まれてしまった。「これからは、あなたはあたしのものよ。」と、彼女は言った。「これがここの親鍵だわ、好きにやってくればいい。」それが最後の言葉になった。そして、まだ立ち去りかけの彼の背中に、意味のないキスがひとつ投げられた。建物の門を出ると、柔らかな雨が降っていた。おそらく、まだ窓のところにいるレーニの姿が見られると思って、彼は道の真ん中まで出ようとした。そこに、建物の前にずっと停まっていた一台の車（ボオツとして、全く気づけていなかった）から、叔父がパツと飛び出してきた。腕を掴むと、まるでそこに釘づけにしようというように、建物のドアにグッと彼を押しつけた。「貴様っ、」と、彼は大きな声を出した。「一体、何ということをしてくれた! うまくいっていた自分の事件をメチャクチャにして、その上、どうやら弁護士の情婦らしい恥知らずのチビの阿魔と出払ってからは、もう何時間も帰ってこない。言い訳するのでもなく、何を隠すのでもなく、実にアツケラカンとあいつのところにはシケ込んで、さっぱり戻ってこない。その間、わしら、つまり、お前のために骨を折っている叔父、お前のために手を差し伸べてくれそうな弁護士、何よりも、現時点でお前の事件をまさに取り仕切っておられる御仁である事務局長は、ずっと膝を突きあわせて、座りっ放しだった。どうやってお前を助けられるか、話しあおうとしていた。そして、わしは弁護士を、弁護士は事務局長

を、手厚くもてなさなければならなかった。何にしても、少なくともわしを下支えすべき十分な理由は、お前の側にもあった。だが、お前は帰ってこなかった。最後には、そのことが隠し切れなくなった。ただ、そこは礼儀を弁えた、百戦錬磨のお歴々だ。彼らは、そんなことはおくびにも出さず、わしにも労いの言葉をかけてくれたりしていたが、最後には気もちを抑えられず、しかし、事件については話せないで、黙り込んでしまった。数分間、われわれはそこに座って、お前が戻ってくるのではと、最後まで聞き耳を立てていたが、無益だった。当初の予定よりはるかに長居をしてしまった事務局長が、ついに立ち上がると、暇乞いをして、あなたの手助けができないのが残念でなりませんと、心からの言葉を口にした。それから、まだしばらくの間、信じられない親切心でドアの横のところに立っておられたが、やがて出ていった。もちろん、出ていってもらった方がよかった。息が詰まりそうだったのだから。さらに、病気の身である弁護士には、全てがもっとよくない方向に進んだ。わしが失礼しますと言った時、善良な人間であるあの弁護士は、一言も口にする事ができなかった。おそらく、お前はあいつの完全な破滅に向けて、背中を一押しした。そう、お前に必要なひとりの人間の死期を早めたのだ。それから、叔父であるこのわしも、この通り、雨の中——ちょっと触ってみろ、完全にずぶ濡れだ——、何時間も待たされて、心痛でヘトヘトにさせられてしまった。



## 第七章

## 第七章 弁護士、工場主、画家

冬の日の朝――外では、薄明の光の中、雪が舞っていた――、早朝にも関わらず、すでにすっかり疲れていたKは、事務所で座っていた。少なくとも部下の職員たちから自分を守ろうという目論見で、自分はある大きな仕事に取りかかっており、誰も中に入れてはいけないからと、使用人たちには言ってあった。しかし、仕事に取りかかるのでもなく、椅子に座った状態で身体の向きを変えると、机の上の数個の品物の位置をゆっくりとずらしながら、知らないうち、机の天板の上で両腕をだらりと広げたまま、突っ伏してそこに座っていた。

訴訟のことが頭から離れなかった。弁明を仕上げて、裁判所に提出するというのがよくないのだろうか、もう何度も自分に問いかけていた。その弁明書では、彼は短い経歴書を作成して、何かしら重要と思われる出来事が出てくる度、どういう理由で自分はそういう処理をしたのか、その処理の仕方は今の判断からして否定されるべきなのか、肯定されるべきなのか、その否定や肯定はどういう根拠からなされるべきなのかを、明らかにしようとしていた。とはいえ、こういう弁明書が、そうでなくても欠点がないとはいえない弁護士たちの手による単なる弁明よりは効果があるのは、疑いようがなかった。実際、弁護士が何をするつもりなのか、Kにはサッパリ分からなかった。何にしても、それは大したことはなかった。なぜなら、すでに一ヶ月もの間、弁護士からの呼び出しは何もなく、これまでの話しあいでも、一度としてこの男が本当に役立ちそうだという印象をもてたことはなかったのであるから。とにかく、ほとんど一度も、男は質問をしてこなかった。しかも、そこには質問すべきことが山のようにあったのである。質問こそが重要であった。Kは、ここで必要な質問の全てが列挙できるような気さえしていた。それにも関わらず、弁護士は質問もせず、自分のことを話したり、黙り込んで、彼と差し向かいに座っては、ひょっとして耳が遠いのか、少し事務机の上に屈み込みながら、自分の髭から一掴みの房を引っ張り出してきて、絨毯の方、おそらくはKがレーニと寝転がっていたあの地点の方に目をやったりするのであった。それから、時々、まるで子どもにするような二、三の意味のない説教もしてきた。役立たずの、うんざりするようなお喋り。いざ最後の支払いの段になっても、このお喋りにはビター文払うものかと、Kは思っていた。満足できるだけ彼を貶めたと思うと、決まってまた少し勇気づけようともし始めて、弁護士はこんなことを言った。わしは、同じような訴訟（ひょっとして、実際は、そこまで困難ではなかったのかもしれないが、一見、はるかに絶望的な訴訟）に、全面的（あるいは、部分的）にもう何度も勝ってきた。それらの訴訟の全記録

は、ここの引き出しの中——その際、彼は机の引き出しのひとつをコツコツと叩いてみせた——に入っているが、職務上の秘密があり、残念ながら、お見せすることはできない。とはいえ、今のところは、これまでのあらゆる訴訟から来る豊富な経験が、もちろん、Kにとっては助けになるであろう。当然、仕事にはすぐに着手するつもりでいる。最初の陳情書はもうできたも同然だ。この書類は極めて重要なものになるだろう。なぜなら、弁明からくる第一印象は、しばしば手続きの方向性を決めてしまうのだから。もっとも、残念ながら、時として、最初の陳情書が裁判所では読まれずじまいになるということも、見過ごされるべきではない。彼らは、その書類をポイッと既読箱に投げ込むと、差し当ってはどんな書類より被告人の審問や観察の方が大切なのだからと言うのである。そこからは、請願人がいくら食い下がっても、彼らは、決定前にさえなれば、全材料（もちろん、関連する全材料）が集まった段階で、最初の陳情書も含めた全ての書類にもう一度目を通すのだからと、付言するのである。しかし、残念ながら、そのことも大抵は正しくない。通常、最初の陳情書は、置き去りにされるか、完全に消えてなくなってしまう。最後まで残ったとしても（まあ、噂話だが）、読まれるまでには決して至らない。こういうこと全ては、残念ではあるが、仕方のないことでもある。とにかく、分かって欲しいのは、この訴訟手続きは公開されておらず、裁判所が必要と認めた場合にだけ公開されるので、法律が公開を定めているのではないという点である。そういうことで、裁判所の書類、とりわけ起訴状は、被告人やその弁護人が閲覧できる形にはなっていない。だから、最初の陳情書がどこに宛てて書かれるべきかも、一般論としては（少なくとも、正確には）、誰にも分かっていない。つまり、実際のところ、案件に対する重要な論述が弁明書の中に含まれているのかは、全く偶然の産物に過ぎないのだ。本当に的確で、立証力に富んだ陳情書は、被告人が審問される中、幾つかの訴因や論拠がハッキリ浮かび上がるか、あるいはそれが言い当てられるようになって、初めて書き上げられる。そういう関係なので、弁護人というものは、当然、極めて不利で厳しい状況に置かれることになる。だが、そのことも目論見のうちなのだ。なぜなら、弁護人というものは、元々、法的には認められておらず、是認されているだけの存在なのだから。該当する法律の箇所からは、少なくとも、是認という意味が読み取れるのかすら、論争があるくらいである。つまり、厳密に言うのなら、裁判所に認定された弁護士というものはない。実際、裁判所に弁護士として出廷しているのは、全員、もぐりの弁護士なのだ。当然、このことは、その立場全体に屈辱的な影響を与えている。いつか近いうち、裁判所事務局に出向くことがあったら、そのことを一度、確かめるため、実際、弁護士控え室を覗いてみるとよい。そこに屯している連中におそらくあなたは驚かれるであろう。彼らに割り振られた、天井の低い、狭い部屋からしてすでに、裁判所がこれらの人々に抱いている軽侮の念が表わされている。その部屋には、小さな天窗を通してしか光が入らないが、その窓は恐ろしく高いところにあるので、外を見たいと思ったら（ちなみに、窓を開けた先では、スレスレのところにある煙突からの煙が鼻をついて、顔が真っ黒になってしまうのだが）、まず自分を背中に載せてくれる同業者を探さなければならない。この部屋の床には——この状況にもうひとつだけ例を挙げてみると——、これでもう一年以上も前から、ポツカリと穴がひとつ空いている。人が落ちるほどではないが、片足がスッポリ入るだけの大きさは十分にある。そうして、ひとりがそこに嵌まると、その弁護士控え

室は屋根裏部屋の二階にあるので、片足が屋根裏部屋の一階にぶら下がるのだが、何とそれが、訴訟当事者たちが待っている廊下なのである。誰かがそういう状態を不名誉と呼んだとしても、全く言い過ぎではない。それについて、司法組織に苦情を申し立てたところで、ほとんど何の反応も返ってこない。幾らかの費用をかけて、弁護士がその部屋に何かの手を加えることは固く禁じられている。とはいえ、弁護士に対するこの種の取り扱いについても、それなりの理由はある。彼らは、できるだけ弁護人は締め出されるべきで、全ては被告人自身の手で行なわれるべきと思っているのだ。基本的に悪い考え方ではない。しかし、そのことで、この裁判所では被告人のための弁護士は不要と言い切るほどの的外れも、またないのである。それどころか、他に類を見ないほど、この裁判所では弁護士が必要とされている。というのも、ここでの訴訟手続きは、概して一般人だけでなく、被告人にも秘密にされているのである。むろん、やれる限りの秘密であるが、かなりの範囲でやれるのである。というのも、被告人にも裁判所の文書の閲覧はできないので、審問からその根拠となる文書を推定するのは相当に困難な話になっており、とりわけ、結局は偏見にまみれて、気を散らすあらゆる心配事に囲まれている被告人たちにとっては、そうなのである。そして、そこにこそ、弁護人が介入する余地が生じている。概して、弁護人というものは、審問の場には顔を出すことができない。そのため、審問が終わるとすぐ、できれば審理室のドアを出たくらいのところ、審問について被告人に探りを入れて、しばしばすでにかなり混乱している報告から、弁護に使えるなものを引っ張り出さねばならない。とはいえ、最も重要なのはそういうことでもない。なぜなら、このやり方でも、そう沢山のことを聞き出せる訳ではないのだから。もちろん何でもそうだが、こういう場合でも、能力のある人間はそうではない人間より沢山のことを聞き出してくる。しかし、最も大切なことは、依然として弁護士の個人的な人間関係の中にこそあり、そこにこそ弁護人の腕の見せどころがあるのである。さて、ここの最下層の組織が全く不完全なもので、義務を忘れがちな、買収されやすい職員たちからなっており、そのため、ある意味、裁判所がいくら強く締めつけても、そこには綻びが生じてくるという点は、Kもすでに十分に体験済みであろう。さて、過半数の弁護士たちは、この綻びに向かって殺到し、買収や聴取を行なうのだが、少なくとも昔は、それどころか、書類の盗難事件というものすら発生していた。そのような方法でも、少しの期間なら、被告人が、二、三の驚くほど有利な結果を手に入れられるのは否定しない。これらの小物の弁護士たちは、あちらこちらでこの手の話を言いふらしては、新規の顧客たちの心を揺すぶるのであるが、訴訟のさらなる進展という意味では、全く無益であり、緑なことにならない。つまり、本当に価値があるのは、誠実で個人的な人間関係だけなのである。しかも、高位の役人との人間関係である（むろん、下級の中の高位の役人という意味だ）。そういう手段をもってして初めて、最初は気づかないくらいだが、徐々にはっきりした形で、訴訟の進展に影響を与えられるようになってくる。むろん、そんなことができるのは、限られた弁護士だけであるが。そして、そういう意味からも、Kの選択は極めて有利なものだったといえるのである。おそらく、このフルト博士と匹敵する関係が築けているのは、数えるほどしかない。むろん、そういう弁護士は、弁護士控え室での集まりなど歯牙にもかけないし、彼らと交流することもしない。そして、だからこそ、裁判所の役人たちとの繋がりが密になってくるのである。裁判所に出

向き、予審判事の控え室で出待ちをし、気分次第で変わる、ほとんど見かけでしかない結果をえられる（あるいは、それもえられない）、そういうことをずっとやっていなければならない訳ではない。そう、Kもその目を見たように、役人たち、中でも本当に高位の役人たちが、自らここに足を運んで、明白な、あるいは、少なくとも容易に解釈がつく情報を喜んで落として、訴訟の次の展開についての相談もしてくれる。そう、それどころか、個々のケースでは、大人しくこちらの説得を聞いてくれたり、突拍子もない意見を喜んで取り上げてくれたりもする。まあ、そうはいつでも、彼らの最新の見解を信じ過ぎるのもよくない。どんなにはっきりと、あなたの弁明に有利な、新たな意見を口にしていたとしても、ひょっとして、あなたがそのまま事務所に直行してみると、翌日には全く別の内容を含んだ、彼らがその考えからは完全に頭を切り替えなければならないと言っていた最初の意見よりおそらく被告人にとってはるかに厳しい、裁判所としての結論をもって来るかもしれないのである。もちろん、そうした事態は防げない。なぜなら、二人で話したことは二人で話したことに過ぎず、いかなる公的な結果も伴わないのであるから。それとは違って、弁護人が彼らの鼻根になる努力をしなかったというので、そういう事態に陥ってしまうということもある。他方、彼らが何か人間愛や友愛の情のようなものから、弁護人（もちろん、専門知識をもった弁護人だけ）と連絡を取りあっているのではないのは、むしろ、その通りである。それどころか、ある意味、彼らは弁護人に頼らざるをえない。そこには、そもそもの設立時から秘密裁判の規定をもっている司法組織について回る、他ならぬ欠点が現われている。つまり、役人たちには、住民たちとの接点というものが無いのだ。だから、ありふれた並みの訴訟についての準備は万端で、そういう訴訟は、ほとんど自動的に進んでいくので、彼らは、時々、背中を押していればそれでよい。しかし、単純極まりない事件や、とりわけ難事件に対しては、しばしば彼らは手も足も出せない。昼も夜も、彼らはずっと法律の中に閉じ込められていて、人間関係に対する正しい感覚がもてずにいて、こういう事件には恐ろしく手こずる。そうして、助言を求めては、弁護士の門を叩くのであるが、その背後には、そうでもなければ秘密であるはずの書類を廷吏が捧げもっている。そんなことは全く想像できないであろうが、この窓のところでも、大勢、集まった彼らが全く慰めようのない様子で街路を見下ろして、その一方で、彼らによりよい助言を与えようと、弁護士が机のところで書類を読み込んでいる。ちなみに、まさにそういう機会には、彼らが仕事のことをどれくらい恐ろしく真剣に考えているのか、その性格からして、乗り越えられないこの障害について、どんなに深い絶望に陥っているのかを目にすることができる。彼らの立場は、そうでなくてもやはり簡単なものではない。彼らを非難するべきでもないし、彼らの立場を軽く見るべきでもない。裁判所における位階と昇進は無限であり、熟練した人間ですら見極めることはできない。さらに、法廷で行なわれる訴訟手続きは、通常、下級の役人には秘密にされており、自分が取り扱った事件のその先の顛末を、将来に渡って完璧に追求することは、ほとんどの場合、全く不可能である。つまり、裁判事件というものは、しばしばどこから来たのかも分からぬまま、視界に現われては、どこに行くのかも分からぬまま、消えていく。要するに、それぞれの訴訟段階の研究、最終的な判決、その根拠からえられる教訓は、これらの役人の手をすり抜けていくのである。彼らは、法律によって局限された訴訟のある一部分にしか関わらず、それより先の彼らの本来の仕

事の結果については、慣例に倣って、ほぼ訴訟の終了まで被告人と関わることができる弁護士たちより、さらに深い理解にまで至ることはほとんどない。つまり、こちらの方面においてすら、彼らは弁護士から沢山の有益な話を聞けるのである。こういう一切のことに注意を払っていてもなお、しばしば訴訟当事者たち——彼らは皆、そういう目にあっている——に対して侮蔑的なやり方で示される役人たちの怒りっぽさを、Kは不思議に思うかもしれない。役人たちは、皆、怒っている。平静さを保っているように見える時でもそうだ。もちろん、特に小物の弁護士たちが、しばしばそのことに悩まされている。例えば、次のような話が伝えられているが、極めてありそうなことだ。ある老役人（善良で、もの静かな男）が、難しい裁判事件を抱えていた。その事件は、とりわけその弁護士が出した陳情書によって引っ掻き回されて、一昼夜、ぶっ通しで、彼は研究を続けていた——本当に、まれに見るくらい、この役人は勤勉なのだ。——とうとう夜明けを迎えて、二十四時間にも及ぶ、おそらくさほど実りのなかった仕事の後で、彼は玄関のドアのところまで出ると、そこに入ろうと待ち構えていた弁護士たちの全員を階段の下に突き飛ばした。弁護士たちは、下の踊り場のところに集まると、さてどうしたものかと評定をした。一方、彼らには、本来、部屋に招かれるべき請求権はなく、何かを役人たちに正式に企てることは、ほとんど不可能であった。だから、すでに述べたように、役人たちを怒らせぬように用心するくらいが関の山だったのである。そして、他方、裁判所で過ごせない全ての日々は、彼らにとっては無益であって、つまり、中に入れるかどうかは死活問題であった。結局、その役人を疲れさせようというので、全員の意見は一致を見た。何度も繰り返して、次から次へと弁護士たちが送り込まれた。彼らは階段を駆け上がると、できる限りの受動的な抵抗の後で、ドンと投げ落とされて、踊り場で同僚たちに受け止められた。一時間近くそんなことが続いた。徹夜で疲労困憊していた老人は、全てが嫌になってきて、事務所の中に戻ってしまった。階下の人たちは、最初、そのことを全く信じられず、ようやく弁護士をひとりやって、本当にそこには誰もいないのか、ドアの奥の様子を探りにいかせた。それから、ようやく中に踏み込んだのだが、彼らはおそらく一言も愚痴を言うことがなかった。というのも、弁護士にとって——一番小物の弁護士ですら、少なくとも部分的にはその関係性を理解している——、裁判所に何かの改善を上申、貫徹するというのは、思いも寄らないことなのである。逆に——、これも非常に特徴的なことではあるが——、ほとんど全ての被告人たちは、ひどくお人好しの連中ですら、訴訟に足を突っ込むとすぐ、もう改善提案を考えようとしてしまう。そして、しばしば、そんなことをしていなければ、もっとましなことに使えたはずの時間と労力が消えていく。唯一、正しいのは、目の前の関係と折りあいをつけることだけなのに。何かの細則の改善が可能であるにしても——そんなことは、馬鹿げた思い込みだが——、この先にあるかもしれない事件に備えた何かがいられるくらいが関の山なのだ。むしろ、常に復讐心に富んだ役人たちの特別の注意を引くことで、計り知れないダメージを受けてしまう。ただただ、注意を引かぬようにすること！ 意に反した方向に進んでいても、涼しい顔をしていること！ そして、この巨大な裁判組織というものが、バランスを保って、ほとんど永遠にそのままの形であり続けながら、誰かがその場で独力で何らかの変化を与えられたとしても、その人は足元の地面を失なって、墜落することすらあるのに、一方の巨大有機体は、そういう小さな妨害があっても、い

とも簡単に今度は別の場所で――というのも、全ては連続しているので――、もっと閉鎖的で、もっと警戒心に満ちた、もっと力強い、もっと邪悪などまでは言わないにしても（むしろ、そっちの方がありそうだが）、代替物を生み出しては、何もなかったようにそのままそこにあり続ける、そういうことを理解せねばなるまい。ということで、結局、皆は弁護士の邪魔をするのでなく、仕事を彼らに委ねるようになるのである。非難などしたところで、実際、何かの役に立つことは決してない。とりわけ、その理由を完璧な意味で納得させられないのであれば。ただ、そうはいっても、事務局長に対するKの態度がこの事件にどれだけの影響を与えたのかは、言うておく必要がある。この影響力をもった男は、Kのために何かをしてくれそうな人間のリストからは、もうほとんど外れかけている。この訴訟についてのほんのちょっとした言及ですら、露骨な意図をもって聞き流されているのである。多くの点で、役人たちには本当に子どものようなところがある。彼らはしばしば他意のない言動に臍を曲げて（ただし、残念ながら、Kの態度には他意がなかったとはいえない）、親友と口を利かなくなったり、挨拶されてもソッポを向いたり、あらゆる方法を使って抵抗を試みたりする。ところが、その後、先行きが見えないという理由だけでヤケクソに繰り出したちょっとした冗談が、さして根拠もない突然の爆笑を誘って、コロッと機嫌が直ってしまうということもある。彼らとうまくやっていくのは、難しいと同時にたやすい。原理原則などないに等しい。ここで多少の成果を出せるくらい物事を理解しようとするのなら、そんなことをしているより、ただ普通の市民生活を送っている方がましということには、しばしば驚かされる。とはいえ、気の塞ぐ時というのは誰にでもある話で、そんな時には、自分は最低の成果すら出せないのだと思いつめて、最初からよい結果が出ると決まった訴訟だけがよい結果を生んでいるので、それは自分の助けなしでもそうだったのだと思えてきてしまう。その一方で、それ以外の全ての訴訟は、あらゆる伴走、あらゆる骨折り、あらゆる小さなうわべに過ぎなかった成果にも関わらず（そのことをあんなに喜んでいたので）、敗北に終わってってしまう。そうすると、とにかく、敗北より確かなものは何もないと思えてきて、ある種の疑念から、訴訟をうまく運ぼうとする営みは、むしろ自分の助けが元で脱線したということすらあえて否定しようとは思わなくなってしまう。確かに、これもひとつの自分の信じ方ではある。こうなった時に取りえる唯一の信じ方でもあるが。こういう発作――それは、実際のところ、発作であって、それ以外の何物でもない――に、弁護士は晒されている。本当に十分に満足のいく形で進んでいた訴訟が、突然、自分の手から奪われていく時に、とりわけ、こういう発作に襲われる。それは弁護士に降りかかる最も不愉快な出来事である。ただ、被告人が訴訟を弁護士から奪えるというのでは決してない。そんなことは絶対にありえない。一度、弁護士を選んだら、何があっても、そこから被告人が離れることは許されないのだ。一体、一度は助けを求めておきながら、そこからひとりでやっていけるなどということがあろうか？ そんなことは断じてない。しかし、もう弁護士がついていけない方面に訴訟が向きを変えるというのは、よくあることである。訴訟や被告人やあらゆるものが、弁護士からいとも簡単に取り上げられてしまう。そうやってしまえば、役人たちとの最高の交わりすら、もう何の役にも立たない。なぜなら、彼らにも何も分からないのであるから。訴訟はまさに、出入り禁止の法廷が訴訟を仕切り、被告人は弁護士に接近すらできない、手の施しようのない領域にまで足

を踏み入れたのである。こうなったら、ある日、帰宅してみると、これまで事件への溢れんばかりの希望をもちながら、全身全霊で作った沢山の陳情書が、机の上に置かれているのに気がつくということにもなる（新しい訴訟段階へのモチベーションが許されず、それが差し戻されたので）。それらは、価値のない紙切れになってしまった。ただ、それでもまだ敗訴で決まったというのではない。全く違う。少なくとも、そう仮定するだけの決定的な理由がない。訴訟について、それ以上、誰にも分からなくなったというだけの話である（それ以上は、経験がないので）。ただ幸いなことに、そこまでになる事件は例外的である。Kの訴訟も、その手の事件に当て嵌まるのかもしれないが、今のところ、そういう段階からは遠く隔たったところにある。そこにはまだ、弁護士が手腕を揮う機会が数多くあり、これからその機会が使い尽くされるのは、確信してもらっていい。先にも言ったように、この陳情書は申請されてはいないが、それはさほど急を要するものではない。これから始まる有力な役人たちとの話しあいの方がよっぽど大事なくらいである。それについてはもう手が打ってあり、いずれ明らかになるが、色々な成果が上がってくるはずである。当面、細かい打ち明け話は、それによってKがよくない影響だけを受けて、喜びの余り舞い上がるか、極度の不安に陥るかのどちらかになるから、しない方がよかろう。ただし、何人かは非常に好意的な言葉をくれて、こちらを手助けする様子を見せていたことだけは言うておくが、その一方、余り好意的な言葉をくれなかった人もいるにはいた。しかし、助けを拒絶されたのでは全くない。だから、全体としての成果は極めて上々であった。ただし、そこから特別な結論を引き出すべきではない。なぜなら、全ての事前準備は似たり寄ったりの状態で始まって、次の展開があって本当に初めて、その事前準備の真価が見えてくるのだから。とにかく、何か失なわれたというのでは決してない。あの事務局長さえ味方につけられれば——その目的のために、もう色々なことの布石は打ってある——、それなら、まだ全ては——外科医がよく言うところの——綺麗な傷であって、安心して結果を待ってられるのだ。

そんな話、似たような話を、次から次へと弁護士は語った。訪ねる度、いつもそうなのであった。そこでは、必ず進展があったとされながら、進展の中身は決して明らかにされなかった。常に最初の陳情書に取りかかったとされながら、それは決して完成には至らなかった。そして、大抵、次の訪問の際には、その完成に至らなかったことが、恐ろしいほどの幸運であったとされた。なぜなら、前はそれを予測できなかったが、あれは書類を渡すには最悪のタイミングだったからというのである。時折、Kは、そういう話に本当にうんざりしてきて、色々、難しいのは分かりますが、余りにも進みが遅いのではと試みてみた。しかし、ちっとも遅くなんかない、もっとも、もっと早く弁護士に相談していれば、ずっと先に進んでいたのだろうかと、言い返されるのであった。残念ながら、その機会をお前は逃した。この怠慢はやはりまださらなる不利益をもたらす。それは時間的な不利益に留まらない。

この訪問における唯一の有益な息抜き、それがレーニであった。心えたもので、彼女はいつもKがいる時にお茶を淹れられるよう、うまく都合をつけてくるのであった。そんな時、彼女は弁護士がカップの方に身を屈めてはお茶を注ぎ、むさぼるようにして飲み干すのを、一見、Kの後ろに立って、眺めるだけのようであった。しかし、秘かに自分の手をKに委ねるといふこともやってきた。完璧な沈黙が支配していた。弁護士はお茶を

飲み、Kはレーニの手に触り、レーニは、時折、Kの髪を優しく撫でてやっていた。「お前、まだいたのか？」と、お茶を済ませると、弁護士が聞いた。「お茶の道具を片づけようと思って。」と、レーニは言う、最後にもう一度、グッとKの手を握ってきた。口を拭うやいなや、心機一転、弁護士は再びKの説教に取りかかった。彼が辿り着こうとしていたのは、慰めだったのか、絶望だったのか？ それはKには分からなかったが、自分の弁明が油断ならぬ人物の手の中にあるのは、ほぼ間違いがないように思われたのであった。彼がなるべく前に出たがっているのも透けて見えたが、Kの訴訟のように、彼が言うところの大きな訴訟を、おそらく一度も手がけたことがないのも透けて見えた。しかし、弁護士が言ったことは、あらゆる点で正しかったのかもしれない。それにしても、彼が際限なくもち出してくる役人との個人的な関係には、依然として、胡散臭さがつきまとっていたが。一体、彼らがKだけのために利用され尽くすことがあろうか？

ちなみに、今、彼らと言ったのは、下位の役人たち、つまり、訴訟のある種の逆転が出世におそらく重要な意味をもっている、非常に従属的な地位にある役人のことだと言うのを、弁護士は忘れなかったが。ひょっとして、彼らは、当然、被告人にはさらに不利に働く逆転を手に入れるために、弁護士を使っていたのであろうか？ おそらく全部の訴訟でそんなことをするのは無理であろう。確かに、そこまではなさそうであった。おそらく訴訟が進む中で、弁護士の動きに便宜を与えられる訴訟もあるということなのであろう。なぜなら、弁護士の名声を無傷のままにしておくことは、彼らにとっても極めて重要なことであったはずだから。しかし、もし本当にそうだったとしても、弁護士が言うところの極めて困難な訴訟、だからこそ極めて重要な訴訟、始まるやいなや、裁判所で一大センセーションを巻き起こしたというKの訴訟に、一体、どうやって介入するるのであろう？ 彼らがそれを仕かけてきているのは、疑問の余地がなかった。その徴候は、訴訟が始まってからすでに数ヶ月が経つのに、まだ最初の陳情書も出されず、弁護士の申し立てによれば、全てが開始時の状態に留まっているという点からも推察することができた。そのことは、むろん、被告人を眠り込ませて、孤立無援の状態にしておいて、それから急に、判決文、あるいは少なくとも、被告人には不利な方向で終わった予審がさらに上級の機関に引き渡されたという布告で責め立てるのには、極めて好都合であった。

K自身の介入が、どうしても必要であった。とりわけ、あらゆることが無意味に頭の中を駆け抜けていくこの冬の朝のように、大きな疲労を抱えている状態では、こういう確信に至るのも仕様がなかった。かつては訴訟を馬鹿にしていたが、それでは何の役にも立たなかった。世界が自分ひとりであったのなら、訴訟を軽く見ることもできたであろうが。ただ、それならそもそも訴訟にならないというのも、その通りであった。さらに、すでに叔父によって弁護士に引きあわされた今となつては、家族への配慮も考えの中に入ってきていた。もはや、彼の立ち位置からでは、訴訟の進行から完全に自立できているとは言えなかった。軽率にも、彼自身、ある種の説明できない満足を感じながら、自分の訴訟について知人に漏らすということまでやってしまった。どういう手を使ったのか、彼の訴訟の話聞いたという人すら現れていた。ビュルシュトゥナー嬢との関係も、訴訟に応じて揺らいでいるようであった――つまり、選択肢としては、訴訟を受け入れるか、拒絶するかであった。二つの間で身を守らなければならなかった。彼は疲れ

ていた。なぜなら、それは容易ならぬ判断だったのであるから。

もっとも、この過度の心配に特段の根拠はなかった。自分が銀行で相当に短い期間のうちに高い地位まで出世して、皆に認められながら、その地位を保っているのを彼は分かっていた。今はただ、そのことを可能にした能力を少し訴訟の方に向けさえすればそれでよいのだ。それがよい結果に終わるのは間違いなかった。とにかく何かを達成するのであれば、ありえる罪に対するあらゆる思考を元から絶つことであつた。罪などないのだ。訴訟とは、すでに何度も彼が銀行の利益のために結んできた、大きな取引のようなものであつた。規則もそうだが、そういう取引の中にも、どうしても避けねばならない様々な危険は潜んでいる。この目的のためには、とにかく何かの罪であれこれ悩んでしまうのがよくない。むしろ、自分は特別に有利なんだと、できる限り信じ込んでしまうのである。そういう見地からすれば、極めて速やかに（できれば、今日の夕方にも）、あの弁護士から代理の任務を取り上げてやるというのは止むをえないところであつた。弁護士の説明によれば、それは確かに何か前代未聞の、どうやら恐ろしい侮辱だとのことであつたが。しかし、訴訟で奮闘している自分の目の前に、おそらく弁護士がきっかけで生じた障害が立ち塞がってくるのは、Kには堪えられないことなのであつた。ところで、一度、弁護士をお払い箱にすれば、すぐにも陳情書を出さねばならないだろうし、それを取り上げさせるため、場合によっては、毎日、それを追いかけていなければならない。この目的のためには、他の被告人のように通路のところにKが座って、帽子をベンチの下に置くだけでは、もちろん、不十分であつた。格子窓越しに廊下ばかり見るのではなく、机の前に座ってKの陳情書を精査するよう、彼自身や女たち、あるいはそれとは違う使者たちが、連日、役人のところに押しかけては、急かしていくことが必要であつた。こういう努力を止めるのはありえなかつた。全ては組織化されて、監視の下に置かれているのであり、いつの日か裁判所は、自らの権利を守るやり方をよく心えている被告人に体当たりを食らわせてくるのに相違ないのだ。そして、Kにはこういう全てをやり遂げられるだけの勇気もあつた。ところで、その陳情書を作成する困難さには、全く常軌を逸するところがあつた。以前、まだ一週間くらい前までであれば、照れ臭さを感じるだけで、いつしかそういう陳情書を書くこともあるのだろうと想像することができた。しかし、それが困難でもあるという点には、全く思いが及んでいなかつた。以前、彼はまさに仕事に没頭していたある朝、試しにそういう陳情書の思考プロセスを書き出して、それをあの何とも愚鈍な弁護士が使いこなせる形で手渡してやろうと、突然、一切を脇に置いて、メモ用紙を取り出してみたことがあつた。ところが、支配人室のドアが開くと、ちょうどそこにあの支配人代理が、大きな笑い声をさせて入ってきた。もちろん、彼は陳情書のことには知らなかつたので、そのことではなく、そこで聞いたある相場の小唄を笑つたのだが、それはその時、極めて不愉快な感じをKに与えた。その小唄の理解には図が必要だったので、支配人代理は、Kの手から鉛筆を引たくると、机の上に屈み込んで、陳情書のためにと思っていたメモ用紙の上にその図を完成させた。今日はもう、照れを感じることはなかつた。陳情書を書き上げなければ。そのための時間が事務所で取れないのなら、よくある話だが、毎晩でも取り組まなければ。夜だけでは不足なら、休暇を取ってでも。中途半端で留まっていたは、いけなかつた。仕事だけでなく、常にどんな場合にでも、それは最も無意味なことなのである。もちろん、陳情書

がほとんど先の見えない仕事になるのは分かっていた。恐ろしく心配性になる必要もなかったが、いつか陳情書が仕上がることなどありえないと、簡単に放り投げてしまうのもありえる話ではあった。怠惰や深謀からそうなるのではなかった（そういうことで完成から遠ざかるのは、あの弁護士くらいであった）。むしろ、目の前にある告訴内容や、そこからそれがさらにどう展開するかが分からないがゆえに、また極めて些細な行為や出来事に至るまでの自らの全人生を回想して、それを書き表わして、あらゆる角度から検証しなければならないがゆえに、そうなるのであった。いずれにせよ、それは何と悲惨な仕事であったことか。もしかすると、それは、年金をもらった後、再び子どもになった人を採用して、長い一日を過ごすのを助けてやるには、最適の仕事だったのかもしれない。しかし、彼の場合、仕事のために全思考力を使っていたその時、まだ上り調子で、すでに支配人代理への脅威にもなっており、全ての瞬間が猛スピードで過ぎ去っていたその時、若さのみなざる男として、短い夜を楽しんでやろうと思っていたその時、それを書き上げなければならなかったのだ。彼の考えは、再び愚痴の方に向かっていった。ほとんど無意識のうち、そういう考え方に終止符を打つためだけに、控えの間に繋がる電鈴のボタンを指で探り、それを押すと、時計の方に目をやった。十一時だった。二時間という長く貴重な時間を無駄にしてしまった。もちろん、さっきよりもはるかに疲れていた。とはいえ、時間をドブに捨てたというのでもなかった。役に立つかもしれない決心を、彼はやり遂げたのだ。もうすでに長い間、Kを待っているという紳士たちの名刺を二枚、色々な郵便物とは別に、使用人たちが持参してきていた。本来なら絶対に待たせてはならない人物たちであった。なぜ彼らはこんなに具合の悪い時にやってきたのであろう？ 勤勉であるKが、なぜ自分のプライベートのために最上の職務時間を使ったのであろう（閉まったドアの向こうでも、そういう質問をしているようであったが）？ これまでに起きたことにはうみ疲れて、これから起きることには疲れを感じながらも期待をして、最初の客に会うために、Kは立ち上がった。

小柄で、元気のよい紳士、Kもよく知る工場主であった。大変な仕事をしているKの邪魔をしたことを工場主が詫びると、これほど長く待たせてしまったことを、Kの方でも詫びた。すでにこの詫びは、機械的な言い回し、ほとんど間違ったアクセントで口から出されたので、完全に仕事に心を奪われていなければ、工場主もそのことに気づいたはずであった。そうするかわりに、工場主は大慌てであらゆるポケットから計算書や図表を引っ張り出すと、Kの目の前でそれを拵げてみせて、それぞれの費目の説明をしながら、その上でさらに、この暫時の一瞥の際に気になった、小さな計算間違いの修正までして、およそ一年前に結んだ同様の案件をKに思い起こさせながら（ちなみに、今回は、最大の犠牲を払いながら、別の銀行もこの仕事に名乗りをあげてきていると知らせながら）、最後には、Kの意見を聞くため、黙り込んだのであった。最初のうち、本当によくKは工場主の話に耳を傾けて、その際には、この重要な仕事についての思考も、まだ頭の中に残っていた。しかし、残念ながら、それも長くは続かず、すぐに緊張の糸を切れさせると、しばらくは工場主の喧しい大声に相槌を打っていたが、結局、それも止めて、書類に覆い被さっている禿げた頭をジイッと眺めながら、この男、今、喋っている全てが無駄ということに、一体、いつになったら気がつくのだろうか、と、自問していた。さて、工場主が黙り込んでしまっただけからは、最初のうち、こちらが話を聞いていないと

白状する機会を与えるために彼はそうしているのだと、Kは本気で思っていた。その後、明らかにあらゆる反論を覚悟している工場主の張りつめた視線を見てからは、やはりこの仕事上の話しあいには続けるべきなのだと了解したが、そこには同情の気もちしか働かなかった。つまり、命令を受けたようにジッと俯くと、鉛筆をゆっくりと書類の上で行ったり来たりさせて、時には、その動きを中断させながら、その数字を睨んだのである。工場主の方は、Kには異論があるのだと考えていた。もしかすると、本当は数字が決まっていなかったのか、あるいは、それがまだ決定的なものではなかったのか、いずれにせよ、工場主は書類を手で覆い隠して、彼の横にピッタリと寄り添いながら、改めてその仕事の全体的な説明を始めたのであった。「これは難しいですね。」と、Kは言う、唇をすぼめて、唯一の情報源である書類が見えなくなったので、よろけるようにして、椅子の肘かけのところに身体を凭れかけさせた。それだけでなく、支配人室のドアが開き、ガーゼの覆いの向こう側にいるように、ボンヤリと副支配人が姿を現わすのを、ショボショボする目でただ仰ぎ見ていた。それ以上は、Kはそのことについて考えるのは止めて、自分にとって極めて喜ばしい、ある直接的な効果だけを目で追うようにした。というのも、工場主が椅子からピョンと飛び上がって、支配人代理の方に駆けていったのである。あと十倍は速く駆けるとKは思った。なぜなら、また支配人代理がいなくなってしまうような気がしたのである。それは無用な心配であった。サッと紳士たちは駆け寄ると、お互いに手を出しあいながら、一緒にKの事務机のところまでやってきた。業務代理人さんには、全然、この仕事に興味をもってもらえないんですよと訴えながら、支配人代理の目もあって、再び書類の上に屈み込んでいるKのことを、工場主がそう名指しした。その時、二人は事務机に凭れかかっていたが、今度は工場主が支配人代理に対して攻撃を開始したので、圧倒的な嵩があると思われる二人の男が、自分のことを頭ごなしに相談しているように、Kには思われた。注意深く上の方に目を回しながら、頭上で何が起きているのかをゆっくりと探ろうとした後で、ろくに見もせず、Kは事務机の上から書類を一枚引ったくと、それを片方の手の平の上に乗せて、自らも立ち上がりながら、二人の紳士の方にゆっくりと運んでいった。その時は、何か特定のことを考えていたというより、いつか自分を完全に解放する長大な陳情書が完成したら、こんな風に振る舞うのではという考えだけで動いていた。全神経を集中して、会話をしていた支配人代理は、ほんの少しだけ書類の方に目をやると、差し出されたものには目もくれず（なぜなら、業務代理人には重要だったものが、彼には重要ではなかった）、それをKの手から引ったくと、こう言った。「ありがとうございます。もう全部、分かっていますから。」そうして、また机の上に静かにそれを置いた。Kはイライラしながら、脇の方からそれを見ていた。しかし、支配人代理は、それに気づかなかったか、あるいは気づいていて、そのことをただキッカケにしたかのどちらかであった。何度も彼は大きな声で笑い、一度など、当意即妙の反論で工場主を明らかな当惑の中に置き去りにしたが、自らに異議を唱えることで、すぐにそこから工場主を救い出して、最後には、ここでなら用件を最後まで進められますからと、事務所に立ち寄ることを勧めたのであった。「これは非常に重要な案件です。」と、彼は工場主に言った。「わたしはこの件を完全に理解しています。それに業務代理人さんも、」——と、言いながら、そもそも工場主にしか話を向けていなかったが——「この件は、われわれが引き受けた方がよいと思っていますらっ

しゃる。この案件には静かな熟考が必要だが、業務代理人さんは、今日はお仕事で忙殺されているようだし、それに、実際、何人もの方々がすでに何時間も控えの間でお待ちになっていらっしゃる。」Kにはまだ、支配人代理からは顔を背けて、愛想のよい感じを保ちながら、工場主だけには強張った微笑みを振り向けるだけの落ち着きがあった。しかし、それ以上、そこに口出しすることはせず、少し前屈みになると、まるでレジ前の店員のように、事務机の上に両手を置いて、身体を支えながら、二人の紳士がさらに談笑を深めて、机の上から書類を取り上げつつ、支配人室の中に消えていくのをジッと見ていた。ドアのところで、もう一度、工場主は後ろを向くと、こう言った。これでお別れじゃありません。もちろん、業務代理人さんには話しあいの結果を伝えます。あと、ちょっとご報告したい用件もあるのです。

ようやくKはひとりになった。別の関係者は通す気になれなかった。ただぼんやりと意識に浮かんでくるのは、まだ工場主と対応中だからというので、部屋の外の人たちが、あの使用人ですら、誰も部屋に入られないと考えているのが、何とも痛快だという思いであった。窓辺のところまで来ると、手摺壁に腰を下ろして、片手は把手の上にしかりと載せながら、広場の様子に目を凝らしていた。まだ雪が降っていて、晴れ間は見えなかった。そもそも、どうしてこんなに不安になるのかが分からなかったが、長い間、そうやって彼は座っていた。ただ時々、そこに物音がしたのだと誤解して、少しビクビクしながら、肩越しの控えの間のドアの方に目をやったりしていた。しかし、誰も現われなかったので、気を取り直して洗面台のところまで行くと、冷水で顔を洗って、頭をスッキリさせて、再び窓辺のその場所に、彼は腰を下ろした。これからは、自分で弁護を引き受けるのだという決心が、最初にそう決めた時よりずっと重いものとして、彼の目の前に立ち現われていた。弁護士に弁護を放り出しているうちは、結局、まだ訴訟の影響を受けることもほぼなく、遠くから観察していれば、直接の接触も回避できていた。事件がどうなったのかは、その気になりさえすれば、調査もできたし、その気になりさえすれば、頭を引っ込めることもできた。それとは違って、弁護を引き受けることになった今からは――少なくとも、そう決めた瞬間からは――完全にわが身を裁判に晒さなければならなくなっていた。むろん、その成果は、後々の完全で決定的な解放に繋がるはずであった。しかし、そのためには、しばらくの間、いずれにせよ、これまでよりはるかに大きな危険にわが身を晒さなければならなくなったのである。ちなみに、それを疑う気さえあったなら、支配人代理や工場主とのこの日の会合も、以下のような質問で、全く反対のことを彼に納得させることができたであろう。一体、自分で弁護するという一大決心をしておきながら、どうしてあんなところに座っていたのか？　一体、これからどうなるのか？　何という日々が立ちはだかっているのか！　あらゆることを潜り抜けて、よい結果に繋がる道などあるのだろうか？　慎重な弁護というものは――そうでなければ、意味がない――、慎重な弁護というものは、同時に、他の全てを諦めるということを意味していたのではなかったか？　うまくやり遂げられるのか？　銀行にいながら、どうしてこのことを切り抜けられるのか？　陳情書の作成だけが問題でないのは明らかであった。それだけのことなら、休暇をひとつ取れば、おそらく十分であった（今、休暇を申請することは、大きなリスクかもしれなかったが）。むしろ、問題は、どこまで続くのか全く先が見えないこの訴訟自体にあった。何という障害が、突然、

Kの人生行路に投げ込まれたのであろう！

今も銀行のために働かなければならないのか？ 彼は事務机に目をやった。——今、この瞬間すら、関係者を中に通して、交渉しなければならぬのか？ 例の屋根裏部屋では、どんどん訴訟が進み、裁判所の役人たちが訴訟の書類に取り組んでいるというその時に、銀行の仕事を片づけなければならぬのか？ これではまるで、裁判所に見い出されて、訴訟に繋ぎ留められながら、銀行の仕事をやらされるという拷問のようではないか？ どこか銀行の中で、彼の仕事を評価してくれながら、彼の特殊な状況も考慮してくれるという人はいないのか？ そんな人はいなかったし、これから出てくるはずもなかった。実際、この訴訟について誰がどれくらい知っているのか、まだそれすらもはっきりしていなかった。かといって、完全に秘密というのでもなかった。そして、もしできるのなら、あの支配人代理の耳にこの噂が届いていなければよかったのだが。ただ、もしそうなら、Kへの同僚のよしみや思いやりなどなく噂が使われ尽くす様が、はっきり目の当たりにされるはずであった。では、支配人はどうか？ 確かに、彼はKに好意をもっており、訴訟について聞いているのなら、彼のことを気にしている以上、すぐにもKのために色々な軽減策を講じてくれそうであった。しかし、そこまで彼がやり通してくれるのはありえないことであった。なぜなら、今や、それまでKが築いてきた釣りあい鍾は弱まっており、自分の勢力の増強のため、支配人の苦境を利用し尽くそうとする支配人代理の影響を受けることになっていたのだから。では、Kは何を期待できるのか？ おそらくこういう考え過ぎが原因で、彼は抵抗力を弱めてしまっていた。とはいえ、当面、思い違いなしに全てをなるべく明晰に見るのは、必要なことであった。

まだしばらくは事務机に戻らなくてもよかったので、特に理由もなく、窓を開けてみた。窓がガタつくので、把手は両手で回さなければならなかった。すると、その窓から同じ幅と厚みで煤煙混じりの霧が入り込んできて、微かに焦げた匂いでその室内は満たされていった。小雪もパラパラと吹き込んできた。「嫌な秋ですな。」支配人代理のところから戻ってきて、気づかれずに部屋の中に入っていた工場主が、Kの背後でそう言った。頷くと、Kは不安そうに工場主の書類鞆に目をやった。今、支配人代理との会合の結果をKに知らせようと、工場主はそこから書類を引っ張り出すところであった。しかし、Kの視線を目で追いながら、鞆をポンと叩いて、中身は開けずに彼は言った。「どうなったのか、お知りになりたいんでしょう。取引契約はもう鞆の中にあるも同然です。素晴らしい方ですな、あの支配人代理という方は。ただし、全く危険がないというのではない。」彼は笑うと、Kと握手をして、その笑いの中に彼を誘い込もうとした。しかし、その時、工場主が書類を見せようとしなのがどうにも胡散臭く感じられて、工場主の言葉に面白味があるとは彼には思われなかった。「業務代理人さん、」と、工場主が言った。「この天気はあなたを苦しめていますか？ 落ち込んでいらっしゃるように見えますが。」「ええ。」と、Kは言う、片手でこめかみを押さえてみせた。「頭痛と、家の心配です。」「仰る通りです。」と、せっかちで、人の言うことを黙って聞いてられない工場主が言った。「誰もが自分の十字架を背負わねばなりません。」思わずKは、工場主を送り出そうとするように、ドアの方に一步を踏み出しかけたが、そこで工場主がこう言った。「もしよかったら、業務代理人さん、ちょっとお知らせしたいことがあるのです。今日のような日にお邪魔するのは、大変、心苦しかったのですが、すでに最近、二度

ほどこちらに寄せてもらいながら、その度、言うのを忘れてしまったのです。また引き延ばせば、きっと完全に目的を見失ってしまうでしょう。しかし、それはそれで残念です。なぜって、お知らせしたいことは、基本的に価値がない話じゃありませんから。」Kがまだ答えを返さないうち、工場主は彼の近くまで歩み寄ると、指の節でKの胸を軽く突きながら、低い声でこう言った。「訴訟を抱えていらっしゃる、ね、そうでしょう？」後退りしながら、Kはすぐに大きな声を出した。「支配人代理が言ったんだな！」「いいえ、違います。」と、工場主が言った。「どこで支配人代理がこんな話を嗅ぎつけるんです？」「じゃあどうやって？」と、すっかり落ち着きを取り戻したKが言った。「色々なところで裁判の話を書くのです。」と、工場主が言った。「今からお知らせするのも裁判の話です。」「そんなに沢山の人がこの裁判に関係しているのか！」と、俯いたまま、彼は言うと、工場主を事務机のところまで引っ張っていった。またさっきのように二人で座ると、工場主がこう言った。「お知らせできるのは、そんなに沢山のことにありません。でも、こういう話は、小さなことでも、なおざりにはできませんから。おまけに、何とかあなたを助けたいという気持ちに駆られてもいるのです（わたしの助けなんて、ささやかなものに過ぎませんが）。なぜって、われわれは、これまでもよい仕事仲間だったじゃないですか？　ところで、」Kが今日の打ちあわせの際の非礼を詫びようとしたが、工場主は少しの中断も許そうとせず、自分は急いでいるということを示すために、書類鞆を脇の高いところで挟み直すと、こう話を続けた。「訴訟の話は、画家のティトレリという男から聞きました。ティトレリというのは単なる雅号で、本当の名前は知りません。数年前から、ちょくちょくわたしの事務所に顔を出しては、小さな絵をもち込んでいたのですが、いつもわたしは——ほとんど乞食みたいなものです——一種の布施のようなものを渡していました。ちなみにそれは、荒野の景色や、それに類した美しい絵でした。こういう売買は——われわれ二人には、それが当たり前になっていましたが——、いつも非常にスムーズに運んでいました。ところが、ある時、この訪問が余りにも頻繁に過ぎるので、わたしが彼に小言を言って、会合をもつという話になりました。画業だけでどうして生計を立てているのか聞いてみたいという興味もありました。ところが、驚いたことに、主たる収入源は肖像画であると、彼は言ったのです。裁判所のために描いているとも言っていました。どこの裁判所だって？　と、わたしは聞きました。すると、彼が裁判所について語り始めたのです。この話がどれくらいの驚きだったのか、一番分かってもらえるのは、おそらくあなたでしょうね。それ以来、彼は訪ねてくる度、裁判に関する何らかのニュースを聞かせてくれるようになり、徐々にそのことについて、わたしはある種の知見をえられるようになってきました。とにかく、ティトレリはお喋りです。わたしは、しばしばやつを追い返さなければなりません。あれが正真正銘の嘘つきというだけでなく、とりわけ、仕事の重圧でほとんど潰されかけているわたしのようなサラリーマンには、自分が門外漢のことには構ってられないという、そういう理由から。しかし、そんな話は蛇足です。おそらく——わたしが思うのに——、ティトレリはお役に立ちます。大勢の裁判官を知っていますし、大した影響力はありませんが、様々な有力者にどうやって近づくのかの助言ができます。この助言は、それ自体、決定的ではないにしても、あなたがそれを手に入れられれば、より意義は深まるだろうとわたしは見ています。あなたは本当に弁護士のような方ですね。よく言っていたんです。

業務代理人のKさんは、本当に弁護士のような方だって。いや、だからといって、あなたの訴訟の心配なんて、これっぽっちもしていませんよ。ところで、ティトレリのところに行く気はありませんか？ 紹介をすれば、やれることは何でもしてくれます。わたしは本当に、あなたは行くべきと思っているのです。もちろん、今日ではなく、いつか何かのついでの日にも。もっとも――さらに申し上げるのなら――、わたしが助言したからといって、あなたが本当にティトレリのところに行くべき義理はないのですよ。ええ、ティトレリなしでやっていけるというお考えなら、完全に脇に置いてしまった方が確かにずっとよいのです。もしかして、すでに極めて詳細な計画があって、ティトレリは邪魔になっているのかもしれませんがね。ええ、それならもちろん、行くべきじゃありません！ あんな若僧から助言をもらうには、確かに自分を乗り越えることすら必要です。ですから、お好きなように。これが紹介状で、これが住所です。」

ガッカリしたKは、手紙を受け取ると、グイッとポケットに押し込んだ。どんなに上首尾に運んだとしても、訴訟について工場主がもう知っており、画家が噂を言い触らすという恥辱に比べれば、この紹介状がもたらすであろう有益さは、はるかにえるところが少なかった。すでにドアの方を向いた工場主に、二言三言、感謝の言葉を伝えることすらできなかった。「行ってみます。」と、ドアのところで工場主に別れを告げながら、彼は言った。「あるいは、今は非常に忙しいので、いつの日か、この事務所に来るようという手紙を書くかもしれませんが。」「まあ、あなたは、」と、工場主は言った。「いずれは最善の策を見出されるのでしょう。ただ、ここで訴訟の話をするために、ティトレリのような男を銀行の中に入れるのは、むしろ避けられるんだと思っていました。この手の輩に手紙を渡すのは、よいことばかりとはいえません。とはいえ、きっと熟慮を重ねて、何をすべきかはお分かりになっているのでしょう。」Kは頷くと、控えの間を過ぎてもまだ、工場主の後ろにつき従っていた。しかし、表向きの落ち着いた態度の裏で、彼は自分に対する大きな驚きも感じていた。そもそもティトレリに手紙を書くと言ったのは、自分でも紹介状のありがたみは分かっている、ティトレリと会う可能性についてはすぐに考えたということ、何とか工場主に示したかったからに過ぎなかった。さらに、ティトレリの援助に価値があると認めたのであれば、実際、手紙を書くことに躊躇はしなかったであろう。ところが、そのことに伴う危険については、工場主に注意されるまで、全く気がつかなかったのがあった。彼自身の悟性は、本当にそれくらい当てにならないものになってしまったのであろうか？ 支配人代理とはドア一枚しか隔っていない場所で、訴訟についての助言をもらうために、誰の目にも分かる手紙という手段を使って、そのようにいかがわしい男を銀行の中に入れるということがありえるのなら、それ以外の危険を見逃したり、その中に足を踏み入れているというのもありえなくはない、それどころか、極めてありえる話になっているのではないか？ 必ず誰かが身近にいて、警告してくれるというのでもなかった。そして、まさに今、あらん限りの力で行動しなければならないその時、それまで気にもしていなかった自分の注意深さに対するこの種の疑念が生じてくるとは！ 事務仕事の中でも感じていた困難さが、今、訴訟の中でも始まったのであろうか？ もちろん、今となっては、ティトレリに手紙を書いて、銀行に招き入れるということ、どうしてありえる話だとしてしまったのか、全く訳が分からなかった。

まだそのことで首を振っていると、使用人が近寄ってきて、銀行の控えの間に座っている三人の紳士に、彼の注意を向けさせた。彼らは、Kのところに通されるのを、もう長い間、ジッと待っていた。今、使用人がKと言葉を交わしたので、彼らはサッと立ち上がると、我先にめいめいがKに近づくため、何らかの好意的な機会を利用しようとした。銀行の側が余りにも無神経にこの待合室に無益に彼らを留め置いたので、彼らにも一切の遠慮はなかった。「業務代理人さん、」と、最初のひとりが早くも言った。しかし、Kはもう使用人に冬外套を取りにやらせていて、使用人の助けを借りて、袖に手を通しながら、三人全員に向けて次のように言った。「お許し下さい、皆さん、残念ながら、今、この瞬間に、あなた方をお迎えする時間は全くありません。本当に申し訳ないのですが、差し迫った出張を片づけねばならず、すぐにも外出しなければならないのです。わたしが今、どれくらい引き留められていたのかは、実際、ご覧いただいた通りです。よろしければ、明日（あるいは、いつでもいいのですが）、出直してはもらえませんか？　あるいは、この件について、電話でお話しするというのはどうでしょう？　あるいは、今、何が問題なのかを手短かに仰ってもらえませんか。後日、詳しい回答を手紙で差し上げます。もちろん、一番いいのは、後から来てもらうことなのですが。」Kからのこの提案は、今まで完全に待ちぼうけを食わされていた紳士たちを驚きの渦中に放り込み、彼らは声もなく、お互いどうしを見つめていた。「じゃ、そういうことで。」と、今、帽子を運んできた使用人の方を向いて、Kが言った。Kの部屋の開け放たれたドアからは、戸外の雪がさらに激しさを増しているのが見えた。それゆえ、Kは外套の襟を立てると、首の下のボタンを留めた。

ちょうどそこに、隣の部屋から支配人代理が入ってきて、Kが冬外套を着ながら紳士たちと談判しているのを笑って見ていたが、こう聞いた。「もうお出かけですか、業務代理人さん？」「ええ。」と、Kは言う、立ち上がった。「所用があるのです。」しかし、支配人代理の身体は、もう紳士たちの方に向けられていた。「じゃあ、この方たちは？」と、彼は聞いた。「もうかなり長いこと、お待ちいただいているように見えますが。」「すでに話がついています。」と、Kは言った。しかし、紳士たちは少しもジッとしておらず、Kを取り囲むと、大した用件もなく、即時、詳細に、差し向かいで話しあう必要もなしで、こうして何時間も待ってられるでしょうかと言い立てていた。支配人代理は、しばらく彼らの話を聞いていたが、Kが帽子を手にもち、ところどころついた塵をパツパと払う様子にジッと目をやりながら、こう言った。「皆さん、極めて簡単な解決策があります。わたしでよければ、業務代理人さんのかわりに、喜んで交渉を引き継ぎますよ。あなた方の用件は、むろん、すぐに話しあわれるべきです。同じ商売人として、商売人の時間を大切にすべきなのも分かっています。こちらにいらっしゃいませんか？」そうして、彼の事務所の控えの間に通じるドアを開けたのであった。それにしても、この支配人代理は、Kが今、止むをえず手放さなければならなかった全てをゴツソリ手中に収めるのが、何と巧みであったことであろう！　そして、Kは、どうしても止むをえないものだけを手放したのであろうか？　彼も白状せざるをえなかったように、極めて微かで不確かな希望にすがって、彼が画家のところに出払っている間に、その評判は回復不可能な損害を被ってしまった。もしかすると、再度、冬外套を脱いで、少なくとも、実際、まだ隣の部屋で待っている二人の紳士たちだけは奪還しておいた方が、はるかに

まじだったのかもしれない。今、Kは、自分の部屋の書架を我が物のように物色中の支配人代理の姿を目の当たりにしていなければ、もしかして、その奪還をやっていたかもしれない。Kが憤慨してドアの方に近づくと、彼は大きな声を出した。「あれ、まだ行ってらっしゃらなかったんだ！」Kの方に彼は顔を向けた。その顔の沢山の揺るぎのない皺は、彼の年齢をというより、権力を証明しているかのようであった。それからすぐにまた、あの物色が始まった。「契約書の写しを探しているんですよ。」と、彼は言った。「あの商会の代表者が、あなたのところにあるはずだと言うものですから。探すのを手伝ってもらえませんか？」Kが一步近づくと、支配人代理がこう言った。「ありがとう、ありました。」そして、契約書の写しだけでなく、まだ沢山の他の書類も入っているに違いない大きな書類の束を抱えて、再び部屋に帰っていった。

「今はあいつに敵わないが、」と、Kはひとりで呟いた。「いつかこの個人的な厄介事が片づいたら、この厄介事が片づいたことを本当に思い知らせる最初の人間にしてやろう。それも、なるべく痛快に。」そう考えて、少し気が楽になったKは、もう長い間、廊下に繋がるドアをずっと開けてくれていた使用人に、自分は所用で出かけたからと、折りを見て、あの支配人に伝えておくようにと言うと、しばらくの間、プライベートにより完全に没頭できるのをほとんど喜びながら、銀行を後にした。

以前の裁判所事務局とは正反対の方角にある市の郊外に住むという画家のところにすぐに飛んだ。そこは、この間よりさらに貧しい地区で、建物もずっと暗い感じで、溶けかけた雪の上をゆっくりと漂っていく汚物で街路は溢れ返っていた。画家が住む建物は、大きな門の片方の門扉だけが開いていたが、もう一方の門扉の壁の下にはポツカリと穴が空いていて、Kが近づいた途端、吐き気を催すような煙を立てた黄色の液体が湧き出して、それを避けるように、数匹の鼠が近くの排水溝にドボンと飛び込んでいった。階段を下りたところでは、幼い子どもがひとり、地面に這いつくばって泣いていたが、門の反対側のブリキの作業場から鳴り渡る全てを圧するような轟音のせいで、一切、それが耳に入ってくることはなかった。そこの作業場の扉は開いていて、三人の見習修了生たちが何かの製品の周りを半円状になって立ち、そこにハンマーを振り下ろしていた。壁にかかった大きなブリキの板からは、ギラギラと青白い光が放たれて、その光は、二人の見習修了生たちの間を縫って、彼らの顔や作業用の前かけを照らしていた。これら全てに、Kはぞんざいな一瞥を投げかけていた。ここでの仕事は、できるだけ早く片づけて、二言三言、その画家だけから話を聞いたら、またすぐに銀行に戻ってやろうと、彼は考えていた。本当に少しでもここで成果が上げられれば、今の銀行の仕事でも、さらにより効果が出てくるはずであった。ちなみに、四階では歩調を緩める必要があった。すっかり息が切れていたのである。階段の高さは、天井の高さと同様、全く度を越すものであった。上の階の屋根裏部屋にその画家はいるはずであった。空気は極めて息苦しかった。階段には踊り場がなく、細く延びる階段は両側から壁で挟まれていた。壁のそここの本当につべん近くのところには、小さな窓枠が切られていた。少しの間、Kがそこに立っていると、数人の若い少女たちがどこかの部屋から走り出してきて、笑いながら、また階段を駆け上がっていった。Kは、ゆっくりと彼女たちの後を追っていった。つまり、他の少女たちから遅れを取っていたひとりの少女にサッと追いつくと、その少女と一緒にさらに歩を進めながら、こう聞いた。「ここに画家のタイトル

りって住んでる？」それは、十三歳になるかならないかの少しせむしの少女であったが、そう聞かれると、片肘で彼を突いて、横からジッと彼の方を見上げてきた。その若さや、肉体的な欠陥をもってしても、彼女がすっかり墮落しているのを隠し通すまでには至らなかった。ニコリともせず、鋭い、威嚇するような眼差しで、マジマジと彼女はKを見つめていた。そういう態度には気がつかない振りをして、Kはこう聞いた。「画家のティトレリって知ってる？」彼女は頷くと、自分の方からもこう切り出した。「あの人に何の用？」早い段階でティトレリについて少しでも情報がえられるのはありがたいことだと、Kは思った。「肖像画を描いてもらおうと思ってさ。」と、彼は言った。「描いてもらおう？」と、彼女は聞くと、ありえないくらいポカンと口を開けて、何か非常に驚くべき、まずいことでも言われたように、Kを片手でポンと叩き、いずれにせよ、恐ろしく丈の短いスカートを両手でまくり上げながら、力の限り、他の少女たち（彼女たちの叫び声は、高いところから来ていたので、もう聞き取ることはできなかったが）の後を追っていった。ところで、階段の次の曲がり角では、彼はもうすでに全員の少女たちに追いついていた。せむしの少女からKの意図を聞かされて、彼女たちがそこで彼を待つことにしたのは明らかであった。彼女たちは階段の両端に並んで、Kがその間をうまく通れるように、壁に身体をピッタリと押しつけながら、両手でエプロンの皺を伸ばしていた。こういう隊列を組むところや、彼女たちの顔つきは、子どもっぽさと性悪さのある種のミックスを表わしていた。今や、Kの後ろで笑いながら集まっている少女たちの先頭にはあのせむしの少女がいて、彼の案内役を買って出ている。Kがすぐに道が分かったのは、この少女によるところが大きかった。つまり、道を直進しようとする彼に対して、ティトレリのところには、階段の別れ道の方を選ぶべきだと教えてくれたのである。ティトレリの部屋に繋がる階段は、とりわけ狭く、極めて細長く、一切の曲折がなかったので、端から端までを見通せたが、一番奥の突き当たりはティトレリの部屋のドアに直結していた。それ以外の階段とは違って、斜め上につけられた小さな天窓でかなり明るく照らし出されたそのドアは、水漆喰が塗布されていない角材で組まれていて、その上にはティトレリという名が、刷毛で赤く描き入れられていた。Kが一行を引き連れて、階段の真ん中まで来てみると、明らかに大勢の足音に促されたらしく、上の方の階のドアが少し開いて、おそらくナイトガウンを羽織っただけの男が、ドアの隙間に姿を現わした。「おや！」と、一行を見ると、大きな声を出して、男はサッと姿を消した。あのせむしの少女が、喜んで手をパンと打ち鳴らした。それ以外の少女たちも、もっと早く前に進もうと、後ろからKの背中を押した。上の方の階にいた画家は、彼らがまだ登り切る前からもうドアを大きく開けて、深くお辞儀をしながら、お入り下さいとKを誘っていた。その一方で、彼が少女たちを寄せつけることはなかった。彼の意思に逆らって、彼女たちがどんなに侵入を試みても、誰一人、中には入れなかった（どんなに頼んでも、許可は降りなかった）。ただ、あのせむしの少女だけは、彼が伸ばした腕の下をスリと掻いぐっていったが、画家はその後を追うと、そのスカートを掴み、自分の周りでクルッと一回転させて、ドアの前の他の少女たちの横にストーンと置いた。画家がその場を離れている間も、少女たちが敷居を跨ぐことはなかった。こういう全てをどのように判断すればよいのか、Kには分からなくなっていた。つまり、全体が友好的な合意の下で進んでいるように思われたのである。少女たちは、ドアのところで我先に首を上へ伸ばして

は、Kが知る由もないふざけた色々な隠語を、画家に向かって投げつけていた。せむしの少女を片手でしっかりとぶら提げながら、画家も笑っていた。それから、ドアを閉めて、もう一度、Kに頭を下げると、握手のために片手を差し出して、自己紹介をしながら、こう言った。「画家のティトレリです。」Kの方は、その背後で少女たちが囁いているドアの方を指で差して、こう言った。「この建物では、大変な人気がありますね。」「ああ、あのじゃじゃ馬たち！」と、画家は言うと、ナイトガウンの首のボタンを留めようとしたが、無理だった。ちなみに、彼は裸足で、その他に身につけていたのは、ダブダブの黄色のリンネルのズボンだけであった。ズボンは紐で締められていたが、長い端がダラリと垂れ下がっていた。「あのじゃじゃ馬たちには、ほとんど手を焼かされています。」まさに最後のボタンが弾け飛んでいったナイトガウンのことは諦めて、椅子を一脚もつくと、そこに座るようにKに勧めながら、こう続けた。「彼女たちのうちのひとり——今日はいませんが——の絵を描いてやったら、それ以来、全員に追われるようになりましてね。ここにわたしがいる間は、許可なしでは入ってきませんが、一旦、外出すると、最低、ひとりには中に入り込んできます。彼女たちは、わたしの部屋のドアの鍵をひとつ作って、融通しています。それがどれだけ鬱陶しいかは、誰にも想像できないでしょう。例えば、モデルの女性を家に連れてきて、自分の鍵でドアを開けたとします。すると、あのせむしの娘が机のところで、唇を筆で真っ赤に塗っているのです。その間、彼女が面倒を見なければならない妹たちも、そこら中をうろつき回って、隅から隅までこの部屋をグチャグチャにしています。あるいは、昨日あった話ですが、夜更けに家に帰ってきて——どうか、その辺を斟酌して、わたしの格好やこの部屋が荒れ放題なのはご容赦下さい——夜更けに家に帰ってきて、ベッドに入ろうとすると、誰かが足をつねるのです。ベッドの下を見て、またそうやってひとりを引っ張り出します。なぜそんなに群がってくるのかは分かりません。わたしが誘っているのではないのは、今、ご覧いただいた通りです。もちろん、そのことは仕事の支障になってしまいます。タダで自由にアトリエを使わせてもらっているのであれば、とっくに引き払っていたことでしょう。」その時、ドアの向こうで、か細い、不安そうな声がした。「ティトレリ、もう入ってもいい?」「駄目だ。」と、画家が言った。「あたしだけでも、駄目?」と、また声がした。「それでも、駄目だ。」画家はそう言うと、ドアのところまで行って、ガチャリと鍵をかけた。

その間に、Kは部屋を見回していた。この惨めな小部屋をアトリエと命名できるという着想には、自力では決して辿り着けなかったであろう。そこは、奥行や間口が、大股で二歩以上は進めないくらいの広さであった。床、壁、天井は全て木製で、角材と角材の間では、細い隙間が空いていた。Kの真向かいには、壁に沿うようにベッドが置かれていて、様々な色の寝具が山盛りになっていた。部屋の真ん中では、イーゼルに絵がかけられていた。それはシャツで覆い隠されていて、その袖が床まで垂れ下がっていた。Kの背後には窓があり、そこからは、霧の中、雪に包まれた隣りの建物の屋根だけが見えた。

鍵穴で鍵がガチャリと回ると、すぐにここから出るつもりでいたのを、Kは思い出した。それゆえ、ポケットから工場主の手紙を取り出して、画家にそれを手渡すと、こう言った。「わたしは、あなたもよくご存知のこちらの紳士から、あなたのことを教えてもらって、その方の助言でここに来たのです。」手紙にザッと目を走らせると、画家はそれ

をベッドの上にポイッと投げた。あの工場主から、ティトレリは彼の知りあいで、彼の施しに頼っている貧しい人間なのだと、これ以上ないくらいキツパリと聞いていなければ、このティトレリは工場主のことを全く知らないか、少なくともそのことを全く思い出せないのだと、その時は本気で信じていたかもしれない。いずれにしても、その時、画家はこう言った。「絵をお買い上げですか？ それとも、描いて差し上げるのをご希望ですか？」驚いたKは、画家の方を見た。一体、手紙には何と書かれているのだろうか？ 工場主が画家に宛てた手紙には、ここではKは訴訟の問い合わせしかする気がないと、当然、書かれているのだと思っていた。いずれにせよ、余りにも性急に、深い考えもなしに、Kはここに来てしまった！ しかし、今は、何かの答えを画家に返さなければならなかった。そこで、チラッとイーゼルを見ると、彼はこう言った。「今も絵に取り組んでいらっしゃった？」「ええ。」と、画家は言う、イーゼルにかけられたシャツをベッドの手紙の方にサッと投げた。「肖像画です。出来はよいのですが、まだ完成していません。」偶然がKに微笑みかけて、公式に裁判所について話す機会が与えられた。なぜなら、それは明らかに裁判官の肖像画だったのである。ちなみにその絵は、弁護士の執務室にあったものと全くの瓜二つであった（確かに、ここで問題になっていたのは、それとは別の裁判官であったが）。それは、モジャモジャの黒い髭を生やした太っちょの男で、その髭は、両側から頬を覆い尽くしていた。それに、前は油絵だったのが、今回は弱々しく薄っすらと、パステル顔料で描かれていた。しかし、それ以外は、全てがソックリであった。なぜなら、ここでもまた裁判官は、まさに今、肘かけをしっかりと握りながら、玉座から立ち上がろうとしていたのである。「これは確かに裁判官です。」と、すぐにKは言おうとしたが、しばらく思い留まって、細部を吟味しようとするように、絵の方に近づいていった。中央の玉座の背凭れの上に立つ巨大な像の正体が分からなかった。この像は何でしょうかと、彼は画家に聞いた。もう少し仕上げが必要なんですと、画家は答えると、小さな卓の上からパステルを取り上げて、像の輪郭線をサッとなぞった。しかし、それでもこの像が何かを理解できるようにはならなかった。「正義の女神です。」と、とうとう画家が言った。「今、分かりましたよ。」と、Kも言った。「ここに目隠しが、ここに天秤がありますね。でもこれって、踵のところに翼があって、飛んでいるんじゃないですか？」「その通りです。」と、画家が言った。「依頼に従って描きました。つまり、正義の女神と勝利の女神の合体です。」「あんまりよくない組み合わせですね。」と、笑いながら、Kが言った。「正義の女神はデンと構えているべきです。そうでないと、天秤がふらついて、正しい判決が下せません。」「その点については、依頼人からの指示の通りにしています。」と、画家が言った。「まあ、確かに。」と、自分の発言で誰かの気分を害したくないと思ったKは、そう言った。「あなたは、背凭れの上に像が立っている様子を、ありのままに描いたんですね。」「いいえ。」と、画家が言った。「像も玉座も、見たことはありません。全部、作りごとです。でも、何を描くべきかはあらかじめ決まっています。」「エッ？」と、Kは聞いた。故意に、画家の言うことが完全には理解できない振りをしてのことであった。「だって、これは裁判官席に座っている裁判官でしょう？」「ええ。」と、画家が言った。「でも、高位の裁判官じゃありません。だから、こんな玉座に座ったことは一度もないのです。」「それなのに、こんな改まった格好で自分を描かせるんですか？ 本当に裁判官みたいに座っていますが。」「そう、この人た

ちは見栄っ張りなんです。」と、画家が言った。「ですが、こういう風に描いてもよいという上からの許可は出ています。どういう風に描くべきかは、全部、細かく決まっています。残念ながら、あいにく服装や座り方の細かいところまでは、この絵では見極められません。パステル顔料はそういう表現には不向きなのです。」「ええ。」と、Kは言った。「これがパステル顔料で描かれているというのが、不思議ですよ。」「裁判官が希望したのです。」と、画家が言った。「ある婦人に献呈されます。」絵を見たことが、仕事への熱意を呼び覚ましたようであった。シャツの袖をまくり上げると、画家は何本かのパステルを手を取った。パステルの震える先端の下では、そこから裁判官の頭部に赤味がかかった陰影が生み出されて、放射状に画面の縁に向かって消えていくのを、Kは見ていた。次第にその陰影の紛れは、飾りや高位の勲章のように頭部の周辺を取り囲んでいった。さらに、正義の女神の像の周囲は、気づかないくらいの色調で明るくなって、この明るさの中で、像はとりわけ前に飛び出すような感じになった。像は、もはや正義の女神とも勝利の女神とも感じられず、むしろ今は、完全に狩猟の女神のようであった。思った以上に、Kは画家の仕事に惹きつけられていた。しかし、最後には、すでに余りにも長く逗留しながら、結局、本来の仕事は何もできていない自分を責めたのであった。「この裁判官の名前は？」と、突然、彼が聞いた。「答えられません。」と、画家が答えた。絵に向かって、深く前屈みになりながら、最初はあんなに気をつけてもてなしていたゲストを、彼は明らかにないがしろにしていた。Kはそのことを気紛れだと思ったが、時間を浪費させられたことには、怒りを感じていた。「あなたは裁判所の連絡員みたいなものですか？」と、彼は聞いた。画家はすぐにパステルを脇に置くと、背筋を伸ばし、両手を擦りあわせながら、笑顔でKのことを見た。「ただただ早く真実をもってことです。」と、彼は言った。「紹介状にもありましたが、あなたは裁判所について知りたがっておられる。そして、わたしの気を引こうとして、まずこの絵についてお尋ねになられた。そのことを悪く言うつもりはありません。それがわたしに当てはまらないということが、あなたにはお分かりにならなかった。アッ、すみません！」Kが何か異議を唱えようとする、彼は鋭く拒絶しながらそう言って、また続けた。「ついでに言うのなら、仰られたことは全くその通りです。わたしは裁判所の連絡員みたいなものです。」この事実で満足するための時間をKに与えてやろうとでもいうように、彼は少しの間を置いた。その時、またドアの向こう側で少女たちの声がした。おそらく、鍵穴に群がっていたのであろう。おそらく、隙間からも部屋の中が覗けるのであろう。Kは何とか謝ってしまおうという自分を押し留めた。なぜなら、画家の気を散らす気はなかったし、画家が余りにも尊大な態度を取るようになり、そういうことで、ある意味、手の届かない人間になるのは嫌だと思ったのである。それゆえ、彼はこう言った。「それは公式に認められた地位ですか？」「違います。」と、話しかけられたことで、自分が言いたいことが遮られたとでもいうように、ぶっきらぼうに、画家は言った。しかし、画家に黙り込まれたくはなかった。Kは言った。「でも、そういう非公認の地位の方が、公認の地位より影響力をもつというのはありますよね。」「まさにわたしの場合がそうなのです。」と、画家は言う、額に皺を寄せながら、コクリと頷いた。「昨日もこの件で工場長と話をしました。あなたを助ける気があるのかとわたしは聞かれて、『いつの日か、その方がわたしのところに来られるのなら。』と、答えましたが、こんなにも早くお目にかかれるとは、嬉しい

限りです。本当に、重く事件がのしかかっているようですね。しかし、もちろん、そんなことは驚きでも何でもありません。ひょっとして、とりあえず、外套を脱ぎたいんじゃないでしょうか？」長居するつもりはなかったが、画家のこの申し出は大いにありがたかった。彼には、部屋の空気がだんだん息苦しくなっていた。隅に置かれた、どう考えても火の入っていない小さな鉄製のストーブの方に、すでに何度も目が行った。この部屋の蒸し暑さの理由が分からなかった。冬外套を脱ぎ、さらに上着のボタンも外していると、弁解しながら、画家が言った。「わたしは温かくしていなきゃいけないんです。でも、ここはとっても快適でしょう？ その点、この部屋は非常によい場所にあります。」これには、Kは何の言葉も返せなかった。そもそも彼が不快だったのは、温かさというより、むしろ蒸し返すような、ほとんど呼吸を妨げるような、ここの空気であった。この部屋では、もう本当に長いこと換気がされていなかった。部屋にひとつしかない、イーゼルの中の椅子にこの画家が座るために、Kにはベッドの上に座るよう勧めてきたことで、その不快さはさらに強まっていった。おまけに、Kがベッドの端にしか座らない理由を、画家は取り違えたようであった。それどころか、もっと楽にするようにと勧めてくるので、Kが戸惑っていると、ツカツカと近寄ってきて、彼をベッドとクッションの奥に押し込んでしまった。それから、また肘かけ椅子のところに戻ってくると、画家はようやくまともな質問をしたが、それはそれ以外のことをコロリとKに忘れさせた。「あなたは無実ですか？」と、彼は聞いてきた。「ええ。」と、Kは答えた。この質問に答えられたことが、しみじみと嬉しく感じられた。こんな風に、一私人（つまり、何の責任もない人間）と受け答えできたのが、とりわけ嬉しかった。これほど開けっ広げに聞いてこられたのは、初めてであった。この喜びを味わい尽くそうとして、さらに彼はこう続けた。「完全に無実なんです。」「そうですか。」と、画家が言った。俯いて、考えているようであった。突然、また顔を上げると、こう言った。「もし無実だとすれば、話は非常に簡単です。」Kの目の色はサッと曇った。自称裁判所の連絡員というこの男の話しぶりは、何も知らない子どものようなのではないかと。「もし無実でも、簡単じゃないですよ。」と、Kは言った。そういう色々なことにも関わらず、微笑んで、ゆっくりと首を振ることしかできなかった。「裁判所がその中に迷い込んでいる沢山の些事の方が重要なんです。そしてその些事が、元々は何もなかったところから、最終的には大きな罪を引っ張り出してくるのです。」「ええ、まあ、確かに。」と、まるで、Kが不必要に自分の考えを邪魔しているかのように、画家がそう言った。「でも、無実なんじゃないですか？」「ええ、まあ。」と、Kは言った。「そこが大事なんですよ。」と、画家が言った。反論しても、ビクともしなかった。とはいえ、断固とはしていても、確信してそう言っているのか、投げ槍で言っているだけなのか、その辺ははっきりしなかった。まずはそのことを確かめようと思って、Kはこう言った。「全く、あなたはわたしの何倍も裁判所についてご存知ですよ。もちろん、わたしは本当に色々な人たちから裁判所について聞いていますが、それ以外、何が分かっているのでもありません。でも、そこで皆が口を揃えて言っているのは、軽ければ起訴にはならないが、一旦、起訴されると、裁判所は被告人の罪を信じ込んで、その確信を捨てさせるのは極めて難しいのだと。」「難しい？」と、画家は聞くと、片手を高く突き上げた。「裁判所に確信を捨てさせるなんて、絶対に無理ですよ。このキャンバスに全員の裁判官を描いて、そのキャンバスの前で弁明をしてみせる方が、実際の法廷で弁明をす

るより、はるかにましな結果になるでしょう。」「そうですか。」と、Kは呟いた。この画家には探りを入れるだけのつもりだったが、そんなことはどこかに飛んでしまっていた。ドアの向こうの少女のひとりが、また口を開いた。「ティトレリ、その人、すぐに帰るんじゃないの?」「うるさい!」と、画家がドアに向かって叫んだ。「この方とお話しているのが、分からないのか?」しかし、少女はこの答えには満足せず、こう聞いた。「その人のことを描くの?」そして、画家が返事をしないので、さらにこう言った。「お願いだから、その人のことは描かないでね、イケ好かないんだから。」入り乱れていて、はっきりしなかったが、それに賛同しているらしい叫び声が聞こえた。画家がドアのところを飛んでいき、細い隙間ができるくらいにそこを開けると――そこには、嘆願するように伸ばされた、少女たちの打ちあわされた手があった――、こう言った。「静かにしていないと、君たち全員を階段の下に突き落とすぞ。この踏み段のところに座って、大人しくしているんだ。」おそらく、少女たちはすぐには従わず、だから、命令しなければならなかった。「踏み段の上に座るんだ!」そうして、初めて静かになったのであった。

「すみませんね。」と、またKの方に戻ってくると、画家が言った。ドアの方に、Kは顔を向けなかった。自分を守る気がこの画家にあるのか、どうやって守るつもりなのか、そういうことは、完全に相手に委ねてしまっていた。今度もまたジッと動かずにいると、画家が屈み込んできて、声が漏れないようにしながら、耳許でこう囁いた。「この少女たちも裁判所の人間なんですよ。」

「エエツ?」と、Kは聞き返して、頭を横に振ると、ジッと画家を見た。ところが、画家は再び肘かけ椅子のところに座ると、冗談半分、説明半分という感じで、こう言った。「本当に全てが裁判所に属していますからね。」「全然、気がつきませんでした。」と、ボソリとKが言った。画家による一般化の説明によって、少女たちに関する示唆からくるあらゆる懸念は取り除かれていった。それでも、Kはしばらくの間、ドアを見ていたが、その背後では、今はもう大人しくなって、少女たちが踏み段の上に腰を下ろしていた。ひとりの少女だけは、角材の隙間から一本の麦わらを差し入れて、それをゆっくりと上下させていた。

「裁判所についてまだよくご存知じゃないみたいですね。」と、画家が言った。両足をバラバラの方向に伸ばしながら、つま先で床をコンコンと叩いていた。「でも、無実なら、知らなくてもいいんじゃないんですか。わたしひとりでも救ってあげられますよ。」「でも、どうやって?」と、Kは聞いた。「なぜって、ついさっき、どんなに証明しても、裁判所は全く聞く耳をもたないって、仰っていたじゃないですか。」「聞く耳がないというのは、裁判所にもち込まれる証明に限った話です。」と、画家は言う、あなたは繊細な区分に気づけていないのですという風に、人差し指を立ててみせた。「その点、公式の裁判所の裏側、つまり相談室、廊下、例えば、このアトリエでやられることは事情が異なるのです。」今、ここで画家の口から漏れ出た話は、それほど荒唐無稽であるとは思われなかった。むしろ、これまで他の人たちから聞いた話とも、大いに符合するところがあった。いや、それどころか極めて有望ですらあった。弁護士の説明にもあったが、裁判官が個人的な関係に影響されやすいというのなら、見栄っ張りの裁判官と画家との関係は、とりわけ意味があり、いずれにせよ、過小評価されるべきではなかった。ちなみに画家は、Kが全力で掻き集めてきた支援者たちの輪の中に、実にうまい具合に嵌まり込

んでいた。かつて銀行では、彼の組織能力が誉めそやされていたが、自分だけの力で立つこの場所でも、それが究極の形で試されるよい機会が訪れたのであった。画家は、自分の説明がKに及ぼした効果を見定めた後で、どこか不安げにこう言った。「わたしがまるで法律家みたいに喋るのが気になりますか？ 裁判所の人たちとの引っつきりなしの交流から、大きな影響を受けていましてね。もちろん、そこから沢山の利益をえましたが、芸術的な衝動の大部分は失なわれてしまいました。」「最初、どうやって裁判官たちと知りあいになったのです？」と、Kは聞いた。本当に採用する前に、まず画家の信頼を勝ち取りたいと思っていた。「極めて単純です。」と、画家が言った。「この関係は相続したのです。父がすでに裁判所お抱えの画家でした。代々、継承される地位でしてね。また、そういうことなので、新参者は相手にされません。なぜって、色々な役人の階級を描写するための、余りにも雑多で、幾重にも渡る、何よりも秘密の規則があるのですが、そもそも、ある決まった家系以外、そのことを伝承されることがありません。例えば、その引き出しの中にも、父の書き物が入っていますが、誰にも見せることはありません。とはいえ、規則さえ分かれば、裁判官の絵を描くことはできます。ただ、書き物がなくても、わたしだけは、まだ沢山の規則を空んじていますから、やはり誰にもこの地位は脅かせません。それに、裁判官たちは、誰も昔の偉い裁判官のように描いて欲しいと思っていますが、それができるのもわたしだけですから。」「羨ましい価値ですね。」と、銀行での自分の地位を思い浮かべながら、Kが言った。「じゃあ、あなたの地位はビクともしないんですね？」「ええ、ビクともしません。」と、画家は言う、誇らしげに両肩をそびやかした。「だから、時々なら、訴訟を抱えているかわいそうな人たちを、無理してでも助けることができるのです。」「でも、どうやって？」と、たった今、画家がかわいそうだと呼んだ人たちは、自分のことではないと言わんばかり、Kが尋ねた。しかし、そんなことで気を散らされるはずもなく、画家はこう言った。「例えば、この事件の場合、あなたは完全に無実だということなので、次のように進めていきます。」自分が無実であると再び言及されたのが、Kにはもう煩わしかった。そういう発言によって、画家が、よい結果で訴訟が終わるのを自分が手を貸す前提にしようとしていると、時折、彼には感じられたのである（ちなみにこの前提は、そうすることによって、当然、崩れ去ってしまっていたが）。そういう疑いはあったが、Kは自分を抑えて、画家が喋るのをあえて止めることはしなかった。画家の助けを否定する気にはなれなかった。画家の助けを借りることは心に決めていた。それに、こちらの援助の方が弁護士のそれよりずっといかがわしさが少ないようにも感じられていた。それが悪気なく、開けっ広げに示されたので、はるかにましな感じがしたのである。肘かけ椅子をベッドの方に引き寄せながら、さらに抑えた口調で、画家はこう続けた。「初めにどんな種類の解放がお望みなのか、お聞きするのを忘れていました。選択肢は三つあります。本物の無罪判決、見せかけの無罪判決、引き延ばしです。本物の無罪判決は、むしろ、そうなるに越したことはありません。ただ、この種の解決に向けて、わたしが力になれることはありません。わたしの見立てでは、本物の無罪判決に向けて影響を与えられる人物は、ほとんどいません。おそらく被告人の無実が決め手になるのでしょう。あなたは無実なので、自分の無実だけを信じるといってもひとつのやり方です。しかし、その場合、わたしや他の誰かの援助を当てにすることはできないのです。」

この理路整然とした説明は、最初、Kを驚かせた。それでも、画家と同じように抑えた声で、彼はこう言った。「仰ったことが矛盾しているようですが。」「どの辺がです?」と、粘り強く画家は聞いて、笑いながら、椅子の背に身を横たわらせた。この笑いは、自分は画家の言葉にではなく、裁判所の手続きそのものの中に矛盾を見出すことに着手したという感じを、その時、Kの中に呼び起こした。しかし、それでもたじろぐことなく、彼はこう言った。「ついさっきは、いくら証明しても、裁判所は聞く耳をもたないが、それは公式の裁判所に限った話であると、あなたは言いました。ところが今度は、裁判所に対して無実でさえあれば、どんな助けも必要ないと、あなたは仰っています。まず、そこに矛盾があります。さらに、さっきまでは、裁判官に個人的な影響を及ぼすことは可能だと言っていたのに、今度は、いつの日にか、個人的な影響で、いわゆる本物の無罪判決に到達するのはありえないと仰っている。それが第二の矛盾です。」「そんな矛盾なら、簡単に説明できますよ。」と、画家が言った。「ここには、二つの別々の物事についての話が混在しています。ひとつは、法律に書かれた物事についての話。もうひとつは、わたしが個人的に体験してきた物事についての話。この二つを取り違えてはいけません。一方では、当然のことながら、無実であれば、無罪判決をえられるはずと、法律には書いてあります（もっとも、読んだことはありませんが）。しかし、他方では、裁判官が個人的な影響を受けやすいとは書かれていません。さて、ところで、わたしが体験してきたこと、それはまさにその反対でした。本物の無罪判決というのは、一度も聞いたことがありません。反対に、裁判官に影響を与えられたという話は、本当によく聞くのです。わたしが知っている全ての事件に無実の人がいなかったというのは、もちろん、ありえないのではないのでしょうか、そんなことがありますかね? あんなに沢山の事件があって、ひとつの無実もなかったなんて?　すでに子どもの頃、家で父が訴訟について話してくれた時分から、わたしは父の話にジッと耳を傾けてきました。アトリエにやってくる裁判官たちも、よく裁判所の話をしていました。われわれの集まりでは、ほぼそれ以外の話はないのです。自分で裁判所に行けるようになると、わたしはいつでもそのことを最大限に活用しました。重要な局面にある数え切れない訴訟を傍聴して、目に入る全てのものを追いかけてきました。しかし――白状すれば――、ただのひとつも本物の無罪判決は出なかったのです。」「やっぱり、本物の無罪判決はないのか。」と、まるで自分に向かって、自分の希望に向かって語りかけるかのように、Kが言った。「しかし、このことは、すでに裁判所について、わたしがもっている考えを裏書きしているのに過ぎません。つまり、この点からも、裁判所は役目を果たしているとはいえないのです。絞首刑吏がひとりいれば、全ての裁判所のかわりができます。」「一般化のし過ぎはよくありませんね。」と、不服そうに画家が言った。「わたしは自分の体験について話したまでです。」「それで、全然、十分です。」と、Kが言った。「それとも、昔、無罪判決についてお聞きになったことがあるんだとか?」「そういう無罪判決は、」と、画家が答えた。「むろん、あったとは伝えられています。もっとも、それを確かめるのは極めて困難です。裁判所の最終的な決定は、全く公開されていません。そこには、裁判官ですら近づけないのです。結果として、古い裁判事件は伝説としてだけ残ります。ただ、これらの伝説の半分以上には、本物の無罪判決が含まれています。ですから、信じてもらっても構わないのです。しかし、証明はできません。かといって、なおざりにしてよいというのでもありま

せん。何かの真理が混ざり込んでいるのは、間違いありません。さらにいえば、それは極めて美しくもあります。わたし自身、そういう伝説から着想をえた絵を何枚か描いたことがあります。」「単なる伝説では、意見は変わりませんよ。」と、Kが言った。「実際、裁判所でその伝説を引きあいに出す訳にもいかないでしょう？」画家は笑った。「いきませんね。できない話です。」と、彼は言った。「だったら、これ以上、この話をしても意味がないですよ。」と、Kは言った。しばらくの間は、どんなに荒唐無稽に思われようと、別の報告とどんなに矛盾しているように見えようと、画家の意見は受け入れてみよう、彼は思っていた。今の画家の話の全てが正しいのか、それを吟味し、反論している余裕は、彼にはなかった。決定的ではないにせよ、何かの形で援助をしてくれるように、画家を仕向けられるのなら、それはそれで大成功であった。そこで、彼はこう言った。「だったら、本物の無罪判決は脇に置いて、残りの二つの選択肢の話をししましょうよ。」

「見せかけの無罪判決と引き延ばし。問題になるのはそれだけです。」と、画家が言った。「ところで、それについてお話しする前に、上着を脱ぎませんか？ 暑さが堪えているんでしょう。」「そうなんです。」と、Kが言った。それまでは、画家が説明することだけに注意が向いていたが、今、暑さにも意識が向かったことで、額からはドッと汗が吹き出していた。「ほとんど堪えられません。」Kが不快な気持ちでいたのは分かっていましたという風に、画家が頷いてみせた。「あの窓は、開けられないのですか？」と、Kが聞いた。「できません。」と、画家が答えた。「一枚きりの嵌め込みガラスで、開けられないのです。」窓のところまですぐ画家が飛んでいって、ガラッとそこを開けてくれたら（あるいは、すぐに自分が飛んでいって、そこを開けられたら）と、ずっと思っていたことに、今、彼は思い至った。口を大きく開けて、その霧を吸い込もうという構えすら取ろうとしていた。そこに、ここと外気が完全に閉ざされているという感覚が急に襲ってきて、クラクラする眩暈を彼は感じた。脇に置かれた羽根布団を軽く片手で叩きながら、弱々しい声で、彼はこう言った。「ここは本当に不快で、不健康です。」「いやいや、それは違いますよ。」と、窓のことを弁解しながら、画家が言った。「ここでは、開かないことで、かえって二重窓より一枚ガラスの方が、暖気を保てるのです。換気がしたければ（どうしてもするべきじゃありませんが）、そこいら中の材木の隙間から外気が入るので、ドアのひとつか両方を開ければ、それで十分です。」この説明を聞いて、少し安心したKは、その二番目のドアを探そうとして、辺りをキョロキョロと見た。そのことに気がつく、画家はこう言った。「そのドアなら、あなたの後ろです。ベッドで隠さなければなりませんでした。」今、初めて、壁のところにある小さなドアを彼は見い出した。「とにかくここは、アトリエとしては、全てが余りにも手狭なのです。」と、まるでKの非難の矛先をかわそうとするかのように、画家が言った。「全てがうまくいくように、整えなければなりませんでした。ドアの前にベッドがあるのは、もちろん、極めてよくないことです。例えば、今、わたしが描いている裁判官は、いつもベッドの脇のドアから入ってきますが、そのドアの鍵を渡してあるので、不在時でも、このアトリエで待っていられます。さて、ところで、いつも、彼は早朝、まだわたしが眠っている時にやってくるのです。もちろん、ベッドの脇のドアが開けば、どんなに深い眠りの中にあっても、現実の世界に引き戻されます。早朝、ベッドの上に彼がやってきた時のわたしの出迎いの悪態の数々を聞けば、裁判官へのあなたの畏敬の念も吹き飛ぶでしょう。もっとも、鍵

を取り返すという手もあるのですが、余計にこじれるだけかもしれません。ここではどこのドアも、ちょっと力を入れたら、蝶番から外れてしまいますから。」この話をしている間も、上着を脱ぐべきかどうかで、Kは迷っていた。しかし、そうしないと、最終的に、これ以上、ここでの長居はできないと思ったので、上着は脱ぐことにした（とはいえ、話が終われば、すぐに羽織るつもりで、膝の上には載せておいた）。上着を脱ぐやいなや、少女のひとりがこう叫んだ。「もう、上着まで脱いじゃったわよ！」この光景そのものを見るために、少女たち全員が、隙間に殺到しているらしい物音がした。「つまり、少女たちはこう思っているのです。」と、画家が言った。「わたしが肖像画を描こうとして、だから、あなたは上着を脱いだのだと。」「そうか。」と、Kは言ったが、今はもう、ワイシャツ姿で座っているのに、それでも全く快適さは感じられず、少しも寛いだ気分にならなかった。ほとんど不愉快さすら滲ませながら、彼はこう聞いた。「残りの二つの選択肢は、何でしたっけ？」その用語を、また彼は忘れてしまっていた。「見せかけの無罪判決と引き延ばしです。」と、画家が言った。「どちらを選ぶのかは、あなた次第です。どちらも、わたしの手助けで到達可能です（もちろん、努力なしでは不可能です）。これらの観点の違いは、見せかけの無罪判決が、集中的で一時的な努力を要求するのに対して、引き延ばしの方は、はるかに少ない、しかし、持続的な努力を要求してくる点にあります。さて、ではまず見せかけの無罪判決から。こちらをお望みなら、わたしが全紙版の紙に無実の証明を書いて差し上げます。この種の証明のための文章は父から受け継いでおりますので、そこには隙はありません。それから、顔なじみの裁判官たちの間を、わたしがこの証明書をもって回ります。要するに、例えば、今、わたしが描いている裁判官が、今日の午後、モデルをしにやってきたら、その証明書を見せるということをするのです。証明書を見せて、あなたの無実を説明して、あなたの冤罪を保証します。単なる表面的な保証じゃありませんよ。実質的で、拘束力のある保証です。」画家の眼差しには、その種の保証という重荷を、あなたがわたしに課しているのだという非難の色が浮かんでいた。「ご親切、痛み入ります。」と、Kは言った。「で、裁判官は、あなたのことを信じてくれても、本物の無罪判決は下りないのだと？」「言った通りです。」と、画家が答えた。「ちなみに、わたしの言うことを信じようとする裁判官も出てはくるでしょう。しかし、多くの裁判官は、例えば、あなたを連れてくるように言うと思います。その時は、まあ、一度は、同行してもらおうことになりましょう。もっとも、そうなれば、もう半分くらいは勝ったも同然です。当然、前もって詳しく、この裁判官にどう関わるべきかをわたしが教えますから、とりわけ、そういうことになります。はるかに厄介なのは――そういうこともありえます――、最初から拒絶してくる裁判官です。わたしの方では色々な試みを怠るつもりがなくても、こういう裁判官は、諦めなければなりません。それはそれで構いません。なぜなら、ここでは、ひとりの裁判官が決定権をもっているわけではありませんから。さて、この証明書に対して十分な数の裁判官のサインが集まったら、それをもって、あなたの訴訟を担当している裁判官のところに行きます。ひょっとして、その裁判官もサインをしてくれるかもしれません。そうなってくると、全てが前よりももう少しだけ早く進み始めます。普通、本当にここままでになれば、総じてそれ以上の障害が生じることはまずありません。そうなってくれば、被告人にとって最高の確信に満ちた時がやってくるのです。奇妙な話ですが、実際のところ、この時期にある

人の方が、無罪判決を受けた後の人より、ずっと確信に満ちているくらいなのです。こうなれば、特に骨を折ることもありません。証明書の中で一定数の裁判官の保証を手に入れられているので、何の気兼ねもなく、担当の裁判官は無罪判決を下すことができます。もちろん、色々の形式的な手続きを踏んだ後にはなりますが、わたしやその他の知りあいにも、間違いなく、好意でそれをやってくれるでしょう。そうして、裁判所を出て、あなたは晴れて自由の身になれるのです。「それで、本当に自由の身になれるのですね。」と、ためらいながら、Kが言った。「ええ。」と、画家が言った。「ただ、単なる見せかけの自由、あるいはちょっとうまい言い方でいえば、暫定的な自由に過ぎませんが。なぜって、わたしの知りあいが属している最下級の裁判官には、最終的な無罪判決を下す権限がありませんから。そういう権限は、あなたやわたしや、われわれ全員がどうやっても辿り着けない、最上位の裁判所だけがもっているのです。そこがどんなところかは知りません。ついでに言えば、知りたくもありません。結局、その裁判官には、我々を起訴から解放できるほどの大きな権限はないのです（起訴から引き離しておく権限ならあります）。どういうことかということ、そういうやり方で無罪判決を受けても、一時は起訴から遠ざかりますが、やはり、それは引き続きあなたの頭上を漂っていて、上からの命令が発せられるや、すぐさま再起動されるのです。わたしは、裁判所とはよい関係にありますので、本物の無罪判決と見せかけの無罪判決の区別が、裁判所事務局向けの規定の中でどのように表現されているのかをお伝えすることができます。本物の無罪判決の場合、訴訟文書は完全に廃棄されます。訴訟手続きからも完全に姿を消します。起訴だけでなく、訴訟、それどころか無罪判決があったことすら、取り消されるのです。全部、取り消されます。見せかけの無罪判決の場合は、事情が異なります。書類は、無実の証明、無罪判決、無罪判決の根拠という形でその数を増やしていきますが、修正はされません。ちなみに、書類は訴訟手続きの中に残ったままです。そして、裁判所事務局との絶え間ないやり取りからくる要請で、上位の裁判所にもち込まれたり、下位の裁判所に差し戻されたり、そうやって、大小の振幅や長短の停滞を伴いながら、振り子のよう上下するのです。どうなるのかは、予測できません。端から見ていると、全てはすっかり忘れられて、書類もどこかに掻き消えて、無罪判決は確定したと思えることがよくあります。ただ、事情通はそんなことは信じません。書類が掻き消えるとか、裁判所で何かが忘れられるというのは、ありえないのです。そして、ある日のこと――そんなことは誰も予想していないある日――、裁判官が、いつもより注意深くある書類を手にとって、まだこの事件では起訴が有効であると気がつく、即時の逮捕を命令するのです。ここでは、わたしは見せかけの無罪判決と新たな逮捕の間には、長い時間が経過すると仮定しています。それはありえることで、そういうケースを聞いたこともあります。しかし、裁判所からの無罪判決が家に届いたその日に、もうそこに代理人が、再びその男を逮捕するために待っているというのも、同じようにありえることなのです。むろん、そうなれば、自由な生活はおしまいです。「それから、訴訟がまた改めて始まる？」ほとんど信じられないという気持ちで、Kがそう聞いた。「もちろん、」と、画家が言った。「訴訟がまた改めて始まります。しかし、そこでも前と同じで、見せかけの無罪判決を勝ち取る可能性は、まだ残っています。もう一度、全力を集中すべきであり、諦めてしまっただけではありません。」

おそらく画家は、Kから受けた、少し気落ちしているという印象に従って、この最後の言葉を口にしたのであった。「それはそうですが、」と、画家によるある種の暴露行為の先を行くようにして、Kがこう聞いた。「二度目の無罪判決の獲得は、最初の無罪判決の獲得より、難しいんじゃないですか？」「この点については、」と、画家が答えた。「はっきりしたことは言えません。おそらくあなたは、訴訟の中で二度も逮捕されることで、被告人にとってはよくない影響を裁判官が被るとでも思っているのでしょうか？ そんなことはありません。無罪判決を下した時にはもう、裁判官はこの逮捕を予想しています。だから、この状況は逮捕に何の影響も与えないのです。ところで、裁判官の気分というのは、事件に対する法律的な判断と同じで、それとは別の無数の理由で変化していきます。だから、二度目の無罪判決に向けた努力は、この変化していく状況に適合しているべきで、通常、最初の無罪判決と同じくらい、力を入れなければならないのです。」「それはそうですが、この二番目の無罪判決も、それで終わりになる訳ではないのでしょうか。」そう言うと、Kは無愛想に顔を背けた。「もちろんです。」と、画家は言った。「二度目の無罪判決に続いて、三度目の逮捕、三度目の無罪判決に続いて、四度目の逮捕。そういう風に、続いていきます。このことは、見せかけの無罪判決という概念の中に、すでに表わされていますが。」Kは黙り込んだ。「どうやら、見せかけの無罪判決は、あなたのご都合にはあわないようですね。」と、画家は言った。「引き延ばしの方があっているかもしれませんね。引き延ばしがどういうものか、お話ししましょうか？」Kは頷いた。画家は、肘かけ椅子にだらしく身を凭せかけた。ナイトガウンの胸のところが、大きくはだけていた。その下に手を滑り込ませると、彼はポリポリと胸や脇腹を掻いた。「引き延ばしというのはですね、」そう画家は言う、完全に的を射た説明を探すかのように、一瞬、前の方に視線を向けた。「引き延ばしというのは、永遠に訴訟を最下位の訴訟段階に据え置く点に本質があります。それをなし遂げるには、被告人と協力者、中でも特に協力者が、裁判所と絶え間なく、個人的な接触をもち続けることが必要になってきます。繰り返しますが、そのためには、見せかけの無罪判決の獲得のような懸命の努力はいりません。むしろ、はるかに多くの注意深さが必要になります。訴訟を見失ってははいけません。あなたの訴訟を担当する裁判官のところに、定期的な間隔を置いて、特別な機会にはなおさら、顔を出すようにするのです。どんなやり方でもよいので、機嫌を損ねないようにして下さい。裁判官と個人的な繋がりがなくても、そのことで直接的な相談を諦めるのはよくありません。知りあいの裁判官を通じて、影響を及ぼすようにするのです。この点を取り零さずに進めれば、訴訟は最初の段階から一步も前に踏み出していないと、十分な確信をもって仮定することができます。確かに、訴訟が終わってくれる訳ではありません。しかし、解放されたのと同じくらい、被告人は有罪判決から守られることになるのです。見せかけの無罪判決と比べて、引き延ばしの方は、被告人の将来がはっきりしているという点で有利なところがあります。被告人は、突然の逮捕というショックからも守られていて、それ以外の状況がかなり思わしくなくても、見せかけの無罪判決の達成にはつきものの、努力や焦燥を引き受けなければという不安に駆られる必要もありません。もちろん、被告人の目から見て、引き延ばしにも看過できない不利な面はあります。ここでわたしが考えているのは、引き延ばしでは、被告人が決して解放されることがないという面ではありません（見せかけの無罪判決でも、本当の意味では、被告

人は、やはり解放されませんから)。それは、別の意味での不利な面なのです。訴訟は、少なくとも見せかけの理由を提示しておかなければ、少しもジッとしていません。つまり、訴訟では、何かが外に向かって生じ続けなければならないのです。時々、色々な指示が出されたり、被告人が尋問されたり、審理されたりということが、行なわれていなければなりません。それが人工的に閉じ込められている小さな環の中で、とにかく訴訟は常に回転し続けていなければならないのです。当然、そこには被告人にとってのある種の不快さがつきまといまいます。しかし、一方で、この不快さを最悪のものとするのもよくないことなのです。実際、全ては表向きの話に過ぎません。要するに、例えば、尋問について言うのであれば、それは本当に時間を取らないものに過ぎないので、時間がない、あるいは気が乗らないのなら、欠席しても構わないのです。それどころか、ある種の裁判官たちに至っては、長期に渡って、お互いに指示をあらかじめ取り交わしておくことすら可能です。つまり、その性質上、時々、担当の裁判官のところ顔を出しておきさえすればそれでよいのです。」最後の言葉を聞きながら、もうKは上着を腕にかけて、立ち上がっていた。「もう立っちゃったわよ！」と、ドアの向こうで声がした。「お帰りですか？」と、こちら腰を浮かせた画家が聞いた。「あなたをここから駆り立てているのは、おそらくこの空気ですね。これは大変に困ったことだ。話すことが、まだ山のように残っていたのに。かいつまんでお話しできたのなら、よかったです。とはいえ、説明は分かりやすかったというのを、期待はしております。」「もちろん、そうでした。」話を聞こうと自らに強いる余り、頭痛がしていたKが言った。このような追認にも関わらず、まるで帰途につくKに慰めを与えるかのように、もう一度、全てを要約しながら、画家がこう言った。「二つの方法には、被告人の有罪判決を避けるという共通点があります。」「でも、本物の無罪判決も避けられてしまうんじゃないですか。」と、それを知ったことが恥でもあるかのように、小声でKがそう言った。「問題の核心を捕らえていらっしゃる。」と、画家が早口で言った。冬外套の上にKは手をやったが、上着に袖を通す決心はつけられなかった。全てにケリをつけて、新鮮な空気の中に飛び込んでしまえば、最高だったのだが。もう少女たちは早合点して、Kが上着を着る気になったと言いつつあっていたが、それでも、彼は袖を通す気にはなれずにいた。何とか、Kの気持ちを汲み取ってやるのが、画家には重要なことになっていた。それゆえ、画家はこう言った。「あなたは、きっとまだわたしの提案を決めかねていらっしゃる。それはよくあることです。それどころか、わたしは、すぐには決めずにおくのお勧めしようと思っておきました。有利と不利とは紙一重です。全てを正しく評価しなければなりません。もっとも、余り沢山の時間を無駄にするのも、よくはありませんが。」「すぐに戻らなくて。」と、急に決心がついて、上着に袖を通し、肩に外套を引っ掛けながら、ドアに向かって足を急がせているKが言った。ドアの向こうでは、今や、少女たちは叫び始めていた。ドア越しに叫んでいる少女たちが見えるようだとKは思った。「そうは言っても、約束は守ってもらわないと。」と、彼を送り出すでもなく、画家が言った。「でなければ、自分からお願いするため、わたしが銀行に出向くまでです。」「そんなことはいいので、サッサとドアを開けて下さい。」と、Kは言う、把手をグッと引いたが、それは少女たちの力で、外側から押さえつけられていた（抵抗する力でそれと分かった）。「少女たちにつきまといたいんですか？」と、画家が聞いた。「それより、こっちの出口を使って下さ

い。」そうして、ベッドの奥にあるドアを差し示した。言わんとすることを理解すると、Kはベッドの方に飛んでいった。ところが、そちらのドアは開けずに、ベッドの下に潜り込むと、そこから画家がこう聞いてきた。「もう少しお待ち下さい。あと一枚、絵をご覧になりませんか？ お売りすることもできますよ。」こいつは無下にはできないぞと、Kは思った。実際のところ、画家は彼のことを引き受けて、この先の手助けもしようと約束してくれたのに、自らの健忘症から、その手助けに対する報酬については、まだ全く話すらできずにいた。そのため、今は、画家を退けることもできず、アトリエから出たいと忍耐で身体を震わせながら、彼は絵を見させられることになった。額に入っていない沢山の絵を画家は引っ張り出してきたが、それらは埃まみれであった。画家が、一番上の絵から埃を吹き飛ばそうとすると、しばらくの間、それはKから呼吸を奪いながら、目の前をグルグルと旋回していた。「荒野の風景です。」と、画家は言う、Kに絵を差し出した。ヒョロヒョロした二本の木が描かれていた。それらは大きく間隔を空けながら、暗色系の草っ原からニョッキリと生えていた。背景には、様々な色彩からなる落日があった。「美しい。」と、Kは言った。「これをもらいます。」と、軽はずみに、余りにもぶっきら棒に言葉が口から出たので、画家がそれには腹を立てず、二枚目の絵を床からもち上げた時、Kはホッと胸を撫でおろした。「こっちは、その絵とは反対の傾向の作品です。」と、画家は言った。反対の傾向を狙ったのかもしれないが、一枚目との違いはほとんどなかった。近景に木と草があり、背景には落日があった。しかし、そんなことはどうでもよかった。「両方とも美しい風景画です。」と、彼は言った。「二枚とも買いましょう。事務所の壁にかけますよ。」「モチーフがお気に召しましたか。」そう言うと、三枚目が出てきた。「たまたまもう一枚、似たような絵がありまして。」しかし、似ているどころか、完全に瓜二つの荒野の風景であった。画家は、古い絵を完売するチャンスをうまく使い尽くそうとしていた。「これももらいます。」と、Kは言った。「三枚でお幾ら？」「それについては、次の機会にお話しします。」と、画家は言った。「今、あなたはお急ぎだし、われわれは連絡しあえる仲間だから。ついでに言えば、絵がお気に召したようで嬉しいです。今度、ここの下にある絵を全部、おもちしますね。静まり返った荒野の風景。沢山の荒野の風景を描いてきました。余りにも陰鬱であるからと、この種の絵を多くの方は敬遠します。しかし、そうではない人々（あなたもそのひとりですよ）は、まさにその陰鬱さを愛するのです。」しかし、Kは今、乞食画家の職業経験に耳を傾けているつもりはなかった。「全部、絵を包んで下さい！」と、画家の話を遮りながら、彼は叫んだ。「明日、使用人をここにやって、もって帰らせませんから。」「その必要はありません。」と、画家が言った。「同行できる荷役夫なら、すぐにご用意できます。」そして、ついにベッドの上に身を屈めながら、ドアを開けたのであった。「恥ずかしがらず、ベッドまで上がってきて下さい。」と、画家が言った。「ここに来る人は、皆、そうしていますから。」勧められなくても、遠慮などしなかった。それどころか、もう羽毛布団の真ん中まで片足を踏み入れていた。その場で、開いたドアから中を覗いたが、またヒョイツと彼は足を引っ込めた。「どうしましたか？」と、画家が聞いた。「何を驚いていらっしゃる？」と、こちらはこちらで驚いている画家がそう聞いた。「裁判所事務局ですよ。ここが裁判所事務局だって、知らなかったんですか？ 裁判所事務局なんて、ほとんどどこの屋根裏部屋にでもあるじゃないですか。どうして、ここだけそうじゃないはずが？

わたしのアトリエも、本来は裁判所事務局の一部ですが、裁判所から自由に使ってもいいと言われたのです。」ここが裁判所事務局だということには、さほど驚かなかった。主に驚いたのは、自分自身、つまり、裁判所にまつわる事柄に対する自らの無知についてであった。いつも準備万端なこと、不動心、左側に裁判官がいる時、ポケットと右側を見ていないこと、それが被告人としての行動の基本原則だと、彼は思っていた――そして、何度もその基本原則を彼は犯してしまっていた。目の前には長い廊下が延びていて、そこからは一筋の空気が流れてきていた。それは、アトリエにひけを取らない息苦しい空気であった。廊下の両側にはベンチが置かれていたが、その様子は、Kを所管する裁判所事務局の待合室とソックリであった。裁判所事務局の仕様には、細かい規定があるらしかった。今のところ、そこで訴訟当事者の往来はさほど多くなかった。男がひとり、半分横になりながら腰を下ろして、ベンチの上に突っ伏しながら、寝ているようであった。もうひとり、廊下の突き当たりの薄暗がりの中に立っていた。今、Kはベッドを踏み越えたところであった。絵をもちながら、画家がこれに続いた。すぐにあの廷吏にバッタリと出くわした――今は、どの廷吏も金のボタンで見分けがついた（普通のボタンに交じって、平服の上に金のボタンを着けていた）。――絵をもちながら、Kに同伴するようという任務を、画家は廷吏に与えた。進めば進むほど、ますます足がふらついてきた。彼はハンカチを口に当てた。もうちょっとで出口というところで、あの少女たちがワラワラとつめ寄ってきた（やはり、Kは逃げ切れなかった）。明らかに、アトリエの二番目のドアが開いたのを見て、こちらから入ろうと回り道をしてきたのであった。「これ以上、お供はできません！」と、少女たちに押しまわられながら、笑みを浮かべて、画家が叫んだ。「またお会いしましょう！ 考え過ぎはいけませんよ！」Kはもう、後ろにいる画家の方は振り返らなかった。裏通りで自分の方に向かってきた最初の馬車に、ヒョイと彼は飛び乗った。気懸かりは、どう廷吏を厄介払いするかであった。ずっと金のボタンが気になっていた（それがなければ、おそらく誰の目も引かなかったであろう）。その勤勉さゆえ、廷吏はさらに馭者台までよじ登ろうとしてきたが、Kは彼を蹴落としてやった。銀行の前まで着くと、とっくに正午は過ぎていた。馬車に絵は置いておきたかった。しかし、何かの拍子で、画家に絵で自分の証明をすることになるのが、彼は恐かった。それゆえ、事務所まで絵を運ばせると、少なくともここ数日はそれを支配人代理の目に触れないところに置くために、机の一番下の引き出しの中に鍵をかけて入れておいた。



## 第八章

## 第八章 商人ブロック、弁護士への解約通知

最終的に、それでも弁護士からは代理権を取り上げようと、Kは腹を決めた。それでよいのかという疑念は消えなかったが、その必要性を確信する気持ちの方が強くなっていった。弁護士のところに行く日、その決心はKから職務能力を大いに奪い、とりわけ仕事の手は止まり、遅くまで事務所に残ることになった。ようやく弁護士の家の門の前に立った時には、もうとうに十時を過ぎていた。弁護士には電話や手紙で解約通知をした方がよかったのか、個人的な話しあいはかなり気まずいものになるのだろうか、ベルを鳴らす前、彼はジイッと考え込んでいた。それでも、最終的に、Kはそのことを止めなかった。それ以外のどんな解約通知の方法を取っても、それらは沈黙や二、三の形式的な言葉で受け止められて、レーニが何かを探り出そうとしない限り、この弁護士が解約通知をどう受け取ったのか、決して侮れないこの弁護士の意見によれば、この解約通知がKにどんな結果をもたらすとされたのか、Kには分からなかったのである。だが、弁護士がKと差し向かいに座って、解約通知に驚いてくれるのであれば、向こうには手の内を明かすつもりがなくても、その顔色や振る舞いで、知りたい全てを簡単に手に入れられるのである。それどころか、弁護はこの弁護士に委ねて、解約通知は引っ込めた方がよいと得心するというのも、ありえる話であった。

例の通り、ドアのところでは最初に鳴らした呼び鈴は、全く役に立たなかった。「レーニなら、サッサと来るのに。」と、Kは思った。しかし、いつものような、別の訴訟当事者による割り込みがないのであれば（例えばナイトガウンの男やそうでない誰かが、うるさくつきまとい出すとか）、それはすでにひとつの有利な点であった。再びボタンを押している間、Kは反対側のドアの方に顔を向けていたが、今回はそちら側のドアは開かなかった。最後に、弁護士のドアの覗き窓のところに、二つの目が現われたが、それはレーニの目ではなかった。何者かによってドアが開けられたが、その男は、しばらくの間はまだ抗がいながら、部屋の内側に向かって大きな声を出していた。「あの方がいらっしやいました！」それから、ようやく完全にドアが開いた。Kはそのドアに身体を押し当てていた。なぜなら、すでに男の背後の別の部屋のドアのところで、慌てた様子で鍵穴に鍵を差し込む音が聞こえたのである。それゆえ、ようやく目の前でドアが開くと、彼はズカズカと控えの間の中に入っていったが、そこでは、二つの部屋を繋ぐ廊下を抜けて、レーニが下着姿で逃げていくのが見えた（ドアを開けた男の警告の叫びは、そのレーニに向けられたものであった）。ちょっとの間、彼はそれを目で追っていたが、その後、ドアを開けてくれている男の方にも顔を向けた。顔一面に髭を生やした、小柄で瘦

せた男が、ろうそくを手にもっていた。「ここで雇われている方ですか？」と、Kは聞いた。「いいえ。」と、男が答えた。「この人間じゃありません。こちらの弁護士に、代理人をしてもらっているだけです。ある司法事件の関係で、こちらにきています。」「上着もなしで？」と、Kは聞くと、手の動きで、間違えだらけの男の服装の方に注意を促した。「アッ、すみません！」と、男は言う、そういう状況を自分の目で見るのは初めてだという風に、ろうそくで自分の姿を照らし出してみせた。「レーニはあなたの恋人ですか？」と、ポツリとKは聞いた。男は足を少し開いて、帽子を手にもったまま、両手を後ろで組みあわせていた。丈夫なオーバーコートがあったことで、Kはすでに自分がこの痩せた小男をはるかに凌駕しているのを感じていた。「まさか。」と、男は言う、驚いてかばうような感じで、片手を顔の前に差し出した。「ありえませんが、何てことをお考えになるのです？」「どうやら、信じてよさそうですね。」と、微笑みながら、Kが言った。「そんなことはともかく、どうぞ中にお入り下さい。」帽子で合図しながら、男はKに自分の先を歩かせた。「ところで、お名前は？」と、歩きながら、Kが聞いた。「ブロック、商人のブロックと申します。」と、小男は言う、自己紹介すると同時に、クルッと向きを変えた。しかし、男をそのままにしておくKではなかった。「それは本名ですか？」と、Kは聞いた。「もちろんです。」それが答えであった。「どうして疑うのです？」「本名を隠す理由があると思ったのです。」と、Kは答えた。彼は、自由な自分を感じていた。それは、こういう場合でもなければ、外国で下層の人間と話をしている、自分に関することは全て伏せておきながら、何か別の誰かの利害について、我関せずという感じで符丁をあわせておいて、そうやって相手をのぼせ上がらせておきながら、その時の気分でパッと急に落とすこともする、そういう時しか感じられない自由であった。弁護士の執務室のドアのところでハタと立ち止まると、Kはそこを開けて、恭しく先を進む商人に大きな声でこう言った。「そんなに急がなくてもいいんだよ！　ここをろうそくで照らしてくれ！」そこにはレーニが潜んでいると、Kは睨んでいた。しかし、その部屋を隈なく商人に捜させたものの、何も出てはこなかった。例の裁判官の絵の前では、商人のズボン吊りを後ろから掴んで引き止めた。「この絵のことはご存知？」そう聞くと、人差し指で高いところを差し示した。商人はろうそくを高く掲げて、上の方を向いて、目をしばしばさせながら、こう言った。「裁判官の絵ですね。」「高位の裁判官でしょうか？」と、Kは聞くと、男が絵から受けた印象を吟味するために、商人の斜め前に立った。商人は感嘆しながら、上を向いていた。「高位の裁判官です。」と、彼は言った。「大して見る目がないんですね。」と、Kは言った。「低位の予審判事の中でも、最低辺の予審判事ですよ。」「今、思い出しました。」と、商人は言う、ろうそくを下に置いた。「そんな話を、前に聞いたことがあります。」「そうなんでしょうね、当然。」と、Kは大きな声を出した。「当然、あなたが知っているはずというのを、わたしが忘れてしまいました。」「でも、どうして、わたしが知っているだなんて、一体、どうして？」と、両手でKに押されて、ドアの方まで歩かされながら、商人がそう聞いた。外廊下まで出ると、Kがこう言った。「レーニがどこに隠れているのか、やっぱりご存知なんでしょう？」「隠れている？」と、商人は言った。「そんなことはありません。おそらく、彼女は厨房で弁護士のためにスープを作っています。」「どうして、すぐに言ってくれなかったんです？」と、Kは聞いた。「本当にご案内しようと思っていました。でも、またあなたが呼び止めたり

するものですから。」と、矛盾する命令で、自分は混乱させられたと言わんばかり、商人が答えた。「きっと抜け目なくやったとお思いなのでしょう。」と、Kは言った。「じゃあ、連れて行って下さい！」厨房には、まだ彼は入ったことがなかった。そこは、驚くほど広く、あらゆる設備が整っていた。竈だけでも、通常の三倍はあった。しかし、その時の厨房には、入り口に吊るされた一個の小さなランプしか明かりがなく、それ以外の細部は見極められなかった。いつものように、竈には白いエプロンを着たレーニがいて、アルコールの焰の上にかけた深鍋の中に、卵を割り入れていた。「こんばんは、ヨーゼフ。」と、流し目を使いながら、彼女が言った。「こんばんは。」と、Kは答えて、脇の方に置かれた肘かけ椅子を片手で示して、そこに商人が座るように言うと、言われた通り、商人はそこに腰を下ろした。それから、彼はレーニのすぐ後ろまでやってきて、女の肩越しに身を乗り出しながら、こう聞いた。「あいつは誰だい？」すると、片手でKのことを抱いて（もう片方の手では、スープを掻き回していた）、自分の顔の前にもってきながら、レーニが言った。「気の毒な人よ、可哀想な商人で、確かブロックといったわ。ちょっと、よくあの人のことをご覧になって。」彼らは二人して後ろを向いた。商人は、Kが示した肘かけ椅子に座って、ろうそくをもっていたが、もう光は不要だからというので、それにフッと息を吹きかけて、煙が出ないようにしながら、芯を指で押さえていた。「君は、下着姿だったね。」と、Kは言う、また女の頭を竈の方に向けさせた。女は黙っていた。「あいつは君の恋人かい？」と、Kは聞いた。女は、スープ鍋に手を伸ばそうとしていたが、その両手をギョッと掴むと、Kはこう言った。「とにかく答えてくれ！」彼女はこう言った。「執務室に行きましょう、全部、そこで話しますから。」「駄目だ。」と、Kは言った。「ここで説明してくれ。」

Kにぶら下がりながら、女はキスをしようとした。しかし、それを撥ねつけると、Kはこう言った。「今は、君からのキスを受けたくない。」「ヨーゼフ。」と、レーニは言う、哀願するように、そして真っ直ぐに、Kの瞳の中を覗き込んだ。「でも、あなたは、ブロックさんになんか嫉妬しなくなるわ。——ルーディ、」それから、商人の方を向くと、こう言った。「もう、助けてちょうだい、見ていたんでしょう、わたし、疑われているのよ。そのろうそくは、下に置いて。」注意散漫のようではあったが、彼は完全に事態を掌握していた。「どうしてあなたが嫉妬しなければならないのか、さっぱり訳が分かりません。」ほとんど当意即妙とはいえなかったが、商人はそう言った。「本当のところ、わたしにも分かっていません。」そうKも言う、笑いながら、商人の方にジッと目をやった。レーニも大きな声で笑いながら、Kがぼんやりしているのをうまく使って、Kの片腕をサッと掴むと、こう囁いてきた。「今は、あんな男のことは放っておきましょう。この男がどういう素性の人間か、あなたにはもうお分かりでしょう。この男のことは、ちょっと面倒を見ているだけよ。だって、弁護士の上得意なんですもの。それ以外に理由なんてないわ。で、あなたはどうするつもり？ まだ今日も弁護士と話をするの？ 今日あの方は体調を崩しているけど、お望みなら、取り次いでくるわ。でも、今晚はわたしのところにきてね、きっとよ。だって、もうずっと長い間、いらしてないんだもの。あの弁護士ですら、どうしてるんだって聞いてくるわ。訴訟をなおざりにしては駄目よ！

わたしも、見聞きした色々なことをお知らせします。まずはまあ、マントをお脱ぎになって！」彼女は彼が脱ぐのを手伝い、帽子も取ってやると、それを引っかけるために

控えの間に入って、また戻ってきて、スープの加減を見た。「まずは取り次ぎますか、それともスープをおもちします?」「まずは取り次いでくれ。」と、Kは言った。腹が立っていた。元々は、自分の事件、特に問題となっている解約通知の件で、レーニに細かい相談がしたいという気もちであった。しかし、その場に商人がいたことで、彼にはその気が失せてしまった。そして、今のところは、おそらくこの小柄な商人が決定的なところに絡むにしては、自分の事件は大き過ぎるという考えの側に傾いていた。そのため、すでに廊下に出ているレーニに、もう一度、戻ってくるようにと、彼は大きな声で言った。「まず、あの方にはスープをおもちして、」と、彼は言った。「話しあいに向けて腹ごしらえをしてもらう。あの方にはそれが必要だ。」「何といても、あなたは弁護士の依頼人ですから。」と、部屋の隅から確認するような低い声で商人が囁いたが、その言葉は全く歓迎されなかった。「それがあなたに何の関係がありますか?」と、Kは言った。すかさず、レーニも言った。「いい加減に口をつぐむことね。――じゃあ、あの方にはまずスープをもっていくわ。」と、Kに言うと、皿にスープを注いだ。「あの方がすぐに寝てしまうのだけが恐いわ。食べると、すぐに眠ってしまうのよ。」「ぼくの言うことを聞けば、眠ることはない。」と、Kが言った。彼は常に、自分は弁護士と何か重要な折衝をしているという感じを醸し出すようにしていた。そして、それはどういうことなのかと、レーニに質問させようとしていた。その上で初めて助言を求めようという魂胆であった。しかし、きっちり口に出した命令しか、彼女が実行に移すことはなかった。皿をもって横を通り過ぎる際、わざと軽くぶつかりながら、彼女は彼にこう囁いた。「食べ終わったら、すぐに伝えにくるわね。できるだけ早くあなたを取り返すために。」「いいからもう行ってこいよ。」と、Kは言った。「行けよ。」「もっと優しくしてくれても、いいんじゃない。」と、彼女は言う、皿をもったまま、もう一度、ドアのところでその身を反転させた。

Kはその後ろ姿を見送っていた。あの弁護士を罷免する方向で、今、ようやく彼の腹は決まった。レーニとは事前に話ができなかったが、おそらくその方がよかったのだ。きっと彼女は、全体について満足できる知見がないのだから、あなたは思い止まるべきと、勧めてきたであろう。もしかすると、今回のところは、実際、Kも解約通知を諦めていたかもしれなかった。そして、それから先も、懐疑と不安の中に留まりながら、結局、しばらくしてからようやく、自分の決心を実行に移したのかもしれない。というのも、この決心は余りにも動かしがたいものであったので。しかし、それは早く実行すればするほど、より多くの損害を回避してくれるはずであった。それはそうと、ひょっとしてこの商人は、このことについて何かを知っているのかもしれない。

Kは後ろを振り返った。そのことに気がつく、すぐに商人は立ち上がろうとした。「どうか座ったままで。」と、Kは言う、商人の横に肘かけ椅子を引っ張っていった。「あの弁護士に依頼をしてから、もう長いのですか?」と、Kは聞いた。「ええ。」と、商人が答えた。「昔から依頼をしています。」「代理をお願いしてから、もう何年ですか?」と、Kは聞いた。「質問の意味が分かりませんね。」と、商人が言った。「取引上の司法事件では――わたしは穀物商をしています――、もうこの商売を継いだ時点から（まあ、二十年くらい前です）、ここの弁護士に代理をしてもらっています。プライベートな訴訟の方（あなたが仰っているのは、きっとこっちの方ですよ）も、最初の時からです。もうとっくに五年が過ぎました。そう、五年以上になりますね。」と、言葉が続けながら、古

ばけた書類鞆を引っ張り出した。「書類は全部ここに入っています。お望みとあらば、細かい日付もお教えます。全部を覚えるのは大変ですから。ひょっとすると、もっと長くやっているのかもしれませんが。あれは妻が亡くなってすぐに始まりました。とすると、もう五年半以上にはなりますね。」Kは、彼ににじり寄った。「とすると、あの弁護士は、一般の司法事件も担当しているんですね？」と、彼は聞いた。裁判と法学とのこの結びつきは、Kには大きな安心材料であると感じられた。「確かに。」と、商人は言うと、Kに囁いた。「それどころか、あの方はこの方面の司法事件の方が別の方面の司法事件より得意だという噂もあります。」しかし、それから、言ったことを後悔しているようであった。片手をKの肩の上に置くと、彼はこう言った。「どうかお願いですから、告げ口はしないで下さい。」Kは、相手を安心させるために、太股をポンと叩いてやりながら、こう言った。「まさか、わたしは告げ口するような人間じゃありません。」「はっきり言って、あの方は執念深いんです。」と、商人が言った。「誠実な依頼人が相手なら、きっと何もしませんよ。」と、Kは言った。「まさか、その逆です。」と、商人が言った。「一度、逆鱗に触れたら、もう見境がありません。おまけに、そもそもこっちにもやましいところがありますし。」「どんな風な？」と、Kが聞いた。「言わなきゃいけませんか？」と、疑り深そうな感じで、商人が聞いた。「言ってくれてもいいんじゃないかと、わたしは思いますが。」と、Kが言った。「じゃあ、」と、商人が言った。「ちょっとだけ、打ち明けましょう。でも、あなたも秘密を言ってくれなきゃ駄目ですよ。そうしたら、お互いが弁護士に掴まりあっていられます。」「随分、用心深いんですね。」と、Kが言った。「とはいえ、ひとつは秘密を言うことにいたしましょう。それは、あなたを完全に安心させると思いますよ。で、どこに弁護士に対するやましさがあるのです？」「わたしは、」と、おずおずしながら、何か恥ずべきことを告白する感じで、商人が言った。「あの方以外に、三人の弁護士を雇っているのです。」「全然、ひどいことでも何でもありませんよ。」と、ちょっとがっかりしながら、Kが言った。「ここではいけないことなのです。」と、白状してからは、まだ呼吸は荒いものの、Kの発言から多くの信頼を感じ取っていた商人が言った。「許されていないのです。絶対にいけないのは、いわゆる弁護士の他にもぐりの弁護士を雇うことです。よりによって、わたしはそれをやってしまった。あの人他に、五人のもぐりの弁護士を抱えているのです。」「五人ッ！」と、Kは叫んだ。数を聞かされて初めて、Kは驚きの中に突き落とされた。「あの人他に、五人の弁護士？」商人は頷いた。「今、さらに六人目と交渉中です。」「でも、どうしてそんなに沢山の弁護士が必要なのですか？」と、Kが聞いた。「全員、必要なんです。」と、商人が言った。「そのところをご説明いただけませんか？」と、Kが聞いた。「構いません。」と、商人が言った。「分かり切った話です。とにかく、訴訟に負けたくないからです。そのために役に立つことであれば、わたしは一切、手を抜きません。何かの事件があって、利益を引き出せる望みがほとんどなくても、投げ出したりはしないのです。だから、もっているものは全て訴訟に注ぎ込みました。例えば、自分の商売からは、現金を全額、引き出しています。以前は、商売の事務所がひとつの階全体を占めていましたが、今は離れの小屋ひとつで十分で、そこで見習いの子と働いています。この退潮は、もちろん、現金の引き出しだけでそうだったわけではありません。むしろ、職務能力を引き出したことからそうになりました。訴訟のために何かをしようと思ったら、それ以外のことには、ほとんど構ってられま

せん。」「じゃあ、あなた自身も、裁判所で仕事をなさっている？」と、Kは聞いた。「まさに、そのところをお聞きしたいです。」「それについては、少ししかお話しできません。』と、商人が言った。「確かに、最初はやろうとしました。でも、すぐにまた止めてしまったのです。ヘトヘトに疲れるだけで、よい結果には繋がりません。あそこに出かけて仕事や交渉をするのは、少なくとも、わたしには絶対に無理だと分かりました。あそこでは、座って待っているだけで、もう大変な労力が必要です。裁判所事務局の空気のひどさについてなら、ホラ、あなたもよくご存知でしょうに。」「そもそも、あそこにわたしが行ったことがあるのを、どうしてご存知なのですか？」と、Kが聞いた。「あなたが通りかかった時、ちょうどあそこにいたんですよ。」「そんな偶然があるでしょうか！」と、Kは叫んだ。すっかり心を奪われて、さっきまでの商人の滑稽さは、どこかに飛んでしまっていた。「とすると、あなたはわたしをご覧になっていたんだ。わたしが通りかかった時、あの控えの間にいらっしゃったんだ！　そう、以前、あそこには立ち寄ったことがあります。」「そんなの偶然でも何でもありませんよ。』と、商人が言った。「あそこにはほとんど毎日、行くんですから。」「きっとこれからは、時々、わたしも行くことになるんでしょうね。』と、Kは言った。「ただ、あの時みたいに恭しく迎えられることは、もうないんでしょう。全員が起立してくれました。わたしのことを、きっと裁判官とも思ったのでしょうか。」「違いますよ。』と、商人が言った。「あの時は、廷吏に挨拶をしたのです。あなたが被告人というのは、皆、知ってました。そういう知らせは、すぐに伝わるのです。」「つまり、あなた方はもう知っておられたんだ。』と、Kが言った。「とすると、わたしの態度はきっと不遜なものに映ったでしょうね。皆さん、そう言っていないでしたか？」「いいえ。』と、商人が言った。「その逆です。下らない話をしていました。」「どんな種類の下らない話を？」と、Kが聞いた。「そんなことを聞いてどうするんですか？」と、怒ったように商人が聞いた。「あそこにいる人たちのことを、どうやらあなたは、まだよくご存知ではないようだ。それでは、きっと間違った解釈をしてしまいます。よくお考え下さい。この訴訟手続きの中では、再三に渡って、自分の理解が及ばない様々な出来事が話の中でもち上がるので、皆、ただもう疲れてしまい、沢山のことに気が削がれるようになり、その代償として、迷信に鞍替えするようになるのです。わたしが話しているのは、自分とは別の人たちの話ですが、わたしだって、それよりましとは全くいえません。そういう迷信のひとつとして、例えば、多くの人々が、被告人の外見、特に唇の皮の模様から、訴訟の結末を予測しようとするというのがあります。要するに、あの人は、その唇から判断するに、あなたはすみやかに有罪判決を受けるだろうと話していたのです。繰り返しますが、そんなのは笑うべき迷信で、ほとんどの場合、事実によって完全に引っくり返されてしまいます。ですが、ああいう連中と一緒に過ごしていると、そういう意見を取り除くのが難しいのです。この迷信がどれくらい強い影響を与えていたのか、ちょっと考えてみましょうか。あそこで、あなたはひとりの男に話しかけましたよね？　あの男は、あなたに一言も言葉を返しませんでした。もちろん、あそこで男が取り乱したのには、色々理由があります。しかし、そのうちのひとつは、あなたの唇の外見にあったのでした。後で、あの男は、あなたの唇に、彼自身の有罪判決のしるしがあると感じたという話をしてくれました。」「わたしの唇に？」と、Kは聞くと、手鏡を取り出して覗いた。「特に変わったところはないようです。あなたはどう思わ

れます?」「分からないです。」と、商人が言った。「ごくごく普通の唇です。」「あの人たちは、何て迷信深いんでしょう!」と、大きな声でKは言った。「だから、そう言ったでしょうに?」と、商人が言った。「そもそも、彼らはそんなに頻りに往来して、意見交換してるんですか?」と、Kは言った。「わたしはこれまで、随分、人と違ったやり方をしてきたな。」「普通、お互いに往来するなんてありませんよ。」と、商人が言った。「ありません。だって、あれだけ沢山いるんですよ。共通の利害なんて、ほとんどありません。時々、どこかのグループで共通の利害というアイデアが浮かんだとしても、すぐに誤りであることが判明します。裁判所に対して、何かが共同でやり遂げられるというのはないのです。それぞれの事件では、個別に調査が行なわれています。それはもう、極めて慎重な裁判所です。ですから、何かが共同でやり遂げられているというのはなく、時々、個人が何かをこっそり手に入れられるだけのことなのです。何かが手に入れられると初めて、別の人がそれを嗅ぎつけます。しかし、なぜそうなったのかは、誰にも分かりません。つまり、そこに共同というものはないのです。確かに、控えの間のあちこちで人が集まってはいますが、じっくり話が交わされている訳ではありません。昔から迷信深い意見はありましたが、それらは紛れもなく勝手に増えてきています。」「その男のことなら、あそこの控えの間で見ましたよ。」と、Kが言った。「待っていても、無駄なように見えたが。」「無駄じゃないです。」と、商人が言った。「自分勝手な介入だけが、無駄なのです。すでに申し上げたように、今や、あの方の他に、わたしには五人の弁護士がおります。むろん、それならこの案件を丸ごと彼らに委ねてしまえばとお考えですよ——最初は、わたしもそういう考えでした。でも、違うんです。彼らはひとりだけの時より、さらに任せられないのです。おそらくそのことは、お分かりいただけないでしょうね?」「ええ。」と、Kは言う、商人の恐ろしい早口を止めるために、宥めるように、その手の上に自分の手を重ねた。「もう少しゆっくり話してもらえませんか。本当に極めて重要な問題なのですが、話についていけていません。」「よく仰ってくれました。」と、商人は言った。「あなたは本当に新入りの若造です。訴訟が始まって、まだ半年でしたっけ?　そう、そんな話を聞いたことがあります。まだ、始まったばかりの訴訟!　とはいえ、わたしはもう数えきれないくらい、そういうことを考え続けてきました。そうして、それは世界で一番、自明なことになったのです。」「ご自身の訴訟がかなり先まで進んでいるのを、きっとお喜びなんでしょうね?」と、Kは聞いた。商人の事件がどうなっているのか、あけすけには聞かないようにしていた。しかし、それでも、はっきりした答えが返ってくることはなかった。「ええ、自分の訴訟は、もう五年も転がしています。」商人はそう言うと、下を向いた。「楽な仕事じゃありませんでした。」そうして、しばらく黙り込んでいた。そろそろレーニが来るのではと、Kは聞き耳を立てていた。一方で、彼女には、来て欲しくないという気もちもあった。まだ、山のように聞くことがあったし、商人と親密な話をしているのを、レーニに押さえられるのも嫌であった。しかし、他方で、自分が来ているのに、こんなにも長く（スープの増量に必要な時間よりもずっと長く）弁護士のところに入り浸っている彼女への憤りの気もちもあった。「あの頃のことは、まだはっきりと覚えています。」と、また商人が話し始めた。すぐにKは注意を集中した。「わたしの訴訟が、まだ今のあなたくらいの進み具合の時でした。その時、弁護士はここだけをお願いしていましたが、あの方には、さほど満足はしておりません

でした。」さあ、今から全てを聞き出せるぞと思って、そうすることで、知る価値があることを全て白状するよう商人の背中を押せるのだとでもいうように、Kは熱心に相槌を打ってみせた。「訴訟は、」と、商人が続けた。「さっぱり進みませんでした。確かに審理はありました。審理には全て出席して、資料も集めて、あらゆる帳簿を裁判所に出しました（全て無駄だったことが、後で分かりましたが）。弁護士のところに何度も足を運んでいると、あの方は色々な弁明書を提出してくれました——。」「色々な弁明書？」と、Kは聞いた。「ええ、そうです。」と、商人が言った。「それは、わたしにとっては極めて重要な話です。」と、Kは言った。「わたしの事件では、まだ最初の弁明書に取り組んでいます。まだ、何もしてもらえていません。今、分かりましたが、わたしはひどくぞんざいな扱いを受けているのですね。」「弁明書が未完成なのは、色々と正当な理由があります。」と、商人が言った。「ちなみに、わたしの弁明書は全てが完全に無価値だったことが、後で判明しました。ちなみに、ある廷吏の好意で、その弁明書のうちの一文をわたしは読ませてもらいました。確かに、博学な書きっぷりでしたが、結局、中身は空でした。とりわけ目についたのは、理解不能なラテン語の羅列。それから、何ページにもわたる裁判所への一般的なお願い。それから、名指しはしないものの、事情通なら必ず言い当てられるであろう、何人かの特定の役人に対するお世辞。それから、弁護士による自画自賛（ここでは、弁護士は、本当に犬のように裁判所にへりくだっていましたが）。最後に、わたしの案件に類似すると思われる過去の法律事件についての研究（もっとも、この研究は、わたしが理解する限り、極めて慎重に行なわれていました）。こういう全てから、弁護士の仕事に何かの判断を下すつもりはありません。読んだ弁明書も、数ある中のひとつであったに過ぎません。しかし、いずれにせよ（こんなことは、今だから言うのですが）、当時、自分の訴訟は一步も前進していなかったのです。」「じゃ、どう前進するのがお望みだったのです？」と、Kは聞いた。「至極、ごもっともなお尋ねです。」と、笑いながら、商人が言った。「この訴訟手続きでは、前進する方がまれなのです。当時は、そんなことも知りませんでした。わたしは今も商人ですが、当時は輪をかけてそうでした。わたしは、全体が終わりに向かうか、少なくとも正しく上昇するか、そういう目に見える前進が欲しいと思っていました。かわりにあったのは、ほとんど同じ内容の事情聴取でした。わたしは、もう連禱のように答えを丸暗記していました。裁判所の使者たちが、週に何度も、会社や家や、それ以外にも、わたしに会える場所にやってきました。そのことは、むろん、面倒なことではありました（少なくともこの点は、今では、はるかにましになっています。電話で呼び出される方が、ずっと面倒は少ないのです）。商売仲間、とりわけ、親戚たちの間に、訴訟の噂が広がり始めました。あらゆる方面から、中傷が巻き起こりました。しかし、近い将来、裁判所の最初の審理だけでも始まることを代弁するような、これっぽっちの徴候も現われなかったのです。それゆえ、わたしは弁護士に苦情を言いに行きました。確かに、彼は長々とした説明はしてくれました。しかし、あなたが仰る意味のことはやれないという断固とした拒絶もなされたのです。彼はこうも言いました。審理をやるかどうかの決定に影響を及ぼすことは、誰にもできない。それを弁明書でしつこく求めるのは——それがこちらの要求でしたが——、とにかく、聞いたこともない話で、わたしもあなたも破滅させられてしまう。わたしは思いました。この弁護士が取り組まない、あるいはやれないという話でも、他の弁護士

であれば、取り組めるし、やれるのではないかと。他の弁護士をわたしは探して回りました。急ですが、先回りして言ってしまうと、本審理の決定を求めたり、それを認めさせてくれる弁護士は、ついに現われませんでした。もちろん、ある種の留保はありましたが（それについては、これからお話しします）、それらは、全く無理な話だったのです。つまり、この点では弁護士の話に嘘はありませんでした。しかし、それはそうと、別の弁護士たちに相談したことをわたしは後悔しておりません。もぐりの弁護士については、きつとフルト博士から、すでに色々、お聞きになっていますよね。おそらく、彼らのことを極めて恥ずべき人間と言ったと思いますが、本当にその通りです。もっとも、彼らについて話をしたり、自分や同僚を彼らと比べようとする時、あの方はいつでも小さな誤謬を犯しています（本当についてで言うのですが、注意を促しておきます）。そういう時、彼はいつも自分の仲間の弁護士たちを、他と区別して、『大弁護士』と呼んでいます。こういう言い方は間違っています。もちろん、自分の勝手でも、誰に『大』の冠をつけようが構いません。しかし、今回の場合は、裁判所での用法が全てです、そこに拠立しているのであれば（もちろん、もぐりの弁護士を除いての話ですよ）、そこには、大と小の弁護士に委せる。といっても、ここの弁護士やその同僚たちですら、一介の小弁護士に過ぎません。そして、大弁護士の方は（聞いたことがあるだけで、わたしも見たことはありませんが）、小弁護士よりはるかに高い地位（ここの弁護士が、軽蔑すべきもぐりの弁護士の上にいるのとは、比べものにならないほどの地位）にいるのです。」「大弁護士？」と、Kは聞いた。「それは一体、どういう人たちです？ どうしたら会えますか？」「ということは、まだお聞きになっていないんですね。」と、商人が言った。「彼らについて知った後、しばらくの間、彼らに憧れを抱かない被告人はおりません。気を強くして、そんな形で誘惑されることがないように。誰が大弁護士なのか、そんなことは誰も知りません。彼らのところには、きつと誰も辿り着けません。彼らが関わっているとはっきり言い切れる事件を、わたしは知りません。彼らは多くの事件を弁護していますが、被告人が自らの意思で彼らの門を叩くことはできないのです。彼らは、自分が弁護したいものしか弁護しません。そして、彼らが面倒を見るべき案件は、おそらくもう下級の裁判所を飛び越えてしまっています。ついでながら、彼らのことは考えない方がいいと思います。なぜなら、そうしないと、他の弁護士との相談や彼らの助言や援助が、本当に吐き気を催すような、無益なものに思えてきますから。全てを投げ出して、家のベッドに横になり、何にも耳を貸さなくなったという人の話すら、聞いたことがあります。むろん、そんなことをすれば、それこそ愚の骨頂です。ずっとベッドに横になっていることなど、できるものですか。」「とすると、当時、あなたが大弁護士について考えることはなかったのですか？」と、Kが聞いた。「ちょっとは考えました。」と、商人は言う。また笑った。「残念ながら、完全に忘れ去ることはできませんでした。特に、夜はそんな考えに陥りがちです。そして、その時は、手っ取り早い効果を求めて、もぐりの弁護士に走ったのです。」

「こんなところで、仲よく並んで座って！」と、お盆をもって戻ってきて、ドアのところに立っていたレーニが叫んだ。彼らは、本当にキチキチに座っていて、少しでも向きを変えると、頭をゴンとぶつけそうであった。その小ささは別にしても、さらに背中まで丸くした商人は、この話の全てを聞きたいのなら、もっと前に屈み込みなさいと、

Kに求めていた。「もうちょっと待って。」と、レーニを片手で払いながら、そう叫んだKは、まだ商人の手の上にあった自分の手を、もう我慢がならないという風に、ピクリと震わせた。「この方が、わたしの訴訟について聞きたいと仰って。」と、商人がレーニに言った。「話してあげて、いいから話してあげて。」と、女の方も言った。女は、愛情に溢れた感じで商人と話していたが、そこには気安さもあって、それがKには癪に障った。今ではもうKにも分かっていたが、この男にもちょっとした価値（少なくとも、経験）があって、それをうまく分かちあうやり方を、男は心得ていた。どうやら、レーニは男を不適切に判断しているようであった。長い間、商人がずっと手で捧げていたろうそくをレーニが受け取って、男の手をエプロンで拭いてから、ろうそくからズボンに垂れた少量のろうを掻き取るために、商人の前に跪いてやっているのを、不満そうな感じで、彼は見ていた。「もぐりの弁護士の件でしたが。」と、Kは言う、それ以上は口にせず、レーニの手をパッと払った。「どういうつもり？」と、レーニは言う、軽くKを小突いたが、再び仕事に戻っていった。「そうそう、もぐりの弁護士の件でしたね。」と、商人は言ったが、考えごとをするように、片手で額を擦っていた。男の背中を押すつもりで、Kはこう言った。「手っ取り早い効果を求めて、もぐりの弁護士に走ったとかいう話でしたが。」「そうです。」と、商人は言ったが、次の言葉が続かなかった。「きっとレーニの前では、話しにくいんだな。」と、Kは考えると、すぐに続きをと逸る気持ちは抑えて、今はそれ以上、問い糺すことはしなかった。「取り次いでくれたかい？」と、彼はレーニに聞いた。「もちろんよ。」と、女は言った。「お待ちかねだわ。ブロックのことは、今は後回しにしておきましょう。後でも喋れるのだから。ブロックならまだここにいるわ。」まだ、Kは戸惑っていた。「どこかに行ったりしませんか？」と、彼は商人に聞いてみた。商人自身の返事が聞きたいというのが、彼の本音であった。レーニが商人のことをそこにいない人のように話すのが、気に入らなかった。内心、今日はレーニにひどく腹が立っていた。しかし、それでもまだ、レーニからしか答えは返ってこなかった。「この人、よくここで寝ているのよ。」「ここで寝ている？」と、Kが叫んだ。彼が弁護士との話しあいを急いで済ませている間も、商人はここで自分だけを待ってくれるものだと彼は思っていた。もしそうであるのなら、二人で一緒にここを出て、誰の邪魔もなく、徹底的に全てを語りあえるはずであった。「そう。」と、レーニが言った。「ヨーゼフ、誰もがあなたみたいに好きな時間に面会してもらえる訳じゃないのよ。弁護士が病気を押し、夜中の十一時なのにまだ中に通そうとしているのを、あなたは不思議とも何とも思ってやしない。友達がやってくれることも、当たり前くらいにしか思っていない。まあ、友達なら喜んでやるんでしょうけど。少なくとも、わたしは喜んでやっているわ。お礼なんて望んでいない。愛してくれるのなら、他には何にもいらないの。」「愛してくれるのなら？」と、一瞬、Kは思った。そこで初めて、次のような考えが、頭の中に浮かんだ。「そうだ、俺はこの女を愛している。」それにも関わらず、他の話は全てを脇に置いた上で、彼はこう言った。「こちらは依頼人なんだから、あっちが通してくれるのが本筋なんだ。そのことでまた、さらに別の助けがいるというのなら、一步一步、先に進む度、同時にお願いをしてお礼を言わなければならない。」「この人、今日はとつてもご機嫌が斜めよね？」と、レーニが商人に聞いた。「今度は、俺の方がこの場にはいない人みたいだ。」と、彼は思っていた。それどころか、レーニの不躰さを引き継ぎながら、商人が

次のように言った時、彼にはほとんど憤るような気にすらなつた。「また別の理由もあって、弁護士はこの方を受け入れています。つまり、この方の事件はわたしのものよりはるかに興味深いのです。とりわけ、この方の訴訟は始まったばかりで、おそらくまだ閉塞状態には陥っていません。そういう時期というのもあって、弁護士は、まだこの方の件に進んで関わろうとされているのです。それから先は、また別の話なんでしょうが。」

「そうね、そうよね。」と、レーニは言う、笑いながら、商人の方をジッと見つめた。「この人、何てよく喋るんでしょうね！　つまり、」と、ここでKの方を向いた。「あなたはこの人を信じてはいけないのよ。とっても親切だけど、とってもお喋り。だから、おそらく弁護士もこの人のことは腹に据えかねている。とにかく、この人には気が向いた時しか会おうとしない。そのことを変えようと、ずっとやってきたけど、うまくいっていない。ちょっと考えてみて。ブロックのことを何度も取り次いでいるのに、彼を呼び入れるのは、それから三日後にようよくなの。でも、呼ばれた時、そこにいないと、全てがオジャンで、また最初から取り次がなくちゃいけない。だから、ブロックにはここで寝てもいいって言ってあげたのよ。夜中にベルで呼ばれるのも、実際、すでにあったことだわ。今でもブロックは、夜でもこんな風にずっと待っている。とにかく、ブロックがここにいるというのが分かったら、入室許可が何度も取り消されるといのが、今も繰り返されているわ。」確認するように、Kは商人の方を見た。商人は頷くと、さっきKと喋っていた時のようにアッケラカンと、次のような話をしたが、おそらく恥ずかしさの余り、混乱に陥っていたのであろう。「ええ、誰もいずれば弁護士ベツタリになるものです。」「この人は、表向き、嘆いてみせているだけなのよ。」と、レーニが言った。「ここで寝るのが大好きなの。もう何度も、そう告白してくれたわ。」小さなドアのところに近づくと、彼女はそれを押し開いた。「この人の寝室を見る？」と、彼女は聞いた。Kはそちらの方に歩を進めて、敷居のところから、天井の低い、窓のない部屋の中をグッと覗き込んだ（その部屋は、狭いベッドひとつで完全に占領されていた）。ベッドのところに行くには、ベッドの柱をよじ登らなければならなかった。ベッドの枕の側には、壁に窪みがあって、そこには、一本のろうそく、インク壺、羽根ペン、書類の束（おそらくは、訴訟書類）が、恐ろしくキッチリと置かれていた。「あなたは、女中部屋で寝ているんですか？」と、Kは聞くと、商人の方を振り返った。「レーニが部屋を空けてくれましたね。」と、商人が答えた。「実によい具合です。」男のことをKはジッと見た。商人に対する最初の印象は、もしかして、それでもやはり、正しかったのかもしれない。訴訟はすでに長期に渡り、彼は経験を積み重ねて、高い代償を支払ってこいた。突然、Kは商人を正視しているのに耐えられなくなった。「いいから、あいつをベッドに連れていってくれ！」と、彼はレーニに向かって叫んだ。しかし、女には彼の言う意味が全く理解できないようであった。そして、彼自身は、弁護士のところに赴いて、解約通知をすることで、弁護士だけでなく、レーニやこの商人からも自由になりたいと思っていたのであった。ところが、まだドアのところにも辿り着かないうちに、その商人が低い声でこう話しかけてきた。「業務代理人さん。」怒ったような顔つきで、Kはクルッと向きを変えた。「あなたは、約束をすっかり忘れていらっしゃる。」と、商人は言う、椅子からKの方にすがるように伸び上がってきた。「そのうち、秘密を打ち明けてもらえるというお話でしたが。」「神に誓って、そうするつもりでしたよ。」と、Kは言い、注意深く自分を見つめ

るレーニの方に、チラッと一瞥を投げた。「じゃあ、聞いて下さい。といっても、もうほとんど秘密でも何でもないので。今から、わたしは弁護士のところに行って、解約を申し出るので。」「この人、解約するんだって！」と、大きな声を出して、肘かけ椅子から跳び上がると、両手を高く掲げながら、厨房の中を商人がグルグルと走り出した。彼は、何度も大声を出した。「弁護士を解約するんだって！」すぐに、レーニがKに飛びかかろうとしたが、商人が割って入ったので、むしろ、商人に対して彼女は拳骨の一撃を食らわした。それから、拳骨を丸めてKの後を追ったが、その姿はすでにはるか遠方にあり、追いついた頃には、もう弁護士の部屋の中に彼は足を踏み入れていた。Kは自分のすぐ後ろでドアを閉めようとしたが、レーニは足を挟んでそのドアが閉まらないようにして、彼の片腕を掴んで引きずり出そうとした。しかし、余りにも強く彼が手首を捻り上げたので、彼女は呻き声を上げて、その腕を放さなければならなかった。彼女がすぐに部屋に入ることはなかった。そこで、Kは鍵をかけて、ドアを開けられないようにした。「ずっと長いことお待ちしていました。」ベッドのところから弁護士がそう声をかけて、ろうそくの照明で読んでいた書類をナイトテーブルの上に置くと、眼鏡を鼻の頭に載せながら、Kの方をジロッと一瞥した。詫びの一言もなく、Kは言った。「すぐにまたお暇しますので。」それが詫びではなかったのもあって、Kの発言を取り上げることはせずに、弁護士はこう言った。「少なくとも、こんなに遅い時間にお迎えすることは、二度とありませんよ。」「願ったり叶ったりです。」と、Kが言った。弁護士は、彼の方に物問いたげな視線を投げた。「お座り下さい。」と、彼が言った。「仰せの通りに。」と、Kは言うど、肘かけ椅子をナイトテーブルの方に引っ張って行って、座った。「ドアを開かなくしたんですね。」と、弁護士が言った。「そうです。」と、Kが言った。「レーニがいけないんです。」誰かをねぎらう気などサラサラなかった。ところが、弁護士はこんなことを聞いた。「また、あれが押しつけがましいことをしましたか？」「押しつけがましいこと？」と、Kが聞いた。「ええ。」と、弁護士が言った。その時、彼は笑みを浮かべて、それから咳の発作に襲われながら、それが終わると、また笑った。「どっちにしろ、あれの押しつけがましきには、おそらくもうとっくにお気づきでしょう？」そう聞くと、ポオツとしたKがナイトテーブルの上に置いていた片手を、彼がボンと叩いたので、素早くそれをKは引っ込めた。「あなたは、それがそんなに重要なことだとは思っておられない。」と、弁護士が言うと、Kは黙り込んだ。「それはそれで結構です。そうでないと、ひょっとして、わたしの方が謝らなければならなくなる。謝るというのは、レーニのおかしなところについてですが（ちなみに、わたしは昔からあれのそういう面については、大目に見てきました。今、あなたがドアを開かないようにしてくれなければ、こんなお話もできませんでしたが）。といっても、これのおかしさは、おそらくほとんど説明の必要がないでしょう。しかし、あなたが余りにも驚いた顔でこちらを見ているので申し上げますが、そのおかしさというのは、レーニが大抵の被告人の中に美を見い出すという点にあります。彼女は、全ての被告人に首っただけ、全ての被告人を愛して、もちろん、全ての被告人から愛されています。さらに、わたしを喜ばせるために、そうしてもよいと言いきえすれば、時々、その辺の話をしてくれたりもします。こういう全ては、驚きでも何でもありません（あなたは、驚いているようですが）。正しい眼力さえあれば、本当に被告人が美しいと思えてくるのです。確かに、それは奇妙ですが、ある意味、自然科学

的な現象です。もちろん、起訴の結果として、何か明白な、本当に決定的な容貌の変化が生じるわけではありません。他の裁判事件とは違って、ほとんどの被告人は普通の生活を送って、訴訟に煩わされることはありませんから（うまく事件の面倒を見てくれる弁護士さえ見つければですが）。それでも、経験のある人なら、沢山の群衆の中から次々と被告人を見つけ出します。どうやってと、あなたは聞くでしょう。答えはあなたを満足させません。なぜなら、被告人は全くもって、本当に美しいのですから。罪が美しくさせるわけではありません。なぜなら——少なくとも弁護士としては、そう答えざるをえません——、いくら何でも全員に罪があるはずはありませんから。本物の刑罰が彼らをすでに美しくしているのでもありません。なぜなら、いくら何でも全員が刑罰を受けているはずはありませんから。つまり、彼らに提起されて、何らかの形でつきまとっている訴訟手続きのためとしか言いようがないのです。もちろん、美しい被告人の中でも、とりわけ美しい被告人がいます。しかし、全員が美しいのも事実です。あの下劣な蛆虫のブロックですらそうなのです。」

弁護士の話が終わっても、完璧にKは落ち着き払っていた。それどころか、最後の言葉には大きく首を振って、以前からの自らの見解の正しさを確認したのであった（その見解では、この弁護士は、本来の問題とは無関係の一般的な知らせでKを煙に巻き、一体、問題に対する実質的な仕事として、あなたはわたしに何をしてくれたかという重大な問いからは、常に、そして今回も、逃げていくということになったのだが）。今回、いつもよりKが抵抗しようと思ったことに、おそらく弁護士は気がついていて、なぜなら、その時、彼はダンマリを決め込んで、Kが自ら話し出すための隙を提供したのであるから。それでもKが口火を切らないので、彼はこう聞いた。「今日は、目論見があっていらっしやった?」「ええ。」と、Kは言う、弁護士のことをもっとよく見ようと、片手で少しろうそくの光を遮った。「今日は、わたしの代理の任務の返上のお願いでやってきました。」「言っている意味がお分かりですか?」と、弁護士は聞くと、ベッドの中で半身を起こしながら、クッションの上で片手でその身体を支えた。「分かっています。」と、辺りをコソコソと伺う感じで座ったKが、背筋をピンとさせながら、そう言った。「じゃあ、ぜひ、その計画について話しあいましょうか。」と、少し間を置いてから、弁護士が言った。「こんなもの、計画でも何でもありませんよ。」と、Kが言った。「そうかもしれませんが。」と、弁護士が言った。「でも、われわれはそれでも慌てることはないのです。」自分はKを手放すつもりはなく、かりにKの代理人ではもうないにせよ、少なくともまだ助言者なのだからという感じで、「われわれ」という言葉を彼は使った。「慌ててなんかいません。」と、Kは言う、ゆっくりと立ち上がり、肘かけ椅子の後ろに廻り込んだ。「このことはじっくりと考えてきました。おそらく考え過ぎたくらいです。この決心は揺らぎません。」「じゃあ、あと少しだけ、話をさせて下さい。」と、弁護士は言う、羽根布団を投げ飛ばしながら、ベッドの縁に座った。剥き出しの白い毛の生えた両足が、寒さに震えていた。ソファから毛布を取ってきてもらえないかと、彼はKに頼んだ。毛布を取ってきてやりながら、Kは言った。「あなたに身体を冷やしてもらうまでの必要はないのです。」「十分に重大だからこそ、こういうことをするのです。」と、羽根布団を上半身に巻きつけて、その後、毛布で両足をくるみながら、弁護士が言った。「あなたの叔父さんは、わたしの友人です。そして、時が経つにつれて、あなたへの親しみの気もち

も湧いてきました。それは正直に告白します。わたしがそのことを恥ずかしがる必要は全くないのです。」老人によるこの種のセンチメンタルな語りを、Kは全く歓迎していなかった。なぜなら、それはKが避けたいと思っている詳細な説明をするように彼に強いてきたし、加えて、翻心するまでには至らなかったものの、彼の正直な告白によると、それは心を揺すぶったのである。「温かい心遣い、ありがとうございます。」と、彼は言った。「あなたがわたしの事件に、できるだけわたしに有利になるとあなたが思っている範囲で、一所懸命、取り組んでおられるのを、わたしは高く評価しています。ただ、最近になって、これでは十分でないと感じました。もちろん、あなたのような、それほどの年輩者（かつ熟練者）の心を、説得までして自分の見方に変えようと思ったことは一度もありません。無意識に何度かそうしてしまっていたとしたら、どうかお許し下さい。とはいえ、あなた自身も仰るように、この事件は十分に重大であり、さらにわたしの確信するところでは、これまでよりさらに強く訴訟に介入することが求められています。」「分かっています。」と、弁護士が言った。「あなたは、もどかしいんですね。」「もどかしいんじゃないありません。」と、少し語気を強めながら、Kは言ったが、もうそれほど、彼の言葉に注意が向かうこともなかった。「叔父とこちらにお邪魔した最初の訪問の時、この訴訟にわたしがそれほど重きを置いていないことに、あなたはもう気づいておられました。ある意味、誰かが力づくで思い出させてくれなければ、わたしはこのことをすっかり忘れていたでしょう。しかし、代理の任務はあなたに一任すべきと叔父が言い張りましたので、叔父の気が済むならと、そうすることにしました。そうしたからには、訴訟の負担はこれまでより軽くなると、期待してもよいはずでした。なぜなら、誰もが訴訟の重みを少し肩がわりさせるために、弁護士に代理権を譲り渡すのですから。ところが、起こったことはその逆でした。それからというもの、わたしは訴訟に対して、前より大きな不安を感じるようになったのです。ひとりの時は、事件に対しては何もせず、特に何も感じませんでした。逆に今は、代理人がいるので、何かが起きるように仕向けられています。常に間断なく、期待に胸を膨らませながら、介入を待つことになりましたが、そういう風には事は進みませんでした。もちろん、あなたからは、裁判所について、そうでなければおそらく誰からも聞けないような色々な話を教えてもらいました。しかし、訴訟というものが、秘かに形式を踏みながら、徐々にこの肉体に近づこうとしている今、それではわたしは不満なのです。」肘かけ椅子をドンと押すと、上着のポケットに両手を突っ込みながら、Kは立ち上がった。「実行に移されたある時点を過ぎると、」と、低い、穏やかな声で、弁護士は言った。「本質的に新しいことは何も起こらなくなります。何と多くの訴訟当事者たちが、似たような訴訟の段階で、似たような告白、似たような話をしてくることでしょ！」「それなら、」と、Kが言った。「これら全ての似たような訴訟当事者たちは、わたしと同じように正しかったんです。そんなんじゃ、反論になってません。」「このことで、反論しようとは思っていません。」と、弁護士は言った。「わたしが言いたいのは、とりわけ司法組織やわたしの仕事について、他の訴訟当事者より多くの洞察をあなたに与えたつもりでしたので、他の人より多くの判断力を期待してしまったということだけです。今、それにも関わらず、あなたには十分に信じてもらえていないということが、わたしには確信させられました。あなたは難しく考え過ぎです。」Kに対して、弁護士は何と憤り深かったことか！ まさしくこの瞬間、間違いなく最も敏感で

いなければならない専門家としての体面についても、彼は恐ろしく無関心であった。なぜそんな風に振る舞ったのであろう？ いずれにせよ、一見したところ、彼は多忙な弁護士で、おまけに資産家でもあり、稼ぎ口を失っても、依頼人に逃げられても、それ自体、大問題にはならないはずであった。その上、病気がちでもあるのなら、仕事の軽減が考慮の中に入ってきてもよさそうであった。しかし、それでも、彼はそれほど強くKを引き止めたのであった！ 一体、なぜ？ 叔父への個人的な思い入れからであろうか、それとも、Kの訴訟が本当に常軌を逸脱していると考えて、Kに対して、あるいは——その可能性は、必ずしも排除できなかったが——裁判所の友人たちに対して、自分を極立たせたいと思ったのか？ Kは無遠慮にジロジロと彼を眺め回したが、何も変わったところは見受けられなかった。わざと無愛想な表情を作って、自分の言葉の効果が現われるのを待っているのだと、辛うじて、考えられないでもなかった。しかし、今、次のように話し始めたことからすると、どうやら余りにも身勝手に、Kの沈黙を解釈したからのようでもあった。「もうお気づきですね。わたしは大きな事務所を構えていますが、ひとりの助手もおりません。以前は、それとは違って、何人もの若い法律家が働いておりました。今はひとりです。このことは、ある部分、あなたのような種類の司法事件にどんどん特化してきたことから来る、実務領域の変化が関係しています。別の部分では、これらの司法事件によって、さらに認識が深まったことも関係しています。わたしは、依頼人や自分が引き受けた仕事に対して罪を犯さずにいるために、この仕事は誰にも手渡してはいけないと悟りました。そして、全ての仕事を自分でやろうと決めたことから、当然の結果が生まれたのです。つまり、ほとんど全ての代理権の申請を断わり、特に心に響く申請しか追わなくなったのです——今や、そこには、わたしが投げたあらゆる紙くずに群がる、本当に十分な数の人間がおります（それどころか、わたしのすぐ近くにも）。おまけに、わたしは過労で、病気にもなりました。しかし、それでも、自分で決めたことを悔やんではいません。実際にお断りしたよりもっと多くの代理権をお断りした方がよかったということすら、ありえる話です。そして、引き受けた訴訟への全力投球が全く無駄ではなかったということも明らかになりましたし、結果で報われてもきました。昔、ある書類の中で、普通の司法事件の代理とこの種の司法事件の代理の違いが、実にうまく表わされているのを読んだことがあります。そこでは、こんな風を書いてありました。撚り糸を使って、依頼人を判決まで導こうとする弁護士がいる一方で、すぐに依頼人を両肩に載せて、どこにも下ろさず、判決や、そこからさらに遠い先まで担いでいこうとする弁護士もいるというのがそれです。確かにその通りです。しかし、この大きな仕事を一度も悔やんだことがないかと言えば、嘘になります。今回の事件のように、仕事が完全に誤って理解されてしまうと、思わず後悔しそうになってきます。」この話には、Kは納得させられるというより、むしろイライラさせられた。その先に何が待っているのかも、この弁護士の語り口から、何となく聞き取れたように彼には思われた。もし自分が譲歩をすれば、またあの慰めが始まるのだ。陳情書は前進して、裁判所の役人の声は明るさを増しているが、同時に、仕事には巨大な困難が立ち塞がっているというあの指摘——、要するに、不確かな希望で再びKを欺いて、不確かな脅しで痛めつけるために、うんざりするほど分かりきった、あらゆる物事がもち出されるのである。そういうことは、最終的には、回避されなければならなかった。それゆえ、彼

はこう言った。「あなたがこの代理権を保持するとして、わたしの事件で何をしてくれるのです？」あろうことか、弁護士はこの侮辱的な質問すら受け入れて、次のように答えた。「すでにやってきたことの中で、さらに前進します。」「そんなことは分かっています。」と、Kが言った。「でも、今はどんな言葉を投げてもらっても無駄ですよ。」「もうひと踏ん張りしようと思っています。」と、Kの心をイラつかせることが、Kの周りにはではなく、自分の周りに起こっているとでもいうように、弁護士が言った。「つまり、わたしの推測によれば、あなたはわたしの法律顧問という地位について、誤った判断に陥っているだけでなく、そのことから、あらゆる関係に陥り、被告人であるにも関わらず、恐ろしく大切に、もっと正確に言えば、なおざり、どうやら、なおざりに取り扱われてしまっています。実際、この後者の取り扱いには理由があります。しばしば、自由であるより、鎖に繋がれている方がましですから。ところで、他の被告人がどのように取り扱われているのかをお見せしようと思います。おそらく、あなたはそこから教訓を引き出されるでしょう。どういうことかといいますと、今からブロックを呼びます。ドアを解錠して、ナイトテーブルに着席して下さい！」「いいでしょう。」と、Kは言う、弁護士が言った通りにした。学ぶ用意はいつでもあった。しかし、あらゆるケースに備えるため、さらに彼はこう聞いた。「ところで、代理権を取り上げるという話ですが、了承はもらえたんですね？」「ええ。」と、弁護士は言った。「でも、今日ならまだ取り消せますよ。」再びベッドで横になると、羽根布団を顎まで引き上げて、壁の方を向いた。そうして、呼び鈴を鳴らしたのであった。

合図とほぼ同時に、レーニが現われた。サッと目を走らせると、今、起きていることを彼女は探ろうとした。ベッドの横でKがくつろいで座っているので、安心してよさそうだと彼女は感じた。自分をジッと見ているKに相槌を送ると、ニコリと微笑んでみせた。「ブロックを呼んできてくれ。」と、弁護士が言った。ところが、ブロックを呼びに行くのではなく、ドアの前のところまで出ると、彼女は大声を出した。「ブロック！

弁護士さんのところまで来て！」それから、おそらくは弁護士が壁の方を向いて、特に何かを気に留める様子もなかったもので、Kの肘かけ椅子の後ろに潜り込んできた。そこから、肘かけ椅子の背凭れの方にグッと屈み込んで（もちろん、とても優しく、かつ、注意を払って）、両手で髪の中に指を通して、両頬を撫で上げることで、彼をうるさがらせた。最終的に、彼は彼女の手をギュッと掴んで、そういうことができないようにしたが、少しの抵抗の後、彼女も片手を彼に預けてきた。呼び出しを受けて、すぐにブロックがやってきたが、ドアの前で立ちすくむと、中に入るのか、考えあぐねるようであった。弁護士のところという命令がもう一度繰り返されるのか、聞き耳を立てるようにして、眉を高く上げて、彼は首を傾けていた。Kは、中に入るように背中を押すこともできたが、弁護士だけでなく、この部屋の全てと縁を切ろうと思っていたので、最終的にはダンマリを決めることにした。レーニも黙っていた。少なくとも、誰も追い払う人がいないと分かったので、ブロックが爪先立ちで中に入ってきた。顔つきは期待に満ちていたが、両手は背中ので緊張に震えていた。退却もありえるので、ドアは開けたままになっていた。Kには目もくれず、高く盛り上がった羽根布団のベッドの方だけを、彼は見ている（そこには弁護士がいたが、壁のすぐ近くに身体を寄せていたので、姿は見えず、声だけが聞こえていた）。「ブロックはいるかい？」と、彼は聞いた。この問いは、すでに

相当な道のりを歩んできたブロックの胸と、その次には背中に、文字通りの一撃を与えた。彼はグラリとよろめいた。深く身を屈めながら、その場に立つと、彼はこう言った。「はい、こちらに。」「何がしたいんだ？」と、弁護士は聞いた。「お前は、都合の悪い時にやってくるな。」「わたしは呼ばれたんじゃないありませんでしたっけ？」と、ブロックは、弁護士にというより、自分自身にそう聞くと、身を守るために、両手を前の方にグイッと突き出した。逃げる用意はあった。「呼ばれたんだよ。」と、弁護士は言った。「それでもまだ、お前は都合の悪い時にやってくる。」それから、ちょっと間を置くと、またこう続けた。「いつだって都合の悪い時にやってくる。」弁護士が喋り始めてからというもの、ブロックはもうベッドには目をやらず、むしろ部屋の隅のどこかをジッと見ていて、話し手を見るのが眩しくてならないようであったが、ひたすらに話を聞いていた。しかし、話に耳を傾けているだけでも簡単なことではなかった。なぜなら、弁護士は壁に向かって話をして、実際、囁くような声で、早口でもあったのだから。「退室しましょうか？」と、ブロックが聞いた。「もう来てしまったんだから、」と、弁護士が言った。「そこにいろ！」弁護士がブロックの望みを叶えなかったばかりでなく、鞭のようなもので脅していたといわれても、信じていたかもしれなかった。なぜなら、ブロックは、今や本当に震え始めていたのである。「わしはな、昨日、」と、弁護士が続けた。「友人の第三裁判官のところに行っていたんだ。だんだんとお前の話になっていった。あれが何とやっていたのか、知りたいか？」「ええ、お願いします。」と、ブロックが言った。すぐに弁護士が話し出さないで、ブロックはもう一度、お願いしますと繰り返して、跪かんばかり、その身をグッと屈めてみせた。ところが、そこでKが彼を怒鳴りつけた。「何をやっている？」と、Kは叫んだ。叫ぶのをレーニが止めようとするので、もう一方の彼女の手も、彼はギュッと掴んだ。彼が彼女の両手を掴むやり方は、愛情からのものではなかった。一度ならず、彼女は溜め息をつきながら、何とか手を彼からもぎ離そうとした。しかし、Kの叫び声で罰を受けたのは、むしろブロックの方であった。なぜなら、弁護士がこう聞いたからである。「ところで、お前の弁護士は誰だったかな？」「あなたです。」と、ブロックが言った。「わし以外には？」と、弁護士が聞いた。「あなた以外にはおりません。」と、ブロックが言った。「だったら、他の人間の言うことを聞くんじゃない。」と、弁護士が言った。弁護士の言わんとするところをブロックは完全に了解した。悪意のこもった眼差しでKの方を見ると、彼に対してブルブルと首を振った。この態度を言葉に翻訳すれば、ひどい罵詈雑言になったであろう。こんな人間と、Kは自分の事件についての友好的な話しあいをしようとしていたのであった！ 「もうあなたの邪魔はしません。」と、肘かけ椅子に凭れながら、Kは言った。「跪くなり、四つん這いになるなりするがいい。やりたいようにやりなさい。これについては、わたしはもう何も思いません。」しかし、少なくともKに対しては、ブロックにも名誉心というものがあった。なぜなら、両方の拳を振り回して飛びかかりながら、弁護士が近くにいる時だけに発するような大声で、こう叫んだのである。「そういう口の利き方はいけませんよ。そういうのは許されません。どうしてわたしを侮辱するのです？　しかも、弁護士さんの前で？　わたしとあなたは、慈悲心だけでここにいさせてもらっているのです。あなたがわたしよりましな人間ということはありません。なぜなら、あなたは起訴されていて、訴訟中の身でもあるのですから。それでも、あなたが紳士だと言うのなら、わたしも同じ紳

士です（あなたより上だとは言いませんが）。そして、そういう人間として見られたいとも思っています（とりわけ、あなたにはね）。もし、あなたはそこに座って、静かに傍聴することが許されていて、一方のわたしは（さっきもあなたが仰ったように）四つん這いでいるからというので、自分には特権があるとお考えなら、ある昔の判決をお教えしましょう。容疑者としては、止まっているより動いている方がまだ、というのがその判決です。というのも、止まっている方は、知らぬ間に天秤皿に載せられて、いつでも罪の重さを量られてしまいますから。」Kは何も言わなかった。瞬きもせず、この惑乱した男をジッと見ていた。一体、どういう種類の変化が、ただ最後の瞬間にだけ、この男に生じたのであろう！ 彼をあっちに投げ、こっちに投げして、どれが友でどれが敵かを分からなくしているもの、それが訴訟なのであろうか？ 弁護士が、故意に彼を侮辱して、Kの前で自らの力を誇示してみせて、それによって、おそらくKも服従させることだけを狙いにしているのが、彼には分からないのであろうか？ ところで、ブロックがそういうことには気がついていない、あるいは、彼が弁護士を恐れる余り、どんな認識も彼を助けることができないのだとしても、それでも彼が、弁護士を欺いたり、それ以外に別の弁護士を雇っているのを隠し通すほどずる賢く、厚かましいのはどういうことであろう？ そして、Kがすぐに秘密を漏らすかもしれないのに、どうしてわざわざKに食ってかかったのであろう？ ところが、この男はさらにその先を行こうとしたのであった。つまり、弁護士のベッドのところまで行って、今度はそこでもKの苦情を言ったのである。「弁護士さん、」と、彼は言った。「この男がわたしと話しているのをお聞きになりましたか？ この男が訴訟に費やした時間はまだ数えるくらいなのに、五年もやっているわたしに、もう説教をしようとするんですよ。それどころか、罵倒です。何も知らないくせに、エチケットや義務や裁判所のしきたりが求めることを微力を尽くして調べているこのわたしを、罵倒するんです。」「人のことばかり構っているんじゃない。」と、弁護士が言った。「自分が正しいと思うことをやっていけばいい。」「仰る通りです。」自分を励ますようにブロックはそう言うと、チラッと横目を使いながら、ベッドのすぐ横のところに跪いた。「もう跪いています、弁護士さん。」と、彼は言った。しかし、弁護士が沈黙を破ることはなかった。ブロックは、片手で用心深く羽根布団を撫でていた。今では、静寂が支配していた。そういう中、Kの手から身を振りほどきながら、レーニが言った。「痛いわ。放してちょうだい。わたしはブロックのところに行くの。」彼女はその場所を離れると、ベッドの縁に座った。彼女が来たことは、ブロックには大歓迎であった。彼はすぐに熱の入った無言の身振りで、自分を弁護士に取りなしてくれと、彼女に頼み込んだ。明らかに、彼は弁護士からの知らせを喉から手が出るほど欲しがっていたが、そこにあっただのは、おそらく他の弁護士たちにそれを利用させようという魂胆だけであった。レーニは、どうやら弁護士の扱いに熟練しているようであった。彼女は弁護士の両方の手を指で差すと、キスをするように唇を尖らせてみせた。すぐにブロックは弁護士の両手に接吻をして、レーニの求めに応じて、もう二回、そのことを繰り返した。しかし、それでも弁護士が口を開くことにはならなかった。そのため、レーニは弁護士の上にしなだれかかってみせた。グッと背中を反らせると、彼女の身体の美しいラインが浮かび上がった。それから、顔の方に深く屈み込むと、長く白い髪をフサフサと撫でてやった。そのことが、彼をして、そうは言っても、今は返答せざるをえないかという

気もちにさせた。「あいつに知らせてやるべきか、迷っているんだ。」と、弁護士は言った。もしかして、レーニの手の感触をもっと感じるためなのか、少し頭を振っているのが分かった。ブロックは、この盗み聞きによって、自分は掟を破ってしまったとでもいうように、深くうなだれながら、聞いていた。「どうして迷っていらっしゃるの？」と、レーニが聞いた。Kは、まるで稽古した会話を聞かされているような感じであった。それらはすでに何度も繰り返されて、まだ何度も使い回されるのであろうが、ブロックにだけは新味を失なわないのだ。「今日のあいつの態度はどうだった？」と、弁護士は、返事をするというより、質問をした。それについて答える前に、レーニは下の方にいるブロックに目をやり、自分の方に両手が伸ばされて、それが懇願と共に、擦りあわされるのをしばらく見ていた。最後は、真顔になって頷くと、弁護士の方を向いて、こう彼女は言った。「冷静に、一所懸命やっていましたわ。」長い髭を生やした大の男の老商人の方は、何とか有利な証言をしてもらえないかと、この小娘に向かって懇願していた。その時は、彼にも下心があったのかもしれない。しかし、どう鼻真目に見ても、それを正当化するようなものは見当たらなかった。こんな一幕を演じることで、どうして弁護士が彼を味方につけられると思ったのか、Kにはさっぱり分からなかった。すでに追い払われたというのではなかったが、こんな場面を見せられれば、彼は離れていくのに違いなかった。彼は、ほとんどの見物人を辱めていた。つまり、弁護士の手法はそういう効果をもたらしたのであった（幸い、彼がその手法に晒されていたのは、それほど長い時間ではなかった。そのため、依頼人が最終的に世間のことを忘れ去り、誤った道の上を訴訟の終わりまで、ズルズル進もうと思うところにまで、至ることはなかった）。もうこの状態では、依頼人というよりは、むしろ弁護士の犬であった。犬小屋に入るようにしてベッドの下に潜り込み、そこから吠えろと命じられても、喜んで彼は従ったであろう。検証しながら、見下ろしながら、Kはジッと耳を傾けていた（ここで語られた全てを細かく噛み砕いて、どこかの上級審でその証明をして、報告書を作るように委任されているようであった）。「この一日、あいつは何をしていた？」と、弁護士が聞いた。「わたしは、」と、レーニが言った。「仕事の邪魔をしないよう、いつも滞在しているあの女中部屋に閉じ込めておきました。隙間からは、時々、彼が何をしているのかのチェックができます。あの人は、いつもベッドの上に膝を突いて、あなたが貸した書類を窓台の上で開いて読んでいましたわ。これにはよい印象をもちました。つまり、あの窓は通気縦坑にしか繋がっておらず、ほとんど光が差さないのですが、それでもブロックが読んでいたということは、いかに従順かということを表わしています。」「それが聞けて嬉しいよ。」と、弁護士が言った。「だけど、理解して読んでいたのかな？」この会話の間中ずっと、ブロックは唇を動かしていた。おそらく、レーニに言って欲しい答えを口にしていたのであろう。「それについては、もちろん、」と、レーニが言った。「はっきりしたことは言えませんわ。いずれにせよ、徹底的には読み込んでいました。一日中、同じページばかり読んで、読みながら、指で行をなぞっていました。覗きに行くといつも、読むのが恐ろしく難儀なんだという感じで、溜め息をついていましたわ。あなたが貸した書類は、きっとひどく分かりにくいね。」「その通り。」と、弁護士が言った。「確かにあれは分かりにくい。そして、あいつが何かを理解できたというのを、わしは信じてすらいらないのだ。あの書類は、あいつを弁護するための戦いがどれくらい厳しいのかと

いう予感を与えてやったに過ぎない。そもそも誰のために、こんな厳しい戦いをやっているのか？ それは——こうして、口にするのも、ほとんど滑稽なくらいだが——、ブロックのためだ。このことが、どんな意味をもっているのか、そのこともあいつには理解させなくてはならない。あいつは、休みなく勉強していたかい？」「ほとんど休みなくやっていたわ。」と、レーニが答えた。「一度だけ、水が飲みたいと言ってきました。その時は、隙間からコップ一杯だけ、差し入れてやりました。それから八時になったので、部屋から出してやって、少しだけ食事を与えました。」ブロックは、今、自分について何か誇るべきことが語られており、それはKにも感銘を与えたであろうというように、横目でKをチラッと見た。その時、彼は希望に胸を膨らませているようであった。身のこなしは、より柔らかくなり、跪きながら、ユラユラと身体を揺らしていた。それだけにいっそう、次のような弁護士の言葉でどのようにその身体が硬直したのかが、なおさらはっきりと露呈してしまった。「お前はあいつを誉めようとしているが、」と、弁護士は言った。「まさしく、そのことが、わしを喋りづらくさせる。というのも、あの裁判官は、ブロック自身やあいつの訴訟について、何も好意的なことを言わなかったのだ。」「好意的じゃなかったですって？」と、レーニが聞いた。「そんな馬鹿な？」ブロックは、すでに言い放たれた裁判官の言葉であっても、彼女であれば、今でも好意的な形に変える力があると信じているかのように、緊張した面もちで彼女のことを見つめていた。「好意的ではなかったのだ。」と、弁護士は言った。「それどころか、ブロックについて話し始めると、嫌がるような素振りさえした。『ブロックの話はしないで下さい。』と、あの方は言われた。『あれはわたしの依頼人ですよ。』と、わしは言った。『あなたは力の使い方を間違えています。』と、あの方は言われた。『わたしは、あれの事件が負けだとは思っていません。』と、わしは言ってやった。『力の使い方を間違えています。』と、あの方はまた繰り返した。『そうは思いません。』と、わしは言った。『ブロックは、熱心に訴訟に取り組んでいますし、事件をいつも追いかけています。わたしのところで、住み込み同然になりながら、いつも事情通であろうとしています。ああいう熱心さは、そうはありません。確かに、個人的には好感はもてません。礼儀もなってませんし、いかがわしくもあります。しかし、訴訟という観点からすれば、非の打ちどころがないのです。』わしは非の打ちどころのない形で話をしてやった。わざと大袈裟に言ってやったんだ。すると、あの方はこう言われた。『ブロックはずる賢いだけだ。色々な経験を積んで、訴訟を引き延ばすやり方を心得ている。だが、あいつがものを知らないのは、抜け目がないのよりもっとひどい。まだ、自分の訴訟が始まってすらいないと知ったら、訴訟の始まりを告げる鐘の音すら、まだ一度も鳴っていないと聞いたら、あいつは何と言うだろうか。』おい、落ち着くんだ、ブロック。」と、弁護士が言った。なぜなら、ブロックは膝をガクガクさせながら、まさに立ち上がり、どうやら説明を求めるかのようにもあったのである。弁護士がブロックに面と向かって細かい話をするのは、これが初めてであった。彼が疲れた目で、半分はあてどもなく、半分は下のブロックの方に向かって視線を送ると、その視線の下で、再びブロックはゆっくりとあの膝を突いた姿勢に戻っていった。「裁判官のこの発言は、お前にとっては重要なことでも何でも無いんだ。」と、弁護士は言った。「一言一言にイチイチ驚くんじゃない。また同じことを繰り返させるのなら、これ以上の打ち明け話は控えることにするぞ。今は、最終判決が下されたような感じでお前に見つ

められずには、ひとつの文章も発することができん。ここにいる依頼人に対しても、恥を知るべきだ！ お前は、この人のわしに対する信頼すら、ぐらつかせようとしている。一体、何がしたいんだ？ お前はまだ生きていて、わしの庇護下にあるじゃないか。心配無用！ 最終判決というものが、多くの場合、思いも寄らぬ形で、任意の人から、任意の時に告げられるという話は、どこかで読んだことがある。色々な留保条件はあるにせよ、そのことはもちろん真実であるが、お前の心配がわしに吐き気を催させて、そこにあるはずの信頼が減ってきているとわしが踏んでいるのもまた真実なのだ。わしが一体、何を言った？ 裁判官の話のまま伝えただけじゃないか。訴訟手続きの周りには、先が見通せないくらい色々な見解が積み上がっているのは、お前も知っているだろう。例えば、この裁判官は、訴訟手続きの開始をわしとは違う時点で捉えているが、それも見解の相違に過ぎない。ある段階まで訴訟が進むと、古い慣習に従って鐘が鳴らされるのだが、この裁判官の見方では、この時をもって訴訟は始まるというだけのことなのだ。今、それに対する反論の全てをお前に説明することはできない。お前にも理解することはできまい。沢山の反対意見があるということだけでも、お前にとっては十分なんだ。」下の方にいたブロックは当惑して、ベッドの前に置いてあるマットの毛を指で鋤いていた。裁判官の発言に対する不安から、弁護士に対して従順であるべきということが一時的に忘れ去られて、その時は、自分のことだけを考えて、裁判官の言葉をあらゆる方面からひねくり回していた。「ブロック、」と、警告するような感じでレーニは言うと、彼の襟首のところを少しもち上げてやった。「毛をいじくるのはやめて、ちゃんと弁護士さんの話を聞きなさい。」——本章未完——

## 第九章

## 第九章 大聖堂にて

Kは、銀行にとっては極めて重要な人物で、この街に滞在するのは初めてだというイタリア人の商売相手に、幾つかの芸術的文化遺産を案内するようという命令を受けた。こんな時でなければ、こういう命令も確かに名誉と感じたのかもしれない。しかし、必死の努力でひたすら銀行内の名声を何とか保っている今となっては、嫌々、引き受けるものになっていた。事務所から引き離される一刻一刻が、彼には心痛の種なのであった。実際、事務所の時間をうまくやり過ごすのは、前のようにはできなくなっていた。一時しのぎで、本当に仕事をしているふりだけで過ごす時間も多くなったが、それだけに、事務所を空けることは彼の心配を大きくした。いつも待ち伏せしている支配人代理が、時折、彼の部屋にやってきては、彼の事務机に座り、彼の書類に目を通しながら、長年、Kがほとんど友人のようにつきあってきた利害関係者たちを迎え入れては、それを奪い取り、それどころか、おそらく彼の失敗を暴いていく様が、目に見えるようであった（その失敗のせいで、工作中は、今でも常にあらゆる方向から脅かされているのが分かって、もう身動きが取れなくなっていたが）。そういうことで、とにかく（ちなみに、今回はかなり目立つ形ではあったが）、何かの出張や小旅行を命じられると——そういう命令が、最近はたまたま重なっていた——、そういう時は、誰かがちょっとでも事務所から彼を引き離して、彼の仕事ぶりを監査しようとしているか、あるいは、少なくとも誰か事務所の人間が、彼をほとんど不要と見なしているのではと、とにかく勘ぐりたくなった。こういう命令のほとんどは、簡単に断られるものではあったが、あえてそうはしなかった。なぜなら、その危惧がほとんど杞憂に過ぎなかったとしても、命令を拒むことは、自らの不安を告白することになったのであるから。こういう理由からも、表向き、彼はそういう命令を何でもないという感じで受け取ると、それどころか、神経をすり減らす二日間の出張をしなければならなかった時ですら、その頃、ずっと続いていた雨模様の秋の天気を理由に出張が中止されるかもしれないという危機に晒されずにいるためだけに、自分のひどい風邪を隠そうとさえたのであった。ズキズキする頭を抱えて、その出張から戻ってみると、明日はそのイタリア人の商売相手のお供をしてもらうことになったからと、彼は伝えられた。少なくとも今回ばかりは、断りたいという誘惑は極めて大きかった。何よりも、今回、割り当てられた仕事は、直接には商売に絡んでいなかった。とはいえ、商売相手にこの種の社交上の義務を果たすのは、本来、明らかに十分過ぎるくらい重要な仕事であった。ただし、Kにとってはそうでもなかったが（仕事の成果を通じてだけ、自分は延命するのであり、それがうまくいかなければ、自分は完全に無価

値だということを、彼はよく分かっていて、それどころか、たまたまこのイタリア人の気に入られたとしても、それは変わらないのである)。一日でも仕事の領分から締め出されるのを、彼は嫌った。なぜなら、もう戻れないのではという恐怖、それは考え過ぎだと恐ろしく明瞭に分かってはいても、胸を締めつけてくる恐怖が余りにも大きかったのである。今回の場合、もちろん、受け入れてもらえそうな言い訳の捏造は、ほとんどできなかった。Kのイタリア語の知識は、大したものではなかったが、いずれにせよ、満足できるレベルにはあった。さらに決定的だったのは、以前から美術史についての多少の蘊蓄があったのである。Kがちょっとした間だけ(ちなみに、単なる商売上の理由で)、街の芸術的文化遺産の保存協会のメンバーだったというのも、かなり大袈裟な形で銀行の中で喧伝されていた。そして、今、噂では、そのイタリア人が美術愛好家だということもあり、その辺の事情からも、同行者としてKが選ばれるのは自明の理なのであった。

激しい雨が降る、嵐の朝であった。これからやってくる一日に腹を立てながら、この訪問によって全てを奪い取られる前に、せめて少しの仕事だけでもきちんと片づけようと、七時にはもうKは事務所に姿を現わしていた。簡単な下準備のために、半夜をイタリア語の文法の勉強に費やしたので、疲労困憊していた。このところ、座るならこと決めていた窓辺が、事務机よりもこちらにいらっしやいと彼を誘ってきていたが、それには逆らって、やはり仕事をしなければと、彼はそこに着席した。残念ながら、ちょうどそこに使用人が入ってきて、こう言った。業務代理人さんがもういらっしやったのかを確かめるため、支配人さんがわたしを寄越しました。もしいらっしやったら、恐縮ですが、応接室までお越し下さいとのこと。イタリアからお越しの方も、すでにそこにおいでです。「すぐに行きます。」と、Kは言う、小さな辞書を鞆に入れて、知らない人のために用意した街の名所アルバムは小脇に挟んで、支配人代理の事務室を抜けて、支配人室の中に入っていった。それだけ早く事務室に到着して、すぐに何でもやれる状態になったことは、喜ばしいことであるように彼には思われた(そんな風になるとは、正直、誰も期待していなかった)。支配人代理の事務室は、もちろん、まだ真夜中のようにガランドウであった。おそらく使用人は、支配人代理も応接室に呼ぶように命じられていたが、うまくいかなかったのだ。応接室に足を踏み入れると、フカフカの肘掛け椅子から、二人の紳士が腰を上げていた。親しげに笑みを浮かべながら、支配人はKの入室を明らかに非常に歓迎すると、すぐに紹介の労を取った。イタリア人は、力強くKの手をギュッと握り、笑いながら、あの人は早起きですからと、誰かのことを当て擦った。それが誰のことなのか、Kには判然としなかった。なおかつ、それがちょっと聞き慣れない言葉でもあったので、少し考えてから、ようやく彼はその意味に辿りつくことができた。二、三のありふれた言葉で彼が返事をすると、イタリア人は、また笑いながらそれを受け取って、その際には、灰青色のもじゃもじゃの口髭を神経質そうな手で何度も触った。この髭には、どうやら香水が振ってあるらしく、近くまで寄って、匂いを嗅ぎたいという気持ちにさせられた。全員が着席し、簡単な会話が始めると、そのイタリア語が断片的にしか聞き取れないことが分かって、Kは愕然とした。本当にゆっくり話してくれれば、完全に理解することもできたが、そんなことはまれな偶然で、大抵の場合、弁舌が口から溢れ出すと、喜ぶように彼は首を振りながら、会話の中で、どこかの方言の中に規則的に紛れ込むのであった。それは、全くイタリア語に聞こえなかったが、支

配人はそれが分かるだけでなく、喋ることすらできた。もちろん、そうなることはKも予想していた。なぜなら、このイタリア人は南イタリアの出身で、支配人も同じ場所で数年間を過ごしていたのである。とにかく、このイタリア人と意思疎通する可能性のかなりの部分が失なわれていることを、Kは思い知らされた。なぜなら、男のフランス語も極めて分かりにくかったし、おまけにその髭が、唇の動きを覆い隠していたのである（それが見えれば、ひょっとして理解の助けになったのかもしれないが）。Kは、色々と厄介なことになるぞという思いを深めていた。差し当たり、イタリア人の言うことを理解しようとするのは諦めて——彼の言うことをやすやすと理解できる支配人がいる前では、無駄な努力であった——、どのようにして、深く、しかし、軽やかに肘かけ椅子に彼が身を安らわしているのか、どのようにして、短く、鮮やかに裁断された上着を何度も引っ張り上げているのか、どのようにして、もち上げた両腕と、関節がしなやかに曲がる両手とで、とにかく何かを表わそうとしているのかを（前屈みになって目を凝らしても、Kには理解できなかったが）、気のない感じで観察するだけにしておいた。終わり近くになると、手もち無沙汰で、そうでなくても話の応酬を機械的に目で追っていただけのKを、先程からの疲れが襲い始めた。とにかく彼は、ボウツとしながら、今、まさに立ち上がり、それから向きを変えて、その場を後にしようとしている自分に（幸いなことに、まだ早いうちではあったが）、驚きながら気がつくことになった。ようやくイタリア人も時計に目をやると、サッと席を立った。そして、支配人に別れを告げながら、Kの方に近づいてきた。それが余りにも近かったので、もし自分が動きたかった場合、Kは肘かけ椅子を後ろにずらさなければならなかったであろう。Kの目の中に、このイタリア語に対して彼が感じている苦悩の色を明らかに読み取っていた支配人は、会話の中に割り込んできたが、より正確に言えば、極めて聡明に、慎重に割り込んできたので、本当に少し、助言を差し挟んでいるだけのようにも見えた（実際には、このイタリア人が話を遮って主張してくる全てのことを、疲れも知らず、手際よく、Kが聞き取れる形に変えてくれていたが）。とりあえず、このイタリア人には、まだまだもう少し仕事が残っており、残念ながら、やはり全部をあわせてもほんの少ししか時間はないが、かといって大急ぎで全ての名所を見て回る気持ちはなく、むしろ——もちろん、Kが同意すればの話で、決定権はKだけにあるが——大聖堂だけを（ただし、ここだけは徹底的に見物したいと思っているという話が、Kには伝えられた。わたしは、非常に学識がある、愛想のよい方——これは、Kのことであった（当のKは、イタリア人の話を聞き流しながら、支配人の言葉をすばやく聞き取ることはできなかったが）——に同伴してもらい、この見物ができるのを嬉しく思っています。そこでお願いなのですが、もし時間が許すのなら、二時間後のおよそ十時に、大聖堂まで来てはもらえませんか。わたし自身も、その時刻でなら、指定された場所まで行けると思っています。二、三のその場にふさわしい答えをKは返した。イタリア人の方は、最初に支配人、次にK、それからまた支配人と握手をして、二人につき添われながら、半分はまだ二人の方に身体を向けながら、依然としてお喋りは止めず、ドアの方に向かって歩いていった。その後、ちょっとの間、Kはまだ支配人と一緒に立っていたが、支配人は、今日、とりわけ思い悩んでいるようであった。どうにかしてKに謝罪しなければと考えて、次のように彼は言った——二人は親しげに寄り添っていた——。最初は、わたしがイタリア人と行くつもりでした。

しかし、その後――彼は、詳しい理由を明かさなかったが――、やはり、あなたに行ってもらうことにしました。最初、すぐにはイタリア人の言うことが分からなくても、愕然とする必要はありません。そのうち、スラスラと分かるようになります。かりに十分に分からなくても、それはそんなにまずいことではありません。なぜって、あのイタリア人は、理解されるのをさほど重視していませんから。ちなみに、あなたのイタリア語は、ビックリするくらいお上手で、間違いなく、これらのことをうまくおやりになれると思います。そんな話をして、Kは彼と別れた。残った時間は、大聖堂の案内に必要な専門語を辞書から抜き出すことに使った。それは、極めて厄介な仕事であった。使用人たちは郵便をもって来るし、職員たちは色々な問いあわせをしにきては、Kが仕事かなのを見ると、ドアのところでパタリと足を止めたが、Kに話を聞いてもらえるまで立ち去ろうとしなかった。Kを妨害できる機会をあの支配人代理が見過ごすはずもなく、何度も入り込んできては、Kの手からパッと辞書を引ったくと、明らかに何の意味もなく、それを拾い読んだりしていた。ドアが開くと、控えの間の薄暗がりの中で、あの利害関係者たちすら姿を現わして、ためらいがちに会釈をしてきた――彼らは自分たちに気づいてもらいたがっていたが、見られているということに自信がもてなかった――。Kの周辺、彼という中心を巡っては、こういう全てが生じていたが、彼自身は、必要な単語を列挙して、辞書を引き、それを書写して、発音を練習して、最終的には暗記するのに必死であった。しかし、かつての優秀な記憶力にも見放されたようであった。彼は、こういう努力を強いてくるイタリア人に立腹する余り、もう絶対に準備などするものかと固く決心をして、何度も辞書を書類の山の中に埋めたりした。しかし、その後、そうはいっても、あのイタリア人と、黙り込んだまま、大聖堂の文化財の前を往復する訳にもいくまいと悟って、前より怒り狂いながら、また辞書を引っ張り出したのであった。

ちょうど九時半、出かけようとしていると、電話の呼び出しを受けた。おはようと、レーニが挨拶をして、調子はどうかと聞いてきた。Kは、ありがとうと短く返事をする、これから大聖堂に行くことになったから、話している暇はないと言った。「大聖堂？」と、レーニが聞いた。「ああ、そうだ、大聖堂だよ。」「でも、どうして大聖堂なの？」と、レーニが言った。Kがあらましを説明しようとする、言うか言わないかで、突然、レーニが言った。「あなた、駆り立てられているわね。」求めもせず、期待もしていなかったこの憐れみの言葉に堪えられず、じゃあねと別れを告げたが、受話器を元の場所に戻しながら、もう彼女は聞いていなかったが、半分は自分、半分は遠くにいる娘に向かって、それでも彼はこう言った。「そうさ、駆り立てられているのさ。」

さて、しかし、すでに時間は経過して、定刻に間に合わないという危惧は、すでにほとんど現実化しようとしていた。車に乗ったギリギリのところ、さらにあのアルバムのことが頭を横切った。さっきは渡しそびれて、そのために今も手元に残っていたのである。彼は膝の上にそれを置いて、落ち着かない感じで乗車中もずっとコツコツと叩いていた。雨足は弱まっていたが、大気は湿り気を帯びて、冷え冷えとして、すっかり暗くなっていた。きっと大聖堂では何も見えないだろう。あそこの冷たいタイルの上で何時間も立たされるのだから、風邪はきっとひどく悪化するだろう。大聖堂の前の広場は全く人気なかった。まだ自分が小さかった頃、この狭い広場に面した屋敷では、ほとんど全ての窓カーテンがいつも下りていたのを、彼は思い出した。もちろん、今日の

ような天気の場合、そうなっていることはいつもよりはるかに説明がつくことではあったが、大聖堂の中も全く人気がないようであった。今、こんな場所に来るなどというのは、もちろん、誰にも考えつかないことであった。Kは両方の側廊を歩いたが、温かそうな一枚布にくるまって、マリア像の前に跪き、ジッと視線を送っている老婆をひとり見出しただけであった。それから、さらにもうひとり、跛を引いた寺男が壁のドアの中に姿を消すのを、彼は遠くの方から眺めていた。そこにKが来たのは、ピッタリ時間通りであった。中に入ると同時に十時が刻を打ったが、まだそこにイタリア人はいなかった。Kは正面入り口まで戻り、決めかねる感じでしばらくそこに立っていたが、それから、そぼ降る雨の中、もしやイタリア人がどこかの側廊の入り口で待っていないかを確認するため、大聖堂の周りをグルッとひと回りしてみた。どこにも男はいなかった。支配人が時間の指示を間違えたのであろうか？ あんなやつ言うことをどうやって正しく理解できるのであろう？ しかし、いずれにせよ、少なくともあと半時間は待つのだろうし、疲れてもいたので、どこかに座ることにしようと、Kは思った。もう一度、大聖堂の中に入ると、階段の上に絨毯のような小さな切れ端があったので、近くの長椅子のところまで爪先で引きずっていき、外套の前をピッタリとあわせながら、襟を高く立てて、その上に足を置いて、着席した。暇潰しのために、アルバムを開いて、ちょっと拾い読みを試みたが、すぐに止めてしまった。なぜなら、余りの暗さで、見上げて、近い方の側廊ですら、細部をほとんど見極められなかったのである。

はるか先の主祭壇の上では、ろうそくの光が作る大きな三角形が、チラチラと輝いていた。さっきもそれを見たのかどうかは、はっきりしなかった。おそらく、今、初めて灯されたのであろう。寺男というものは、商売柄、忍び歩きの達人で、そこにいるということには誰も気がつかない。たまたま後ろを振り返ると、それほど遠くない背後でも、丈の高い、太い、柱に固定されたろうそくが同じように燃えているのが見えた。美しい光景であった。しかし、大概、副祭壇の闇の中にかかっていることが多い祭壇画を照らすには、それでは全く不十分であった。というより、それは暗闇を深めていた。姿を現わさないというイタリア人の振る舞いは、無作法ではあったが、理にかなっていてもいた。何も見えなかったであろうし、Kの懐中電灯では幾つかの絵を一ツオル〔約二・三センチ〕ずつ見るので満足するしかなかったのである。そういうやり方で何がやれるのかを調べるため、Kは近い方の副礼拝堂まで歩いていき、数段、階段を登って、大理石製の低い手すり壁のところまで上がって、前のめりになりながら、祭壇画を懐中電灯で照らしてみた。その先では、万年灯が邪魔をするように、ポオッと浮かび上がっていた。彼が見て、部分的に何が描かれているのかがようやく分かったのは、絵の一番端のところに描かれた、大柄で、甲冑をつけた騎士であった。その騎士は、目の前の荒れた大地——数本の草の茎だけがまばらに生えている——に突き立てた剣に自らの身体を預けて、目の前で繰り広げられる出来事を注意深く観察しているようであった。そういう風に立ち尽くしながら、そこに近づかないのはおかしいことであった。おそらく、見張りをするように言われているのであろう。すでに相当に長い間、何の絵も見てこなかったKは、ライトが発する緑の光に堪えられず、ずっと目をしばしばさせながらではあったが、しばらくジッとその騎士を観察していた。それから、絵の他の部分にも光を当ててみると、ここにはありふれた解釈によるキリストの埋葬図が現われ出てきた。ちなみに、それは最

近、描かれたものであった。彼はライトを懐にしまうと、また元のところに戻った。おそらくもう、今となっては、イタリア人を待っている必要はなかった。とはいえ、戸外の大雨は明らかであり、そこは思ったほど寒くもなかった。しばらくはここにしようとKは決めた。すぐ隣には大きな説教壇があり、その小さな丸屋根の上には、ほとんど横倒しになりながら、二つの飾り気のない金の十字架がつけられていて、それらは互いに一番上のところで交わりあっていた。手すり壁の外側と、柱を支えるために渡されている部分は、緑色の葉形装飾で被われており、小さな天使たちが、あるものは元気よく、あるものは静かに、その中に埋め込まれていた。Kは、説教壇の前に歩み寄ると、あらゆる方向からそれを調査してみた。その石には、極めて精巧な細工が施されていた。葉形装飾どうしの間やその背後にある深い闇は、まるで掴み取ってきて、嵌め込んだかのようにであった。Kは、そういう隙間の中に手を入れてみて、それからその石を注意深く吟味した。こんな説教壇があるとは、今まで全く知らなかった。その時、たまたますぐ側の椅子の並びの向こうに、ひとりの寺男がいるのに気がついた。ダラリとした、襲つきの黒い上着姿でそこに立ち、嗅ぎ煙草入れを左手にもちながら、こちらをジッと観察していた。一体、何がしたいんだ？ と、Kは思った。こちらをうさん臭いと思っているのか？ チップが欲しいのか？ ところが今、寺男はKに見られているのに気がつくくと、右手で（二本の指で、嗅ぎ煙草をもうひとつつまみしながら）何かはっきりしない方向を指差してみせた。その振る舞いは、ほとんど理解できなかった。Kはもうしばらく待ってみたが、寺男はやはり手で何かを指差しながら、頷くことでさらに強調するのを止めなかった。「一体、何をしたいんだ？」と、Kは低い声で呟いたが、呼びかけるまでのことはしなかった。そして、その後は財布を取り出しながら、男のところに向かうために、手近なところの椅子を押しおけると、先へ先へと進んでいった。ところが、男はすぐに手で待っているという仕草をすると、肩をすくめて、それから跛を引きながら、またピョコリピョコリと歩き出した。よく子どもの頃、Kはこの急ぎ足の跛と同じような歩き方で、乗馬の真似をしたものであった。「子どもみたいな年寄りだな。」Kはそう思った。「あいつの頭じゃ、寺男くらいしか務まらないんだ。俺が止まると、あっちも止まって、こっちがさらに行く気があるのかをジッと探っている、あの様子ときたらどうだ。」笑いながら、側廊を完全に抜けて、ほとんど主祭壇の高くなっているところまで、Kは老人を追っていった。老人は、何かを手で指差すのを止めなかったが、Kはあえて振り返ることはしなかった。この仕草の中には、老人の跡をつけさせなくさせる以外の意図は見受けられなかった。結局、男を追いかけるのをKは本当に止めてしまった。男を心配させ過ぎるのもよくないと思ったし、イタリア人が姿を現わすかもしれない時のことも考えて、この幽霊を完全には追い払わずにおこうと思ったのだ。

アルバムを置き忘れた場所を探して、身廊の中に足を踏み入れると、祭壇唱歌隊のベンチとほとんど境を接する柱のつけ根に、小さな副説教壇があるのに気がついた。飾り気のない、白っぽい石でできていて、極めて簡素な造りであった。余りにも小さいがゆえに、遠目からは、何かの聖者像を置くために空けられた壁龕であるようにも見えた。説教者が、手すり壁から一歩も後ろに退れないのは明らかであった。おまけに、説教壇の石が形づくるカーブは異常に低いところから始まって、なるほど飾りは何もなかったが、そこから急に湾曲して上昇するので、中背の男ですらそこには真っ直ぐに立っておられ

ず、手すり壁の前にずっと身を乗り出さなければならなかった。全ては、説教者に責め苦を与えるために仕組まれているようであった。それとは別に極めて精巧に飾られた大きな説教壇が使えるのに、どうしてこれが必要なのか、さっぱり訳が分からなかった。

とはいえ、この小さな説教壇も、説教の直前に準備されるのが常であるランプさえ吊るされていなければ、間違いなく、Kの注意を引くことはなかったであろう。今から、何かの説教が始まるのか？ 誰もいない教会で？ 階段の上から下まで、ジロジロとKは眺め回した。階段は、複数の柱にまつわりつきながら、説教壇まで繋がっていたが、余りにも幅が狭いため、人間のための通路というより、柱の装飾の役目しか果たしていないようであった。ところで、その説教壇の下のところには、本当に僧侶がひとり立っていた（驚いて、Kは笑ってしまった）。男は、階段を登ろうとして、手すりの上に手を置くと、チラッとKに視線を送ってきた。それから、本当に軽く会釈をしたので、それを受けて、Kは十字を切って、グッと腰を屈めた（そんなことは、とっくにやっておくべきであったが）。僧侶は小さく跳躍すると、チョコマカした素早っこい足取りで説教壇を駆け登った。本当に説教が始まるのか？ あの寺男は、理解力がないどころか、ひょっとして、この説教者のいる方にKを追い込もうとしていたのか（そのことは、誰もいない教会ではとりわけ必要なことであったが）？ ちなみに、どこかのマリア像の前では、間違いなく、まだもうひとりの老婆がいるはずで、彼女もここに来るべきなのかもしれない。さらに、もし本当に説教があるとするとするのなら、どうしてオルガンの前奏がないのであろう？ ところが、そのオルガンは静まり返っており、とてつもない高みにある暗闇から、弱々しい光を投げているだけであった。今、急いで逃げ出さないでよいのかと、Kは考えていた。今、そうしなければ、説教の途中でそれをやれる見込みはなく、そうなったが最後、説教の間中、ずっとそこにいなければならないのだ。彼は、事務所でも同じくらいの時間を無駄にしてきた。イタリア人を待つという義務は、もうどうの昔に果たされていた。時計に目をやった。十一時であった。しかし、本当に説教はあるのだろうか？ Kだけが聴衆ということがありえるのか？ もし、彼が教会を見学したいというよそ者に過ぎないとしたらどうなのか（基本的に、彼はそれ以外の何者でもなかったが）？ 今、平日のどしゃ降りの大雨の十一時に、説教があると考えの方が馬鹿げていた。この僧侶——僧侶であることに違いはなかった。髭のない、薄暗い顔をした若者であった——は、一見、誤って灯したランプを消すためだけに、登ってきたようであった。しかし、それは違っていた。むしろ僧侶は、光の具合を確かめると、さらに少しランプの芯を長く出して、それからゆっくりと手すり壁の方に身体の向きを変えて、前方の角張った縁を両手でギュッと掴んだ。そうして、しばらくは棒立ちになって、頭はピクリとも動かさず、周辺の状態に目を配っていた。Kの方は、大きく後ろの方に退いて、教会の先頭のベンチの背凭れのところで両肘を突いていた。どこかの場所で（そこがどこなのか、はっきりしなかったが）、背中を丸めながら、まるで仕事は終わったとでもいうように、くつろいだ感じで例の寺男が小さくなっているのを、定まらない目つきで、彼は見ていた。今、何という静けさが大聖堂を支配しているのか！ しかし、Kは、それを乱さなければならなかった。ここに留まっている気など、サラサラなかった。状況のことなど配慮せず、決まった時間に説教をするのがこの僧侶の義務だというのなら、やればいいのだ。そんなことは、Kがいても大した効果がないのと同じで、Kの助

けがなくとも、うまくいくであろう。Kもゆっくりと動き出して、爪先で確かめながら、ずっとベンチの並びに沿って広い中央通路まで出ると、何にも邪魔をされずに、前に進んでいった（ただ、密やかに歩こうとしても、石畳の床がカツカツと鳴り、それが幾重にも、規則正しく歩みを進めてしまうことで、弱々しく、しかし、絶え間なく、丸天井が反響するのは別であったが）。そんな中、Kはひとりで誰もいないベンチの間を抜けていったが（ひょっとすると、僧侶に観察されながらだったかもしれないが）、少し見捨てられたような感じもしていた。大聖堂の巨大さも、人間が何とか堪えられるギリギリの大きさであるように感じられた。さっきのところまで来ると、彼は文字通り、一切の躊躇もなく、そこに置き忘れていたアルバムをサッと掴んで、自分のものにした。もうほとんどベンチが並んでいる場所は抜けて、ベンチと出口の間に横たわる何もない空間の中に足を踏み入れた、その時であった。初めて僧侶の声を聞いた。よく訓練された、力強い声であった。それを受け入れるために準備されたこの大聖堂に、その声は何とよく響き渡ったことか！ 僧侶が呼びかけたのは、聴衆にはでなかった。そのことは明らかで、言い逃れの余地がなかった。なぜなら、彼はこう言ったのである。「ヨーゼフ・K！」

Kは足を止めて、目の前の床を見た。今のところ、それでも彼は自由の身であった。まだ前にも進めたし、そう遠くないところに三つある、黒っぽい木製の小さな扉のひとつを抜けて、その場を離れることもできた。そのことは、彼が事態を飲み込めずにいる、あるいは、飲み込みはしたが、その気がないということを匂わせてくれたであろう。しかし、振り向けば、縛られることになった。なぜなら、そうすれば、彼は正しい理解に到達しており、自分は本当に招かれた人間であり、それに従う気もあると告白したことになったのだから。もう一度、僧侶が呼びさえすれば、間違いなく、Kは立ち去っていたであろう。しかし、どれだけ待っても物音ひとつしなかったのだから、彼は少し頭の向きを変えた（今、僧侶が何をしているのかを見たいと思ったので）。すると、さっきと全く変わらぬ様子で、説教壇のところで、静かに彼は立っていた。彼がKの頭の動きに気づいたということは、そこにハッキリと読み取られた。今、彼が完全に向きを変えなければ、子どもの隠れんぼのようになったであろう。彼が向きを変えると、もっとこちらに来るようにと、指で合図しながら、僧侶が彼を呼んだ。今や、全てが開けっ広げになったのもあって、説教壇に向かって彼は進んだ——好奇心もあったし、早く用件を切り上げたくもあった——それも、大股の、飛ぶような足取りで。最前列のベンチのところで立ち止まったが、まだその距離では、僧侶には遠過ぎるようであった。彼は、片手をスッと伸ばすと、鋭く下向きにした人差し指で、説教壇のすぐ前の床を差し示した。Kは言われた通りにした。その場所では、それでも僧侶を仰ぎ見ようとすると、本当に頭をのけ反らせなければならなかった。「ヨーゼフ・Kだね。」と言うと、手すり壁の上の方で、何かはっきりしない感じで、僧侶は片手をスッと上げた。「ええ。」と、Kは言った。これまではずっと、何とオープンに自分の名前を呼んできたことかと、彼は思った。ちょっと前から、それは重荷になり始めていた。今では、初対面の人すら彼の名前を知っていた。まず自己紹介をして、そこで初めて知りあいになれるというのは、何と素晴らしいことだったのか。「起訴されているようだが。」と、やけにヒソヒソした声で、僧侶が言った。「ええ。」と、Kが言った。「そうだと聞いています。」「だったら、探していた人だ。」と、僧侶が言った。「わたしは教誨師です。」「ああ、そうですか。」と、Kは言った。「こ

ここに君を呼びにやらせたのはわたしだ。」と、僧侶が言った。「君と話をしたいと思ってね。」「それは知りませんでした。」と、Kが言った。「わたしはイタリア人に大聖堂を見せるために、ここに来たのです。」「小さなことに煩わされているんじゃない。」と、僧侶が言った。「何を手にもっている？ 祈祷書か？」「いいえ。」と、Kが答えた。「街の名所アルバムです。」「放しなさい。」と、僧侶が言った。余りにも強くKがそれを投げつけたので、それはバラバラと開いて、ページをクシャクシャにしなが、床の上を少し滑っていった。「訴訟は旗色がよくないようだが？」と、僧侶が聞いた。「わたしにもそう思えます。」と、Kが言った。「これまでも、できるだけことはしてきました。しかし、無駄でした。もちろん、陳情書もまだできていません。」「結局、どうなると思っている？」と、僧侶が聞いた。「前は、絶対にうまくいくと思っていました。」と、Kは言った。「今は、時々、自分でも駄目なんじゃないかと思えてきます。どうなるかは分かりません。あなたには分かるのですか？」「分からない。」と、僧侶が言った。「だが、うまく運ばないのではないかと、心配している。君のことを有罪だという人もいる。おそらく、君の訴訟は下級裁判所より先には進むまい。少なくとも暫定的には、有罪が証明されたと思っている人もいるにはいる。」「でも、無実なんです。」と、Kは言った。「間違いなんです。そもそもひとりの人間がどうして有罪になるのです？ われわれは、それでも皆、誰もが同じ人間です。」「確かに。」と、僧侶が言った。「だが、有罪の人ほどそういう言い方をする。」「あなたもわたしに対する偏見があるのですか？」と、Kが聞いた。「偏見はない。」と、僧侶が言った。「それなら、ありがたい。」と、Kは言った。「でも、訴訟手続きに関わっている他の人たちには、皆、わたしに対する偏見があるのです。彼らはそれに関係のない人たちにも吹き込んでしまう。わたしの立場はどんどん悪くなっています。」「君は事実を誤認している。」と、僧侶が言った。「判決は、突然に下されるんじゃない。訴訟手続きが、徐々に判決に移行するんだ。」「そういうことですか。」と、Kは言う、ガクツと下を向いた。「近いうち、自分の事件で何をしようと思っている？」と、僧侶が聞いた。「さらに助けてくれる人を探すつもりです。」と、Kは言う、僧侶がこのことをどう判断したのかを見極めるため、頭をグツと上げた。「まだやり尽くしていない可能性がありますから。」「君は知らない人の助けを借りようとし過ぎる。」と、賛成しかねるといった感じで、僧侶が言った。「特に女たちの助けをな。それが本当の助けになっていないのが分らんのか？」「時々、いや、それどころかしばしば、あなたの仰ることは的を射ています。」と、Kは言った。「でも、それは絶対じゃない。女たちには大きな力があるのです。知りあいの数人の女たちさえ一緒に仕事をする気にさせれば、やり遂げられるはずなんです。とりわけ、ほとんど女蕩ししかいないこの裁判所では。遠目でもいいから、女をひとり、あの予審判事に見せればよいのです。女の尻を早く追い回すためだけに、やつは裁判所の机や被告たちを突き倒すでしょう。」僧侶は前方にある手すり壁の方に首を傾けた（今、ようやく説教壇の屋根が彼を押さえつけ始めたようであった）。外の天気はどうなったのであろう？ そこは、もう陰鬱な日中というより、すでに深い闇夜であった。大窓のガラス彩色が、真っ暗な壁を一筋の鈍い輝きで途切れさせるということもなかった。まさにその時、主祭壇のろうそくを寺男が次から次に吹き消し始めた。「気を悪くされましたか？」と、Kが僧侶に聞いた。「おそらくあなたは自分がどんな裁判所にお勤めなのか、ご存知ないのです。」それには答えがなかった。「自分の経験から

言っているだけですがね。」と、Kが言った。相変わらず、上の方は静かであった。「あなたを侮辱するつもりはなかったのです。」と、Kは言った。すると、下にいるKに向かって、僧侶が叫んだ。「では、君には二歩先すら見えないのか？」それは、怒りから出た叫びのようでもあり、同時に、誰かが倒れたのを見て、自分でも驚いてしまって、軽はずみに思わず口から出た叫びのようでもあった。さて、長いこと二人は黙っていた。Kには小さなランプの光で僧侶のことがはっきりと見えたが、下を支配する暗闇の中、僧侶がKを子細に確認できていないのは明らかであった。なぜ僧侶は下りてこないのだろうか？ 確かに、彼は説教をしてくれたのではなく、よく考えれば、役に立つというより、おそらく損にしかならないことを幾つか教えてくれただけであった。ただ、僧侶に善意があるのは確かなように感じられた。下りてさえきてくれれば、彼がKの言うことに同意してくれるというのも、ありえない話ではなかった。どうやって訴訟に影響を与えられるかではないにせよ、例えば、どうやって訴訟から身を引き剥がせるか、どうやってやり過ごせるか、どうやってその埒外で生きられるかについての、決定的で受け入れ可能な助言がもらえるというのは、ありえる話であった。そういう可能性は、あってもおかしくなかった。最近、何度か、そんなことをKは考えていた。もし、そういう可能性をこの僧侶が知っているなら、頼みさえすれば、ひょっとして、コッソリ教えてくれるのかもしれない（彼自身は裁判所に属しており、Kが裁判所を攻撃すると、その柔軟な本性を押さえつけて、それどころか、Kに大声を上げることすらしていたのだが）。

「下りてきませんか？」と、Kは言った。「だって、説教をするんじゃないんでしょう。下りてきて下さい。」「今なら、下りられる。」と、僧侶が言った。大声を出したことを、おそらく後悔していたのであろう。ランプを鉤爪から外しながら、彼は言った。「最初は、遠くから喋りかけねばならなかった。そうしなければ、簡単に影響されて、役割を忘れることになってしまったから。」

Kは、下の階段のところで彼を待っていた。僧侶は階段を下りながら、上の階段にいる時からもう彼の方に手を伸ばしていた。「ちょっと時間をもらえませんか？」と、Kが聞いた。「時間なら、好きなだけどうぞ。」と、僧侶は言うと、Kにもたせてやろうと、小さなランプをサッと手渡した。その佇まいからくる一種の威厳は、近くまで来ても消えなかった。「ご親切、ありがとうございます。」と、Kは言った。二人は、暗い側廊の中を並んで行ったり来たりした。「裁判所に属している人たちの中でも、あなたは特別です。本当に沢山の人たちと知りあいになりましたが、そういう人たちの誰よりも、あなたは信頼できます。あなたとなら、腹を割って話ができます。」「間違えてもらっては困る。」と、僧侶が言った。「どこで間違えましたか？」と、Kが聞いた。「裁判所についてのところだ。」と、僧侶が言った。「この種の誤りについては、法律の入門書の中で次のように書かれている。法の門の前にひとりの門番がいた。この門番のところに田舎から男がひとりやってきて、法の中に入れて欲しいと頼んだ。しかし、門番は言った。今は入れられない。よく考えてから、男が聞いた。じゃあ、後でなら入れますか。『それならありえる。』と、門番が言った。『だが、今は駄目だ。』いつものように法の門は開いていて、門番はその横に立っていた。門越しに中を覗いてみようと、男は身を屈めた。そのことに気がつくや、微笑を浮かべながら、門番が言った。『そんなに気になるなら、制止を振り切っても、中に入ってみるがいい。だが、覚えておけ。俺にも力はあるが、これで

も最下位の門番に過ぎない。広間という広間には門番がいて、どんだん力のあるやつになっていく。三人目の姿を見たところで、もうこの俺ですらすくみ上がってしまったくらいだ。』こんな困難が待っていようとは思ひもしなかった。法というものはいつでも誰にでも開かれているものだと、男は思っていた。しかし、今、毛皮の外套に身を包んだこの門番、その大きな尖り鼻、長くて薄い、韃靼人風の真っ黒な髭をジッと見ていると、それでもやはり、入れという許可が出るまで待ってみようかと、男は腹を決めた。門番が床几を勧めてきて、扉の横に男を座らせた。何年もの間、そこで男はジッと座っていた。男は中に入れてもらおうと様々な試みをして、押し倒すことで、門番を疲れさせた。門番の方は、時々、ちょっとした尋問をしながら、男の故郷や、その他、色々なことを聞いてやった。しかし、それは偉い人がやるような気のない聞き方で、最後にはいつも決まって、それでもまだ入れることはできないと、言うのであった。この旅行のために色々なことを準備していた男は、あらゆる手立てを使ってみた（どんなに金のかかることでも、門番を買収するためとあらば）。確かに、門番は何でも受け取ったが、その際にはいつもこう言うのであった。『何かをし損なつたと、思わせないためだけに受け取るのだ。』何年もの間、ほとんどずっとこの門番だけを男は観察していた。それ以外の門番のことは忘れてしまった。最初の門番だけが法の中に入る唯一の障害物であるかのように、男には感じられていた。最初の数年間は声高に不運な偶然を呪っていたが、その後、年を重ねると、ひとりでブツブツ呟くだけになっていった。男は子どもっぽくなった。何年にも渡る門番についての研究で、毛皮の襟巻きの中に蚤がいるのに気がつくのと、その蚤にまで、俺を助けてくれ、門番の気もちを変えてくれと頼むのであった。最後に視力が衰えてくると、本当に周囲が暗くなったのか、単なる目の錯覚なのかも分からなくなった。そして、その時、暗闇の中、幾重にも連なる法の扉の奥から消えることなく溢れ出る一条の輝きに、男はふと気がついた。もう命は長くなかった。死を前に、これまで経験した全てのことが頭の中でひとつの問いという形になった。それは、これまで一度も門番に対して投げられなかった問いであった。すでに硬直してきた身体をもち上げることもできず、男は門番の方にチラッと目配せをした。門番は深く屈み込まなければならなかった。なぜなら、身体が大きさが男には非常に不都合な具合に変わっていたのである。『今さら、まだ何を知りたいんだ？』と、門番が聞いた。『欲張りなやつめ。』

『誰も法を求めています。』と、男は言った。『それなのに、長い年月、わたし以外の誰もここに入れてくれと言ってこなかったのは、なぜですか？』男の命の終わりが近いことが、門番には分かった。弱まりゆく聴力に届けとばかり、大きな声で門番は言った。『ここはお前以外の誰も入ることが許されなかった。なぜなら、ここへの入り口はお前だけのものだったから。俺はもう行く。ここを閉めるぞ。』

「だったら、門番は男を騙したんだ。」と、この話に強い感銘を受けて、すぐにKが言った。「早まっちゃいけない。」と、僧侶が言った。「馴染みのない考えを吟味もせず受け取るんじゃない。この話がかかれて通りに、わたしは君に読んで聞かせた。ここには、騙したとは書かれていない。」「でも、明白でしょう。」と、Kは言った。「そして、あなたの最初の解釈は全くその通りでした。知らせではもう男の救いようがなくなったところで、初めて門番は解決に繋がる知らせを男に伝えたのです。」「それまでは、門番はそのことについて聞かれていなかったのだ。」と、僧侶が言った。「単なる門番だった

と思えばよい。そういうものとして、彼は義務を果たしたのだ。」「義務を果たしたと、どうして分かるのです？」と、Kが聞いた。「果たしていませんよ。おそらく、彼の義務は全ての部外者の中に入れないことにありました。でも、この男はこの入り口から入るべきと定められていたのですから、入れるべきでした。」「君は書物に十分な敬意を払わず、話を改変してしまっている。」と、僧侶が言った。「この話には、法の中に入ることについての門番による二つの重要な言明が含まれている。そのうちのひとつは冒頭部に、もうひとつは結末部にある。つまり、一方の箇所では、今は入れられないとあるのに、もうひとつの箇所では、この入り口はお前だけのものだったとある。この二つの言明に矛盾があれば、君は正しく、門番は男を騙したということになる。ところが、矛盾などないのだ。逆にそれどころか、最初の言明は次の言明を暗示すらしている。将来、中に入れるという可能性を男に約束してやった時、門番は自分の義務をほとんど逸脱しかけていたのかもしれない。この時点では、その男を入れないことだけが門番の義務だったようでもある。実際、この文献の多くの注釈者たちは、門番によるこのような仄めかしにそもそもの訝かしさを感じている。なぜなら、門番は精確さを愛しているようでもあり、忠実に職務を守っているようでもあるからである。つまり、何年もの間、彼は職務から離れず、最後の最後になってようやく門を閉じた。仕事の重要性についてもよく分かっていた。なぜなら、次のように言っているからである。『俺にも力はある。』上官への敬意もあった。なぜなら、次のように言っているからである。『これでも最下位の門番に過ぎない。』お喋りでもなかった。なぜなら、何年もの間、いわゆる『気のない聞き方』をするだけだったからである。買取も効果を上げられなかった。なぜなら、贈り物をもらっても、『何かをし損なったと、思わせないためだけに受け取るのだ。』と、言っているからである。義務の遂行に関わるところでも、心を動かされたり、腹を立てたりはしていない。なぜなら、男については、『拜み倒すことで、門番を疲れさせた。』と、書かれているからである。最後に、外見の面でもある種の神経質な性格が表わされている（大きな尖り鼻、長くて薄い、韃靼人風の真っ黒な髭）。これこそが、義務に忠実な門番そのものではないか？ さて、ところで、この門番の中には、中に入りたがる者には極めて好都合なもうひとつの特徴が紛れ込んでいる。そのことは、とにかく将来の可能性を仄めかしながら、彼が少し自分の義務を逸脱するという点を理解させてくれる。つまり、彼が、少し単純で、その関係で、若干、うぬぼれ屋だという点は、否定ができないのだ。自分の力についての言及、自分以外の門番たちがもっている力、それどころか、彼がすぐみ上がったという彼らの見かけについての言及――わたしの意見では、これら全ての言及や、こういうことに言及しようとするやり方は（それ自体は、正しいのであろうが）、その純真さや横柄さによって彼の理解力が曇らされていることを表わしている。これについては、注釈者たちもこう言っている。『ある事柄についての正しい理解と、同じ事柄についての誤った理解とは、互いに完全には排反しあわない。』いずれにせよ、こういう純真さや横柄さが、ひょっとしてどんなに少ししか表に出なかったとしても、入り口の見張りという役割の力を削いでしまっているのは、誰もが肝に銘じるべきであろう。それは、この門番の性格の中にある隙である。加えて、この門番が生まれつき人なつっこいらしいという点が、さらに頭に浮かんでくる。彼は、根っからの役人というタイプとは違う。中に入ることについてははっきりした禁止があるにも関わらず、最初の瞬間から

すぐ、男を招待するという冗談を彼はやっちゃっている。その後も、この話で書かれていることに従えば、男を追い払うどころか、床几を勧めて、扉の横に座らせている。長い間、男の拝み倒しを辛抱するという忍耐、ちょっとした尋問、贈り物の受け取り、ここに門番が置かれているという不運な偶然を自分の横で声高に呪うのを許すという上品さ——こういう全ては、そこに同情の気もちがあるのを推認させてくれる。全ての門番が、そこまでのことをしてくれる訳ではない。目配せに対して、彼は最後にもう一度、男の方に深く屈み込むと、最後の質問の機会を与えてやろうとする。弱々しい苛立ちだけが——そう、門番には、全てが終わりに向かっているのが分かっている——、次のような言葉の中に表わされている。『欲張りなやつめ。』それどころか、多くの人々はこの注釈のやり方をさらに進めて、この『欲張りなやつめ。』の一言の中には、一種の友好的な感嘆（もちろん、気安さも交じっている）が示されているとも言っている。いずれにせよ、この門番という人物は、君が思っているのとは全く違った感じで像を結ぶのだ。「ずっと前から、あなたはこの話をわたしより詳しくご存知なんですね。」と、Kは言った。二人はしばらくの間、ジッと黙っていた。それから、Kが言った。「つまり、男は騙されたのではないとお考えなのですか？」「誤解してはいけない。」と、僧侶が言った。「君にはこの話にまつわる色々な意見を伝えてやっているのに過ぎない。意見を尊重し過ぎるのはよくない。書物は不変だが、意見というものはしばしばそれに対する絶望の表現に過ぎないのだ。この事案については、それどころかこんな意見すらある。つまり、騙されていたのはむしろ門番の方だというのだ。」「ひどく先回りした意見ですね。」と、Kが言った。「どういう理由で、そうなるのです？」「理由は、」と、僧侶が答えた。「あの門番の純真さにある。その説によれば、彼は法の内部については何も分かっておらず、入り口の手前の自分が繰り返し見回っている道のことしか知らないのだという。内部に対して彼が持っているイメージは子どもっぽいものとされていて、彼らの考えでは、男を恐れさせようとしている当のものを彼は自分でも恐がっている。そう、男よりもそのことを恐れているのだ。なぜなら、内部にいる恐ろしい門番たちのことを聞いた時、それでも男は中に入ろうとしたのに対して、門番は入ろうとしていない（少なくとも、そういう話は伝わっていない）。すでに内部に入ったことがあるはずという人もいるにはいる。なぜなら、彼はいやしくも一度は法の仕事で雇われたのであり、雇い入れるための手続きは内部でしかやられないはずであるから。これについては、内部からの招きで門番として雇われたのは確かであるが、少なくとも、内部の奥までは入っていないと答えることができる。なぜなら、すでに三人目の姿を見たところでもうすくみ上がったと、書かれているのであるから。さらに、長い期間に渡って、門番について言及されている以上に、内部について何かが語られたという話も伝わっていない。そのことは、禁じられているのかもしれない（禁じられているということについて、何かが語られているという訳でもないが）。こういう全てから、彼は、内部の様子やその意味については何も知らず、むしろ騙されているという結論が下されるのである。それどころか、田舎の男についても彼は騙されていた。なぜなら、彼は男よりも下位にあったのにそれを知らなかったのであるから。彼が、男を自分より下位の人間として扱っているということは、色々な点からも明らかであろう（そのことは、君もまだ覚えているであろう）。しかし、こちら側の意見に立ってみると、実際は、むしろ彼の方が男よりも下位にいるということが、同じよう

に明らかなことのように思えてくる。何よりもまず、縛られた人間というものは、自由な人間よりも下位に置かれている。そして、実際、この男の方がむしろ自由なのである。この男は好きなどころに行ける。ただ、法の入り口だけが禁じられているが、いずれにしろ、それを禁じているのは、唯一、あの門番だけである。門の横にある床几に座って、命の続く限り、そこに留まろうとするのは、あくまで彼の自由意思からである。いかなる強制があったとも、そこには書き表わされていない。一方の門番は、自分の職務でその場に縛られている。もち場を離れることは許されず、どうやら、彼がそうしたいと望んでも、内部に踏み入ることは許されていない。さらに、彼が法の仕事をしているのは確かであるが、働いているのはもっぱらこの入り口でだけである（つまり、この男にだけ、この入り口にだけ、縛られている）。こういう理由からも、彼は男の下位にあるといえるのである。長い間、いわば壮年期の全体に渡って、彼は空しい仕事だけに携わってきたと推認される。なぜなら、男がひとり、つまり、壮年期にある某がやってきたと、書かれているからである。つまり、男の目的が達成されるまでの長い間、門番は待っていなければならなかった。そして、実際、そうはいつても、自由意思でやっているこの男の気が済むだけの長い間、彼は待ったのであった。そして、男の死でしか仕事の決着がつけられなかったために、最後の最後まで、彼は男の下位にあり続けたのであった。さらに、何度も強調されているのが、とにかく門番は何も知らなかったらしいという点である。しかし、その点については特に注目すべきとは思われない。なぜなら、こちら側の意見に立ってみれば、この門番がさらにひどい騙され方をしていることが分かるからである。それは彼の仕事に関係している。つまり、結末部のところで、入り口についての話になって、彼は次のように言っている。『俺はもう行く。ここを閉めるぞ。』しかし、冒頭部では、いつものように法の門は開いていたと書かれている。そして、いつものように開いていたということは、そこに定められた男の寿命とは関係なしに、いつでも、常に、ということである。つまり、門番でもそれを閉めることはできなかったのである。これについては、門を閉めるという予告をした門番は、ただ返事がしたかっただけ、あるいは、仕事上の義務を強調しようとしていた、あるいは、最後の時でもまだ後悔と悲嘆の中に男を置き去りにしたかったからなど、色々な意見が出されている。だが、彼が門を閉められなかったという点では多くの意見が一致している。それどころか、少なくともあの結末部では、知識の面でも彼は男の下位にあったというのが、彼らの考えである。なぜなら、この男の方は、法の入り口のところから溢れ出すあの輝きを見ているのに、一方の門番は、仕事柄、おそらく入り口には背を向けて立っていて、何かの変化に気づいたといういかなる発言もしていないからである。」「領ける内容です。」と、僧侶の説明を受けて、幾つかの箇所は自分に向かって小声で繰り返しながら、Kが言った。「領ける内容です。そして、門番は騙されていたと、今ではわたしにも思えてきました。しかし、前の考え方を捨てたのではありません。なぜなら、二つは部分的に補完しあっていますから。門番が明晰に見ていたのか、騙されていたのかは決められません。騙されていたのは男の方だと、わたしは言いました。もし門番が明晰に見ていたとすると、人はそのことを疑えるのかもしれませんが、騙されていたとすると、その騙されていた中身は必然的に男にも伝染していたはずで。そして、実際のところ、門番はペテン師だったというより、むしろ余りにも純真だったので、すぐに職を解かれてしまったは

ずですが、そうはなっていません。ただ、もしそうだとすると、門番は騙されたところで害はないが、男の方は千倍も害があるということを、あなたは考えるべきです。」「ここで君は、ある反対意見に突き当たる。」と、僧侶は言った。「つまり、多くの人々の意見によれば、この話は、門番に何らかの判断を下す権利を誰かに与えるものではないというのである。われわれの目にどう映ろうと、とにかく彼は法の仕事に就いている。つまり、法に属しており、人間の判断からは遠く隔たったところにいる。だから、門番が男の下位にいると考えるのはよろしくない。仕事で法の入り口に縛られているというだけでも、この世で自由に生きているということより、ずっと優れたことなのだ。初めて男が法のところにやってきた時、門番はもうずっとそこにいた。そこにいるように法で定められていた。つまり、彼の尊厳を疑うということは、法を疑うことに繋がるのだ。」「その意見には賛成しかねます。」と、首を振りながら、Kが言った。「なぜって、もしそれが本当なら、門番の言ったことは全て正しいと考えなければならなくなります。でも、それがありえないってことは、実際、ご自身で詳しく説明されていたじゃないですか。」「そうではない。」と、僧侶が言った。「全てを真実と考えるべきではなく、むしろ、必然と考えるべきなのだ。」「憂鬱な意見ですね。」と、Kが言った。「世界秩序のために、嘘が使われるんだ。」そう言って、Kは話を打ち切ったが、それが最終的な結論という訳でもなかった。彼は疲れており、この話から導き出される全ての結果を見通すことができなかった。それは慣れない思考の流れであり（その中を、彼は導かれていったが）、彼より廷吏たちの集まりの場での討議にふさわしい、非現実的な内容であった。単純だったはずの話は、すっかり装いを変えてしまった。こんな話は身体から振り払いたいと思っただけで、そして、今になって大いなる優しさを示し始めた僧侶は、その辺のことは大目に見ながら、Kの発言を黙って受け入れようとしてくれていた（彼自身の見解と一致していないのは、明らかであったが）。

ちょっとした間、二人は一言も口にせず歩みを進めた。Kは、自分がどこにいるのかも分からず、僧侶の横にピッタリと寄り添っていた。手にもっていたランプの火はとっくに消えていた。一瞬、彼の目の前を、銀の輝きだけを放ちながら、ある聖人の立像がギラッと光り、すぐにまた暗い色調の中に戻っていった。僧侶にばかり頼っている訳にもいかず、Kは聞いた。「今、正面入り口の近くですか?」「いや。」と、僧侶が言った。「かなり離れている。もう帰るのか?」その時は、そんなことは考えていなかったが、すぐにKは言った。「確かに、もう帰らなければなりません。わたしはある銀行の業務代理人です。人を待たせてもいます。わたしは、ただ外国人の商売相手にこの大聖堂を案内するためにやってきたのです。」「そうか。」と、僧侶は言うと、Kに片手を差し出した。「それなら、行くがいい。」「ですが、この暗さでひとりにされても、全く勝手が分かりません。」と、Kが言った。「壁沿いに左に行けばよい。」と、僧侶が言った。「そうすれば、壁から手を離さずに進んだ壁沿いの先が、もう出口だ。」僧侶が、数歩、そこから遠ざかると、Kはもう大きな声を出した。「ねえ、ちょっと待って下さい!」「待っている。」と、僧侶が言った。「もう聞くことはないんですか?」と、Kが聞いた。「ない。」と、僧侶が答えた。「さっきまではあんなに親しく接してくれたのに、」と、Kが言った。「何でも教えてくれたのに、今度はわたしなんてまるで眼中にないみたいに、置き去りにするんですね。」「だが、帰らねばならんのだろう。」と、僧侶が言った。「まあ、そうです。」と、

Kが言った。「といっても、君は理解しなければならない。」「まず、わたしが誰かということ。」「あなたは教誨師です。」と、Kは言うと、僧侶の方に近づいていった。口に出してはみたものの、銀行にすぐに戻るという話は全く急を要することでもなかった。まだずっとそこにいてもよかった。「つまり、わたしは裁判所の人間だ。」と、僧侶は言った。「だから、どうして君に聞くことがあろう。裁判所は君に何も求めない。君が来るなら、受け入れるし、行くというなら、去らせるまでだ。」



## 第十章

## 第十章 終わり

三十一歳の誕生日の前夜――夜の九時頃で、通りの上には静寂の時があった――、二人の紳士がKの住まいにやってきた。フロックコートに身を包み、血の気はなく、デップリと太っていて、見たところ、ピクリともしそうにないシルクハットを被っていた。初回の訪問というもあり、ドアのところで仰々しい儀式が少しやられると、その後、Kの部屋の前でも同じような仰々しい儀式がより大袈裟な形で繰り返された。訪問については聞いていなかったが、Kも同じように黒の衣装に身を包んで、ドアのそばの肘かけ椅子に座ると、ピッタリと指に張りつく新調したばかりの手袋にゆっくりと指を通しながら、まるで客を待っていたような風情であった。すぐに立ち上がると、興味津々といった感じで、彼は紳士たちに目をやった。「さては、僕のところに行けと言われたんだね?」と、彼は聞いた。紳士たちはコクリと頷くと、一方の紳士が他方の紳士を、シルクハットでサッと指差した。自分は彼らではない人間を待っていたということを、彼は認めない訳にはいかなかった。窓のところまで行って、もう一度、真っ暗な通りの方に目をやってみた。通りの反対側のほとんど全ての窓はすでに真っ暗で、多くの窓にはカーテンが引かれていた。その階の明かりのついた窓では、格子の向こう側で小さな子どもたちが一緒になって遊んでいて、その場からはまだ動き出さず、かわいい手でお互いどうしを探りあっていた。「老いぼれた下っ端の舞台俳優たちを寄越したんだな。」と、Kは言うど、もう一度、そのことを自分の腹の中に入れるために、クルリと後ろを振り向いた。「安っぽいやり方で俺を片づけようとしやがって。」突然、彼らの方に向き直ると、Kはこう聞いた。「どちらの劇場にご出演です?」「劇場?」と、口の端を歪めながら、一方の紳士が他方の紳士に助言を求めた。そのもう一方の紳士は、言うことを聞かない有機体に戦いを挑む唾のようになっていた。「質問される用意がないんだな。」と、Kは言うど、帽子を取りに行った。

階段に出たところで、もう紳士たちはKと腕を組もうとしてきた。しかし、Kは言った。「病人じゃあるまいし、通りに出てからでいい。」しかし、門の前のところまで出るとすぐに、Kが今まで誰とも歩いたことがないようなやり方で、二人は腕を組みあわせてきた。彼の肩のすぐ後ろに自分たちの肩を入れて、自分たちの腕は曲げず、Kの腕全体にそれを巻きつけるために、そのことを利用しようとしてきた。下の方では、手順に従った、手慣れた、逃げられない掴み方で、彼らはKの両手を握ってきた。二人の間で引っ張り上げられながら、Kは進んだ。今や、三人はひとつのまとまり、そのうちのひとりでも倒れれば、全員がひっくり返ってしまいそうな、そういうまとまりを形づくっ

ていた（ほとんど非生命体でしかありえないようなまとまりであった）。街灯の下、何度もKは自分の部屋の薄暗がりよりもっとはっきりと同行者たちを見極めようと試みたが、この押しくらゐ頭の状態では、それも難しかった。「たぶん、テノール歌手だろう。」と、彼らのでっぴりとした二重顎を見ながら、彼は思った。彼らの顔が清潔であることには、吐き気を催させられた。そこにはまだ、まさしく掃除する手とでも呼ぶべきものがあった。それが目の両端を行ったり来たりして、上唇を拭ったり、顎の襷の中をこそげたりしていた。そのことに気がつくや、Kはパタリと足を止めたが、つられて残りの二人も立ち止まった。広々とした、人気のない、様々な施設が置かれた広場の縁であった。「全く、どうしてお前たちみたいなのを寄越してくれたんだろう！」と、彼は尋ねるといふよりは、叫んだ。紳士たちに答えのもちあわせはないようであった。患者が休息を取ろうとする時の看護人のように、彼らは両腕を下げて、ダラリとさせながら、ジッと待ち続けていた。「これより先にはもう進まないよ。」と、探りを入れるかのように、Kが言った。これには紳士たちは答える必要がなかった。手を緩めず、Kをそこからもち上げてしまえば、それでよかったのだから。しかし、Kは抗おうとした。「これ以上、沢山の力を蓄えている必要はない。今から全力を出し切るのだから。」と、Kは考えた。小さな脚を掻きむしって、もち竿から逃れようとする蠅のことが頭に浮かんだ。「こいつらに、一杯食わせてやるんだ。」

その時、彼らの見ている目の前で、低いところにある通りから小さな階段を抜けて、ビュルシュトゥナー嬢が広場に姿を現わした。それが本当に彼女なのか、はっきりしたことは分からなかった。もちろん、似ているところは沢山あった。しかし、間違いなくビュルシュトゥナー嬢だったのかは、Kにはどちらでもよかった。抵抗しても無駄だという思いだけが、すぐに頭の中をよぎっていった。抵抗しても、今、紳士たちの手を煩わせても、今、拒絶の中、最後の生の輝きを楽しむにしても、そこに英雄的なところなど、何もないのだ。彼は歩き出した。そして、そのことが紳士たちに歓迎されたというそのことが、さらに彼自身を変えることになった。今のところ、彼が行き先を決めても、彼らは何も言ってこなかった。ならばと、前に行くビュルシュトゥナー嬢が通った道の方を進むように、彼は行き先を変えてみることにした。それは、彼女に追いつきたい訳でもなく、ちょっとでも彼女を長く見ていたい訳でもなく、むしろ、ただ彼にとって彼女は警告であったというそのことを忘れないでおくためだけに、そうしたのであった。「今、俺がやれる唯一のことは、」と、彼は言ったが、自分の歩みとそれ以外の二人の歩みが同期していることで、彼はその思いを強くした。「今、俺がやれる唯一のことは、最後まで冷静に判断する理性を失わずにいることだ。いつも二十本の手で、俺はこの世の中に乗り込もうとしてきた。おまけに、その目的はあまり正当であるともいえなかった。それは不正なものですらあった。一年間、訴訟をやっても悟れなかったということ、今、明らかにすべきであろうか？ 愚鈍な人間として退場するべきであろうか？ 訴訟が始まった頃は、終わりたがり、今、終わりが近づくともまた始めたがっている、陰口を言うのを許しておくべきであろうか？ そんなことは言わせておかない。この道のりを行く俺に、このほとんど唾のような、理解力のない紳士たちを宥ててもらったことで、言いたいことが言えていることには感謝をしよう。」そのうち、女の方は脇道に反れていったが、Kはもう彼女なしでも済むようになって、同行者たちにすっかり身体を委ねてし

まっていた。今や、三人全員は完全に一心同体となって、月光に照らされながら、橋を渡っていた。Kがちょっとでも身体を動かすと、今や紳士たちは嬉々としてそれに従った。彼が手すりの方に少し身体を向けると、彼らもそちらに向かって、先頭に立ちながら、クルリと向きを変えた。震える水面が、月光でキラキラと輝きながら、小さな島のところで二つに分割されていた。島の上には、ギュッと押し込まれたように樹木や藪の葉むらが盛り上がっていて、今は見えなかったが、その下には快適なベンチが置かれた砂利道が何本も走っていた（幾夏の間、そのベンチの上で、Kはごろりと寝そべったものであった）。「立ち止まるつもりは全然なかったんだ。」と、同行者たちには言ったが、何でも協力しようとする彼らの姿勢には恥じ入らんばかりの気もちであった。どうやらKの背後では、誤解を招く感じで足を止めたというので、一方の紳士が他方の紳士を軽く叱っているようであった。それから、彼らはまた歩き始めた。

彼らは、幾つかの登り坂の通りを抜けていった。その登り坂では、あちこちで警察官たちが、立ったり、歩いたりしていた。ある者ははるか彼方に、ある者はすぐ近くにいた。モジャモジャの口髭をした警察官が、サーベルを握りながら、決して胡散臭くないとはいえないこのグループの近くまで、意図をもって近づいてきた。紳士たちがピタリと足を止めて、その警察官がもう口を開くと思ったその瞬間、Kは力ずくで紳士たちを前に引っ張っていった。警察官が追いかけてくるのではと、彼は何度も心配そうに後ろを振り返った。自分と警察官の間に一ブロックの距離ができると、Kは走り出した。ゼイゼイと息を弾ませながら、紳士たちも追い縋らなければならなかった。

そうやって、大急ぎで郊外に出た。こちらの方角からだ、街はほとんど何の変わり目もなく、いきなり原野に変わるのであった。見棄てられて、朽ちるがままになった小さな石切場が、まだ何とか都会的といえる一軒家のすぐ脇に隣接していた。ここで紳士たちは、ピタリと止まった。そもそもの初めからここが目的地だったのか、それともさらに先に進むにも、その力を使い果たしてしまったのか。そこまで来ると、黙って待っていたKは解放してやり、シルクハットを脱ぐと、石切場の中をキョロキョロと見回しながら、ハンカチで額から汗を拭いていた。そこら中で、月光が、それ以外の光ではありえないくらい自然に、安らかに降り注いでいた。次の仕事をどちらがやるのかについての幾つかの社交辞令を交わした後――役割分担もなく、紳士たちはこの任務を引き受けただけだった――、一方の紳士がKに歩み寄ると、上着、チョッキ、最後にはシャツを、彼からバツと奪い取った。思わずKがブルッと身震いをすると、優しく、宥めるように、その紳士は彼の背中を擦ってやった。それから、彼はKの衣服を丁寧に畳んだ（今すぐではないにしろ、まだそれを使うつもりだったのであろう）。とにかく、運動もさせず、Kを冷たい夜気に当たらせておくのはよくないからと、Kと腕を組んで、彼はあちらこちらを少し一緒に歩いてやった。その間に、もうひとりの紳士の方は、何かしらピタリの場所を探り当てるため、石切場の中をグルグルと走り回っていた。そして、それが見つかって、彼が目配せをすると、もうひとりの紳士の方が、そこにKを引っ張っていった。それは、採石壁の近くで、切り出された石がひとつ、ポツンと置かれていた。紳士たちはKを地べたに座らせると、その石に凭れさせて、仰向けにさせた。彼らが払ったできる限りの努力や、Kが尽くしたできる限りの譲歩にも関わらず、その体勢というのが、恐ろしく無理のある、信じられないものになった。それゆえ、一方の紳士は他方の紳士

に、ちょっとの間、Kが横になろうとすることだけに委ねてみてはと言ったものの、それでも、少しもよくはならなかった。最終的に、彼らは、それまでに到達した一番ましな姿勢ですらない、ある姿勢をKに取らせた。それから、一方の紳士がフロックコートの前を開いて、チョッキの周りに渡されたベルトにかかった鞘から、長くて、薄い、両刃の、よく研がれた肉切り包丁を取り出すと、高く掲げて、その光で切れ味を確認していた。また、吐き気を催すようなあの社交辞令が始まった。Kの頭越しで、一方の紳士が、他方の紳士にその刃を渡すと、後者が、彼の頭越しに再びそれを返していた。

手から手に頭上でその刃が行き交っている間に、サッとそれに手を伸ばして、わが身に突き立てるのが義務だということを、今、はっきりと彼は自覚していた。しかし、そのことは実行に移さず、まだ自由になる首を回しながら、ジッと辺りを伺っていた。彼は、完全には自分の真価を発揮できなかった。役所から、全部の仕事を除いてやることができなかった。この最後の失敗の責任は、そのために必要な余力を与えられなかった人間が負うことになった。彼の視線は、石切場に面した例の家の最上階のところにポトリと落ちた。明かりが灯って、そこの窓の観音開きの扉がパタンと開くと、ひとりの男が(遠くの高いところであったが、おぼろ気な、うっすらとした感じであった)、深く前に身を乗り出しながら、それよりさらに前に、グッと両腕を突き出していた。誰だ？ 友だちか？ 善人か？ 関係者か？ 助けようとする人か？ ひとりか？ それで全部だったのか？ まだ助けがあったのか？ 忘れていた抗弁があったのか？ きっとあったはずだ。確かに、あの論理は覆しようがなかった。だが、あくまで生きようとする人間に対して、あの論理が屈せずにはいられるはずもないのである。一度もあえなかった裁判官はどこに行ったのだろうか？ 一度も辿りつけなかった上級裁判所は、どこにあったのだろうか？ 両手を上げると、彼は全部の指をカッと開いた。

しかし、Kの喉首には一方の紳士の両手が置かれて、他方の紳士は、例の包丁を彼の心臓の奥深くまで突き入れると、そこで二度、捻りを入れた。弱まっていく視力の中で、まだKには、自分の顔のすぐ前で、頬と頬を寄せあいながら、例の紳士たちが、その決着を観察しているのが分かった。「犬みたいだ！」と、彼は言った。まるで彼よりも恥ずかしさの方が、長く生き残るかのようであった。



訳者あとがき

## 訳者あとがき

カフカの「審判」の革新性は、「大聖堂にて」の章にある。この章では、正しい裁判を求め続けるKの前に教誨師が姿を現わし、テキスト「法の門前」を読み上げる。Kは、登場人物である田舎の男に強い共感を示すが、「話を改変するな」と、教誨師に諭される。それから、教誨師は、「門番は田舎の男より下位にある」とか、テキスト「法の門前」に様々な解釈を与える。そのことで間接的に「審判」へのわれわれの読みは揺さぶられるが、そのことをカフカは意図している。「書物は不変だが、意見はそれへの絶望の表現に過ぎない」という有名な表現が続く。「大聖堂にて」のこの部分に来て、読者は、ここまで「審判」を読んで積み上げた意味の集積が、ガラガラと崩れる徒労感、絶望感を味わされるが、この読者の側で起こる絶望感、崩壊感こそが、カフカが表わしたかったものではと僕は思う。そこから、「書物は不変だが、意見はそれへの絶望の表現に過ぎない」という言説だけは真であると、主張したい誘惑は限りなく大きなものだし、何と多くのカフカ注釈者たちがそうしてきたことであろう。しかし、それですら「意見」であり、「絶望の表現」に過ぎないというのが、「大聖堂にて」の真の主張であり、本当に読者に許されているのは、ただただ深い絶望感に身を委ねる、それだけなのではと僕は思うのである。



---

審判 フランツ・カフカ

---

著 bambus

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---